



あわじ居

〈異〉と出遭う場所―



# 目次

はじめに 〈異〉と出遭う場所 岩瀬崇  
随想…「自然の懐（ふところ）」 岩瀬美佳子

## あわ居の技法

- ことが生まれる場所 32
- あわ居別棟 38
- フィールド学習 42
- プロセスダイアローグ 44
- 宿泊型WS 46
- スペース利用 48

随想…「土からの料理」 岩瀬美佳子 50

## あわ居の研究

- わからないという賭け／井谷信彦さん（教育学者） 62
- 虚実のあわい／松本篤さん（AHA！世話人） 88
- 無に還る場所／井上博斗さん（トランスナヴィゲーター） 112
- 場づくりの詩／百瀬雄太さん（庭文庫店主） 130
- イメージがひらくリアリテイ／前林明次さん（アーティスト） 150
- 時の綾―生きることの旅と詩―／阪本佳郎さん（文学研究者） 172

## あわ居の記憶

菊地美希さん 208 Dさん 216 Mさん 224 勅使河原香苗さん 232 江畑潤さん 240 Kさん 250  
木下佳祐さん・木下麻梨子さん 256 岡野早登美さん 264 高橋真優さん 272 柳澤龍さん・鄭伽倻さん 278  
鈴木雄飛さん 286 田村花さん 296 Yさん 304 川合友紀さん 314 阪上桂子さん 324 日暮辰哉さん 334

随想…「旅のつづき」 岩瀬美佳子

年表

石徹白（いとしろ）について

周辺の見どころ

あとがき 岩瀬崇

## はじめに 〈異〉と出遭う場所 岩瀬崇

私たちは二〇一六年に、岐阜県郡上市の最奥にあり、霊峰白山南麓に位置する石徹白（いとしろ）という集落に家族で移住をしました。三年ほどはもともとと住んでいた岐阜県大垣市の家との二拠点居住のような形態をとりつつ、知人を介して譲っていた築九十年ほどの古民家（現在のあわ居本棟兼住居）を、友人の大工や左官屋さん、地元の工務店の力も借りながら、基本的には自力で改修し、二〇一九年の春にあわ居をスタートしました。二〇二二年には、同じ敷地内にもともとあった倉庫を改修し、あわ居別棟を完成させました。

「どうして石徹白という集落を選んだのですか？」という質問をよくされるのですが、今もまだ、はっきりとした返答ができません。けれども、いろんな移住候補地や空き家を見ても「なにかが違う」と感じていた私たちが、今のあわ居となる古民家を紹介され、はじめて現地に立った時に、夫婦ともども「ここだ！」と感じたのです。それだけは確かなことなのだと思います。

敷地は川に囲まれていて、橋を渡らなければ建物にアクセスできないという立地。建物に入った時に聞こえる清らかな川の流れる音もとても気に入りました。ですので、もしも何か理由があるとすれば、ただただ単純に「ここだ！と感じたから」ということになるのでしょうか。石徹白は標高七〇〇メートルにある小盆地であり、白山信仰において重要な拠点だった集落です。縄文時代から人が住んでいたとも言われています。また県内有数の豪雪地帯であり、もともとは福井県に属していました。そしてどういう理由なのかはわかりませんが、他の場所にはない独特の土地の力というべき何かがありひ



しと感じられる場所です。

私たちは、アートによって生かされてきた人間なのだと思います。救われてきたと書くとき少しおおげさですし、多少ニュアンスに誤差が生じてしまうのかなとも思いますが、そう書いたとしてもそれほど違和感はありません。ともかくも何が言いたいのかと言えば、アートがなければ決して乗り越えることのできなかつた場面が、これまでの私たちの人生の中には確かに存在したのです。きつとこれからもそんな場面はたくさんやってくるのだと思います。そして、私たちが夫婦ともども「ここだ！」と感じたのは、この場所だったら、土地や地域の方の力を借りながら、自分たちなりのアートをつくり、それを介して、誰かの生に触れることができるのではないかと、そんな予感を感じていたからなのかもしれません。

それでは、アートとはいったいなんでしょう？ 絵画や写真、建築、音楽、演劇、インスタレーション……それらはもちろんアートでありうるものだと思います。実際にそうしたものに私たちは強く影響されてきました。それらは人生の方向性をはっきりと定めてしまうくらいのもので、決定的な影響力を持つものとして、かけがえのない出遭いの記憶として、私たちの脳裏や身体に今も刻まれています。けれども、私たちがアートという語句で想起するのは、そうしたものだけでは決してありません。ある古老の語りを聞いた時のこと。サハラ砂漠の上で、まるで自分がこの大地と一体であるかのような感覚を覚えた時のこと。目の前の樹木が生きる姿に、自らの生きていく道を垣間見た時のこと。

友人との対話のなかで自らのパースペクティブがまるで変容してしまった時のこと……。こうした経験もまたアートという語句に関連するものであると、私たちははっきりと感じています。

鶴見俊輔は著書『限界芸術論』において、人間にとっての美的経験の大部分が、一般的な意味での芸術作品とは無関係なところで立ち現れることに着眼し、通常の芸術の概念からは周縁化され、「芸術と生活との境界線」にあるものを「限界芸術」と名付けています。先に挙げた私たちの個人的な経験を、「限界芸術」という語句にひもつけて良いのかどうかという点についてはさておき、少なくとも私たちのアートの捉え方には鶴見と類似した部分があることは確かでしょう。では私たちにとつてのアートとは何なのか。

これまで当たり前だと思っていた世界、そうに違いないと思いついてきた現実、こうでしかありえないと思っていた他者との関係性が、少し揺らいだり、ほぐれたり、あらたになつたりする、そんな出来事を偶発させる装置や技法。これまで築いてきた世界の輪郭の、その外側に私たちを誘ってくれるもの、あるいはそうした体験それ自体。それがアートなのだと思われています。その意味で、アートとは、日常的ななじみの世界から自らを切断するような、そんな〈異〉との出遭いを生み出す技法や体験だと言えるのではないかと、私たちはそのように考えています。絵画や写真、建築、音楽、演劇、インスタレーションといったものの中には、そんな出来事を偶発させる潜勢力を有しているものが確かにある。

となると、ここでのアートは「中断」の契機を生み出すのだと解釈することがおそらく可能です。それまでの日々の安定性を宙づりにし、それらに亀裂をもたらしすもの。世界を受け取り直す時間。しかし亀裂や中断などと書くと、そこには痛みが伴うような気がして、少し怖いような気がします。

けれども日常の安定性が、実は凝り固まったものでしかなく、そこに惰性や息苦しさを感じているとしたらどうでしょうか。それらが抑圧や疎外を含んだところで形成されているとしたらどうでしょうか。文化や環境から一方的に付与された規範や常識だけで成立しているものであったとしたらどうでしょうか。自分が知らない間に、小さい檻の中に閉じ込められて、本来もっているはずの生命力や生き生きとした感受性が発揮されない窮屈な状況に陥っているとしたらどうでしょうか。哲学者の驚田清一は、メルロ＝ポンティに言及しつつ、以下のように言います。

ぼくらには自分がそれと気づいていないままに従っている、あるいはそれにのっとっている人生の初期設定、あるいは社会を見るときに初期設定、フォーマットみたいなものがある。メルロ＝ポンティが言っているのは、哲学するというのは自分が当たり前だと思っていてとくに意識していなかった、自分ののっとっている初期設定や、フォーマットに気づかされること<sup>1</sup>。

1 佐藤和久他編(2015)『世界の手触り フィールド哲学入門』p.224、ナカニシヤ出版

日常的な時間のなかで、自らの生活世界、そこで運用している秩序や思考の傾向、他者との関係性といったものを、批判的に、あるいは客観的に捉えることはとても難しいことです。だからこそ今の自分の価値観や習慣、社会によって一方的に設定されたルールや規範、流布している常識などに対して盲目的になり、そのなかで窮屈な毎日を半自動的に繰り返している場合もあるのではないのでしょうか。

こう考えた時に、中断の契機を生み出すものとして捉えられるアートには、ポジティブな要素が含まれていることに気付かされます。これまでの安定性に亀裂が入り、自明視していた世界を中断させられること。それは逆に言えば、いまだ見えていなかった世界の広大さが私たちにありありと実感され、この現実においての、生の存在可能性がぐんと押し広げられる出来事でもあるのです。

これまで生きてこなかった存在状態。築いてこなかった他者との関係性。見過ごし排除してしまっていた世界の豊饒さ。そうした世界の外部をありありと、目の前に現前させ、実感させるもの。新たな生の始まりを私たちに予感させるもの。それがアートだと言って差し支えないでしょう。もちろんそうした出来事を周到に排除したり、ただの「違和感」として消化してしまうことも人間にはできません。むしろあります。

『被抑圧者の教育学』を著したパウロ・フレイレは、ブラジルで地主に搾取されていた小作人たちに

識字教育を施しながら、被抑圧者が自らの主体性を取り戻し、現実を変革していくことを支援しました。自らが置かれている抑圧的な状況を「意識化」し、現状を批判的に捉えたうえで、目の前の抑圧的な現実を変革していくこと。それは言うまでもなく、抑圧的状况からの解放を目指すための営為です。しかし、そうした作業は、見方を変えれば、これまで生きてきた世界、そこでの習慣や思考、他者との関係性をまるごとゼロから見直す作業でもあるのだと思います。それまでの自分のよりどころを、あえて宙づりにし、揺らがせる営為がそこにはある。痛みや葛藤がそこに伴うこともあるかもしれない。せん。解放や自由を探究することは、自らのよりどころを、常に危ういところへ移し続けていくことでもあるからです。大多数の価値観や社会の常識とは異なるところに足を踏み入れていくことにもなる。そこには孤独や不安が伴います。だからこそ自由を探究する道避け、あえてまた抑圧的な状況に自らを適応させていってしまう場合も多々あるのだと思います。けれども同時にそこには歓びもまたあるはず。パウロ・フレイレに影響を受けたフェミニストのベル・フックスは自らが通った学校について、こんなふうに記しています。

学校はエクスタシーの場だった。つまり、歓びと危険が同居していたのだ。学ぶことによって自分が変わることは本当にうれしかった。だが、家庭で教わる信念や価値観と相容れない知識を学ぶことは、自らを危ういところに追いやり、危険地帯に足を踏み入れることでもあった。家庭では、他人から押し付けられたあるべき理想像を演じなければならなかったからだ。でも、学校はその虚像を忘れさせ、学ぶことを通して新しい自己を再発見させてくれる場だった。

抑圧という語句でそれを表現するかは別として、現代に生きる私たちも、社会や文化からの様々な制限や、知らぬ間に身に染みついてしまった初期設定のなかで、窮屈な生き方や、疎外的な他者との関係性、状況への過剰な適応を余儀なくされている部分が少なからずあるように思います。

そうした状況のなかで、それでもなお、よりひらかれた生の展開を希求するとき、そこではあらゆる前提や価値観をいつでも括弧に入れながら、生の有り様を、世界との向き合い方を、他者との関係性をいつでも批判的に捉えながら、実践的に目の前の状況を変革し続けていく行為が必要になるのだと思います。その過程で、新たな自分、新たな世界、新たな他者と出遭い続けていくこと、出遭い直していくこと、境界をこえていくことが重要なのではないか。私たちはそのように考えています。

そこにはベル・フックスの言うように、深い歓びと共に、危険が同居しています。けれどもそうしたリスクを抱えながら、未知のなかで新たな場所を希求し続けていくからこそ、自らの生や、他者との関係性は根源的なものとなり、瑞々しい世界を生きていくことができる。固有の時間を生きること

ができる。かけがえない存在として主体化していくことができる。そしてそこにこそ解放や自由と  
いったものが予感されるのではないのでしょうか。

私たちは、あわ居をどのように紹介すれば良いものか、オープンしてからずっと考えてきました。  
これからもずっと考えていくのだと思います。そうしたなかで、おそらくあわ居というのは「〈異〉  
と出遭う場所」なのではないかという考えに今は落ち着いています。

日常的ななじみの世界、そこでの習慣や思考の傾向、知覚の様式、あるいは他者との関係性。それ  
らにゆらぎがもたらされるような、それらがほぐされあらたにされるような、そんな〈異〉を体験す  
る場所。これまでのあり様を堂々と一時中断し、自分自身や他者、ひいては世界と出遭い直す場所。  
生を吟味し、より繊細で深淵な世界との関係性をつくっていくためのきっかけを得る場所。それがあ  
わ居です。

あわ居での〈異〉との出遭いを通して、よりひらかれた生へと、新たな存在状態へと、繊細で入り  
組んだ他者との関係性の構築へと、新たな世界との出遭いへと、かけがえない生の展開へとつな  
がる何かもたらされること。そんなことを願いながら、私たちはあわ居を営んでいます。それ自体が  
「ひらかれ」であるような出来事をあわ居で共につくること。「ひらかれ」としての出来事に共に晒さ  
れていること。それが私たちにとってのアートなのだ、そう考えています。

本書『あわ居―〈異〉と出遭う場所―』では、そんな私たちにとってのアートについて重層的にア

プローチしながら、あわ居に広がる風景を、あわ居から広がっていく風景を、書籍というメディアを  
用いて分有することを試んでいます。

〈異〉と出遭う場所。あわ居によるこそ。



岩瀬崇（いわせ・たかし）

一九八七年岐阜県出身。あわ居主宰。「言語を超えたもの」「ことば」を探究テーマとして、あわ居の運営、書作品の制作、書籍の刊行など、ジャンルや領域を跨いだ活動を展開している。著書に『ことばの途上』『ことばの共同体』『詩と共生』などがある。

岩瀬美佳子（いわせ・みかこ）

一九八一年千葉県出身。あわ居主宰。分野を超えて自らの表現を辿り、料理に触れる。現在は食を通じた可能性に目を向け、また、モロッコでの滞在中に感じた豊かさの追求から「KANAN」としても活動。様々な関心における表現の在り方を探究し、地域のソーシャルワークにも携わる。



プラグマティズムが提起するのは、芸術家と聴衆、制作者と鑑賞者の関係を、演じる側と観る側、制作する側と受容する側、卓越した才能を発揮する側と受身的に沈黙する側といった本質的な二項対立においてではなく、互いに働きかけかけられながら美的経験の質を高めていく、あるいは双方にとって制作的な経験であるとともに受容的な経験でもあるというような、相互性と協同性のプロセスのうえにアートを成り立たせることである。

刈宿俊文他編（2012）『ワークショップと学び―まなびを学ぶ』p.205、東京  
大学出版会

## 随想：「自然の懐（ふところ）」 岩瀬美佳子

外では雪がしんしんと降っています。今日の雪は一粒一粒が小さくて、落ちてくるのが少しだけはやい。東京でも雪が降ったと聞いて懐かしく思い出すのは、あの日の雪と今日の雪が、少し似ているからかもしれません。

\*

その頃は、わからない、言葉にならない、膨大で輪郭のないものを、少しでも絵の中に捉えてみたいと思っていました。しかしわからないものにすっかり入り込んだまま、どうしても描くことができない。頭を重くして歩いた街の視覚情報は、さらに私を困惑させていました。

しかしあの日の雪は、あらゆるものをせつせと隠していった。機械的な発信は次第に気配を消し、ふと、私は足を止める。すると突然、わわ、と広がった雪色のキャンバス。まもなく風景の一点から色彩が湧き出して、そこらじゅうを舞い踊り出した。それらは自在に姿を変えながら、イヤホンから流れる音楽に乗って、めくるめく世界を展開していく。

それはたった数秒のこと。その風景の中には、自分の生き方までも自在に描けるかのように見え、



胸が高鳴り仕方無かった。いつかの雪の日のこと。

\*

この土地では冬になると美しい景色までもが真っ白に覆い隠されます。下地にするにはもったいないほどの美しさを、雪はこれでもかと覆い続ける。その無垢なキャンバスに、何をどう描いていくことができるでしょうか。ずんずんと降る雪の中、歩いても歩いてても、どこまでもすっぽりとキャンバスの中。幾度となく降り積もる雪は、何度でも、何度でもキャンバスを白く塗り替え、その度にいくらかでも世界を描いてみることでできそうです。

雪は雨粒よりも複雑に成り立ち、様々な造形を見事に削りあげ、それらもまた世界を描いてみせます。それに雪は、雨よりもずっとゆっくり落ちてくるものだから、見惚れるのに十分な時間もある。粉雪、細雪、霧雪、淡雪、玉雪、灰雪、餅雪、綿雪、アラレ、みぞれ。雪の降りかたにも、積もった雪にも、風景にたくさん名前がある。言葉に自然が描かれているかのようです。

ある日のあられば、路面に落ちてからポンと一度だけ弾み、少し横に着地しました。どのあられも、

一回だけポンと弾む。そこからさらに弾むことはありません。私の周りに落ちたあられば、どれもみな同じように弾むので、音とともに楽しげ。私は思わず躍り出したくなりました。一粒一粒が愛おしく、ひなあられの白いアラレに良く似ていました。降るアラレが、あられ餅の名前になったのか。あられ餅が降るなんて、言葉だけでもなんとも楽しいもの。

一方、降り続く雪が視界を埋め尽くすほどになることもあります。「霏霏（ひひ）と降る」とも言いますが、言葉さながら、外を歩くことも、目を開けることも難しいほどの雪。その中を歩こうものなら、ふとどこかへとさらわれそうになります。しかしそんな時こそ、家々で暖かい灯がそっと点るような、身体の中にあたたかな血が巡っていることを感じることができる。寡黙に佇む大樹のように、内側では静かに力を湛えている。そんな日に誰かと出会い、「よう降るね」「寒いですね」と声を掛け合うのはとても好きな時間です。厳しさも辛さも、悲しさも寂しさもどこか互いに持ち合わせ、内の小さな灯びを祝福するような時、言葉に自然が宿り、世界を描く芽吹きを促すような、力強い暖かさがそっと灯る。

風の微かな日にとてもゆっくりと、ひらひら落ちてくる雪もあります。子どもに名前をつけた日もそんな雪が降っていました。それは白い花が一面に咲き誇り、香り立ち、舞い踊るようで、娘にはそ

んな白い花の名を託しました。中国で不香花と呼ばれる雪もそんな雪なのでしょいか。私たちは自然が描かれている言葉を、さりげなく発しています。

喜びが喚起されるような雪は、古くから瑞雪（ずいせつ）とも呼ばれるそうです。豊作の兆しとなる雪のことで、気象状況からの耕作の予測であったかもしれないませんが、良いことの前兆にも例えられるようです。喜びが降り積もる、次から次へと。それは人々の歓喜が描かれるような、そんな雪として感じられることもあります。

よく似た雪ですが、降る雪一粒一粒に魂のようなものが宿り、弔われていくように見えることもあります。いつ生まれ出でたのかはわからない。次々に落ちてゆき、ただただ静かに降り落ち、降り積もる。無数の弔いと、行き場のない悲しみが、ただそつと重なりゆくようなその風景は、感情を深く許し、沈黙が音のない音楽を静かに奏でては風を描くかのよう。それは心象風景として記憶の中に描かれ、刻まれています。

しかしやってくる春は、どんな雪をも勢いよく解かしていく。地中に染み込み、雲や雨に。あるいは川へ。そしてやがて大海へと向かうかもしれない。それは時に穏やかにも、荒々しくも、あらゆる

旅路を経て循環を果たし続ける。それがただ自然の営みであるのだと示すかのように、ひたすら無情に。自然は何かを意図することも、返すこともない。しかしそれらはありませんにもありありとした姿で、私たちの前に差し出されるので、私たちは疑いもなく感情を揺さぶられてしまう。そしてそれは、私たちが肯定するかのよう。私たちの感情は、日常の中でも気づかないほど自然のごとく、きつと表れている。感情のない自然の循環の中で、私たちが感情を担うかのよう。そうして自然と一体となり、その懐に包み込まれれば、世界は生き生きと描かれていくのではないかと思うのです。

\*

コンクリートで固められた窓のない小さな部屋。戸口を閉めれば、目を閉じた時のような漆黒が広がる。そこに光がそつと照らされると、現れるキャンバス。そこから鳥が羽ばたいていく。鳥はやがて形を変えてゆき、木漏れ日、水面の揺らぎ、波打ち際、雨の波紋と混ざり合いながら部屋じゅうに光として展開されてゆく。そして白いキャンバスにそつと戻り、まぶたを閉じるかのよう光は消え、ゆっくり瞬きをするように、光が続いていく。

大学生だった私は、その小さな部屋に心身ごと入り込むことで、自然と融解するかのよう現象を

もたらし、その体験が誰かしらの創造の喚起の一端とならないかと、雪の日に湧き上がった世界のはじまりのように、世界の膨らみを想起される瞬間の創出が促せないものかと、絵にならない絵を描くように創作を試みていました。

雪の中を歩いていけるとふと、その小さな部屋の中にいるような気持ちになることがあります。雪の風景が展開されているその小さな部屋は、やがて壁が取り去られ、どこまでも広い世界。

あの時に私が作り出したかった空間は、ここにはいつでも当然に、そして完璧にあるかのように思われました。わたしの作品でなにかを促すことは難しくても、ここでなら、と思わずにはいられないのです。雪の日だけではありません。どんな季節にも、どんな天気にも、どんな日にも。ふっと、喚起を促す十分な要素がここにはあまたあります。それは可能性として、どんな人の中にも広がらうのだということにも気づくこともできる。

私たちの中にも、もしかしたら雪のようか、森のようか、川のようか、ともかくも自然のように循環しているものが、常にあるように思います。ただそれをどう感じ、どう触れようかと思うのです。確かなものがあるわけでもなく、決まった方法があるわけでもありません。場所も機会も問いません。

何を求め、何を探すのかも人それぞれです。でも触れようとするものは、みな同じであるように思われるのです。その人が触れようと望むならば、きつと触れることのできるもの。もし、苦しさや行き詰まりがあるのなら、触れてみればよいだけなのかもしれない。自身の循環を滞らせているもの、せき止めているものを流れるようにするには、その引っかかりのある小さなかけりをまずはみつけ、そうしてひとたび触れることができたならば、そこからは少しずつ、あらゆるものを描きながら、生き方までも豊かに展開していけるのではないのでしょうか。

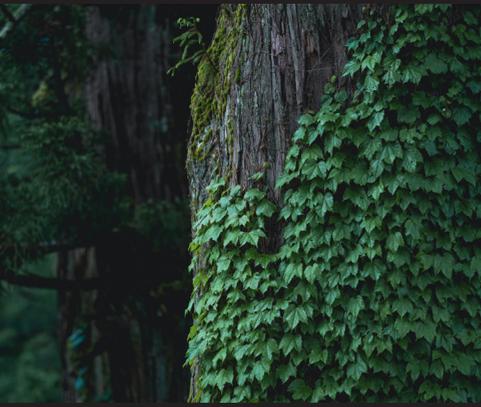
あわ居というこの場所で、私たちはやってくる人々と循環の中で出会い、その個々の物語に寄り添い、そうして微かに蠢く静かな風景の中を、少しの間、一緒に歩いてみたいと思います。

# あわ居 の 技法

「あわ居の技法」では、あわ居で実施している多様な体験について、写真を交えながら、その概要をご紹介します。

# ことばが生まれる場所

「ことばが生まれる場所」はあわ居本棟で実施している一泊二日の宿泊体験型のプログラムです。あわ居を主宰する岩瀬崇・美佳子を交えてのダイアログ、洞窟をモチーフとして形成された空間の体験、あわ居の畑で育てた野菜や地元の食材が多く使われたお食事、川の流れる音、静寂、季節の花……。 「ことばが生まれる場所」ではこうした多様な要素が絡まり合いながら形成される独自の時間／空間のなかでの全身的な体験を通して、ご自身や他者と深く向き合いながら、これまでの思考や習慣、関係性をほぐし、あるいは問い直し、それらをあらたにしていくことに取り組みます。







## あわ居別棟

静けさの中に聞こえる川のせせらぎが心地よいあわ居別棟。あわ居別棟では、ご自身の身体や感覚をめいっばいに広げた、生き生きとした時間がご体感いただけます。自らの身体で世界に触れ、世界を感じ、世界を味わい、世界と戯れる。そんな時間をあわ居別棟で重ねることで、半自動化したいつもの習慣や秩序が手放されていきます。心身はほぐされ、リズムは調い、本来の在り方へと還っていく。そんな状態だからこそ立ち現れる、思いもよらない形での世界からの働きかけや、未知との遭遇、日常では見過ごしてしまうものへの内的な気づきといった体験が、あわ居別棟の醍醐味です。(1泊)。3泊以上を推奨しています。





## フィールド学習

主に大学生や大学院生のゼミなどを対象とした実践体験型のプログラム。フィールド学習では、あわ居のある石徹白集落を舞台に、石徹白の自然や文化、歴史、人々と出会い、対話を重ねます。そして自分自身の感性や身体をフィールドにひらくなかで偶発的に遭遇する「ゆらぎ」や「異和感」を大切にしながら、これまでの自身の思考や価値観を問い直し、新たな世界をひらいていくことに取り組みます。プログラムは個々の目的意識や関心をヒアリングしながら作成し、またオンラインでの事前学習や、振り返り学習なども取り入れながら、より深い学びの機会を共に形作っています。



# プロセスダイアログ

日常生活のなかでの行き詰まりや違和感に対して、それらが生まれてくる構造や問題の所在を論理的に整理しながら、新たな在り方や関係性の創造にむけたプロセスを探索するプロセスダイアログ。様々な見や解釈が交響するダイアログを通じて、これまでの思考や習慣、関係性をほぐし、より開かれた世界の可能性を共に探求することに取り組みます。オンラインまたはあわ居にて実施しています。



# 宿泊型WS

「からだやこころの健やかさを育む」ことをテーマに、多様な領域の講師陣による宿泊型のワークショップを、プライベートグループ向けに実施しています。

・こころとからだを慈しむワークショップ 2泊3日  
案内人..SUIHO (国際認定フェルデンクライスプラクティショナー)

・石徹白の人々と土地に深く出会う 1泊2日  
案内人..斉藤万里子 (いとしろカレッジ主宰)

・大地を歌い踊るトランスワーク 2泊3日  
案内人..井上博斗 (トランス・ナヴィゲーター)



## スペース利用

子ども向けの体験合宿や大人向けの企画など、「学び」を目的とする企画実施の際に、あわ居を企画会場兼て宿泊スペースとしてご利用いただいています（日帰りの企画の場合もあり）。企画主旨や想いについて事前にヒアリングしながら、場が最良のものとなるよう、私たちもその都度、最適なかたちで関わっています。





子どもの頃の私は、時間があれば絵を描いていたのだと思います。時間など気にすることもなくとことん没入したその時間は、どんなにか満たされた記憶。しかし次第に疑問が湧いてくるのです。絵とは何であるのか。何を描いていこうか。十代半ばの私は、大学で学べばわかるのだろうと、疑うことなく美術大学への進学を目指しました。しかし大学に入ったものの、学べば学ぶほど、自分の絵はみるみると描けなくなっていました。子どもの頃は、折り込みちらしの印字のない裏面に、おもいおもいに夢のような世界をいくらでも繰り広げていたのに。大きなキャンバスはそれを拒むかのように、一筆あたりをつけようものなら世界は見事に壊れていきました。思考が手を止めているのなら、考えることを止めてしまえばよいのか。底の方から湧き出している何かは、どうしたら底から指先へ、指先から絵筆へ、絵筆から画面へと滞ることなく伝わり、落とし込むことができるのか。

どうしても描きたい。世界がいくら壊れようが、がむしゃらに描いてみたこともありました。しかしいくら描けど何もあらわれず、泣きじゃくりながら途方に暮れることになりました。画面は淀むように複雑に色が混ざり合い、茶色のような黒のような土色。終わりは見えず、まるで濁っている。これが私が世界としたものの現状なのだろうか。手はすっかり止まり、その絵ともない絵をただ呆然と眺めることしかできませんでした。

どのくらいそうしていたかわかりません。何日か経ってからだったのか、いったいどう思いついたのか。そうしたことはまったく思い出せはしないのですが、構内の画材屋へと、とぼとぼ向かった時の景色はなぜか、ビネットの強く効いた映像のように記憶されています。画材屋に入って少し進んだ右側の棚。そこに並んでいる白の油絵具を何種類か買い込んで、泥沼にも見えるその絵の上に重ねてみることにしたのです。

すると手は迷うことなく夢中になって白を塗り重ねていきました。何日もかけて、画面の隅まですっかり白くなるまで。私はその中にすっかり入り込んでいました。表現の色も形も気にすることなく、ただただ手からまっすぐにでてくるものを夢中で追いました。そうしている間じゅう、ぐちゃぐちゃに絡まった手からまっすぐにでていくように、気持ちも澄んでいくようでした。そうして音楽の最後の一音が消えたかのように、絵の完成もきちんとやってきました。私は心底納得がいき、アトリエで一人、嬉しきで涙が止まらなくなりました。端からみれば、ただ白いキャンバスがあるだけに見えるのは言うまでもありません。でもよくよく見れば、絵の具に厚みがあり、筆やペイティングナイフの跡が残り、土のような色がほんのうっすら残るところがある。ちょうどあわ居の漆喰の壁のような、子どもたちが雪で遊んだ後のような。ようやく描けたのは、そんな一枚の絵でした。

そんな学生の頃ですが、イタリアンの食堂でアルバイトをしたことがありました。新宿歌舞伎町の入り口あたり、地下へ降りるとすぐのところにあつた今はもうなきそのお店には、どうも場所柄か、様々な人がやってきていました。時に陰った面持ちでやって来る人も、重苦しさをそのまま背負ったかのような人もやってきました。でも料理はどんな人へも真つすぐに、いつでも厨房で創出され続けていました。私はその湯気の立つ生き生きとしたものを、どうか生きたまま届けねばと、ひたすら運びました。そして、お皿の上で練り広げられたものがすっかりたいらげられる頃には、彼らの纏う空気が軽やかになり、顔も明るみを選び、丸まっていた背中はずっと伸びたように見えました。

キャンバスに絵も描けない私が、一体どうやってたら、そのようなことが起こせるのだろうか。平面におさまらないと言っていたのは、ただの言い訳であつたのかもしれない。けれど立体にすれば良いという話でもない。映像でなら時間も伴い可能なのか、それとも写真で光を瞬間におさめれば写り込むのか、デザインでなら多くの人の意味となるのか、日常に触れるクラフトならば形となるのか、耳に入りこんでいく音ならば届くのか。身体表現なら真意に近いのか。ハプニングとなるようなものが必要なのか、それとも即興それ自体なのか。それからは徐々に、あらゆるところに答えのようなものを求めては、私なりに納得のできる場所を探し回りました。微かな感覚だけを頼りに黙々と黙々と。

そうしている時に、食べる作品と出会つたことは、些細なことではあれ、きっかけであつたのかも

しれません。宵の風景を美しく見立てた作品であるその食べ物、シンプルな原材料で作られ美味しく、何より心身にすっと取り込むことができました。視覚と触覚と味覚と嗅覚、そして聴覚までもが促され、食べるといういつもの行為をもって、風景と作品が心身に取り込まれていく。咀嚼し、のみ込み、もしかしたら胃で分解されていく間じゅうも、しばらく腑に落とされていくようで、今でも強く印象に残る出来事でした。

母の手料理の記憶と、イタリア食堂の賄い。とあるカフェレストランのメニュー、夫や子どもたちの作る料理、温かいお裾分けやもてなし。あらゆる手料理と数々の食の体験とともに血となっているものが、あらゆるものを取り込みながら脈々と巡り続け、そうして私は今料理に触れているように思えます。

画面でいくらかねくり回してもなかなか描き終わらなかった油絵と違って、料理は大抵完成し、差し出すことができました。食材は切り方で、火にかけることで、調味料の使いかたで、食材の組み合わせで、私の手をみるみる離れ、展開してくれます。それらの作用に協力してもらいながらできる、お皿の上の生き物のようなもの。作る過程でこちらがうっかりのんびりしようものなら、何かが抜け落ち、協力もうまく得られません。それぞれにある程度、適切なペースがあり、それらが少しでも生

き生きとするために、変えることのできない彼らのペースを配慮する必要があります。

しかし私も私のペースでなくては作れず、相互間で、こねくり回す余地はなかなかありません。キャンパスの画面と私の間で繰り広げられる現象にはなかつた有機的な応答が、食材からは確かにある。その応答に耳を傾けながら、形、表情、感触、香りを追う。調理の方法で変化していく姿や音、それぞれの多彩な個性、それを活かす調味料やスパイス、発酵の力が促す深み。あらゆる要素がその世界を彩っていく、私のペースでそれらを夢中で追っていくけば、完成の合図であるかのような一音が聴こえるのです。

それでもどうにも作れなくなることもあります。ペースが乱れたり、なにか思考の淀む時、気持ちの滞り、物事への不信などがある時など。途端に料理の方法がわからなくなり、手は動かさず、いつかのようにただ啞然と困り果てることになりました。絵を描く時と同じなのでしょう。指先が途端に動かなくなり、世界は微動だにしません。

そんな時は畑に助けられることがあります。野菜は元気がなくなることも、よく育たなくなること、途中で枯れてしまうこともある。私たち人間と同じであるように思うのです。そこでは、どうし

たら細胞が活性化されるのかを知ることが、大きなヒントになります。水と陽と栄養と温度、自然の法則、遺伝子に組み込まれた仕組み。その個体のベース、そこに必要なスペース。あらゆることを注意深くみなければならぬ。そしてそこで何を、どうしたら良いのか。わからないなりに向き合わせてくれる。

ここへ越してきてすぐに畑を始めましたが、その畑も少しずつ料理の作りかたに沿うようになってきました。雪が解け、虫たちも活動を始め、土の中ではたくさんの微生物が蠢いている。さて、この畑をどうしようか、という時に絵を描いてみたくなりました。思い出したのは高校生の頃に夢中で描いた油絵。絵の具にも慣れ、ただただ必死になって目の前にあるものを描き上げようとした、その頃と同じように。

まずはここ、と思うところにあたりをつけました。どこにあたりをつけようかと眺めると、畑からの応答のようなものがあるように思われます。なんとなく、です。その当りに植え付けの早い野菜の畝を描くように立ててみます。そうすると次のあたりも見えてくる。そうして畑に呼応するように畝を少しずつ立てていきました。そのうちに育てたい野草の群生があればそれらを避けて、作物の育つであろう大きさも想定し、その畑でそれぞれが生き生きと育つようなイメージをしていく。そして

並行して、蒔きどき順に種を蒔き、地熱をあげた温床でも苗を育て、季節のタイミングで植えていく。

薬効のある植物や料理したい野草は残しつつ、草は刈って根元に敷きながら、気になった草花は観察する。蜂の飛び方、蝶の羽の模様、サワガニの歩き方、聞こえてくる鳥の鳴き声、小動物の作物のかじり方。とどまらない興味はそのままに、それらのベースと私の自然なベースを生かしていけば、その畑のキャンバスは私をそっちのけで、太陽が、雨が、虫や微生物が、ミトコンドリアが、次々と生き生きと細部を描き込んでいくように、自然の力で世界をぐんぐん繰り広げ、野菜も草も花を咲かせ実をつけていきます。その間、彼らの様子を見ながら畑に手を加えていくのは、時折絵の世界にすっかり入りこんでいるように思え、一人心を躍らせることも。そうして食べごろになった野菜を、葉草や食べられる草花と一緒にキッチンへ持ち込みます。自然の在り方までも、できるだけそのままに。

翌年の種とするものを残しながら展開された畑は、次第に雪に埋もれていきます。長い冬の間は真っ白な世界。やがて春になれば雪は解け、小さく芽吹いた草が低く覆っていきます。種を蒔こうと草をのけてみると、あの日画面いっぱいになった土色が顔を覗かせる。そこに種を、蒔く。するとその生き物はみるみると生きかたをそのまま描いてゆく。そしてまた雪の白に覆われると思いつく、あの一枚の白い絵。でも今はその絵から、豊かな世界が展開しているように思えてなりません。

雪が何度もキャンバスを塗り替えるように、勘違いも、思い込みも、固定観念も、濁りそうな想いも、何度でも取り去って、何度でも塗りがえて、何度でも、何度でも世界を繰り広げる。小さな芽となり巡り巡るのに、私から料理を通して誰かへ、そこからまた創出を経て誰かへ。それができる限り澄んだものとして循環となっていくかのように、願ってやみません。

料理をする時は、いつも食べる人のことをイメージします。そこにふと色彩が現れる。その世界の広がりのために私に必要なのは、手が止まらない心の状態と、集中できる環境。そして温かな想いと手まで喜びそうな食材。そしてあらゆる感覚と、指先から放たれるものを信じてのこと。視野を広げたい時には、遠く離れた土地のスパイスやハーブを使い、訪ねたことのある土地の記憶の光景や、見たことのない世界への憧憬を。深く根ざしたい時には、すぐ足元の薬草と大事に育てられた野菜、伝統の漬物や手前味噌で、あらゆる畏敬と様々な声を。さらには、思い出す本の一文や、ふと思いつき起されるいくつかの言葉、いくつかの南の島国の砂糖を。食べる人の想いの行方と、大海のほとりの塩をひとつまみ。知恵とともに育まれた調味料と、生き生きと漂うものを、耳をよくこらして選びとり、料理に落とし込んでいく。できる限り清廉と、自然の力を宿せるように。悲しみが少しでも癒える祝福をも盛り込めるように。料理人としてはあまりに未熟ながらも、お皿から風景が広がり、世界が広がる

ような料理を心がけています。





# あわ居 の 研究

「あわ居の研究」では、各領域の専門家とあわ居主宰の岩瀬崇との対談を通じて、互いの実践や経験についての話を交差させながら、あわ居での実践やそこで用いられている技法についての考察を深めたり、そこから派生的に伸びていく知を探求・記録していきます。



目の前の人に、何をすれば良いのかわからない。不確かさを抱えながら展開するあわ居の時間について、「外部」「賭け」「かけがえのなさ」をキーワードとしながらその実像に迫ります。

◎知らない人だからこそ

井谷…このたびは貴重な機会をいただきありがとうございます。お互いに著作やウェブサイトをとおしてしか知らなかった方と、こうして改めて面と向かって話をしているというのは、なんだか不思議な感覚もありますね。考えてみれば、岩瀬さんたちがあわ居で営まれていることも、まず知らない人がやってくるころから始まりますよね。だとするとやはり不思議なのが、知らない人なのに、どうやって歓迎できるんだろう、なぜ歓迎できるんだろうということですね。知らない人をいかに出迎えるのかということですね。ゲストの方をお迎えするとき、

どういう佇まいでおられるのかなあと。例えばこの人は社長とか、この人は高名な小説家とか、素晴らしい人格を持った人で……というかたちで、何かその人について知っているから、歓迎をしているわけではないですね。

岩瀬…うーん、確かに改めてそう問われると答えに窮しますね……友人の紹介であわ居に来られる場合ももちろんありますけど、全く知らないところからのお問い合わせも多々あるので、確かに普通に考えたら、ちよつとドキッとする部分がありますよね。ただ僕も妻も、知らない人が来るということに対して、あまり抵抗感がないという部分はまずあるのかなとは思っています。

あとは、人間には近しい関係だからこそできることがある一方で、全くの他人だからこそできることもあるのかな、ということは思っていて、おそらくあわ居においては、自分たちは無縁の人間として、来訪者の方と関わっているのだと思います。自分たちが無縁の人間だからこそ、話せること、落とせるもの、剥がせるものがあるんじゃないのかなという気がします。日常生活のなかだと、自分の話ってなかなかできないですよ。色んな人間関係のバランスであったりとか、社会的な役割であるとか、そこで求められる規範とか、そういったものがあるにせいで、人対人に関わりたいという欲求が、自分たちは強いんだと思います。

井谷…関わりたいという出発点が、まずはあると。

岩瀬…自分たち自身も、社会の中で、役割や機能といったところでのふるまいは絶対的に求められますし、も

ちろんそれを遂行しないと社会生活は維持されないとありますよね。だから、その部分はその部分としてまずはしなきゃいけないと。でもそうとは思いますが、自分たち自身も、色々なものを剥がしたところでの自分たちを知りたいし、そこでしか出てこない自分自身を見たい、他者と出会い続けていきたいというところがあるんだと思います。

井谷…去年初めてメールをいただいて、最初にあわ居のホームページを拝見したとき、ここは訪れる人を出迎える、それだけのために作られた場所だなという印象をもったんですね。宿泊や観光が主な目的ではなく、他者を迎え入れるということ自体に、大事にされたいポイントがあるのかなと感じたのを覚えています。

今回、あわ居の「体験者インタビュー集<sup>1</sup>」を読ませていただいたのですが、体験者の菊地さんが語られていることで、「一人の人として迎え入れられている」という言葉がありました。それはすごくなるほどと思って。いまま岩瀬さんの話のなかで、役割とか機能を超えてという言葉がありましたけど、そこも繋がってくるのかなあと。あわ居にはもしかしたら、知らない人だからこそ、という力学が働いているのではないかと。会社の同僚だと会社の役割に縛られた会話になってしまうし、家族でさえ妻や夫、父親、母親、息子、娘みたいな役割のなかで、語れること、語れないことがありますよね。そうしたなかで、知らない人だからこそ、一人の人間として向かい合うことができるのだとしたら、それは非常に興味深い。

1 あわ居のホームページ上に掲載の「体験者インタビュー集」は、本書籍内の「あわ居の記憶」に全文収録されている (pp.207-311)。

2 詳細は本書籍の p.209 参照

岩瀬…そういう意味でも、毎回やっぱりドキドキしますし、毎回どうしたら良いのかわからない(笑)。毎回やっても慣れないですね。

井谷…慣れない。それはすごく面白い。相手のことを知っているという前提で関わるのとは、異なる関わり方になるということですよね。例えばお医者さんは、わかっていること(知識)を前提とした関わり方をするわけです。「検査の結果、あなたはインフルエンザです」とか「これにはこういう薬を、こういう治療を」とか。あるいは「あなたは糖尿病なので、これからはこうしてください」とか。それが百パーセントではないにしても、こうすればこうなるよということ、つまりは元々知っていることを伝える、あるいはそれを背景にした提案をする。でもあわ居がなさっていることって、そうじゃないのかもしれない…: : : だとしたら、岩瀬さんたちは、何をされているんでしょう(笑)。あわ居では、訪れる方を一人の人として出迎えて、そこから何かが変わったり、印象深い出来事が起こったりすると。でも岩瀬さんたちは、医療の知識を駆使して治療をしたり、学校の先生が子どもに教えるように何かを教えているのではないのだとしたら…: : : いったい何をされているんでしょうか。

## ◎外部に接触する

岩瀬…うーん…: : : 話が少し遠回りするかもしれませんが、例えばあわ居で一泊二日で実施している「ことが生まれる場所」のご予約を受けるにしても、あるいは事前にオンラインで相談を受けて、それを踏まえた個別の提案をする場合においてもそうですけど、そのこと自体とても怖い行為だと自分自身は思っています。というの、何が起きれば来訪される方にとってのベストになるのか分からないのに、それでもその時点で自分たちはそれを引き受けているからです。もちろん、当日になってその方が現地に来られても、どうすれば良いのか

はわかりません。それは来訪者の方もおそらく同様です。ご本人も自分が何を求めているのか、おそらくよくわかっていない。

そのなかでひとつ思うのは、例えば「ことが生まれる場所」で言えば、一泊二日という時間において展開していくプロセスへの信頼は、自分自身、確かに持っているんだと思います。「ことが生まれる場所」の流れで言えば、チェックインをして、お茶をしながらいろいろ話をし、その後お風呂があり、食事があり、食事をしたがら対話をし……といったようにひとつひとつプロセスが進んでいきますよね。もちろんその現場にいる時は、どうしたら良いのかわからないんですが、でもそのなかでもどうしたら良いのかを、来訪者の方と一緒に時間をかけて探索しているところがある。わからないなりに、それでもその都度手を打っていくというか……身体的に感知されるところで「こっちな」とか、あるいは「こっちな」みたいなかたちで、即興的に応答関係のなかで道を探っていく。何かが生じる場所を探っていく。人それぞれいろいろと複雑に絡まりあったものがありますし、あれこれ試行錯誤を重ねるわけです。

そのなかで、じゃあ最終的に何が生じれば良いのかという部分で言えば、それは「外部との接触」だと思っています。つまりそれまでの枠組みから、一歩外に出る瞬間を作ること。それは言語的などころで生じる場合もあれば、非言語的などころで生じる場合もあって、人それぞれ、ケースによってまったく異なります。そういった瞬間が生じた時に、自分たちとしては手ごたえを感じるんです。少し遠回りしましたが、以上を踏まえて、「自分たちはあわ居で何をしているのか？」という問いに答えるとすれば、それは「外部に接触する瞬間に至るプロセスに同伴している」ということになると思います。つまりは外部や出来事を共につくっている。

井谷…なるほど、すごく面白いですね。そうすると、ゲストの方が外部に接触するうえで、やっぱり岩瀬さんたちは知っている人ではダメだということですよ。知っている人が、知っている通りにやってくれることは、なんら外部ではないから。

岩瀬…なるほど……確かにそうですね。

井谷…その人のことをよく知ったうえで関わるお仕事、そういう関わり方というのはもちろんあるとは思いますが、でもそれは逆に言うと、いま目の前にいて、どうしたら良いのかわからず困っている人に向き合うことを、ある種さぼっていることになる場合もある。そこでは（目の前の人を）情報に還元してしまっている。知識や情報に基づいて関わる仕事も大事だとは思いますが、そこでは目の前にいる人と関わってはいない。情報と関わってゐる。

例えば色々な歯医者があると思いますが、多くの場合、治療のときは大きな布を顔の上半分にかぶせられますよね。外科で言えば、手術のときは患部だけ、つまり施術する所だけが出るように布がかぶせられる。お医者さんにとっては、ああいう状態が、関わるということなのかもしれない。その人をできるだけ見えないようにして、患部とか術部だけが見えるようにして関わる。つまりその人自身とは関わっていない。奥から二番目の下の歯とだけ関わりたい、できるだけそこだけを見たい。もちろん、歯医者では、水しぶきが顔にかかるからということも言われるから、それはそうなのかもしれないけれど（笑）。そうした患部とか術部とだけ関わるという関わり方に対して、そうではない関わり方をしようとすると、知っているということが、逆に邪魔になることがあるのかもしれないですね。

岩瀬…なるほど。

井谷…学校教育で言えば、「この子はこういう子だから」という関わり方をしてしまうと、その日のその子とうまく出会えなかったり、向き合えなかったりしますよね。それと似ているかもしれない。「あなたのこと知っていますよ」ってなってしまうと、その情報で見えてしまって、一人の人として関わるのが、できなくなってしまうのかもしれない。「この人は政治家で、こういう人生を今まで歩んできて、色々苦労もあつたけれど、いまは成功した」というような情報から関わり、「そういう人なんだあ」ってなってしまうじゃないですか。「先生、大変でしたね」みたいなね(笑)。あるいは職業でなくとも、「こういう経歴を歩んできて、何歳のときにこういう大きな病気をして、そこから回復して、子どもを二人育てておられる」というような情報を最初に知って、そこから関わりと、そういう人として関わってしまうという部分があつたりしますよね。もちろん、そういうことを知っていても良いんだけど、知っていることによって、関わりが阻害されることもあるかもしれないなど。いろいろと話があちこち行きましたが、岩瀬さんたちが知らない人だから向き合えるというのは、このあたりに関わる話なのかなと。

岩瀬…今のお話は、かけがえのなさという語句にも繋がってくる気がします。属性やカテゴリーにおいての関わり、あるいは情報をもとにした関わりというのは、社会の中で強く求められますよね。一方で、おそらくあわ居での関わりというのは、そういうところとははずれたものなのだろうと。その対比については、いろんな論者がいろんなかたちで指摘していると思いますが、例えばアルフォンソ・リンギスの「合理的共同体」と「何も共

有していない者たちの共同体」の対比にも関連するところがあると思います。その人が本当の意味で、かけがえのない存在として居たりとか、自分たちもかけがえのない存在としてそこに居られている時というのは、おそらく属性やカテゴリーといったものを超えた接触、もつと言うと言語を超えた部分での応答がある気がしています。

### ◎コンピテンシーとエージェンシー

岩瀬…自分もすべてを追えているわけではないですけど、最近教育の領域でもコンピテンシー(資質や能力)に対比されるエージェンシーの議論<sup>4</sup>が出てきていると思います。エージェンシーの議論はティム・インゴルドをはじめとして、人類学系の本で自分は良く触れていたもので、教育におけるエージェンシーの話もずっと理解できるところがあります。教育学においては、生徒エージェンシーとか、教師エージェンシーという言葉もありますよね。行為主体性と訳されることの多いエージェンシーは、論者によって、色々な解釈や捉え方があるのだとは思いますが、私自身の認識でいうと、例えば教師エージェンシーというのは、個体としての教師に備わっているものではないと考えています。つまり目の前の生徒との応答関係において、教師自身もよくわかっていないところで発露したり、事後的に確認されたりするもの、それが教師エージェンシーなのではないかと考えています。もちろんそこでは生徒エージェンシーも同時に発現していると思いますが。

3 アルフォンソ・リンギス(2006)『何も共有していない者たちの共同体』(野谷啓二訳)、洛北出版

4 例えば小玉重夫監修(2023)『対話的教育論の探究』、東京大学出版会など

5 例えばティム・インゴルド(2021)『生きていくこと』(柴田崇他訳)、左右社など

井谷…先ほど、菊地さんのインタビューについて少しお話をしたり、そこから質問をしました。自分としてはそうした話を、対談の話題として持ち出してくるのが望ましいのかどうか、お会いしたこともないのにお話をしているのかというところは、実はためらう部分もあるのですが、いまお話を伺っていて、ふと高橋さんのインタビューを思い出しました。あわ居の「ことが生まれる場所」の時間に、「自分が歌います」と言われて歌われたという、あのエピソード<sup>7</sup>。高橋さんはパフォーマーとして、ギターを弾いて、人前で歌われている方ですよね。だからコンピテンシーの観点からすれば、歌える人のはずなんですよ。歌う能力を持っている方でもあわ居の場では、歌うということに緊張というか、ためらいを感じている。ここで歌っても良いのかと。

普段の高橋さんは、彼女が歌うことでお客さんが喜んでくれるという、そういう経験をされてきた方だと思います。その意味では、あわ居で遠慮なく歌ってみせたとしても不思議ではないでしょう。でも、彼女はあわ居で歌うことで、「場の何かを止めてしまわないか」ってお話をされていて。できるかできないかという観点で言えば、できるはずの方が、改めて「歌いたい」という想いを持って、しかし「歌っても良いのだろうか？」という迷いを抱き、でも「歌います」と選んだということ。そのことが今お話された、コンピテンシーとエージェンシーの話と繋がってくるんじゃないかと。

6 今回の掲載にあたってはもちろんご本人にご了承をいただいている。井谷さんが抱くこうした「ためらい」については、岩瀬も同様のものを感じているが、あわ居の実践についての議論を深めていくこと、またそこから知を伸ばしていくにあたってはやむを得ない部分があるようにも感じている。こうした葛藤や「ためらい」があつたうえで、今回の掲載に至ったことをここに記しておく。

7 詳細は本書籍のp.273参照

岩瀬…ひとつの語句として捉えてしまえば、同じ「歌う」ですけれど、パフォーマーとして「歌う」ことと、あわ居で僕ら二人を前に「歌う」ということの間には、差異があるというふうにも捉えられそうですね。それはおそらく「話す」ということについても、同じことが言えるんじゃないかと思いました。社会の中で、私たちは言語を駆使していろんなことを達成するわけですよね。プレゼンテーションであるとか、円滑な指示であるとか、色んなことを求められ、それを遂行する。コンピテンシーはここに関わってきます。一方で、あわ居で「話す」時というのは、それとはまた違う「話す」が現れているのかもしれない。あわ居における「話す」は、個として実施することが難しかったり、日常のあるいは社会的な役割関係のなかで行ったりすることが難しい、そういう類のものなのかもしれません。

### ◎未知に飛び込む

井谷…さきほど岩瀬さんは、どうすれば良いのかわからないけれど、でもプロセスを信頼すると、そしてそのプロセスに同伴していくと、おっしゃってましたよね。そしてわからないというところで、一緒に居られると……いま岩瀬さんの話を聞きながら、「歌う」とか「話す」ということについて、何が違うんだろうかと、私も考えていました。例えば会社でプレゼンテーションをする時というのは、おそらく理解される前提でやっているのだと思う。でも、あわ居でお話をされる時、あるいは高橋さんが歌うと決めたときは、わかってもらえるかが、わからないか……受け入れてもらえるかどうか、と言ったら良いのかな……これを話してしまつたら、あるいはこれを歌ってしまつたら、どうなるのかわからない。

岩瀬…そこでの「わからない」には、あわ居の主宰者である私たちが、それをどう受け取るかわからないと

いう部分がある一方で、それをすることで自分自身がどうなるのかがわからないという部分が同時にありそうですよね。それをしてしまったら、ご本人の中で何が起きるのかが、ご本人もわからない。

井谷…そうですね。もちろん、仕事のプレゼンテーションだって失敗するかもしれないですよ。「君の企画はダメだよ」って(笑)。そう言われるかもしれない。でもそれはそれを含めて想定されていると思うんです。でもあわ居にいらして話したり、歌ったりすることは、「これをしてしまったらどうなってしまいうのかがわからないぞ」というところに、自分を賭けるという感覚があるように思います。一方で、岩瀬さんたちがゲストの方と一緒に、どうしたら良いのかわからないなかで、でもプロセスの中に一緒に居ることも、一種の賭けなんだと思う。その信頼がゲストの方が賭ける瞬間、飛び込んでみる瞬間を生むのかもしれない。

岩瀬…なるほど、面白いですね。今、「賭ける」というお言葉でしたけど、要は未知に飛び込んでいくということですよ。跳躍する。これまでの世界、区切っていた境界を飛び越えていったときに、どうなるのかというところ…:…こうすればこうなるというような既存のパターン、分かり切った秩序ではないところに自ら踏み出して行く。

井谷…だからこそ、わからないでいてくれる人が居るということが大事なんだと思う。「わかってますよ」とか「こうすると、こうなりますよ」という感じの人と一緒にだと、その冒険はおそらくできない。岩瀬さんの「どうしたら良いかわからない」っていうのは、わからないままそこに居てくれる人がいることですよね。そのことが、とても大事なのではないか。

岩瀬…おそらくそこに、自分たちの手ごたえだったり、よろこびがあるんですよね。その現場を共有できるといふところに。

井谷…「外部との接触」という言い方だったかな。そういう場が拓かれるためには、知っている、わかっているというのとは違う向き合い方、出会い方が大事なかもしれないですね。

岩瀬…あとは細かなレベルで見れば、毎回少なからずそうなっているとは思いますが、「これはあきらかに自分たちも外に連れ出されたな」という、そうした感触をありありとその現場で実感するケースもあるんですよね。どこか自分がオートマティカルに作動したりとか…:…その意味でもあわ居は、自分達にとっての外部や、かけがえのなさのようなものを形作っていく場でもあるのかなと。

### ◎かけがえのなさをめぐる

井谷…かけがえのなさ。難しい言葉ですよ。例えばそれは、「この指輪は私のお婆さんの形見で、私のかけがえのない物なんです」という場合もあるだろうし、「私にとってあなたはかけがえのない伴侶です」という言い方もあるかもしれないし。「この場所は私にとって思い出深いかけがえのない場所なんです」とか。あるいはある体験を指して、「かけがえのない体験でした」とか…:…これらはいったい何を言っているんだろう。意味としては、代わりがないという意味ではないかと思うんです。でもたいいものは代わりがないですよ。いまこの一瞬もそうですし、電車で通勤している時間だって、なんだって二度と同じものはない、代わりはないですよ。だから、対象に張り付いている特徴ではなくて、関係のなかの言葉なのだろうなということは思うのです。

……ではそれはどういう関係なのだろうと。あるいは、かけがえのない地球とか、かけがえのない命といった形で、一般論としてそれを使うときもありますよね。岩瀬さんにとっては、かけがえがないというのはどういうことなのでしょう？

岩瀬…うーん……確かにそう言われると難しいですね……ただ、関係性に関しての言葉なんだろうなということとは、自分も思います。ひとまず。あとは「私にとって」というのが付く気はしますね。

井谷…どうすると、「私にとって」かけがえのないものとなるのでしょうか。

岩瀬…あわ居の話とは若干ずれますけど、自分の場合で言うと、自分の中に何かが刻まれてしまったり、それとの関係の中で自分が作り替えられてしまった、なにかを被ってしまったというような……物で言えば、それを使うことで自分の身体に何か変容が起きるということがあるでしょうし、それを見て何かを不意に想い出すこともあるでしょうし。人で言えば、試練を与えてくれた先生とか友人とか。恍惚感をもたらしてくれた作品とか場所であるとか……なんというのか、私というものを語る時に、それをなしにしては語れない、あるいはそれなしには今の自分がいないと思わされるというような、人や物、場所などに対して、「かけがえのない」という語を使っているような気もしますね。自分の場合は。

井谷…うんうんうん。

岩瀬…だから、相互侵犯的なイメージもありますね。

井谷…私の存在と絡み合っていて、それを抜きにしては私とは言えないというような。

岩瀬…それが継続的な関係の場合もあれば、そうではない場合もあるとは思いますが。

井谷…子どもの命のかけがえのなさとか、自分の子どもはかけがえのない存在であるとか……そうしたことを言うときに、確かにいま岩瀬さんがおっしゃったように、自分に大きな変容をもたらした存在という意味合いもあるのかもしれない。

岩瀬…少し思い出したことがあって、あわ居は三年ほどかけていろんな方の力を借りながら、基本的には自力で改修をしたんです。自分は改修を始める時点で、ビスと釘の違いもわからなかった。でも、DIYは流行っていますし、自分もできるかなと甘い考えで始めたものの、やっぱり難しかったと（笑）。それで、やめようかなあ、無理かなあという思いながらも、だんだんと作業が進んでいく過程で、建物に愛着を感じたタイミングがあったんです。ではこれはいったい何なのだろうと……建物に手をいれて行くなかでは、自分の身体や知覚は明らかに変容をしましたし、精神的な面、考え方の面でもアップデートされたところがありました。つまりその建物との関わりのおかげで自分が作り替えられたところがあったんです。ですのでその愛着というのは、おそらく客体としての建物に感じているわけではなく、その建物と自分との間に感じ取れているものなんだろうなと、そう自分なりに整理をしたんです。

井谷…いまのお話を含めて、あわ居が岩瀬さんたちにとってかけがえのない場所なんだなということは、お話

を聞いていてよくわかります。ちょっと考えてみたいのは、じゃあ例えばあわ居のすべての特徴を完全にコピーして、いまの建物と、そっくり入れ替えたら……。

岩瀬…そこではかけがえのなさは感じないのではないのでしょうか。やはり時間や記憶といったものの厚みというのか、堆積がないので。

井谷…一緒に過ごした、あるいは共にした時間が大事だと。

岩瀬…かもしれないですね。いや、でもどうでしょうね……。

井谷…いくつもの彫刻をつくってきた彫刻家がいたとして、その人が使ってきた彫刻刀と、まったく同じようにすり減り、同じように汚れ、同じようにささくれ立った持ち手の刃を与えたとして、それはやはり違いますかね。

岩瀬…うーん……確かにこれは考えれば考えるほど複雑な問題ですね……たとえば家族写真というもので考えた時に、それが三十年前にプリントしたオリジナルのものなのか、それとも同じ写真を焼き直したもののなかによって、確かにそこには差異がありますが、焼き直しの写真から喚起される固有の記憶というものもあるように思いますし。かけがえのなさをどう定義するかにもよりますが……。

## ◎部分と全体

井谷…さきほどまでの（あわ居の改修に関する）お話をお聞きしながら、特徴というのはぜんぶ代替可能なんだなあと思っていました。

岩瀬…なるほど。

井谷…顔がかわいいとか、優しいとか、料理が得意とか。ペンキ塗りがうまいとかね。こうやって特徴を挙げていくと、ぜんぶ代替可能になる。道具についても、自分がこだわっている細かな特徴を挙げれば、じゃあそれを作りますよという話になる。あわ居で言えば、部屋の間取りはこうで、ここに窓があつて、こういう料理が食べられて……みたいに、特徴を挙げていけばいくほど、代替可能になっていく。それがすごく面白いなあ。つまり、そういう特徴をもって、それらをかけがえがないとするわけではないということですよ。むしろ、特徴を挙げていけばいくほど、「じゃあそれ東京でも作りましょう」というふうになる。「同じコンセプト、同じ特徴で」となったら、「じゃあ東京でも」となりえる。ときどきありますよね、それで失敗するという（笑）。

岩瀬…（笑）。このあたりのお話は、いわゆるブリコラージュの話に接続してくるような気がします。人間が目に見えるのは、あわ居で言えば、ここに窓があり、石徹白という土地に建物があり、壁は土と漆喰で、という個々の要素ですけど、それはあくまで表に出ている部分にすぎません。そこでもう一個レイヤーを下げて見ると、実はそれらの要素間には、私たちなりの線というのか、有機的連関がおそらくあります。つまり何が言いたいかと言うと、最終的に目に見えるところで、いろんな要素が表に出ているとしても、やはり全体としては、要素には還元できないものがそこに現われているのではないかと思うんです。

井谷…すごく大事なお話だと思います。ぜんぶ目に見えるかたちで説明することはできない…：特徴をピックアップすればするほど、あわ居のことを詳細に知れるような、そういう錯覚がありますよね。なんでもそういうのが…：例えば「山田太郎さん」という人のことについても、特徴を知れば、「わかった」というふうになるという考え方があつた。でもいまのあわ居のお話だと、そうなっていないということですよ。そういう仕方ではわからない。逆に特徴をピックアップすればするほど歪んでしまうというか。かけがえのなさというのは、そういうことなのではないのかなと。

### ◎隔たりと重なり

岩瀬…今、ふっと思い出したことで、あわ居のインタビュー集では、体験者それぞれの「その人性」みたいなものが出てるように個人的には感じているんです。言い換えればそれはかけがえのなさです。じゃああのテキストに、体験者の方それぞれの、個人としての特徴が載っているか、そういうものが羅列されているかと言うと、そういうのはほとんどないんです。

井谷…そうですね、載っていないです。

岩瀬…けれどもあのテキストには、その人の「声」が響いていたり、「顔」がおそらく映っている。しかもそれがあわ居を媒介して出ているというところに、面白さがあるなあと。もつと言うと、あのテキストは体験者の語り、体験者の声ですけれど、おそらく同時に「あわ居の声」でもあるんです。その二重性というのか…：体験者があわ居のことを語っているのに、そこにその人の「その人性」が出ていて、一方で、あわ居もまたそこで

象られているという。

井谷…いやー、面白いなあ…：極端に言うと、ある芸能人の方があわ居に来たとすると、やはりその芸能人があわ居のことを語ることになるというか、やはりその芸能人が喋っているなあとなってしまふ(笑)。でも、いまのお話からすると、そうではないということですよ。その人の普段の生活とか、人となりとか、出自とかが詳しく自己紹介されているわけではないからこそ、体験者のインタビューを通して、あわ居の声が聴こえてくると。

岩瀬…しかもそれがずれるんですよ、みんな。

井谷…なるほど。

岩瀬…そのずれにこそ、人それぞれの世界が映っているというように、そういう感覚が自分にはあります。だからある種、あわ居は共有地というか、共通世界というか、隔たりつつ、でもだから故に時に重なり合うという、そういう性質をもった場所なのかなという気もしています。例えば教育って、容易に権力と結びついてしまう部分があると思いますし、世界を無視して、「これが良いことだ」っていうのを上から渡すことも簡単にできしてしまうと思います。

でもほんらいの教育環境においては、「私にはこう見える」「でもあなたにはこう映っている」というような、解釈の多様性を担保するための余白が必要なのではないか。そのうえで、それぞれの世界は異なっているけれど、そこに分かち合えるものがあるよねっていう、そうした共同性をつくるのが、教育環境としては理想なんだろうなという気がしています。逆に言うと、現代はそういう余白が少ないですよ。すぐに言語に置き換えられて

しまう記号性を、みんな好むところがある。あらかじめわかっておきたい。あるいはみんなと同じものを持っておきたい。でもかけがえのなさというところでは、無節的などころで世界と対峙するとか、非言語のところでは何かを感じるのか……そういうところこそ、それへと至る通路があるのではないかと思います。

### ◎わからなさという余白

井谷…その意味ではかけがえのなさというのは、「わからないもの」なのかもしれないですね。さきほどの話で言えば、わかってしまえば、同じものを再現できてしまうわけだから……さきほど「何も共有していない者たちの共同体」の話がありましたけど、理解や解釈を共有しえないところに、かけがえのなさが立ち現れてくるのだとすると。菊地さんの体験されたあわ居と、高橋さんの体験されたあわ居というのは、もちろんそこには共約できる部分、例えば「こういう部屋でした」っていうような部分はありつつ、でもそれぞれに共約できないものがあると思います。そしてその共約できないものこそが、かけがえのなさとして残るのではないかと。

岩瀬…となると、例えば文字だけで構成されている書籍で言えば、文字でない白の部分、つまりは行間にこそ、その人にとってのかけがえのなさがあるということでしょうか。

井谷…なるほど、さつき岩瀬さんが有機的連関っておっしゃっていたけれど、そういうことか……すこし思い付きというか、とりとめがなくなってしまうですが、さきほどプロセスへの信頼があるというお話をされましたよね。チェックインして、お風呂に入って、食事をして……という。それらはタイムテーブルとして目に見えていて、説明可能なものですよ。けれども、岩瀬さんご夫妻は、どうしたら良いのかわからないまま、お迎えを

すると。手順やフォーマットはありつつも、どうしたら良いのかわからない余白がたくさんあると。そこはつまり、特徴や言語、情報に還元できないものですよ。ここにかけてがえのなさを考えるヒントがあるのではないかと。この余白こそゲストの方にとってのあわ居／あはひ（間・機縁）があるのではないかと。

岩瀬…要素の話でいえば、あわ居の館内には書籍が置いてあったり、窓から植物が見えたり、川の音が聴こえたり、いろいろあるわけですけど、その人が反応するところ、フォーカスする部分はそれぞれ違いますし、かつそこに何を見るのかも全然違います。だから、先ほどのお話ではないですが、共通する部分はありつつも、そこで見ているものも、またズレているんですよ。そこが面白い。そこにこそ何かがある気がします。広告なんてまさにそうですけど、今はやっぱり「これはこうです」っていう揺るぎない解釈をあらかじめ言語的に与えられて、それをそのままキャッチできればコミュニケーションが成立しているというような形態が多いと思うんです。リングスの言う「合理的共同体」は、おそらくそういうところで営まれている共同体ですよ。

### ◎原初の場所へ

井谷…菊地さんのインタビューのなかに、あわ居から帰ってから日常に対して問いが生まれた、という話が書かれています。おそらく私たちは、普段知っているつもりの世界の中では問われたいんですよ。世界から。「さあ、おまえはどうする？」と、あまり問われていない。「雨降ったら傘さすんですよ」とか、「喉が渴いたらコーヒー飲むんですよ」とか、だいたい知っているつもりの行動をしている。だけど、わからなさに一緒に付き合い合っていてくれる岩瀬さんたちみたいな人がいると、例えば雨が降ってきたとか、蟻が歩いていることとか、そういうふとしたことに対して、「あなたはどうレスポンスするんですか？」というふうに立ち戻れるということか。わ

からないところにいちいち立ち返れるのかもしれない。

岩瀬…なるほど、面白いですね。

井谷…「いま、雨降っていますけど、あなたはこれにどう響き合いますか？」というのを、世界から問われる。かけがえのなさというのか、固有性というのか、その人の応え方がそこで問われる。あわ居はそういう場所なのかもしれないですね。

岩瀬…さきほど、日常ではあまり問われたいというふうなお言葉がありましたけれど、今の社会には「問わなくて良いよ」とか、むしろ「問わないでよ」みたいな力もあつたりしますよね。

井谷…そうだと思います。

岩瀬…だから、そもそも「そういうことをして良いの?」「そこを問いかけても良いの?」という部分が、現代の社会、あるいはそこに生きる人のなかで、すごく強くなっているような気がしています……でもあえてそこを踏み越えて、どう応対していいのかわからない事態に自分を晒す時間というのは、逆に言えば、自分から脱出できる時間にもなりえますよね。もしかしたら、そこには恐さがあるかもしれませんが……だからこそ、本当の遊び、つまり跳躍としての遊びは、誰かが見ていないとやれないんだという話もあつたりしますよね。それに近いのかなという気もしました。

井谷…なるほど。面白い。

岩瀬…つまり、一人では少し不安になってしまうと。例えば小さな子どもだったら、同伴者としては親が多いのでしょけれど、遊びのなかで自分が賭けに挑んでいく状況、いわばどうなるかわからないその現場に、一緒に大人が居てくれるからこそ、子どもは遊ぶことができるわけです。遊びと言うのは、いわば世界の受け取り直しの行為ですよ。そして受け取り直しの行為こそが、本来の創造行為だと思うんです。アーティストはその為に作品を作るのでしょし、教育学者の矢野智司さんの「生成としての教育<sup>8</sup>」というの、まさにそのあたりの議論ですよ。そして世界を受け取り直す時には、言語がない状態というのがあるのではないかと自分は思っています。それを僕は「詩」と言っているわけですが、例えばインフアンティア（言葉の手前にあるもの）という言葉もあつたりしますよね。あわ居においては、そういう言語を超えた状態が、対話的などころで生成される場合もあるでしょうし、一方で雨や植物などとの応答において、つまりは非言語的などころで起きることもある。

井谷…普段、自動的にやっていることをいったん中断したり保留したりして、「じゃあ私はどうするんだ」「私はどうしたら良いかわからないぞ」というところに立つことができる……そういうふう迎えてくれる場所って、それこそないですよ。

岩瀬…なるほど、そうなんですか……。

井谷：何者でもないぞつていう。それはなかなかないですよ。

## ◎二重性あるいは共同性

岩瀬：最後になりますが、自分は今回の対談の冒頭で、役割とか機能を剥がしたところで人と出会いたい、それであわ居をやっているというような話をしたわけですが、でも本当にそこに役割がないのかと言えば、それはまたあやしいのかなという気もしています。実際あわ居では金銭の授受が発生していますし、見方によってはあわ居での関係性は、ファシリテーターとクライアントという構図で捉えられるようにも思っています。オープンダイアログやイタリアの精神保健などはまさにそうだと思いますけど、役割関係がありつつも、そこに「わからなさ」や不確実性を抱えた人対人のレベルでの応対が成立しているケースもありますよね。

これに関連するところで言えば、人類学者の小田亮さんは、レヴィ・ストロースの言う真正な社会にも役割関係はあって、でもそこには同時に役割関係に還元できない過剰性があるのだということを論じています。つまり役割関係があるのに、そこに代替不可能性があるという、その二重性を指摘している。このあたりは、あわ居での対人関係に限らず、今後の社会全体の中の対人関係を考えていくうえでも、かなり大事な論点だと思っています。どうやったらその二重性を確保できるのかということですね。

こうした共同性に関する問題については、徳山村の写真撮った増山たづ子さんの写真などを見ている、個

9 例えば小田亮編(2010)『グローカリゼーションと共同性』p.247-276、成城大学民俗学研究所グローカル研究センターなど

人的にいつも深く考えさせられますね。「顔」のある集落、「顔」のある共同体といったら良いのでしょうか……さらにここを掘っていくと、共同体におけるの秩序と無秩序、構造と反構造を行き来することの重要性についての話などにもおそらく繋がっていきますよね。こうしたことについても今後じっくり考えていきたいと個人的に思っています。最後ぶわつと話が膨らんでしまいました(笑)、今日は長い時間本当にありがとうございました。

井谷：ありがとうございます。

対談実施日：二〇二四年二月十九日

井谷信彦（いたにのぶひこ）／教育学者  
1980年生まれ。専門は教育哲学・臨床教育学。受苦、情感、即興など、言葉にして説明したとたんに元来の特質が失われてしまう現象に関心を寄せながら、ひとが生きることと学ぶことのありうべき関係を探索している。著書に、『教育の世界が開かれるとき』世織書房（共編著）、『教育学のバトス論的展開』東京大学出版会（共著）、『存在論と宙吊りの教育学』京都大学学術出版会など。即興演劇、即興音楽など、即興と名のつく営みに目がないインプロホリック。遊ぶ／学ぶインプロゲーム主催。武庫川女子大学教育学部准教授。

## 【あわ居の研究（対談）】

虚実のあわい／松本篤さん（AHA!世話人）



虚と実、遠さと近さ、私と私たち——。それらのあわいを見つめることでひらかれていく、「分かち合うこと」の可能性／不可能性をめぐる放談。

### ◎生（なま）と加工

岩瀬：まずは、私からあわ居のホームページ上で「体験者インタビュー集」<sup>1</sup>を始めたいきっかけについてお話ししたいと思います。

1 あわ居のホームページ上に掲載の「体験者インタビュー集」は、本書籍内の「あわ居の記憶」に全文収録されている（pp.207-341）。

改修期間を含めると、あわ居という場を始めて約八年が経ちました。そのなかで強く感じているのは、あわ居という場所のこと、あるいはそこで私たち主宰者と来訪者の方との間に起きていることを、第三者に伝えていくことの難しさです。どうやったらそれらのことが伝えられるのが一向にわからなかったですし、今も模索している最中にいます。

あわ居には本棟、別棟という建物には確かにありますし、例えば一泊二日で実施している「ことが生まれる場所」<sup>2</sup>で言えば、何時にチェックインして、何時に食事をして……といった感じで、ある程度のフォーマットのようなものも存在しているわけですが、しかしその都度、来訪者の方との間に生じることはまったく異なります。その意味で、主宰者である私たち自身が、一方的に「あわ居はこういう場所です」とか「こういうことが起きる場所です」というのを言い切るだけで、それで本当にあわ居をしつかりと伝えたことになるのかというと、それはちよつと違うのかなというのを感じています。かと言って、「とにかく来てください」とか「来てもらえばわかります」という態度を示すのもまた違うし、そもそも山奥にあるので、アクセスが悪く、気軽にふらつと行ける場所ではない。もちろんここには経営という要素も絡んできますが、このままの伝え方ではどこか閉じた在り方になってしまわないかと、そんな気がしていました。そうしたなかで、「これではいけないな」というところで、「体験者インタビュー集」の掲載をあわ居のホームページ上で始めたという経緯があります。

ですので、「体験者インタビュー集」をはじめた背景としては、「どのようにすればあわ居のことを第三者に伝えられるのか」というところへの問題意識が大きかったわけです。でも、実際にインタビューをして、それをテキスト化してみると、これはすごく面白い作業だなということに気付かされた。私が、松本さんと出会ったのがちよつと十年ほど前だったと思いますが、そのあたりの時期は、松本さんが一貫して追及されている記憶や歴史

といったテーマであったり、またそれらと言葉との関わりといったところに私自身、非常に関心がありました。ある個人的な経験が、どのようにすれば時間や空間を隔てた人とも分かち合えるのかといったところ。しかしその後、あわ居の活動にぐっと舵を切った中で、そのあたりへの自分の興味関心は、いったん落ち着いたのかなと思っていました。しかしあわ居の「体験者インタビュー集」のテキストの価値について思索する中で、実はその頃に自分が集中的に考えてきたことに、多少リンクする部分もあるのではないかと感じています。今日はそのあたりのことについて松本さんとお話ができればと思っています。

松本…生で起きていることを、その場に居ない人にどのように届けていくか。つまり時間も空間も共有していない人と、何かを分かち合う方法に私も関心があります。二〇〇五年にアーカイブプロジェクト・AHDを始めた頃は、いかにその場で起きていることの強度を高めることができるのか、ということを考えていました。収集・活用といったアーカイブの一連のフローを静的ではなく、いかに動的なものに変容できるのかというモチベーションが高かった。だからその頃は、「場」の捉え方が偏在的だったんだと思います。でも最近では、「場」の捉え方が遍在的になったというか……現場にいない人に、そこで起きていたことをどのように伝えることができるとか、といった別の考え方も必要だと思えるようになりました。

お魚の料理で例えるなら、お刺身と干物の関係。魚は魚なんだけれど、味わい方が違うみたいなのはやっぱりある。今の私たちのプロジェクトでは、ワークショップといった「生」の場の設計や実施は「お刺身」としていかにおいしくできるのか。一方で、書籍は「干物」という感覚があって、そのいちばん旨い料理法を追求しています。一生懸命、遠くの人にお刺身を食べてもらおうっていうのは、良い意味で捨てている。そのうえで伝え方を考えているというのが、記録と記憶の残し方を考えていくうえで、ひとまず辿り着いているところですね。

まあ当たり前といえば当たり前なんですけど。

でも、たまに干物と刺身が「同じ魚だったんだ」と気づく時があるんです。それが例えば、あわ居の「体験者インタビュー集」上で語る岩瀬さんと直接会うとか、実際にあわ居に行ってみる経験。あるいはその逆で、実際の滞在のあとに、インタビュー集を読んでみる経験。生鮮品と加工品の〈ぎっこん、ばったん〉を経由して、二つの別々の経験は接続されていく。

岩瀬…なるほど。私としても、「体験者インタビュー集」を通して、あわ居の質感や雰囲気、その場で起きていることを、それが断片的にはあれ感じてもらえるかもしれないなとは思っていますし、そこから実際にあわ居に来てもらえる流れができないかなあというところは、明確に意図してやっているところがあります。また松本さんのおっしゃるように、あわ居滞在後に、他の方のインタビューを読むことで、何かが生じることもありますよね。それらに加えて、「もしかしたらこういうことも起こりうるのかな」と、自分自身が考えている別のことがあって。そのことについて、少しお話ができればと思っています。

## ◎私と私たち

岩瀬…まずは、自分たちはあわ居という場所で、来訪された方と一緒に出来事を作っているのかなというふうに整理をしています。出来事という語句は、論者によって様々な捉え方がされているものだと思いますが、自分自身としては、その時点でのその人の容量を超えたものを受け取る体験を、出来事だというふうに理解しています。例えば日常というのは、「こうすればこうなる」というかたちで、見通しや予測がある程度つく中でこそ、

円滑に流れていく部分があると思います。一方で出来事に晒されている時間というのは、「ちよつと何が起きているかわからないぞ」という部分がある。つまり、その時点での手持ちの言葉の範疇では整理できないものを体感している時間が出来事であり、そうしたものを、あわ居でつくっているのかなと私としては考えているわけです。

ですので、「体験者インタビュー集」というのは、見方によっては、「あわ居でこういう出来事に遭遇しました」という部分が記述されているとも捉えられるのかなと。そして、その時点で何が起きているのかわからない時間について体験者が語る場合、そこには割と共通する語りの傾向があるのかなと思っています。あわ居の話で言えば、「あわ居に来る前はこうでした」というところから始まり、「あわ居でこういうことが起きました」、そして「その後、こうなりました」という流れですね。あわ居で遭遇した出来事を起点とする、自身の移ろいを話の中で構成しながら、その亀裂について語っていただいている印象がある。その意味で、「体験者インタビュー集」のテキストは、とても物語っぽいものだなと思っています。

おそらく、その人の容量を超えたものを受け取る体験というのは、それまでの自分自身のパターンや秩序が剥がされたうえで、じゃあそこで自分が、もつと言えど誰でもない「この私」が、どのようにそこに応答するのかということが、鋭く問われる場面だと思います。その意味で、あのテキストには、どうすれば良いのかわからない事態に晒された人が、「この私」において、どのようにその出来事を捉え、どう次の有り様につなげていったのかという、その構えのようなものが書かれていると思うんです。わからない事態に対して、他の誰でもない「この私」がどう応答したのかという、その人のその人なりの個性がみえたいものがすごく出ている文章のように私には見える。そしてこうした、その個性が刻印された文章を、時間も空間も共有していない人が読むことで、もしかしたら何かが起きるのではないかということを感じています。

松本：今のお話に対して、自分の関心に引き付けると、まさしく今私の頭の中を占めているのが、「私」と「私たち」を行き来する経験を、どう捉えればいいのかということですね。二つほど例に出してお話します。一つ目は、二〇二一年に『わたしは思い出す』という展覧会を企画した時に経験したエピソードです。展覧会を企画したきっかけは、東日本大震災発災から十年目の「節目」に、「せんだい3.11メモリアル交流館」からAHAIにいただいたオフアールでした。私は企画を構想する段階で、かおりさん（仮）という仙台市の沿岸部に暮らす、あ一人の女性と出会います。彼女は二〇一〇年に第一子を出産するのですが、出産日から育児日記を書き始めるんですね。『わたしは思い出す』は、そんな彼女の育児日記を彼女自身に再読、回想してもらうことで、東日本大震災からの十年間を捉え直すというものでした。

かおりさんが出産された数ヶ月後に東日本大震災が起こったので、彼女の記録は育児日記ではあるんですが、震災の経験が育児の経験とない交ぜになって記述されている。そういった性格のものを振り返るということは、育児の経験、震災の経験、その両方の語り直しとなります。それはずっとAHAIがやってきたような、私（わたし）的な記録や記憶を、公的なものに対置させるアプローチにつうじるものでした。震災が取り扱われる際には被害の大きさにフォーカスされることが多いんですが、それだけに留まらないものが私的な記録と記憶から見えてきました。展覧会は神戸、水戸にも巡回し、その成果を再構成した書籍も作りました。結果的に、三十万字くらい、厚さで言うと五センチくらいのもになりました。

かおりさんが語った「わたし」を主語にし直した語りというのは、聞き手である私と、話し手であるかおりさんの二人で作った言葉だったりするわけです。聞き手と語り手の協働をとおして出来上がった三十万字の言葉。その意味では、本当のかおりさんの言葉は、あの本の中には一切出てきていないんじゃないかということを考え

たりもします。私が聞くことで彼女の言葉というのは一人のものではなくなるわけなので。「わたし」の言葉は二人で作ったものであって、彼女自身の言葉は、彼女の中に留まり続けていくように感じました。あるいは、より遠くにいつてしまうような感じ。いい意味で閉じていく感じ。私的な記録と記憶に着目したアーカイブという活動をめざしているけれど、本当にそれを「私的」と言って良いのかという問いかけを、自分たち自身に投げかけるような経験でした。

二つ目の話をします。私的な記録、例えば個人的な写真だったりとか、ハミリフィルムなどの個人的な映像だったり、今回で言えば、育児日記だったり。それらは全部私的なメディアと言えるんだけど、そこには全部、「イエ」という制度や「家族」という集団がひつついてくるんですよ。つまり、私的な記録と言ったとしても、それは付随的なあり方。「家族」が主としてあって、従属的なものとして個的なものが出てくるっていうような順番。「イエ」の概念に内包されたものとして私的なものが出てくることも気になってるんですよ。私たちの活動は、私的な記録を扱っているのか。また、そもそも、私的な記録とはいかなるものなのか。

岩瀬：面白いですね。

松本：さらに「AHAI」というプロジェクト名についてもふと考えたりします。二〇〇五年にプロジェクトを始める際、私的な記録や記憶の、曖昧で非言語的な部分、それによってもたらされる「驚き」、つまりとても感嘆詞的なあり方を日本語でも英語でも表現できたらいいなと思っ、「あはれ」とか「aha」という言葉が連想されて「AHAI」という名称をつけた。「Archive for Human Activities / 人類の営みのためのアーカイブ」というのは完全なあとづけなのですが、でもよくよく考えると、「人類」と言っているんですよ。

人類ということは、「they」や「we」ですよ。私（わたし）の記録を扱っていることと、これが私たちのアーカイブだと言っていることが、どういうかたちで繋がっていて、どういうふうに違っているのか、どこが重なっているのか。そういうことが気になっているのが今なんです。どこかで「私」と「私たち」というのを行き来しているんだらうな。当たり前のことなんですけど、そのことをここ最近で再認識して、自分で驚いているわけです。啓蒙的に、教条的に「私たちって大事だよ」と言うことは簡単だけど、説得力がないと思っています。そのうえで、どうやったら私たちは、「私たち」という言葉を信じられるんだらうって。往々にして損な役回りをすることの多い「私たち」という主語について、今あらためて考える必要があると感じています。「私たち」を取り戻さないといけないんじゃないかって。

ちょっと前置きが長くなりましたが、あわ居という場を構えられているなかで、岩瀬さんにもそのような経験があったりするんじゃないかと思って。ウェブサイトアップされている岩瀬さんの文章を読ませてもらったりすると、「私」という主語と「私たち」という主語が重なりながら、たびたび登場するんですよ。今日はどんな話になるかわからないんですけど、まずはそのあたりから投げかけてみたいと思います。

岩瀬：どの話も非常に興味深いです。いくつもひろいたい論点がありつつ、ここですべてに接続できるわけはありませんが、まず個人的なものが従属的に出てくるというお話は、自分自身の感覚としても非常によくわかります。「家族」というところは話がずれますが、例えばあわ居のインタビュー集の話に引き付けると、あのテキストには、体験者それぞれのその個性が出ていてはないかという話を先ほどしました。その人のかけがえのなさ、唯一性ですね。でもそれは、あわ居という場所、そこでの時間、あるいは私たち主宰者との間に起きた出来事についての語りにおいて、出ているものなわけです。つまり、ここでのその個性は、あわ居という場所、

そのメディアを介して、間接的に、あるいは従属的に出てきています。

それで、これっていったい何なんだろうと思った時に、おそらくそれは唯一性というものをどう捉えるのかという部分に関わってくる話なのかなという気がしました。唯一性というのと、どうしても自分の内部にあるもの、自分の中に客体としてあるものだと捉えがちですが、おそらく本当の意味での唯一性というのはそういうところにはないのだと思います。むしろ、他のだれにも代替されないような情況や関係性において出現したり、そこでふと実感されたりするもののではないか。個的なものが従属的に出てくるというお話は、このあたりと何らか関連があるのではないかと思いつきながら聞いていました。

次に、「私たち」という部分についての話でいうと、例えばあわ居の「体験者インタビュー集」というのは、社会的な出来事や、いわゆる公的なものについての話ではないですよね。辺鄙な場所にある一つの固定的な場所を起点にして、ある個人の中に起きたこと、そこから語られたことがそこには記されています。けれども、自分としては、あのテキストの中に、今の社会、あるいは時代のようなものをふっと垣間見るような感覚を覚える時があります。そしてそのことも含めて、私にはあのテキストを媒介として「私たち」が生成する兆し、あるいは潜勢力を感じているところがあります。

社会に生きていくうえで、人は、定型的那种とか支配的とかどうか、その時代に流通しているある典型的な生活様式や存在様式を採用している部分が、誰しも少なからずあるように思います。けれども、あわ居で出来事に晒されている中では、そうしたものは剥がされて、境界的な状態の中で、「この私」を鋭く問われる。そしてその問いかけに対する応答として紡がれたあのテキストには、どこかその人の「顔」のようなものが刻印されて

いるのではないかという気がしています。

まだたくさんの方に読んでいただいているわけではないので、これはあくまでも現時点での私の推測ですし、起こりうる可能性の一つに過ぎないわけですが、定型的存在あるいは支配的といわれる生き方に対して不一致感を抱えている人や境界的な状態にある人が、あのテキストを読んだ時に、「あ、もしかしたらこうしたら良いのかも」とか「あ、こっちにいけば良いのかも」みたいな感じで、現状を打破する通路や流れのようなものが、ポコッとどこから出てくるというような、そういうことが起こりうるんじゃないかという気がしています。そこに刻印された他者の「顔」から眼差されるようにして。そういう生の有り様、存在状態もありだよねっていうところで後押しをされる。もつといえ、外へと押し出される。そしてそれは「体験者インタビュー集」に書かれた、応答の仕方をそのまま引用するというかたちではなく、良い意味でのその人なりの誤読や勘違いもしつつ、ある種の跳躍として、現状から脱出するための通路が生じるのではないかと。その瞬間に他の誰でもない、その人の個性が浮上してくるのかもしれないですし、もしかしたら、そこにこそ「私たち」がいるのかもしれない。その意味では、ここでの「私たち」というのは錯覚的に感知されるものに過ぎないのかもしれない。実際のあわ居の場でも時折確かに「私たち」の感覚を得ることがありますが、これも実は錯覚的に感知されているものなのだろうと個人的には思っています。

## ◎言葉の力、あるいは裏切り

松本…今のお話は、言葉の問題としてリフレームすることもできるのかなというふうに聞いていました。言葉にのる。言葉につられる。どこかで読んでいるテキストに連れて行ってもらう感じがありつつ、でも読みながら

自問自答し始めると、どこかで話し始めたり、語り始めたり。書き始めたり。受動的でありつつ、前のめりになるといふ。そういう言葉の持つ力があるというふうには聞こえませんでした。それは言葉を信じているというふうにもとれるし、一方で言葉に裏切られるような感じもある。あるいは言葉を裏切るような感じもある。良いように解釈するというか。まあ占いみたいなものかもしれないけれど。でもそれによって活力が生まれるみたいなことが、現実としてありますよね。

語りは騙(かた)りであり、騙りは語りである。言葉を信じて何なんだろうなと思ってお話を伺っています。今、岐阜県美濃加茂市伊深町(旧伊深村)をフィールドにして取り組んでいる「なぞるとずれる」というプロジェクトとも繋がるところがあるなど。これまでのAHHの活動は、公的なものではない私的な記録をいかに扱うかという問題意識が強かった。でも「なぞるとずれる」は少し違う。というか、込み入っている。戦時中に当時の伊深村の子どもたちが父親や兄、あるいは親戚や近しい関係にある出征兵士に向けて手紙を書いた。手紙と言っても、「ヘイタイサンへ」みたいに誰が読んでも良いように書かれたわけですが、そのあり方自体が二重に私に嘘をついているというか、私性が偽装されているんです。つまり、戦時下における規範にそって書かれているという意味で私的なものではないし、それが手紙という形式をとった文集であること自体、私秘的ではない。「そもそも私的な記録とは何か?」。そんな問いかけをも含み込みながら「偽装された私性」を取り扱っているという意味で、これまでの取り組みとは違う。

それは結局のところ、言葉を疑っているとも言えるのではないかと考えています。そこに書かれている手紙の内容は先生に指導されて書かされたようにも受け止められるが、それは現在から捉えるとそう見えるだけで、皇国史観に浴した軍国少年、少女は、本当に当時の価値観に即して書いていた。さらには、文脈も歴史も全く異なる

るのでとても危なっかしいのですが、敢えて言えば、現在のウクライナに暮らす子どもだったら、「ヘイタイサンガンバッテ」と、自国のために戦う近親者に言ってしまう気もするんです。どこまで行っても本当には分らないんですけど、言葉を信じながら疑う作業を継続しています。例えばどうなんでしょう、実際のあわ居の場において、言葉への疑いが現れることが岩瀬さんの中にあたりするんでしょうか……。

岩瀬…うーん、どうなんでしょう。例えば、本当に本人がそうだと思ってしまうということはよくあると思います。それは嘘をついている、ついていない、というレベルの話ではなく、本当に間違いなくそう思っている。「自分はこういう人間である」とか「こういう性質がある」というふうに、自分を捉えている。もしかするとそこには社会であるとか、その人をとりまくネットワークの中で、知らず知らずそう言わされていたり、そう思わされてしまっている側面もあるのかもしれない。その意味では、思っているのではなく、思い込んでいると言える場合も多々ありそうです。本人がその言葉を使いながらも、実は本人ですら意識できていないところで、誰かや何かに言わされていることは、たくさんあると思います。

でもそうしたドミナントな(支配的な)ものが揺らされることがありますよね。例えば人間関係のゴタゴタであるとか、仕事上でトラブルが起きた時に、それまで形成してきたナラティブが揺らされることがある。つまり、言語的に区切っていた世界が揺らされる。そしてそこにはやはり叫んでいる身体がいる。まだ自覚していない過去の記憶や、隠蔽された自身の性質といったものも含めて、未知の他者が身体には潜在している。そこを協働して立ち上げていく作業をあわ居でしているのかなと思っています。その意味では、それこそ松本さんのおっしゃる「あはれ」じゃないですけど、それが出てきたときに、自分でもびっくりするようなところもあると思うんです。「自分ってそんな感じだったんだ」というところで、それまでのドミナントなナラティブからすれば、か

なり逸脱した自分自身が出てきてしまう。それを見てしまう。

例えば、あわ居の「ことばが生まれる場所」に、あるご夫婦が参加された時に、対話でどこを重点的にテーマとして掘り下げていくかを一緒に検討している時に、「いや、その部分は特に問題ないです」って言われたことがありました。でもこちらからすれば、「いや、そこに何かがあるようにしか思えない」っていう（笑）。それはもう対峙した際の身体的な反応として、どうしてもそのように、こちらからは見えてしまう。それで「ほんとうですか？」というところで、切実に問うていたり、あるいは逆にじっくり待たせたりしていると、やっぱりそこからわらわらと出てくる時が確かにあるんです。

だから、本人が「いや、その部分は特に問題ないです」っていうのは、嘘をついているわけではないと思うんです。言葉ってやっぱり世界を区切れるものではあって、あまりに開けっ放しにしていると、いろいろと入ってきてしまい、日常に支障が出ることもあると思います。ただ一方で、社会やその人をとりまくネットワークに生きるなかで、一般的あるいは定型的といわれるようなナラティブにしがみつこうとしてしまう力が強まっているのかなということは非常に感じています。その意味でも、世界の固定化に加担してしまう力を言葉は持っていますよね。でもそこを引き剥がし、流動化させていく力もまたもっている。その二面性を自覚したうえで、言葉を扱っていくことの重要性を感じています。

### ◎とじるとひらく

松本…少し話が戻りますが、「体験者インタビュー集」に掲載されているのは、たぶん強度があるというか、

耐久性がある言葉になっていると思うんですね。つまり、色んな人が見るものだから、割とパブリックな言葉になっっているような気もします。実際のあわ居で話される言葉は、たぶんもっと狭い言葉で、外には出せない言葉だったりするわけですけど、でもその言葉がけっこう大事で。つまり、インタビュー集で語る言葉と、実際のあわ居の場、つまりその中の私たちだけで完結する言葉があつて。それで、後者のようなものが閉じられた私たちの記録として手渡されると、「私こんなこと言っていたっけ」みたいな経験が後からもやってくる気がする。怖いんですけど、ちょっと寝かしてから、例えば数週間後にその記録が手紙で届くとか（笑）。言葉は別にみんなの為に使わなくても良くて、その人たちと私のためにあつても良い。狭い場所でしか使えない言葉もたぶんあると思うんです。そういうのも大事なのかなあという気がしました。それこそ、かおりさんじゃないけれど、私一人の時間が育っていくというか。

先ほど、岩瀬さんが、ドミナントなものが強固だという部分の話をしましたけど、ほんとそう思うんです。でも、今言ったようなものとして記録があつて、それを後から更新していくとか。それを冷静に見直して、もう一回赤をいれるみたいな。そういうフィードバック作業を、境界的な場所にいる時にやっても面白いのかなとか。あるいは場が終わった後に、私たちだけの会話録としてプレゼントするとか、そういうのも効果があるような気がする。

岩瀬…なるほど。ある鼎談の中で、精神科医の北山修さんは言語には二者言語と三者言語があつて、それらを区別することの重要性を指摘しています。二者言語というのは、例えば日常生活のなかで、友人や家族とコミュニケーションする際に使っている言葉です。そして臨床家の力量が最も問われるのが、二者関係における言語であると。一方の三者言語は、みんなに向けて書かれた言語で、臨床家で言えば論文であるとか、学会で報告する際に使用する言語です。そしてその鼎談の中では、二者言語と三者言語は鋭く対立するものであるのではない

かと、臨床心理学者の桑原和子さんが指摘する一方で、第二者性と第三者性を往還することの重要性が同時に語られている。また、今の社会においては、第三者性が強く要求されることがはつきりと記されている。こうした内容に自分自身、非常に考えさせられるところがありました。

やっぱりあわ居というのは僻地にありますし、やっていること自体も、悪い意味での神秘性を纏った形態になりがちな条件がそろっています。自分自身はおそらく、本質的には三者言語よりも二者言語、二者関係への興味が強い人間なのかと自覚しています。でも仮にそうだとしても、第三者があわ居に対して外から批評できたりツツコミをいれてくれるような、そういう有り様でいたいという思いがあり、「体験者インタビュー集」を掲載している部分もあります。

先ほど、あわ居の「体験者インタビュー集」の言葉がパブリックな言葉になっているという松本さんの話がありました。おそらくこうした背景による影響もあるように思います。つまり「体験者インタビュー集」はもともと、第三者にひらく前提でインタビューが実施され、それがテキストになったもののだと思います。一方で、今の閉じた記録についての松本さんのお話もまさにその通りだなと思いつつ聞いていました。そこでも確かに、何かできることがあるかもしれないなど。このあたりのお話って、冒頭で少し触れた、生ものと加工についてのお話とも少し関連してくるところでしょうか。

松本…それに近いと思います。私はワークショップという言い方をしますが、まず現場があって、一方でそこ

2 矢野智志・桑原和子編(2010)『臨床の知 臨床心理学と教育人間学からの問』pp.174-182 創元社

に居ない人のために本を作ったりするみたいな、その二つの時空を行き来するところがある。最初は、ワークショップで起きたことを文字に起こす、つまり聞き書きのようなかたちにすれば伝わらなと思うんですけども。なんかやっぱり自分の中で乖離していくというか。それをそのまま伝えようっていうことが、やっぱり難しいなってすごく感じるが多くなってきたんですね。それがさっきおっしゃったような二者間での対話と、第三者に伝わるような言語の対比の話に近いんだろうなと。

そこではどうしても言葉が変質してしまうというようなことが起きてしまいます。その中に語り手が本当に思ったことが入っているのかっていうことはまあ置いておいて、二人の間に出てきた「わたし」の言葉を第三者に伝えようっていう意識が変わっているっていう感じですね。だから、『わたしは思い出す』で言えば、いつまでたっても、かおりさんの私的な言葉は入っていないのではないかとこの疑いにつながっている。

岩瀬…虚構と言うか…：最後のお話は、何をもってリアリティがあると言えるのか、という問題に引き付けることもできるのかなという気もします。例えばかおりさんが一人で私的に書いたり独白すること、松本さんが聞き手として介在して語ってもらったことって、そこで出てくる言葉はまったく違うわけですね。そこで一つ考える必要があることとして、かおりさんが一人で書いたり独白することが、本当にかおりさんの本音、もっと言えば身体的なレベルで感知している言葉を引き出す作法だということふうに断言して良いのかと言えば、それはやっぱり分からないなあと……。

松本…そうそうそう。そういう意味では二人の間に出てきた「わたし」の言葉は、「私たち」の言葉なんだと思っちゃう。また、過去の私と、今いる私は違うんじゃないかとも思うわけです。過去の自分の言葉を説

み直すこと自体が、いくつもの私、つまり、「私たち」の場になっていく。そういう意味で、限りなく刷新されていく記録というか。常に更新されるために記録が残されていくということもあると思いますよね。「こんなこと言ってたんだあ」とか「今の自分はこういうふうには思わないなあ」とかも含めて。

そういう意味では、たびたびあわ居に訪れる方がいらっしやったら、その都度、何か今感じていることを言葉にして、それがどんどん変わっていくんじゃないのかな。あるいは変わらないかたちもあるんだろうけど。そういうのを振り返るような場所ってなかなかないですよ。記録を残すってなかなか難しいから。続かないから。そういう意味で、特異な場所、特異な行為なんじゃないかって思いますね。その特異な行為をずっと続けているってことだと思えます。だからすごいことだなと思えますね。

### ◎遠さと近さ

岩瀬…話は変わりますが、例えば複数人が集まって、ハミリフィルムで撮られた昔の映像を観る場においては、どうということが生じれば松本さんとしては「うまくいったな」っていう感触を得るのでしょうか。

松本…一つのスクリーンをみんなで囲んで、それを見たみんなの言葉が残ることですね。例えば世田谷の古い映像を色んな人が観て、語る。それが記録に残る。そのスクリーンを囲んでみた人のすべての言葉を残すことが理想であり、でもそれはほぼ不可能でもある。だから、「うまくいったな」と思ったことはほとんどない。

岩瀬…現場とは異なり、書籍というメディアの形態の場合は、さらに空間的にも時間的にも飛ぶわけですよ。

そこはもう、そういうものだっていう感じですか。もうそれ以降は、その書籍によって何が生じたかはわからないってさう……。

松本…手から離れることの意味もあると思うんですが、実際のところ、離れたあとのことも知りたくなっちゃう。語り手は語りえなさを内在させた語りをしていますよね。「これ言いたかったのになあ」とかもあるし、もう根源的に言えないみたいな。そういうことを、聞き手はつい聞き間違えますよね。そして読み手はまた、読み間違えていると思う。だからたぶん三重の不可能性の上に、本ができていて。綴じられた本を開くということは、その三つの不可能性の上に成り立っている可能性を開いていく行為。継承の不可能性も引き連れることで、継承の可能性ははじめて開かれていく。詩人の言葉とか内省の言葉が飛距離を持っていたりするというのは、そういうわけだったりする。何かよくわからないなあというものに心を動かされていくってこともきつとある。

岩瀬…でもそのなかで、奇妙にずれていくところにこそ、根源的なものが受け渡されていく可能性もまたあるんだという話ですよ。その意味でも、そのあとのことを知りたくなるといっては、私もよくわかります。何ができるようにずれて、何がどのように受け取られたんだろうって。そこをどうしても聞きたくなる……話は若干逸れますが、聞きたくなくなるというところで言えば、あわ居という場や、体験者へのインタビューをやっている、これはもう完全に個人的な感触なんですけど、こんな面白い仕事ないよなって思っています(笑)。

松本…(笑)。

岩瀬…それはやはり、その人の声が聞こえるからですよ。それはちょっとした比喩において感じとれるもの

であったりもする。そこに自分はよろこびを感じているところがある。やっぱり自分は声を聞きたいんですよ。

松本…そうですね。最上の楽しみであり、同時に最上の難しさを感じるのは、目の前の現場ですよ。その意味では、本作りのほうがむしろ易しいと感じてしまう……。

岩瀬…そこでの声というのは、あまりにミクロな、たった一人の声です。じゃあそこで「それはいったい何なの？」とか「何の価値があるの？」と言われても……もちろん、そこに意味づけをしようとすれば、それはいろいろできるわけですし、今回の対談でもそれを自らやってしまっているわけで、もはやこの対談の中ですら自己矛盾しているわけですが(笑)。その人の声、その人の言葉ってなかなか出ないですし、なかなか聞けないじゃないですか。

松本…はう。

岩瀬…でもそこに自分たちが関わることで、確かにそれが出た、聞けたというところ。とにもかくにも、まずはそのことが一番大事なんじゃないかっていう気がするんですよ。

松本…まさしく。おいしいところは目の前にある。だから、その場にいない人に伝えるという編集作業なんていうのは、いろんなものを諦めていくプロセスに近い。諦めるからこそ伝わるものを探して、それを淡々と磨いていく感じ。

岩瀬…そういえば今ふっと思い出しましたが、松本さんとはじめてお会いした時って、まだ書籍を作られていなかった時期ですよ。その頃は、映像を用いた対面的な場づくりを中心に活動されていたのだと思います。それで少ししてから『あとを追う』という本を作り、その後『はな子のいる風景』や『わたしは思い出す』を出版した。そのあたりの時期というのは……。

松本…驕った言い方になってしまいますが、現場が大事だとずっと信じてやっていたんですけど、結果がついてこないというか、なんというか。広がりが出ない感じがあったんです。こんなに大事なことが目の前で起きていると感じているのに、それが伝わっていない感じ。割り切ったんですよ、二〇一五年ごろに。つまり、場づくり自体はそれで大事だけど、別のラインを作らないといけない。生きたアーカイブをどう作るかっていうところで、ずっと模索してきたんだけど、なんか伝わってないぞって気付いちゃって。活動をはじめて十年が経ってやっと(笑)。ちゃんと形のあるもので手渡さないといけないって。それで内心ブンブンしながら『はな子のいる風景』を作ったんです(笑)。

岩瀬…そして今はまさに、両方をされているということですよ。

松本…両方やれるようにしたい、それを続けたい。

岩瀬…本を作って、例えば反響があって、やっぱりそこから波及効果もあるわけですか？ 実際の場に人が集まるようになったりとか。

松本…ちょっとずつ私たちの活動を知ってくれている方が増えている感じはあります。『なぞるとずれる』の書籍が刊行できた暁には、もう少し手応えを感じることができて、現場にもフィードバックが起きるみたいなのを期待しているんですけど。ワークショップのような場づくり、書籍のような場づくり、その両方のメディアをやっていくのが良いですよ。だから、あわ居がインタビュー集を作られるというのは、すごくわかります。

岩瀬…ただこれまでについて言えば、インタビュー集はあわ居のホームページ上に載っているだけで、それだけではなかなか読まれないですし、仮に読まれたとしても、読む人の状態と言ったら良いのでしょうか……ウエブで気軽に読むことで、もちろんそこで読み込めるものはあるかもしれない、でも書籍にインタビュー集を掲載することで、そこで起きる違う作用があるのかなという気もしています。

松本…そうですね。

岩瀬…自分としてもすごく悔しいんですね。あわ居というある種の密室で起きていること、それはある意味ではすごく地味だとは思っています。例えばインタビュー集のなかの川合さんのエピソード<sup>3</sup>でいえば、あわ居別棟にいる時に、そこで聴いた雨の音とか、目に入った植物から、小学校一年生くらいの頃の記憶が全身的に想起された。文字にしてしまえば、まあそれだけの話なんです。でも自分としては、「いやあ、良かったなあ」と(笑)。

3 詳細は本書籍の pp.316-317 参照

松本…わかります(笑)。

岩瀬…でも、「それが大事なんだよ」と私が一方通行で言ってもなかなか伝わらない。臨床心理士の東畑開人さんは「臨床すればわかる」っていうのは確かに事実だけれど、それだけではただの体験主義になってしまって、自分の体験を超えられない、社会に訴えていく言葉を語れなくなってしまうという指摘<sup>4</sup>をされています。だからこそ現場で起こっていることを三者言語に翻訳する、メタでみる。遠くに届ける方法を考える。そしてそこからのように社会や他者との関わりを紡いでいけるのかっていうところですよ。現場を継続しながらも、いかにして外へとひらいていけるのか、そこをいかに往還できるのかという部分については、今後もずっと模索していきたいと思っています。

対談実施日：二〇二四年二月九日

4 斎藤環・東畑開人(2023)『臨床のフリンジャーズ』p.36、青土社

松本篤(まつもとあつし) / AHA! 世話人、  
remo メンバー

1981年兵庫県生まれ。「文房具としての映像」というコンセプトの普及に取り組むNPO法人記録と表現とメディアのための組織(remo)に、2003年から参加。市井の人びとの記録に着目したアーカイブプロジェクト、AHA! [Archive for Human Activities / 人類の営みのためのアーカイブ]を、2005年からremoの事業として始める。これまでに記録集『はな子のいる風景』(武蔵野市立吉祥寺美術館、2017)、ウェブサイト『世田谷クロニクル 1936-83』(生活工房、2019)、展覧会『わたしは思い出す』(せんだい3.11メモリアル交流館、2021)など、さまざまなメディアづくりに携わっている。現在、岐阜県伊深村(現伊深町)にて発行された戦時中の慰問文集の再々発行プロジェクト『なぞるとずれる』に取り組んでいる。

## 【あわ居の研究（対談）】

### 無に還る場所／井上博斗さん（トランスナヴィゲーター）



無に還る場所としてのあわ居についての考察を深めながら、生きている場を取り戻す実践としての「旅」、あるいは「生活」の可能性を探究します。

#### ◎からっぽになる

岩瀬：まずは率直に、井上さんはあわ居という場をどのように感じてますか？

井上：あわ居って中在所<sup>1</sup>にありますよね。かつての白山参りの古道は、石徹白の下在所というエリアから中

1 あわ居のある石徹白地区は、「上在所」「中在所」「下在所」「西在所」に分かれている。

在所を通って、白山中居神社がある上在所へというルートだった。となると、今のあわ居がある場所を通って、白山中居神社の方に向かっていったと思います。今は奥まっつはないけれど、ちよつと集落のはずれ、メインルートのはずれ。際のような場所に、あわ居が位置していると思う。そうした「あいだ」に位置するエリアというのが醸している雰囲気というところで、あわ居に感じる部分がまずはひとつあります。

もう一つは大師堂との関連ですよね。白山中居神社が神仏分離の時代を明治に迎えた時に、虚空蔵菩薩という仏像を救出しなきゃいけなくなつたと。それで神社がある上在所ではなく、中在所のある場所、いまあわ居がある場所から川沿いに畦道を散歩してすぐの場所に、仏像を保存する大師堂という御堂をわざわざ住民が建てた。廃仏されないように、壊されないようにしたわけです。いわば住民が自ら作った聖地。その空気が、あの辺りにはあるわけなんですよね。言ったら、境内のそばにあわ居がある。

僕がいつも思うのが、あの辺の神社でもなく集落の入り口でもない、「あいだ」にある、中在所にあるって言うところの、守られている感じがすごく面白いなって。そこをねぐらにして、その場所で何ができるんだろう、どんなことが生まれるんだろうなと考えますよね。そういった中でひとつ思うのは、ゼロポイントというか、とりにあえず無になる場なのかということ。とつても静かで、からっぽになる場所。あわ居別棟で言えば、何かそこで考えようとは思いますが、とりにあえず何も考えなくていいやっという（笑）。そういう一旦ゼロになるっていうのが一番魅力的な感じがするんですよね。

神社っていう霊力のある場所でもなく、村の入口のような交通・交流の激しい場所でもなく、「あいだ」に位置することでその作用が生まれているのか。あわ居が場として作っている空間がそうさせるのか。明治以降に作

られた二次的な聖地である大師堂があるエリアであるということが、そうさせているのか。はたまた標高七〇〇メートルというひとつの高原、高台の盆地であるということがそうさせているのか。それはわからないけれど。僕にとっては、もともと石徹白という場所自体がそういう場所、つまり無になれる場所ではあったんだけど。あわ居がさらにそれを具体化したというか、鮮明化させたっていう気がしていますね。

岩瀬…井上さんが考える、無になることや一旦空っぽに浸ることというのは……。

井上…何て言うんだらうね。お金のための仕事や、やりたくないことをできるだけ排除して、自分の中に暇をつくるということは、もしかしたら意識的にやれば誰でもできるのかもしれない。そういう意味での暇をまずは確保すること。あとはもうひとつ、オートマティックに、その場所に行ったら無を体験させられるという場所。その両方が大事な気がするんですよ。

ある程度稼いでおかなければいけないという、漠とした切迫感や焦燥感が、現代人には誰しもあって、暇や無が大事だっというところが実感しづらい。でもその場所に行けば、そういうものを感じられるというのが、あわ居なのではないかと。マインドフルネスとか、座禅とか、ぼーっとするととか、それこそ無になるとかもそうだが、なぜそれをするのかという部分には色んな言説があるとは思いますが。でも、生きるってそんなに意味づけで考えるものじゃないと思うんですよ。自分で感じていくということに、その醍醐味があると思ってる。誰かに教えられるものじゃないという気持ちがある。

そのために、ちゃんとゼロポイントになれる場所を探して、自分で持っておかないと、あつという間に社会だっ

たり、家族だったり、コミュニティだったりに染められていく。自分の手から取り上げられてしまう。そういう危機感がありますよね。例えば家族でいても、祖父母になにか言われるとか。コミュニティにいても、近所の人になにか言われるとか。兄弟だったら兄弟っていうひとつの意味付けの中で、自分を見失ったりとか。勿論良い意味で影響を受けたりもするわけですけど。そういうのとは離れた、第三的な場所を持つておくというか、そういう意味合いであわ居があるのではないかなと思います。

### ◎生きている場を取り戻す

岩瀬…今お話を聞いていて、閑暇という語句にも関連する話なのかなというのを少し思いました。例えば現代はもうろん忙しいわけですけど、それでも例えば週一回は休みがとれたり、ゴールデンウィークの何日かは休めるといったことはあるわけですよ。哲学者の國分功一郎さんの『暇と退屈の倫理学<sup>2</sup>』では、消費社会を生きる多くの人間には、労働外の暇な時間をどう使って良いかわからない性質があって、人々はそこで退屈を感じてしまうのだと記されています。そしてそうしたある種の隙に、消費社会が目をつけて、人々は消費による記号的な気晴らしをさせられている。これは自分も実感するところですが、本来の暇って、閑暇だったのではないかなと思うんです。幸福のための時間。school(学校)の語源が、古代ギリシャ語のscholē(閑暇)であるのは有名な話ですが、学問に励んだり、なにか技芸の習熟に動んだり、それこそ無になったり。閑暇はある種の主体性や、時間の積み重ね、訓練、習熟といったものを必要とする。なにか作品と対峙するにしても、なにかを味わうにしても、なにか技芸を身に着けるにしても修練や時間の堆積が必要になる。無になることや、沈黙にいますという部

分で言えば、心の奥底で感じていることや、欲求が立ち上がってくることもありすよね。それを直視するのが怖いっていう部分が、現代においては強いのかなっていう気もしています。そういう意味では、いわゆる消費的な気晴らしって受動的で楽な行為なのではないでしょうか。

井上…確かにそういうところはあるかもしれないですね。忙しい人が休みたいと思っていて、いざ休みになってみると、なにをして良いかわからないみたいなの。望まれた休息だったはずなのに、むしろ不安になる。なにか今日一日を楽しまないといけないという、余暇の切迫感に迫られる。それは田舎だろうが、都市だろうが関係がない。田舎においても、都市的な楽しみを休みの日にしないといけない空気のようなものを、周りで感じることもありすよね。連休だから、都市の人が遊びに行くような場所に遊びにいかなきや、といったかたちで。もちろんそれが悪いわけではないし、好みもあるとは思いますが。でも一方で、あまりにそちらに引っ張られると、自分が生きている場を見失うのではないかっていうことを思います。

例えばご飯を食べる食べないというところで言えば、本当に欲しくない時には食べない、っていう選択をちゃんとできていいのか、というのはすごく考えますよね。誰が一日三食って決めたんだろうって。欲しくないのに、ただ口に入れてるっていうことが、多々あると思う。それって、なにかをしななければいけないという焦燥感がある一方で、既にもうなにかをさせられてしまっているということに、気づけていないということだと思います。そういうことに対してひとつ、あわ居という場の可能性があるのではないかとということを思いますよね。

岩瀬…今、印象的だった言葉で「生きている場を見失う」とありましたけど、その場っていうのは、要は自分が立脚するところですよ、物理的などころだけでなく、感覚的、身体的な部分も含めて。そういうものを

調整したり、想起したりする場所として、あわ居が機能するんじゃないか、と。

井上…人って、ここだとほっとできる、そういう場所のようなものを、例えば家の中、近所、あるいはもっと大きな土地の中でも持っていると思うんですよ。それはある人にとっては、犬と散歩する時間なのかもしれないし、キッチンでコーヒーを淹れることなのかもしれない。その人自身も無意識レベルでやっていることだったりするから、本人も言語化できていない場合もあると思う。でも、それが無意識でやっているが故に、それをするのをいつの間にか忘れていて、身体が感応しないままに、自分の動きを抑えてしまっている場合というのがあるわけですよ。それが慢性化していることもある。で、ある時に、事故が起きたりとか、なにかがクラッシュするとか、病気になるとかして、メッセージがやってくるわけですが。そういうものを、違うかたちで気づかせたり、顕在化させたり、目覚めさせたりする場っていうのを個々人が奪回する必要があるのかなと思ってます。

昔の、いわゆる自然が豊かな場所だと、自分がクラッシュする前に、自然がクラッシュしてくるから、私たちの住む場が、大水や、地震によって脅かされる。動物が住み場を荒らしてくる。そういうエラーが頻繁に起きるので、けっこう周りを警戒して見張っておかないと、簡単に脅かされちゃうっていうところが、生きものとしての人間の健康を保つのに繋がっていたと思うんですよ。ところが今それがなくなると、身体が自動調律的にほっとするとか、自分が自然とやっってしまう生態的な動きとかがあってというのが、起きにくくなっているんじゃないかなって思うのは思いますよね。

岩瀬…なるほど、面白いですね。環境の方が、ある種の圧力として人間に押し寄せてくるなかでは、自分自身で意識的に、自分の場所を守るっていうことの必要性や必然性があつたということですね。なので、ほっとする

状態や、自分が自分で居る状態は、もちろん環境という外的要因から形成される部分がある一方で、自分自身でそれを作っていく側面もあるんだと思います。そこにはもしかしたら、実際に環境に手を加えて、環境に働きかけることも含まれているかもしれないですね。そうした能動性といえますか、意識的な働きかけみたいなものが、「ほっとする」ことや、「居心地」には必要なのかなということを思います。

井上…手つかずの自然とか空間って、なじまないものだと思うんですね。なんか落ち着かないと言えいいのか。でも一方では、自分になじむ状態のようなものがどこかあって、それを集団とかコミュニティとか個人が、絶えず空間とやりとりしながら、物理的、もしくは情動的に安心、安全だと思えるものを作っていくものだと思うんです。その草を刈るとか、ここに建具を入れるとかみたいなのも含めて。そこには色んなレベルがあると思っています。それをすごくやりこんで、自分が思うがままのものに作り変えてしまいうレベルのものあれば、自分は手を加えず、人が作ったものを受け取っているのに、それがものすごくしっくりくるのか。そういう環境や空間とのコミュニケーションが行われることで、場所って変化したり育まれていくものだと思うんですね。逆に、そういうものがない中で、ゼロになるとか、空になるとか、そこから触発されるみたいな場所もあるとは思いますが、それが本当に長続きするのはわからなかったり、違う落とし穴があるような気がしないではないという……(笑)。

### ◎能動と受動、あるいは中動

岩瀬…青森で「森のイスキア」という悩みや傷を負った方を受け入れる場所をひらかれていた佐藤初女さんは「私自身は人を癒しているという気持ちはまったくありません。癒しとは、自らの気づきによってここを解放したときに得られるものだと思うのです」という言葉を残されています。さきほど、あわ居に、オートマティックにゼロポイントにいくような作用があるのではないかというお話がありましたが、例えば井上さんがあわ居別棟での滞在の中でゼロポイントにいった際に、実は井上さんの中に能動していた部分があったりとか、ないしはゼロポイントにいった後に、能動した部分があったりとか、そうした要素もあったのかなという気もしています。場所に行く以上、もちろんその環境に対して受け身な部分はあるんだけど、そこに同時に能動が働いてくると思いますか。最近では中動態<sup>4</sup>という言葉も注目されていますが……。

井上…例えば、自分があわ居別棟に滞在した時に強く感じた話でいうと、朝の光と夕方の光なんですよね。自宅にいても、東向きの家ということもあって、強烈に光を感じるんだけど、またそれとは異なる朝の光とか、夕方の光があるということだと思うんですよ。じゃあそれがどこでも感じられるかというと、決してそうではない。それはあわ居だから感じることでできた朝の光、夕方の光だったと思うんですね。それによってなにか自分がゼロになったというか、素の状態になった感じがすごくした。心が洗われたような気がします。その後、その光が気になって、光がさしている方向へ歩いていたら、大師堂に行きついた。そういうものを能動性と呼んでいいのなら、それはそうなんだと思う。ただ散歩をしたかったということではなく。

3 佐藤初女 (2013) 『5Gの森の台所』 pp.21-22、集英社

4 中動態は「する(能動)」と「される(受動)」の間にある現象を捉えようとする概念。

最近自分はボディワークをしたり、個人が持つるポテンシャルや、身体的・情緒的な深い記憶を引き出しながら、歌ったり、踊ったりするといったことを誘う仕事をしている中で、空間や場所からの兆しと、自分のおのずの動きが出会うことにトライしています。ある種の心地よさ、ゼロポイントがベースにあると同時に、そこから自分が広がる、拡張するような体験を大事にしているんです。ただこっちから思いっきり能動的にやっても、ちぐはぐな状態になると思うんですよ。その両方がうまく出会わないと。

岩瀬…となると、別棟で光を感じた時というのは、おそらくは特異な受け身の状態になったということですよ。それは、癒してほしいとか、消費によって穴を埋めるという意味での受け身ではなくて、余白を残した状態で、身体が居る状態といたら良いのか……。わたしの身体として居られた中で、ある瞬間、光からの働きかけと、井上さんの中の余白が呼応して、ひとつの運動のようなものが立ち上がったということなのでしょう。

井上…そうだと思いますね。例えば、岩瀬さんは書道をやられていますけど、僕があるひとつの書を見て、自分が深く息をつけた、息を深くできたという出来事があったんです。「あ、書ってこうやって見てよんだ」というような。逆にいうと、それは自分の中で息が詰まっている状態があったから、はあって息を吐けたということなんだと思います。どんな人にも滞りや偏りや、波、緊張があつて、でもそれらは時に緩むこともある。人はその繰り返しをしているんだと思うんですよ。だから、そういうものを誘ったり、おのずの動きとして引き出す場というのが必要とされているんだと思います。

岩瀬…息をつく……。我に返るみたいなニュアンスもあるのでしょうか。

井上…それもありますよね、杖をつくという感覚とも少し似ている。自分を支えるという。息をはくことで、自分が立てるといふような。休んでいるんだけど、しっかりと立てるといふような。だから、杖をつくイメージをかりると、吐くことと立っていることへの、そういうイメージも湧きますよね。

岩瀬…はっとするみたいなきもちもありそうですね、さっきの光を見たときの話で言えば。

井上…そうですね、その瞬間はそうだと思いますね。その前の段階というのは、ぼーっとできていたという感じなんです。なにも考えないで居ることができていた。そういう時間は、ぼーっとしているわけだから、その時には「ぼーっ」としているな」とは、思っていないわけです。ふっと、「あ、なんか今までにみたことのない光だな」と意識した瞬間に、「ずっ」とぼーっとしてたんだな」と味わったり、後からぼーっとしていたことに気づく。

人っていろんなことを考えてるわけじゃないですか。「あー、明日これやんなきゃ」とか、「あー荷物重い」とか。昔してしまった失敗をパツと思ひ出したりとか。そうやって忙しくしているなかで、ふとその光に気づいた瞬間は、少なくともぼーっとしていたと思うんですよ。例えば、「あれなんの花だろう」と思える時って、その前の瞬間に、ひとつの間(ま)のようなものがあるんだと思います。逆にぼーっと考えてる時は、脳の中を見ているから、そういうのに気づけない。「俺ここでなにやってるんだろう」「俺どこにいるんだろう」くらいに、ぼーっとした瞬間に、変なものが見えて立ち上がってくる。風景が見えて立ち上がってくる。「あれ、なんかすっごく大きい太陽沈んでるぞ」って。やっていると、いる場所とは別の世界がそこにあるという感覚。そこでは「自然」という言葉が蘇ってくる感じがしますよね。自分の中の自然が励起してくる。

岩瀬…そういう時間というのはいわば無用ですよ、なにも意味がない。なんの役にもたたない。けれどもそれが、先ほどの井上さんの言葉で言えば、「生きている場」を確認する時間になったりする。

井上…僕にとつてはまさにそうで、そういう時間はかけがえないということですよ。コスモスという名前ではなく、「なんか揺れてるぽやっとしたそれ、なんか鮮明であるそれ」みたいな。ある種のトランスしている状態。僕にとつては、そういうのが静かな意味での、生きていることなかなって思いますね。世界に包まれて溶け合っているみたいな、そういう静かな生きている感覚としてそれがある。一方で、お祭りとか歌うとか踊るとか激しく生きること、そういう刹那もあるとは思うんだけど。

岩瀬…そういう感覚や出来事が例えばあわ居であったとして、また日常の環境に戻っていきますよね。そうすると、その感覚や出来事はどうなるのでしょうか？

井上…こういうことを語ると、詩的な表現になってしまいますが、堪能できますよね。ぼーっとして、気づきがあった後というのは、ひたすらそれを充電するみたいに、充足を得られるわけです。「すごい光だったな」ということを、自分の中に深く深く染み込ませ続けられる。ひたすらそれについて反芻する。郡上弁で言うくと、なぶつているといふか、しゃぶつているといふことですよ。「良かったなあ」とか「いいなあ」といふふうには、現代は、そうやって味わう時間というのが少ないと思うんですよ。

極端な例でいうと、動物を狩りしていた時代には、それを仕留める瞬間、その動物を追いかけてる瞬間、動物を食べる瞬間といったかたちで、味わうまでの道のりに、とても長いプロセスがあったと思うんです。そういう味わう時間が、今は圧倒的に少ないんじゃないかなって思います。気づきを得た後に、それをひたすら味わえる時間が、今はどういふふうに残っているのかなって。

例えば、僕が古民家の改修をやっている時に、これを片付けなきゃいけないという、まあ非常に切迫した状態があるわけです。これをやらなければならぬ。次はこれだという計画が。でもそれが強すぎると、それを片付けたという当初の目的は果たせても、その時には喜びが全然得られない。「果たせたな」という安堵感しか得られない。すると、もう次の目的が迫っているわけです。次の課題が。もちろん散らかった部屋が汚くて、自分の心を安定させることができない状態ではある。でも、味わえていないと、実は片付ける喜びが全く得られないということが、頻繁に起きるわけです。「すぐくもつたないやん」って僕は思いますね。はやく進むことや、滞りなく進むことを目指しているのはわかるんだけど。

岩瀬…目の前のものと関わっていないとでも言えばよいのでしょうか。本当は目の前の環境や状況に、なにかキラリとするものがあるのに、それをないものにしてしまっている。先ほどの話で言えば、太陽の光は、いつもあるわけですよ。毎日太陽は昇り、沈んでいるわけ。でも、目の前のものや、現在にしっかりと関わる構えになつていないと、仮にそれを見たとしても、「ああ太陽だな」という程度の処理をします。そういう次元でしか処理しない身体になつてしまっている。一方、井上さんの話の中で、ぼーっとできる時間の中で光を見たときには、目の前にあるそれを、ただそれ自体として受け取ることができたという話ですよ。

井上…そうですね。それであわ居は宿泊が伴う場所なわけだから、旅と関わっているじゃないですか、旅をしないと、そういうものは得られないものだったりするんですよ。それで、旅をしたが故に、それと同じようなことを日常の中でも体験し、意識することができるようになるというのが、旅の醍醐味だなと思いますね。

岩瀬…旅の後は同じ環境に戻るわけだけれど、同じ環境にいても、そこで関わるものや行為を違うところで享受する、捉えていくことができるんじゃないか、と。

井上…僕も自分の家にお客さんを泊めることがそれなりにある中で、かつてのコミュニティや田舎が、なぜまれびとや旅人を接待し、歓迎したのかということが、すごくよく分かるんですよ。要は彼らが、太陽の光、月の光、空気、あるいは水ひとつとっても、こんなに美味しく、気持ちよく感じてくれるんだということを見て、逆に自分達がいかに恵まれた所にいるのかということも教えてもらえるというか。自分たちの見方を更新させ、蘇らせてくれる。それをただ感じるということの、深みや美しさを取り戻させてくれる。だから、自分が旅するのでも、旅人が自分の家に来るといっても、実は同じことなんですよね。

### ◎生活という旅へ

岩瀬…土井清美さんという人類学者がいらっしやいます。彼女はスペインのサンティアゴ徒歩巡礼に参加して、それを『途上と目的地』という民族誌にまとめているのですが、その本の中で気付かされたのは、旅の中でする行為というのは、歩く、見る、食べる、話す、感じる、触るといった感じで、実は日常とさほど変わらないんだ

なということでした。そのうえで、サンティアゴ巡礼をはじめとするある種の旅においては、それらの行為が日常よりも深いところで味わうことが可能になるのだろうということを個人的に深く考えさせられました。そして、そうしたなかでこそ、いつもは記号的に処理をしまっている周りの事物などに対して、日常的な習慣からはずれたところで直接的に関わることが可能になるのだろうと。旅においてのこうした直接的な経験こそが、土井氏が言うところの「誰の注釈もついでない、具体的な世界を取り戻す」ことにつながっていくのだと思います。

さらにもう一つ面白かったのは、ナンシー・フレイという人類学者に、土井氏がインタビューした時の話です。かつてサンティアゴ巡礼に参加し、民族誌を書いたナンシーは、その後、移動や自由時間があまりない、一見すると制約的にも思える生活をしています。にも関わらず、ナンシーは「今はこれでいい」と思える状態にあったと土井氏は記している。それがなぜかと言えば、制約のある生活をしつつも、だからこそ生まれてくる他者との関わりに開かれているからだ。つまり制約があるが故に、安易な安定性にしがみつかない、開かれた生活が成立しているわけです。いわば「さすらいながら住まう」状態にあるのだと。こうしたエピソードを読みながら、「さすらいながら住まう」生活にこそ、本当の意味での人間の立脚点というのか、居場所のようなものがあるのかも、あるいは環境に遍在している他者を発見し続ける構え方があって成立することだと思えます。サンティアゴの旅を通して、ナンシーはそうしたサイクルをまわせるようになったのだろう。そんなことを強く感じました。

井上…それ、今一番賛同する話ですね。共感する話。自分がなぜ郡上に十二年もいて、家族を持ち、それでも全く飽きないのかと言えば、それはやっぱり、ここにいながら旅をしていると思ってるんですよ。例えば、妻が自宅出産をするとなった時に、二ヶ月ないしは二ヶ月は仕事を休まないといけないし、むしろ休みたいと思っただけです。その時に、自宅の寝室で彼女がずっと寝ているという状況の中で、いったいどれだけの旅ができるんだろうと、自分に問いを立てたんですよ。畳六畳の中でも、とんでもない旅が始まるんだろうと予想していたし、それを記述したり、そこから思考したりできるなという予感があった。そして結果、それができたという感触があった。そうした旅がずっと今もこれからも続いていくという感覚があるんですよ。僕は海外はあまり行かないけれど、時々各地に赴くし、各地を旅することで、より深く自分がいる場所を旅していくことに繋がっていきんですよ。今いる場所をひたすら深めていく旅ができていくという実感が確かにある。

岩瀬…日常で旅をするというのは、言葉としては簡単に書いてしまいますけど、意識的にそうしようとしないう限りは、なかなかそうはなっていないわけですよ。ある程度の、修練や忍耐もいると思います。ですので、日常を旅化していくための「溜め」や「構え」みたいなものを自分で作りに行く場としても、あわ居はもしかしたら機能できるのかなということを今思いましたね。

井上…単純に、お金がなくて海外に行けないということがあるわけじゃないですか。でも、例えばチベットを旅する探検家の本を読んだときに、自分はチベットには行けないから、今この場所で旅をするしかないという(笑)。消去法といえいいのか。ここで深めるしかないんじゃないかという覚悟。独身であるとか、お金が有り余っていると、誘いがあるとか、そうした非日常が味わいやすい状態や条件がない中でも、旅は可能だし、消極的な環境にいたとしても、それは起こりうることだと思うんです。自分にとっての自宅出産の旅はほんとに

そうだった。二ヶ月とか三ヶ月、家から動けないが故に、そこを旅するしかないという。

岩瀬…制約があるところに、ぐっと潜る覚悟が重要な気がしますね。この数十年、人類は移動の多い時代を生きてきたと思います。このあたりは新型コロナなども関連してくると思いますが、動かなくても旅する事のできる構え方とか身体を今一度取り戻していくことが必要な気がするし、そうした身体を獲得する、想起することが本来の旅の意義のひとつなのかなというふうに感じました。あわ居もそうした「旅」の場であれたらなというふうに思います。

対談実施日…二〇二三年五月二日

井上博斗（いのうえひろと）／トランスナ  
ヴィゲーター

1983年香川県生まれ。幼少より讃岐の郷土芸能である獅子舞に親しむ。大学在学中に音楽家の土取利行、桃山晴衣に出会い、2010年に両氏が郡上八幡にて主宰する立光学舎スタッフとして、郡上八幡音楽祭を5回にわたって主催。2019年に独立し、丹田の鍛錬と歌と踊りを生み出す身体編集ワークショップ〈トランスワーク〉を開発し、各地で開講。郡上の郷土史をひもとく〈郡上藩江戸蔵屋敷〉講釈人、源流を遊び育む〈長良川カンパニー〉源流案内人。郡上の芸能を超体験へといざなうGUJO TRANCE JOURNEYの企画・ガイドをつとめる。

## 【あわ居の研究（対談）】

### 場づくりの詩／百瀬雄太さん（庭文庫店主）



場をつくることは、自らをつくっていくことでもある——。生成、傷、居場所といった語句をテーマに展開する、場づくりの実践者による「ことば」の交響。

#### ◎アートとしての場づくり

岩瀬…まずはあわ居についてどんな印象をもたれていますか？

百瀬…なんて言うのかな……例えば岩瀬さんは著書『ことばの共同体』でも「あわ居ってこういう場所なんじゃないか」と書かれているし、今回の対談もそうですけど、あわ居ってなんだろうとか、あわ居ってこういう場所だっていうのを、岩瀬さんが理解していきたいところがあるんですね。

岩瀬…自分が、というのはもちろん多少はありますけど……あわ居は私的な場なので、その場にしかない面白さとか手ごたえというのは感じつつ、一方でそこでの行き詰まりというか、限界も感じているんです。ですので、この私的な場、もっと言えばこの局所的な場の価値を、どう社会や第三者的な者に分かち合えるだろうかというところでの、言語化への興味が大きいのだと思います。

百瀬…なるほど……まだ僕には行けていないので、体験としては分からないんですけど、あわ居のホームページや、そこに掲載されている「体験者インタビュー集」などを読んだなかで、あわ居にどういう意味があるのかという話で言えば、色んな意味があると思っています。第一に、僕はあわ居に対して、アートとしての場づくりのようなことをしているという認識を持っています。すごく切実で誠実な仕事だな、と思っているというのがまずはあると。

『ことばの共同体』の中で、岩瀬さんは文芸としての詩に興味がなくなってきたという話を書かれていますけど、そこにも自然な流れを感じている。表面的に見れば、文芸としての詩を書くことと、あわ居を作ることというのは、詩人の仕事と場を運営する人という部分で、わけて捉える人もいるかもしれない。でも僕の中では、そこが密接に繋がっているというか、現われが変わっているだけというか……岩瀬さんの核心部から生えてきているものとしては一緒だな。いわゆる文字を書く詩ではないけれど、出来事としての詩があわ居で起きている。それは文芸としての詩を超えて、岩瀬さんが言うところの「ことば」が立ち現れてくる場所を作っていらっしゃるのだなあと思っています。

あわ居の「体験者インタビュー集」については、六、七割を読んだんです。そこで僕が一個着眼していたのが、岩瀬さんが「特に印象深かったインタビューです」と事前に教えてくれたものとそうではないものに、どういう違いがあるんだろうというところ。僕の予想では、人間同士の対話を超えて、雨の音とか植物とか、非人間、あるいは自然界と言っても良いですけど、そういうものに触れて、外に開かれてしまう感じの話が、(岩瀬さんが印象深かったと教えてくれたインタビューには) 結構出てくるんじゃないかって。で、読んでみると、確かにそういう話が出てきたりして。予想はあっていたのかなと。

そのあたりでひとつ思うのが、「〈異〉と出遭う」という言葉についてですよ。あわ居の今のキャッチコピーと言ったら良いのかな。その〈異〉には、人間同士の〈異〉がある一方で、人間の外にある〈異〉も含まれていて、そういうものと出遭う場所としても機能しているんだなあと……具体的なエピソードで言えば、あわ居にいて、雨の音が普段と違う聴こえ方をするという……その異なりに触れることで、もうなにかが生じてしまっているわけじゃないですか。

岩瀬…そうですね。

百瀬…それってすごく大事なことだなと思いつつ読んでいました。彼女自身は、そこから文芸としての詩を書くわけではないけれど、外にひらかれてしまう。交わって、生成してしまっていると思うんです。時にそれは

2 詳細は本書籍の p.214 参照

彼女の語りとしての言葉を生み出すかもしれないけれど、でも語り以前に変わってしまったらいいんだらうなと。岩瀬さんの本でも、教育学者の矢野智司さんの「生成としての教育」の話が出てきますけど、まさにそういうことが起きる場所を作れているんだなと。

そして、岩瀬さん自身も、前よりも、もっとひらけてきているのかなという気がします。岩瀬さんの『詩と共生』を読んだ時の感触として、あの頃の岩瀬さんは「生活の中に詩を置かねば」という感じと言うか(笑)。人間社会の中にちゃんと詩を生やしておかねばとか、詩がちゃんと生えている社会を実現しなければ、というようなニュアンスが、なんとなく強かった印象を受けています。それで根本が変わったわけではないんだらうけど、『ことばの共同体』の中では、「詩は遍在する」って書かれていますよね。僕もほんとにそう思っている。ある意味、人間社会に入り込まなくても、そこらじゅうに詩は生えるんだらうなと思っている。ただ、あくせく忙しすぎたりとか、自然界が排斥された都市構造の中とかだと、人間社会が世界みたいになっちゃって、外へのひらかれが起きづらいのかなというところは難しい部分ですよ。

ざっとまとめると、あわ居の良さは言語的にも、非言語的にも外へ出る仕組みというか、外への関係やコミュニケーションがあることなんだろうと。言語的には、岩瀬さんや美佳子さんと喋ったり、異なりを持つ他者に触れたりすることで、自分の思い込みや抑圧していたものが剝がれ落ちていく過程があるんだらうなと思ったし、一方でそれだけじゃなく環境的な側面で、岩瀬さんたちを超えたものが協働しながら、言語的ではないところにおいても外に連れていってくれる。そういう場所なんだなと。

## ◎生を肯定する作法

岩瀬…先ほど百瀬さんが「アートとしての場づくり」という言葉を出されました。その言葉はいくつかの捉え方ができるのかなという気がします。例えばインスタレーションとか絵画といった、いわゆるアート、いわゆる作品と言われるようなものが立ち上げてくれる体感だったり現象だったりを、場の中で作っているという意味合いにおいて、まずは一つ、その言葉を捉えられる気がする。一方で、これは場を作っている人間としての僕の印象というか、直観ですけど、例えば庭文庫という場を作られている百瀬さんたちは、やっぱり自分の為にやっているんだらうなということを通じて思うんです。つまりなにが言いたいかということ、主宰者自身が自分自身を作っていくという意味でのアートという文脈においても、さっきの「アートとしての場づくり」という言葉は解することができるのかなというふうに思いました。そのあたりについてはいかがでしょうか。

百瀬…いや、ほんとそうです。その話も含みますね、たぶん。岩瀬さんが言ってくれたみたいに、庭文庫は自分のためでもある。庭文庫を作っていくうえで、まず思っていたのが、僕が居たい場所、僕が自然にいられる場所を作ること。誰かが、という以前にまず僕が居たい。僕が自然に居たら、たぶん誰かも居心地が良いだろうという感じ。そのなかで最初から考えていたのは、いわゆるサービスをしないということ(笑)。僕の親族がコンビニ経営とか、コンビニで働いている人ばかりなんですけど、コンビニってめっちゃ嫌だなあっていうふうに小さい頃から見ていました(笑)。ああいうふうに主と客をわけて、お客様は神様だつてするから、クレマーが出るんだなと思っていました。

もちろん、庭文庫に来てくれる人がいるのはありがたいし、嬉しいんですけど、僕はお客様のために、つてやっている気はない。僕は庭文庫で珈琲を出したり、本を売っていたりするんですけど、歌いだかつたら歌っているし、絵を描きたかつたら描いている。野生動物の一匹で居ようというのは、最初から思っていたところなんです。だから、主だけど、主じゃない。僕はあわ居に行つたことがないから、はっきりとはわからないけど、庭文庫では歓待というところまではしていないなあ。迎え入れるということに、あまり力点を置いていない。それは良い悪いではなくて、迎え入れることによってできることがある一方、迎え入れるというふうに自分がやってしまうと、自分が自分を疎外してしまうところがあるなあと思つた部分がある。だから、庭文庫は、僕が居るよ、入つても良いよという感じでやっている。そのうえで、あなたが困っていたらちょっとサポートするよ、というニュアンスが強いのかな……。

岩瀬…なるほど。

百瀬…僕は庭文庫を始める前、二十六歳ぐらいの頃、人間界に絶望、失望していました(笑)。(東京から)恵那に帰ってきた頃は、もう二度と人間に会いたくないなあ、つて感じだったんですよ。蛾だけが友達だなんて(笑)。それから妻と出会い、結婚をした。それで、妻と出会った時に、「あ、人間としても生きるんだなあ」ということを、あきらかにされた。それで、「じゃあ人間やるかあ」と思って……だから庭文庫は、僕が人間をやる舞台として、ひとつ機能している。こういう場所がないと、僕はうまいこと人間界、人間社会に入れなかつたんだらうなあと思つている。そういう意味ではまさに自分のためですよ。

アートつて割と、生を肯定する作法だなと思ってます。僕がさっき「アートとしての」とあえて言ったのは、

そういう意味合いが強いですね。抑圧されたものからなにかが生えてきたりとか、そこから作ることで肯定されていったりするような過程が、そこにはあると思っっている。岩瀬さんが『ことばの共同体』で書いていたみたいに、自分の考えとか思いみたいなものを、最初から肯定できていたら、岩瀬さんもあわ居をやっていないだろうなと思う。肯定できなかった抑圧があったり、そうやってきた傷があって、でもそれを超えて、それを受容していつて……：そうやって生きてきたからこそ、それができない人の痛みがわかったり、寄り添えたりするんだろうなあと思っっている。

これは詩を書いていた僕の体感ですけど、文芸としての詩を書くことって、大きな意味での、自分の生きている言葉を書くことだと思っんです。自分の身体と結びついた言葉というか、借り物じゃない自分の生に密着した言葉を書くという行為。そしてそこには、そこで生きてても良いんだって、自分で自分を後押ししていく部分があったなあと……だから岩瀬さんが、文芸としての詩に興味がなくなってきたのは、岩瀬さん自身の身体はもう自分の言葉を生きられるようになってしまったのかなと。だからそこにあまり興味をもたなくなっていて、そのうえであわ居という場所に力点が変わってきているのかなと思っる。自分の言葉を他者と分かち合ったり、他者からの言葉を導き出したりといったふうに、言葉の発生の仕方が変わってきているのかなと感じています。岩瀬さんが自分の本を書いて、出すことができることも含めて、自分の言葉を世に発して良いのだという肯定が現われとしてある気がする。

岩瀬…面白いですね。さっきの「あ、人間としても生きるんだなあ」という言葉ではないですけど、百瀬さんであれば庭文庫が、僕であればあわ居が必要で。それって要は、生きていくうえで必要だということですよ。さきほど都市構造が外のないものになってしまっっている、というような話がありましたけど、生きていくうえで

は、外と、もつと言えれば外部とどう関わっていくのかというのはずごく大事な部分だと思っんです。だから僕自身は、自分にとつての外部を作っていくという意味合いでも、おそらくあわ居をやっている。

例えば人類学者の松嶋健さんの『プシコナウティカ』という本の中では、今の社会には出会いがないということが書かれています。出会いがない状況は、国家を含めいろんな問題が背景として複雑に折り重なることで成立してしまっっていると。『プシコナウティカ』はイタリア精神保健（医療）についての話ですが、出会いがないという部分で言えば、日本においても似通ったところがあるように思っるわけです。というよりも、多かれ少なかれ、これはもう世界的な傾向としてあるように思っる。出会いというのは、他なるものに触れることですよ。無限とか外部とか色んな言い方があると思っますが、要はよくわからないものに触れるということ。

そして『プシコナウティカ』<sup>4</sup>の中では、多くの病的現象の根底には他者との出会いの欠如があるのではないかと、という指摘がされています。他者との出会いがないところに、アイデンティティ、自己同一性なるものの病いが出てくるのだと。つまり他者から切り離されたところで、揺るぎない統合されたアイデンティティを持つことが、かえって病理に繋がってしまうという考え方ですよ。そうすると、生きていくうえではやっぱり出会いが必要になってきます。他者と出会っていくことで、自分を更新していくことが必要になる。だからイタリアの精神保健では、患者が地域の中でどう他者と出会っていくのかという部分で、わりと広い意味での「生きている」ことをサポートしているんです。

それで結局何が言いたいのかと言うと、僕は今の、いわゆる社会の中ではなかなか出会えないわけです。出会えないと、自分が変わらないわけです。変わらないと、「生きている」ことの実感もなかなか得にくい。自分が変わっていないか息苦しさを、自分自身、痛感した時期が長かったので、それも踏まえて、あわ居をやっているんだらうなという部分があると思います。

百瀬…なるほど。

岩瀬…それがさきほど百瀬さんが言われたような、生を肯定する、肯定しない、というところの話に繋がってくるような気がする。誰しもが過剰さを抱えている部分があるなかで、無理やりに定型の箱に入れられたり、つるつるの無機質な環境に適応しろと言われたりすると、それはやっぱり厳しいですよ。厳しいと言いか無理です。本来は過剰さがあるからこそ、人と出会えるはずなのに、それができなくなってしまう。いわゆる社会という場所においては、能力とカスキルを介しての関わり、あるいはあらかじめ決められた作法に基づいての、最適化されたやりとりは良くあるわけですけど、そこで本当にざらつとしたものというか、さっき言ったような、わからないものとの出会いがあるかと言えば、それはまた別の話だと思っんです。

僕は会社に勤めたことはいませんが、大学以外はずっと地元の公立の学校に通っていました。そうしたなかで、おそらく自分自身は、自分の過剰さを、なかなか良いかたちで他者に受け取られなかった部分があるんだらうと思っています。一方的にラベリングされたりとか、今の社会の常識のようなものから見ると、それはおかしいと言われたりとか。そういうふうには、自分の過剰さを否定的に捉えられてしまったことが、たぶん多かったんだらうなと認識している。

今はもう、それを出して良い場と、むしろ出さない方が良い場があるんだらうなというふうには思っているわけですけど……その意味で、それを出しても良い場としてあわ居を営みつつ、自分たちの過剰さが、良いかたちで受け取られる文脈というか通路というか、そういうものを作りたいんだらうなというふうには整理している。そのなかで自分自身の、あるいは他者のかけがえのなさのようなものが感じ取れる関係性が、瞬間的にあれ生じた時に、自分自身あるいは他者への受容度が高まっていくような気もする。つまり、やっぱり自分たちも自分たちのためにあわ居をやっているんだらうなと思います。

## ◎個人の傷、社会の傷

百瀬…岩瀬さんは『ことばの共同体』の中で、岩瀬さん自身に抑圧があるということを書いていますが、それがすごく良いなあと思っています。それって結局、自分のそういう部分を見て受け入れられていなかったら書けないと思います。つまり肯定できていないと書けない。それを見ずに、世界の問題と個の問題を切り離して語ってしまう人が、意外と多いなと思う。結局、世の中に色々な問題があるなかで、でもその人にとって重要な問題とそうでない問題があるわけですよ。それでその人にとって、なぜそれが重要な問題なのか、要するに世界の中で色々な問題があるのに、なぜある問題だけが、その人にとって重大な意味を持つのかと言えば、その人の抑圧に関わっているんだらうなと僕は思っている。

岩瀬さんが、その人がその人らしくなることについて、かけがえのなさについて考えていることって、自然とそこにフォーカスがあたりというか、それが岩瀬さんにとっての重要な問題なわけですよ。で、そこにやっぱ

り抑圧とか傷がおそらくあるよなあ。もちろんそれを見ずに社会を変えていくのも良いですけど、その部分を岩瀬さんは見つけていて偉いなあと（笑）。自己肯定と他者肯定って同時な気がしています。つまり、自分の暴力性を抑圧していると、他者の怒りにも不寛容になったりするけれど、自分にも暴力性があるよなあ、というのを自分で肯定できていたら、その暴力性に対して、別のところで肯定できるというか……自分が自分の中で受け入れられていないものほど、他者のそれについても受け入れ難くなるよなあと思っています。

そういう意味では、他者のそういう性質、そうあることをちゃんと受け入れられることと、自分にもそういうところがあるよなあ、と思えることは、繋がっているなあと思ったりもしている。岩瀬さんはやっぱり、自分の思いとか考えとかを肯定できなかったという自分を見つけて、そこを肯定できているから、そこを受容できているから、それが今できていない他者に対して、それを歓待できるのではないかなと思います。

岩瀬…そうかもしれないですね。もともと自分は教師になりたかったんですよ。それで大学入試では教育学科にも受かっていんですけど、なぜか行かなかったという（笑）。でも結局、あわ居でやっていることって、臨床教育学とか、ホリスティック教育、アート教育あたりに接続する部分もあるのかなと思っていて、結局戻ってきたんだなというところがあるんです。さっきもお話した通り、自分は高校までは地元の公立の学校で教育を受け、そこでうまく具合に成型されつつも、でも残念ながら国家が求める工業品にはなり損ねた（笑）。でもそこでの抑圧とか、均されてしまった部分は確かにあったと思う。

だからこの年齢になってみて、例えば自分の子どもを理想的な教育環境に置くとか、そういうことに関心がなくはない。でも自分に関して言えば、自分の辿ってきた道としては、まあこれはこれで良かったかなということ。でも一方であります。そういうプロセスがあったからこそ、今こうしてあわ居で他者と関わることができている気もするのだ。

### ◎傷に居場所を与える

岩瀬・あわ居というのは、〈異〉としていくらいなので、社会的な秩序からはずれた場所ではあるんですけど、たぶん Google Earth で検索すれば、ちゃんと出てくるはずですよ。調べたことはないですけど（笑）。だから社会というか他者と関わるために、この現実の中に位置しているということだと思えます。どこまでいっても社会の中の一人ではないなあということが自分にはある。

学校という場、あるいはそこでの対人関係のなかで、よくわからない形になりましたけど、でもそうしたものがあつたからこそ、それをメタで見ようという気も起きる。そこで起きていたのは何だったんだろうとか。そこにどんな力学が働いているんだろうとか。もう一歩外に出て、あの場に存在していた構造を覗く視点が得られています部分が確かにある。自分は別に選んでこの時代に出てきたわけではないですし、たしかに高校受験はしましたけど、別の場所に生まれていたら別の高校におそらく行ったと思う。だからあの高校に行くという選択が完全に主体的なものだったかと言えば、それはまた違うように思います。

でもだからこそ、そこから自分と社会の接点が見えてくるというか、自分はこの社会のなかで何をしていたら良いのかを知られるというか……そういうことを感じているんですよ。つまり僕が受けた傷があつたとして、それはあくまで個人的なものですけど、ある種、社会的なものでもあるんだろうな。僕もなんでこんなに

自分はおばに興味があるんだろう、なんであわ居で対人的ことをやっているんだろうなあと思っただけです。それで、これは一年くらい前に気付いたんですけど、結局は自分がそこで一番躓いているからなんだなって(笑)。

百瀬…(笑)。それこそ本当に肯定ですよ。僕の肯定って受容に近くて。最近X(旧Twitter)を見ると、整形美女のツイートが一杯まわってくるんです。それを見ながらよく考えるんですよ。彼女たちが美人に顔を作り替えて、自己肯定感爆上げってツイートしているんですけど、なんか自己肯定ってそういうことなのかなあって。それって結局、今の社会で美人といわれる価値を獲得して、自己肯定感爆上げなわけですけど、でも年を取って、その顔が衰えてきたり、その顔ではなくなってきたりとかしたら、どうなるんだろう。要は社会的に既に価値あるものとされているものを獲得することが自己肯定だと思ってしまうと、それがなくなると自己否定になってしまわないですか。自己肯定ってそういう価値を獲得することではなくて、それ自体としてそうある自分を受容することなんじゃないかなと最近考えています。

岩瀬さんがあわ居をやっていたり、詩を書いたりすることとかもそうですけど、自分でもよくわからないのにそれをやってしまうということ、そこにはそれ相応の、それぞれの事情が、わからないなりにもあるわけです。僕は普段はこんなぼけーつとしてますけど、絵を描く時は、描きながらもすごく暴力的になったり、獣じみで描くんです。制作しながら、制作のたびに、「こんな俺がいたんだ」って気付く。やばいときには、紙に向かいながら、殺す殺す言いながら(笑)。それは結局、長らく僕は暴力性を抑圧してきたんですよ。親父が家庭内暴力で、両親が離婚をした。僕自身は殴られていないけど、親父がおか人を殴ったのを見てすごい怖かった記憶があったりして……暴力性を発露すると家族って壊れちゃうんだってそこで思った……。

僕にはずっと想い出す記憶があるんです。僕は十一歳の時に親が離婚して、親父にはれない様に、半分拉致されるように、おかんに岐阜に連れていかれたんです。その車の後部座席で横になりながら、車の窓から青々とした空をぼんやり眺めていた記憶。そのなかで、十一歳の僕はある種、悟っちゃったんですよ。「みんなバラバラなんやなあ」というのをそこで見ちゃった。

その傷自体はもう消えないですよ。一方で、二十代の半ばに歌を歌っていた時に、歌うことを空にとけるとか、空に還るとか言っていたんです。これも意味づけと言えば意味づけなんですけど、「ああ、あの時にバラバラになっちゃったものを、色んな仕方ですなぎ直しているんだなあ」とそこで思った。空の中でバラバラになっちゃった、ひとりぼっちでしかない俺を歌うことで、空という〈異〉なるものに、自分を溶解させていく。俺は俺だけ俺じゃなくなるんだなって。より広いものに開かれて生きていく感じがするなあという過程があった。

だから自己肯定って、傷に居場所を与えることでもあるなあと思う。それがそうなってしまっていること自体は善悪ではなく、いろんなものの絡まり合いから起きている。あわ居に来る人たちにもそれぞれに生きていくうえで、いろいろあると思う。そこで誰かを責めることは簡単だと思う。「あいつが悪かったからこうなったんだ」と責めて解決しようとする人も多いんだろうけど……でもなんかそれは、根本的な解決というか、治癒にはならないような気がしている。その傷をまるっと受容することで、他責にせず、その先に進めるといえるか……。

あわ居のインタビュー集を読んでいて、岩瀬さんや美佳子さんとの対話を通じて、「あ、自分ってこうだったんだ」って気付いたという話がありますよね。多くの悩みって、悩みとして浮上していないところで、こんがら

があったりしているなあという気もする。そのあたりが、対話を通じて、今の自分の思考はこういう構造をしていて、今の時点でこうなってしまうているんだなと、それ自体として受け入れられると、それ自体として利用できる、そこから変わっていきたりするよなあと僕は思っている。そういう役目というか、それが自分に見えるようになる場所として動いているのが素晴らしいなあ。

岩瀬・今の話にまるっと接続するかはわからないですけど、最近僕は、責任という言葉について考えるんです。例えば帰還兵がどうしても周りに暴力をふるってしまうとか、親が子どもに暴力をふるってしまうとか。どうしても人を利用してしまおうとか。そこには自分でもよくわからない、そうしてしまう何かがあると思うんです。その時に、それがどこから来ているのかなということ、いわば自分の歴史と言ったら良いんですかね、それを見ることがすごく大事な気がしています。

ある人が周りにもものすごく暴力をふるうとして、でも実はその人は親に同じことをされていたと。そこで「だっと同じことを親にされたから」と言うこともできると思います。さっきの百瀬さんの言葉で言うところの他責。でも、「じゃあ親はなぜそれを自分にやったんだろう？」というところに目をやって、そこを切開していった時に、おそらく社会とか歴史というものが出てくるのではないかと気がするんです。

例えばそこに、第二次世界大戦との関連があるかもしれない、軍国的な教育が関連しているのかもしれない。あるいはもっと違う問題なのかもしれない。そういうものが見えてきた時に、その人は自分の持っている暴力性に対して、それまでとは違う態度をとることが、もしかしたらできるのではないかと気がしている。そしてそこでこそ、その人は自分の持っている暴力性に対して、あるいは自分という歴史的存在に対して、責任を持つ

るのかもしれないなど。

責任を持てたら、じゃあそれをどうやら無くしていけるんだろうというところに、意識が向いてくるかもしれないですよ。一つのシステムとして、それをしてしまう自分を外から見られるようになるかもしれない。もちろんそうなるためには、その人の力だけではなく、周りのサポート、制度を含めて様々な支えがいるのだと思います。容易なプロセスではないことは承知のうえでこう言っています。

これはさっきの僕の教育の話とも若干リンクしますけど、結局、個人の傷というのは、社会の傷、歴史の傷なのではないのかなって。そしてその傷にこそ、その人がこの社会の中で、他の誰でもないその人として生きていく通路があるような気もするんですよ。僕でいえば、社会の中の生きづらさとか、受けてきた教育、その中の対人関係によって、仮に傷を受けたのだとしても、それはまあそれとして。でもその傷をつけた彼らも、歴史や社会によって、それをさせられてしまっているのかなというところでみた時に、そこに自分と彼らに共通する傷があることが見えてくる。そのうえで、この社会や歴史の中を生きざるをえない、それを引き受けざるをえない自分が、そこで何ができるだろうって、そう考えているのかもしれないです。

## ◎未知のための言語

百瀬・僕が庭文庫をやるうえですごく思っているのは、それぞれがそれぞれの自然さを生きられるようになる、と良いよね、ということ。その根本には、僕が自然に生きられなかった時間が長かったところがある。それは親とか学校とか、いろいろなものが関わりながらそうなってきてしまった。

僕は普段、庭文庫が社会的にどうかというのには考えていない。なんで考えていないのかな……それはたぶん一個、僕が歌うことが社会的に何なのかを考えないことに似ている。例えば僕が歌って、店で泣いてくれる人がいて、良かったねえと思うんですけど、でもその人のために歌っているわけでもないなあ、と僕は思っている。僕が歌いたくて歌っていて、響いちゃって泣くと。それを意味や意義として捉えたら、その人の何かが癒されたということなのかもしれないから、そういうところで言えば、たしかにそこに意味や意義があったのかも少しない。でも僕らはあえて、「庭文庫ってこういう場です」と規定してないところがある。妻のみきでいとも「元気な人より、心が病んでいたり生きづらい人が生きやすくなるの良いね」と話したりはするんですけど、心を病んだ人のための場所ですというふうに言う気はない……それはただ僕が言わないだけであって、それを言うべきじゃないって話ではないんですけど。

あわ居のインタビュー集にも出てきますけど、真木悠介さんの『気流の鳴る音』をはじめ僕が読んだのが庭文庫を始めた頃です。読んで衝撃を受けた。庭文庫にはあれがくっついていて。これは今回の対談の冒頭に、「岩瀬さんはあわ居について理解したいんですか？」という問いを投げたことにもつながるんですけど、僕は真木があの本で分析した「四つの敵」についてよく考えている。そこでの、意味へと疎外されないようにというところ。そのあたりで岩瀬さんはどうなんだろうなと。

岩瀬さんは『ことばの共同体』で、かけがえのない仕事は言語を超えているところで生まれているよねという

5 真木悠介(2003)『気流の鳴る音』pp.160-165、筑摩書房

話をしたり、不安が強くなると概念や形式に頼りがちだよねという話をしている。でもこうやって、あわ居の意味を探っている岩瀬さんがまさにこうしている。あわ居は不可避に生えてきていて、それをもろろん言語で分節することはできるんだけど、岩瀬さんが書いているように、ともすると意味で囲い込むことで、損なわれるものもあるよねあと思ったりもしている。それが今回の対談の依頼を受けた時に一番困ったところ(笑)。

岩瀬・僕は真木さんの『気流の鳴る音』は大学四年生の頃に読んで大きな衝撃を受けましたけど、言語によって意味へと疎外されるというのは、まさにおっしゃる通りだと思います。それは言語の持つ危うさとしてあるのは間違いないですね。そのうえで、この対談もそうですし、インタビューもそうですけど、結局は、僕はあわ居のことを言語にしようとしている。それが疎外になりうるのではないかという部分ですよね。

でも自分のなかでは、今こうして言語にしている行為というのは、ピンどめに近いんです。要は、今動いているあわ居をいったん仮どめする作業。いったん記述する作業。なぜそれを自分が見たいのかと言うと、仮どめをしたことで、また未知の他者と出会えるんじゃないかという、その予感を感じているからです。つまり、体験者にインタビューをすること、こうして対談をすること、あるいはその内容が本になり第三者に読まれること、こうした行為のなかにまだ自分たちの知らないあわ居が出てくるんじゃないかと。そしてそこから、これまでにはなかった関わりが生まれたり、知らないあわ居がそこで垣間見えたり。直接あわ居に来てもらえるといったことが起きたり。あるいは全く思いもしていなかった使われ方をしたりとか。

つまり、言語にはしているんですけど、それはあわ居が何なのかを規定する、意味で囲い込む目的でやっているというよりは、これからもあわ居が生もので居続けるためにしている、という意味合いが強いです。生もの

でしかないあわ居を、どうやったら分有できるのだろうというところでの、言語への変換。詩を書く行為に近いでしょうか。ですので、自分としては、あわ居をよりひらいていくための、より脱構築していくための行為として、それを捉えていますね。あと、百瀬さんが庭文庫について、そういう作業をしないのは、場の開き方の違いもある気はします。

百瀬…なるほどね。ひらくためにむすぶと。それはすぐく大事なことですよね。

対談実施日…二〇二四年二月十五日

百瀬雄太（ももせゆうた）／庭文庫店主  
1988年生まれ、東京都出身。岐阜県恵那市育ち。慶應義塾大学総合政策学部卒業。在学中は、主に、地域型アートプロジェクトに参加。地域政策とアートについて研究。並行して、詩作、作詞作曲を始め、ギターを弾き歌を歌う。大学卒業後は、医療系SEとして就職。2015年に会社を辞め、地元恵那に帰る。現在、庭文庫と、あさやけ出版を営みながら、詩、小説、エッセイ、絵、造形、音楽、舞踏、写真などの、様々な芸術形態に身を浸しながら、生活と制作を行う。



イメージ、聖地らしさ、異日常、歴史、そして穴——。場所をとりまく多様なテーマを歩き来しながら、今日における場所との接触のありようや、虚構が持つ可能性について鋭く迫るダイアローグ。

◎場所の力

岩瀬…このたびは対談の実施にあたり、わざわざ石徹白までお越しいただきありがとうございました。今回は石徹白のフィールド録音もしながら、あわ居別棟に二泊三日滞在していただいたわけですが、そのなかでの体感であったり特徴的だったエピソードについて、まずは聞かせていただきながら、対談を始めていけたらなと思っています。

前林…今回、あわ居のちょうど裏に位置する大師堂でフィールド録音をしたわけですが、お堂までのけっこう急な石の階段をのぼっているときに、自分が見ているものや周りの風景がすごく映像的に感じたということがありました。なぜそういうことが起きたのか明確な理由はわからないし、それは一瞬のことではあったのだけれど、そのことがまずはとても印象的でした。自分が確かにそれを体験をしているんだけど、どこかメディアを通して風景を見ているという感じというのか。普段住んでいる日常的な場所から、石徹白というスケールの大きな場所に車で移動をし、石徹白までの運転の疲れなんかもあるなかで……だから少なくともそれは、日常から離れた体験といって良いのかな。

もちろん、いま話した体験や違和感を少し大きめに捉えてしまっているという部分はあるかもしれない。もしかしたらただ疲れていただけとか、そういうことかもしれないし（笑）。あとは、石徹白は空気が違うなというのは確実にありますよね。新鮮な空気を吸っている実感があるというか……空気が締まっている。

石徹白って、歴史的にも、いわゆる聖地のような位置づけになっているわけですよ。白山中居神社にしても、なにかしらの場所の特性があるというか、昔の人がそこに何か身体的に感じ取ったものがあつたからこそ、その場所が選ばれたというところがあると思う。つまり、身体感覚と場所との関係性のなかで生まれているんだろうな。さっき言ったような感覚は、そういうことと関連しているのかも知れませんね。

岩瀬…なるほど。石徹白という場所の特性について少し整理してみると、まずは歴史的に白山信仰の重要な拠点だったというのがあってと思います。宗教的な文脈のなかでたくさんの方の往来があり、聖地としての機能を果たしてきたというのが、重要なポイントとしてまずはひとつある。一方で、「場所の力」というところにくつと

フォーカスしていくと、それは白山を信仰しているかどうかという点に関わらず、現代の人でも「ちょっと他の場所とは違うぞ」というような空気感とか、清澄な雰囲気を感じ取れる場所なのではないかなということも個人的にも感じています。そこで感じ取れるものは白山信仰という文脈だけでは説明しきれない、場所それ自体が持つなにかしらの力なのだと思います。

そしてまさにその場所で、自分たちはあわ居を営んでいるわけですが、そのなかでの大きな関心事として、「現代においての信仰」というものがあります。信仰と言いましたが、これはなにも宗教の話をしようとしているわけではなく、広い意味で、この現代のなかで何を信じていくのか、何を生きていくうえでよりどころとしていくのか、というところに関わる話です。人間という生物が生きていくうえで、超越的なものとの関わりや至高的な体験を希求する部分が、誰しも少なからずあるのではないかなという気がしていますし、むしろ根源的な生を展開していくうえで、そういうものは欠かせないのではないかとことを思います。

おそらく近代以前は制度宗教がうまく機能することで、そうした人間の欲求にたいしての受け皿が、ある程度社会的に担保されていた部分があると思うのですが、近代になって、制度宗教が死んだわけではないにしても、どんどんと減衰していった。日本の場合で言えば、国家神道や新興宗教などの問題が複雑に絡まり合ったことで、宗教に対しての拒否感はかなり根強いものになっているのではないかと気がしています。そのなかで、宗教ではないところで、いかに超越的なものとの関わりや、至高的な体験を取り戻していけるのかという部分は、現代においてすごく大事なテーマである気がするんです。

そして、自分たちがあわ居という場所を営んでいるなかで思っているのは、それが仮に白山信仰という言葉には結びつかないのだとしても、石徹白やあわ居での時間を通して、その人が確かに「世界」に触れるような体験を創出できれば、それ自体がその人自身のよりどころのようなものとして、身体や記憶のなかに留まり続けるのではないかとことです。この石徹白という場所に立って、それは例えば、風を感じることも良いですし、水にさわることも良いですけど、ともかく何かに「じかに触れる」ということ。「じかに触れる」ことができるときに、そこに「世界」が見えたり、生きていくうえでよりどころとなるような「確かさ」が実感できるのではないかと、自分としてはそう考えています。

逆に言えば、現代は「じかに触れる」ことがとても難しくなっている時代でもあると思うんです。感覚をひらいてしまうとむしろ生きづらいから、あえてそれを摩擦させて、閉じる。その方が、今の社会で生存するうえでは無難であるというような、そういう側面がある気がしています。世界にはほんらい無数の「穴」があるわけですが、現代の日常生活においてはその穴はなかなか見つけにくい。一方で、身体をくわつと開いて、そういうところに触れにいつて良いんだというような安心感や信頼感を感じさせる何か、まずはこの石徹白という土地それ自体に備わっているのではないかと気がしています。だからこそ、その土地の力を借りながら、ここに来た人が、自ら何かに「じかに触れる」ような出来事が生まれればよいなと、そう思っているところがあります。

## ◎装置と人為

前林：今のお話はまさにそうだろうなと思う一方で、最近では「ポケモンのGO」のようなものもあって面白いなと思うところがありますね。実際に自分が目撃した体験から言えば、何年前かに、勤務している大学の周辺で、家族とか若者のグループがスマホを見ながら、何かに引きつけられるようにして、何かを探すようにして歩

いていたんですね。その様子を遠目で見ながら、これは一体何が起こっていて、何を探しているんだろうと不思議に思いました。そしてその後、彼らは「ポケモン GO」をやっているんだということを知りました。僕としてはこういう現象ってすごく面白いなあと思います。

つまり白山中居神社や石徹白の持つ場所の力がある一方で、そこでは「ポケモン GO」というゲームによって仕組まれた「場所の力」が生まれている。それはGPSなどのメディアテクノロジの発展によって可能になっていることですね。もしかしたら場所なんて見ていないのかもしれないけれど、ゲームをする人たちは実際にその場所に行かなければいけないし、そこで何かを探さなければならぬ。そういう場所との関係性や、その場所でしか起こらない臨場感のようなものが、仕組まれたものではあれ、ぎりぎりのところでそこに発生している。だから場所を探る感覚や、この場所に何かがあるだろうっていう気配のようなものを感じ取る力というのは、弱まってきているとは言え、まだ残っていると僕は思います。

むしろ、子どもたちはそういうものを生き生きとした目で探している。その場所に埋め込まれている得体的しれない何か、現実的には見えないけれどたしかにある気配のようなものを探ろうとする力はまだあるとも言える。先ほど、「穴」っていう言葉がありましたけど、そういう穴がメディアテクノロジによってひらくかもしれないということは可能性として感じます。

岩瀬…なるほど。のっぺりとした空間だったはずなのに、そこにひとつ何かを介在させることで、探索する余地が生まれたり、そこに気配を感じ取ろうとする構えがつくられるというような…：なんらかプラスの働きが生まれる可能性があるというお話ですね。

前林…そうですね。だから石徹白のような、いわゆる聖地の持つている場所の力というのは、とても強力なものだとは思いますが、一方でそういうものをわれわれが身体的に感じ取る力、気配を感じ取る力もまたとても重要ですね。その意味で、「ポケモン GO」というのはぎりぎりではあるんだけど、それがあつて、人はそうした身体的に気配を感じ取る力を発揮している、と捉えることができると思います。

岩瀬…なるほど。そう考えてみると、自分たちがこの石徹白の土地の上に、さらにあわ居という具体的な建物を設けている状況というのは、石徹白という土地が持つ場所の力にたいして、さらに人為的な介入を施していると捉えられるのかもしれないと、今お話を伺いながら思いました。その意味であわ居という場所もまた、石徹白という場所をより深く体験するために仕組まれた、人為的な装置であるとも捉えられるなあ。

前林…石徹白がもつ場所の力を感じるための入口というか、導入部というか、そのような感じですかね？

岩瀬…そうですね。おそらくこの石徹白という場所にはいろんな潜在性があるとは思いますが、自分たちとしては、言葉にならない体験というか、「あれは一体何だったんだろう」というような不可解さを含むような出来事を作れたらなというところで、あわ居を営んでいます。そういう出来事のことを僕は「詩」と言うわけですが、それを作ろうとなった時に、現代人のベシクな身体感覚があるなかで、その身体感覚にたいして石徹白という土地が発する場所の力が単純に掛け合わせるだけでは、「詩」の体験にまで達するのがなかなか難しいと、自分たちは無意識のところだと思っているのかもしれないですね。もちろんそこに例外はありますけど、仮にそういうことがあつたとしても精度というか、偶発する可能性はきわめて低くなってしまふ。

つまり、「詩」が生まれる潜在性というのは、この石徹白という場所自体に確かにある。「穴」はたくさんある。でも現代人の身体感覚そのままでは、石徹白という場所ですら、そういうものを探索することがなかなか難しい状況がある。そこにあわ居という人工的な装置が加わることで、何かしら身体感覚に良い意味でのズレが生まれて、石徹白の土地が持つ潜勢力が発現し、言葉にならない体験が偶発する精度や確率が上がるというような、そういうことを自分たちはあわ居で目指しているのかもしれないですね。

自分たちとしては、言葉にならない体験が起きて欲しいとは思いつつも、それがどうやったら起きるのかはわからないし、そこは設計しきれない気がしています。でもそういうことが起きやすい条件はおそらく整えている。宿泊業ではありながら、いわゆる宿業の形態をとらないこと。ホームページ上でそのことを示し、来訪の際の導線を絞ること。それにより、動機付けや文脈がある程度のところであらうこと。ご本人が抱える課題意識や現状について、予約時のフォームに可能な限り記していただくこと……こういった細かな人為的な操作によっても、おそらく「詩」が偶発する可能性は高められているのだと思います。その意味でも、自分たちは人為的な介入によって、普段とは違う身体的な構えを醸成したり、「詩」が偶発しやすい環境をつくっているのかも知れません。自分たちがしているのはそういう意味での場づくりなのかもしれないです。

### ◎場所とイメージ

前林…なるほど。そういう意味で、「ポケモンGO」の持つ可能性について考えてみると、巧妙に仕組みられたゲームではありながら、それを過小評価できないというのが現代の状況なんだと思うんですね。聖地になんらかの力がある一方で、なんでもない場所にも力のようなものをもたせることが可能というように。場所について考えるときによくテーマになるのは、「場所」と「空間」の違いです。「場所」というのはなんらかの力をもっていて、特異点として存在し続けるところと言える。それに対し「空間」は、常に意味付けを待っているようなフラットな領域と捉えることができる。裏返せば自由に意味づけられ、制度化され得る領域、と言えるかも知れません。面白いのは、現代においては歴史や伝統を背負った場所よりも急ごしらえで意味づけられた空間がまず先に来るところですね。

例えば、映画『君の名は。』は、日本の架空の町に隕石のようなものが落ちて……というようなストーリーですよね。ここでは架空のような実在のような場所に対して、映画によって意味が付与されるということが起きています。つまり映画という虚構によって、その場所に対しての意味づけがなされ、観る者の想像力が刺激され、今度はそこを訪れるようになる。こういうあり方はすごく面白いと思うんです。つまりそれは後付けの聖地化という感じで、映画なりメディアなりで、ある場所が虚構のなかで聖地化され、それを見た人が実際にその場所を訪れる。つまり虚構が媒介となって、現実の場へと誘導される。そういう枠組みで見ると……。

岩瀬…いや、まさにあわ居の話ですよね(笑)。

前林…かも知れませんが(笑)。

岩瀬・例えばあわ居のホームページ上で公開してきた「体験者インタビュー集」<sup>1</sup>について、ここであらためて考えてみると、あのインタビューはあわ居という場所についての語りであり、その意味ではひとつの虚構であると捉えることができると思います。そして事前にその虚構に触れ、実際に現地にきてみて、実際の場にその虚構を重ねることで、現地での体験がぐつと深まるとか、場所との接触の可能性が高まるといようなことが、現実的にありえるのかなと……虚構があることで、気配を感じる力とか外部を予感する力がぐんと高まる可能性がある。もつと言えはその虚構自体が、あわ居の求心力になっていくということも考えられますね。じっさい、池田知加さんは、「ツーリズム経験についての『語り』は『場所』の意味や魅力を形成する一つの重要な構成要素とみなすことができる」としたうえで、「ツーリストの語りによって形成されたその『場所』の特別な意味が人を旅へと誘い込むことになるのではないだろうか。」と記しています。<sup>2</sup>

そして書籍『あわ居―〈異〉と出遭う場所―』の刊行によって起こそうとしているのは、まさにその発展形なのかも知れません。書籍によってあわ居に新たな意味や「場所イメージ」<sup>3</sup>のようなものが与えられ、場所の求心力が高まったり、現地での体験の質を高めていくことにつながっていくというよう……そうしたサイクルをまわすことに書籍というメディアが有効に機能するのではないかと思います。この「〈異〉と出遭う場所」とい

1 あわ居のホームページ上に掲載の「体験者インタビュー集」は、本書内の「あわ居の記憶」に全文収録されている (pp.207-311)。

2 池田知加 (2014) 「観光と場所」から『場所の意味の復活』へ『立命館産業社会論集』50 (1)、pp.235-255、立命館大学産業社会学会

3 内田順文はイメージを「知覚、感覚、記憶、知識、想像などの全てを含む、いわゆる広義のイメージ」だとしたうえで、環境としての地理的空間である場所に対するイメージを「場所イメージ」だとしている。詳細は内田順文 (1982) 「地名・場所・場所イメージ」『人文地理』39 (5)、pp.391-409、一般社団法人人文地理学会

う言葉は、書籍を制作するなかでふと思いついたあわ居を言い表す言葉で、わりと気に入っているのですが、一方でこれはあわ居という場所へのイメージを規定してしまう、かなり強い力を持った言葉だと思っています。けれども主宰者があわ居という場所に対して、こういう強い言葉をあらかじめ貼り付けてしまうことで生じるプラスの効果も、やはりあるのかもしれないなあとということを、今お話を伺いながらあらためて考えていました。

今お話してきたことは、ある場所で兆しを探索する時の独特の集中力というものに大きく関連するものだと思いますが、ここで思い出されるのが自分の過去の旅のことです。十年ほど前に、僕は知床の獣道をガイドと二人で往復で数時間歩いたことがあって、その終着点にあった柵の木に、それこそ言葉にならない感動を覚えたということがありました。あの時はちょうど秋で、鹿のいさかいに何回か遭遇しましたし、あちこちに熊穴があったりしました。だから、歩いているなかでちょっとでも変わった音がすると、ガイドはすぐに立ち止まり、周囲の様子を確認するということを繰り返していました。プロがそういうことをしているのを見ると、やっぱり僕自身もちょっと怖くなるというか、周囲に対しての緊張感とか集中力が生まれますよね。それによって、普段は使っていない能力が発動するというか、感覚が鋭敏になっていた部分があったんだろうなと、今になってそう思うんです。つまり日常の知覚の様式を採用してはダメだという危機感がたぶんあった。だからこそ、いつもの自分のあり様から離れた、宙ぶらりんな状態で居られていたんだと思います。つまり、いつもの自分を止めながら、「穴」を探索する構えになっていた。そうしたなかで一本の柵を見た時に、それが鮮烈な印象として自分の中に入ってきた部分があったんだろうなと思うんです。

このエピソードにおいての緊張感、虚構によって生み出されたわけではないですけど、同じような緊張感や集中力、あるいは弛緩や脱力が、虚構によって生じる可能性もまたあるのかなと思います。日常っていちいち

反応しないこととか、流してしまうことで円滑にまわっていく部分があると思うので、そのあり様を中断させるために虚構が作用するというか。虚構によって、いつもの自分ではない自分であることができるようになる。

加えて、ここで共有しておきたいエピソードとして、あわ居のオープン当初のことがあります。あわ居は最初、民宿として営んでいました。もともと、わかりきった何かを渡すような場所にはしたくないというところがあったので、とりあえず民宿のふりをするので、間口を広げ、とにかく色んな方にあわ居に来てもらえさえすれば、何かが起きる、何かが起こせるのだと、そう信じていたわけです。でも、やっぱりそうはならなかった。というのも、布団と食事がセットになっていけば、ほぼ全員がそこを「宿」だと認識します。そしてその認知は一泊とか二泊の時間のなかでは、よっぽどのがなければ覆りません。

そうなると、機能としての「宿」以上の何かを、その場所で探そうとはなかなかありません。つまり、「自由にあわ居を体験してください」とこちらがやっている、かえって「宿」として処理され、「宿」として固定化されてしまうということが起きたんです。現代に生きる人は、そういうふうに記号的に処理することにおそらく慣れ切っています。だからこそ、そのことを前提にしたうえで「宿」として処理されないための、何かしらの工夫や制限、あるいは介入をすることが必要になるんだろかなとそこで思いました。あわ居がどんな場所なのかをある程度こちらが定義し、限定してしまうことでこそ、かえって場の自由度や密度が守られるんだなと、そう気が付かされたんです。

前林…なるほど。

### ◎聖地らしさとは何か

岩瀬…そして今日の聖地というところに話を移すと、それは結局、個人がその場所に何を思いだしているか、その人にとってその場所がどのように大事なのかっていう部分と大きく関連するものかなと思います。フランスにテゼ共同体という修道院があるのですが、その修道院にはツーリスト用の泊まれるスペースがあって、今日の聖地とツーリズムの関連を考えるうえで非常に面白い場所だなあと思っています。宗教学者の岡本亮輔さんのテゼについて考察<sup>4</sup>を読みながら僕が感じたところでは、それぞれのツーリストがテゼに何を見出すのか、そこに何を見るのかという部分こそが重要で、それがあってこそテゼは誰かにとっての聖地になり得るのだろかなということでした。つまり自分でその場所を聖地化しないと、テゼは聖地には決してならないのだと思います。そして、あわ居を作っていくプロセスにおいても、そういうテゼのあり様に多分に影響を受けてきたところがあるんです。対談の冒頭でも、石徹白にはそもそも場所それ自体に、ある種の聖地性があるという話がありました。でも自分たちがあわ居を媒介にして作りたい聖地らしさは、またそれとも違っている……。

自分たちのつくりたい聖地らしさについて説明するうえで、ここでは次女が生まれたときのエピソードについても少し触れたいと思います。次女が生まれたのは今から六年ほど前ですが、妻は千葉の実家近くの病院で出産を予定していたので、出産予定日の一ヶ月くらい前から長女と一緒に実家に帰省をしていました。それで、出産予定日の数日前の早朝に、「もうすぐ生まれる」と妻から僕に電話がかかってきた。僕は当時、石徹白と大垣の

二拠点居住をしていたのですが、その日は運良く大垣にいたので、すぐにとび起きて、始発の電車に乗って名古屋まで行き、そこから新幹線に乗りました。それで新幹線に乗ってすぐに「さっき生まれた」とメールがあった(笑)。しかも面会は午後の十五時くらいからしかできないと言われてしまう。だったら東京でちよつと時間を潰そうかなと思ひ、当時、僕が建築にはまっていたこともあり、東京の四谷にある聖イグナチオ教会に一人で行ったんです。僕はかつてその隣にある大学に四年間通っていたのですが、実は在学中は一度もそこを訪れたことがなかったんです。

それで聖イグナチオ教会に入ってみると、早朝だったこともあってか、教会に居る人はわずか数人程度で、すごく静かでした。それでしばらく座っていたらパイオルガンが鳴り出した。今考えてみると、あの時の自分ってすごく曖昧な状態ですよ。次女が生まれたという事実は聞いたけれど、まだ実際には会えていなくて、情報のなかでは二人の子どもの父親ですけど、実際の感覚としては、まだそうではない。そういうどっつかずの状態のなかで、教会に居て、館内を見渡し、音楽を聴いていたら自分にとっての重要な出来事が起きた。「これまでのことは忘れなさい」とか「これからがはじまりです」というような、ことばが聞こえた気がしたんです。僕は基本的に無宗教で、キリスト教を信仰しているわけではないですけど、あの体験があったから、自分にとって聖イグナチオ教会は聖地なんですよ。だから、あわ居で作りたい「聖地らしさ」は、自分が聖イグナチオ教会に對して抱いているそれに近いものだと思います。そしてその後、自分は何回かその教会を訪れましたが、文脈や状況が違う時にそこに行っても、同じようなことは全く起きませんでした。これも重要な部分だと思います。

前林・今、「聖地らしさ」という言葉がありましたけど、いわゆる「聖地」というのは、伝統とか宗教的なコンテンツががちり固まっている感じがします。逆に「聖地らしさ」の「らしさ」というのは、さっきの気配

を感じる力とか、外部を予感する力とすごく関連する気がします。つまり、こちらが持っている力をその場所に投影するということ。虚構やフィクションによって先取られた場所の感覚を、人は現実の場所に投影する。だからそれもある意味で人為的な操作ではあるんだけど、そこに「らしさ」が発生する。そういう意味で「ポケモンGO」をやっているときの感覚も、その「らしさ」の可能性だと思っんですよ。なんでもない場所にポケモンが潜んでいるっていう設定があることで、そこが特別な場所になり、「らしさ」をまとうことになる。そしてこれは、近代以降の感覚じゃないのかなと思います。

このような問題について考える時に、ルイス・キャロルの『シルヴィーとブルーノ』という小説をいつも思い出します。その小説の中に描かれているイメージ的な遊びのなかで、縮尺1:1の原寸の地図をつくる、という話が出てきます。しかし1:1の地図になると地図自体が大きすぎて、日光を遮ってしまつて作物が育たなくなる。これだとあまりに不便で具合が悪いから「この現実の場所そのものを地図として使おう」という話になります。この発想の転換って、ある意味すごくラディカルですよ。現実の場所と地図という虚構としての空間が重なつてしまふ、あるいは反転してしまふ。こういうラディカルさは、きわめて近代的な発想だと思いますが、現在それが日常化しています。

そこで虚構とかフィクションの問題にもどると、僕がアート作品をつくるときのひとつのテーマが「イメージの合成」なんです。場所と空間、あるいはイメージを合成しながら更新していく。ある場所を訪れ、そこで何らかのインスピレーションを受け、時間をかけて接するなかで、その関わりを自分なりに深めていく可能性がそこにはある。場所からのインスピレーションを音というメディアを通して、変換し、イメージを深化させ、更新していく、あるいは場所のイメージを合成し続けていく。それはもう虚構とかフィクションとかいう枠組みを超えていくような運動でもあるわけです。そこから何が広がっていくのか、そこに賭けてみたいなのというのはあります。

## ◎日常と非日常、あるいは異日常

前林…あとは今回、あわ居別棟に二泊三日滞在させてもらって感じたのは、すごく細心の注意を払って設計された空間というか、過ごしやすいつくりになっているなということでした。やわらかい感覚がありました。それも石徹白という場所を感じるときのひとつの重要なファクターだと思います。

岩瀬…あわ居の空間やそのしつらえも、石徹白という場所を感じ取るうえで、バイアスというか制限というか、何かしらのファクターになっているということですよ。良くも悪くも、間違いなくそこに影響を与えてしまっている。

前林…そうですね。ある意味とても現代的なんだと思う。僕がいろんなところにフィールドワークに行くときもそうだけど、宿泊施設とその場所の記憶ってすごく密接に関わっていて、泊まる場所がなんでも良いというわけではない。あわ居別棟は、とてもアットホームで機能面でも普段の生活と変わらないくらいでした。だからこそ、安らげるというところもありました。例えば珈琲を入れるとか、寝るとか…そうした行為が、日常の生活とあまり変わらずスムーズにできるから、だからこそ外の雰囲気とか、微細な変化を感じ取れるということがありました。そこに対して岩瀬さんご夫婦が細心の注意を払っているんじゃないのかなと思いました。

岩瀬…なるほど、面白いですね。石徹白という場所に居ること自体は非日常なのに、でもそこでする行為自体はすごく日常的だという…あともう一つ思うのが、確かに珈琲を入れて、寝て、パンを食べて…というところ

ろは普段の生活と同じでも、日常だとそこに仕事だったり雑事があるわけですよ。そういう点で言うと、日常でしている仕事や雑事は限りなく少ないなかで、別棟では生活をするわけですよ。その差異も非常に重要な部分のかなと思います。だからこそ、いつもは流してしまっている行為とか、周囲のなかに対して、集中できる部分があるのではないか。もちろん色々なケースがあって、別棟滞在時に多少は仕事や雑事を持ち込まないといけない場合もあると思いますが、ただこれまでの傾向としては、あえてパソコンやスマホを持ち込まない、仕事や雑事はしないという選択をされる方が多いですね。

日常と非日常という部分で言えば、これまでのツールリズムは日常に対しての非日常をいかに作るのか、という点に注力してきたと思います。でも日常がハレ化している現代において、これまで非日常的な行為だとされてきたことをするだけで、本当にそれが言葉にならない体験を創出することにつながるのかと言えば、それは非常に疑問符がつきます。もはやハレとケを対比させていた時代とは前提が違うので、そのうえでどう〈異〉の体験を作れるのかという視点が大事になってくるのだろうか…最近自分が興味を持っている言葉で、「異日常」というものがあるのですが、自分の日常とは違う、異なる日常に身を置くことで、そこから何かが生じることはありますよね。異日常は人類学的なフィールドワークなどとも関連の強い語句だと思いますが、ただフィールドワーカーの場合は異日常の生活自体にストレスがあつて、そこから変容がもたらされる場合が多い気がします。その意味では、まるっと今のお話に接続できるものでもないと思うのですが……。

前林…まあでも確かに、なんらか関連する部分はあるのかも知れませぬ。それにしても「異日常」というのはすごく興味深い言葉ですね。

岩瀬…それに関連するところで、あわ居で起きうる可能性のひとつというか、もしかしたらもうそれは起きていることかもしれないですけど、僕らが日常的に見ている世界とか、僕らのここでの日常的な知覚の様式を、来訪者がトレースするということも起きうるのかなという気がします。つまり僕らの日常が、来訪者にとっての異日常として作用するというか。

前林…そこに小さなズレというか、そういうものが生まれるということですよ。それでやはり思い出すのが、最初に話した大師堂に続く石の階段をのぼっている時に感じた、あるフレームがあつて映像的に辺りを眺めるような感じがしたという、あの感覚のことなんですけど…あのようなズレが起きるには、決してどこでもよいというわけではないと思うんです。

## ◎場所と歴史

前林…これまでの話の流れのなかで面白いなと思うのが、やはり場所のイメージの問題です。場所のイメージについて考える時に、僕は虚構の力を借りて考えることが多いんですが、最近では『A GHOST STORY / ア・ゴースト・ストーリー』という映画が印象的でした。内容をざっと言うと、二人で生活をしている男女がいて、二人はたわいもないことで喧嘩をし、その後、男性は家の前で事故で亡くなるんです。それで男性は成仏できずに、お化けとしてそこに居続ける。もちろん女性には見えないわけですけど。

そのお化けはその場所で恋人が生活する様子を見ながら、だんだんとその場所の過去や未来に、タイムトリップし始める。過去や未来に旅をする中で、なんでもないと思われていたこの場所が、かけがえのない、唯一の場所に変容していく。そういうストーリーなんです。

所に変容していく。そういうストーリーなんです。

こうした時間的な縦軸での場所の捉え方とても重要だと僕は思っているんですが、そういう意味でも、石徹白は縦軸が深い場所ですよ。それでもそのなかでいろいろと変わっていくものがあるわけ。そういう捉え方をした時に、つまり時間のスケールといった部分で、石徹白やあわ居の存在について何か思うことはありますか？

岩瀬…うーん…直接のお答えにはならないかもしれませんが、石徹白には縄文から人が住んでいたということが言われているなかで、もちろんそこには色々な背景があるとは思いますが、でもある程度は、石徹白という土地の何かに惹かれて、つまりはこの場所を選んで縄文人は住んでいたのだと思います。その後、白山中居神社ができて、中世で白山信仰がピークに達し、戦後、都市部に人が流出し、過疎化が進み…といったざっとした流れがあるなかで、間違いなく言えるのは、石徹白に住むことはずっと厳しいことだったのだろうということです。

現代を生きる僕らにはストーブがあつて、除雪車が雪をどかしてくれて、峠の道は車で運転ができて、というような感じで、昔に比べればかなり恵まれた環境を生きているのに、それでも「大変だ」というような言葉をどうしても振りまいてしまう。もちろん、当時とは異なる大変さが今の時代にあるのも事実ですが、少なくとも生活環境という点においては、今とは比べ物にならないくらい、信じられないくらいに昔は厳しかったと思うんですよ。それなのに、ここに人は住んできた、住み続けてきたという…そこには複雑で多様な理由があると思うので、決して一般化はできないと思いますが、ただひとつの大きな理由として、宗教的な部分というのは、かな

り大きかったのではないかと思うんです。白山信仰の拠点を守るところ……白山という霊山との仲介役としての自負を持っていたと思いますし、そこから派生して生まれる、この場所に生きる人だからこそ果たせる社会的な役割もあったと思います。

それで、自分たちは一応は選択して、そういう歴史を背負ったこの場所に住まわせてもらっているなかで、やっぱりこの土地に住んでいるからこそできることとか、この土地が現代の社会においてどう機能すべきかということについては、やはり考えざるをえないですよ。あとは、圧倒的な積雪量とか寒さとか、決して抗えない自然の厳しさがあるなかで、それでもここでどう生きていくのか、どう生計を立てていくのかを模索していくにあたっては、この地でどのように人が生き抜いてきたのかを知ることが、とても重要なのではないかと思います。

前林…いやが応でも、石徹白という場所の時間に組み込まれていくというのか、入ってしまおうというのか……まあそれはどこに住んでいてもそうだと言えばそうなんだろうけど。でも石徹白の場合は、より強固なつながりを感じざるを得ないということかも知れませんか。

岩瀬…そうですね。僕らは今こうして、まぎれもなくツーリズムの事業者としてあわ居を営んでいるわけで、形態としては昔とは全然変わってしまったかもしれないけれど、でも抽象化してみれば、白山信仰の文脈で石徹白に信仰者が来ることと、ツーリストがあわ居に来ることは、それなりに似ている部分があるのかなと思っ

ているところがあります。全然違っていながら、でもどこかで通底している部分も、またあるのではないかと。

岩瀬…そうですね。僕らは今こうして、まぎれもなくツーリズムの事業者としてあわ居を営んでいるわけで、形態としては昔とは全然変わってしまったかもしれないけれど、でも抽象化してみれば、白山信仰の文脈で石徹白に信仰者が来ることと、ツーリストがあわ居に来ることは、それなりに似ている部分があるのかなと思っ

石徹白って、大きく見れば農山村という語句で括れる場所だと思うのですが、お米がずっと作りにくい環境だったとも言われていますし、地形的にも高台にある盆地で、普通の農山村とは明らかに異なる、奇妙なつくりをしています。それに加えて、外部の人が頻繁に出入りしてきた場所だという意味で、すごく都市っぽいなあという印象もあるんです。都市って知らない人同士が出会って、日常の円環の外に出るというか、外部に触れるうえで重要な機能を果たしてきた場所だと思えます。時の権力者含め、いろんな人がこの場所に入ったり、あるいは逆に、特に冬季に布教のために石徹白の人が自ら外に出向く機会が多かったりもしたなかで、そこで得られる情報を経済活動にうまく結び付け、生計を立てていたという話を土地の人からも聞いたことがあります。そういった文脈から、今の石徹白という地を見て、じゃあ現代においてあわ居は、あるいは自分たちはここで何をしていたら良いのだろうか。

前林…この場所にどのような空間的な役割を重ねていくかという……そういうところが面白いですよ。この場所が確固とした揺るぎない歴史性と意味をもつ場所であると同時に、時代性とか現代性とか、そういうことを重ねながら変化していく場所でもあるというところが。

岩瀬…そうですね。過去をなぞりつつ、現代に即したかたちにしつらえ直すというか……伝統とか継承といったものは形態を維持することで可能になる場合もありますが、おそらくそればかりではありません。むしろ目には見えないところで成立している場合も多々あるように思います。だからこそ、この土地で脈々と受け継がれてきたものに対して、一見昔とはまったく違うかたちに映ってしまうとしても、あるいはそこに商業性が絡んできたとしても、それでもそこをやっていききたいというのはありますね。そしてその実践をすすめていくことが、自分たち自身がこの現代において特異化していくこと、個性化していくこととどこかで繋がっている、連動し

前林明次(まえばやしあきつぐ)／アーティスト)

1965年静岡市出身。身体と環境のインターフェイスとして「音」や「聴覚」をとらえ、そこに技術的に介入することで知覚のあり方を問いなおす作品を発表してきた。近年は、場所イメージの「合成」をテーマに、フィールドレコーディングによる音響と様々なメディアを組み合わせるサウンドインスタレーションを制作している。主な作品に《Sonic Interface》(1999-)、《[I/O] distant place》(2001)、《ものと音、空間と身体のための4つの作品》(2005)、《Okinawa Noise Map》、《場所をつくる旅》(2017)などがある。情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 教授。  
[https://www.iamas.ac.jp/faculty/akitsugu\\_maebayashi/](https://www.iamas.ac.jp/faculty/akitsugu_maebayashi/)

【あわ居の研究（対談）】

時の綾―生きることの旅と詩―／阪本佳郎さん（文学研究者）



歴史の荒波や社会の不条理のなかにあつて、それでも私たちがよすがとなるものとは何か――。シュテファン・バチウ、旅、詩、抵抗、偶然と必然といったテーマをめぐる象られていった、生の根源へと向かうダイアローグ。

◎ささやかなものへのまなざし

岩瀬：今回は対談の実施にあたって、息子の渚君と一緒にわざわざあわ居にお越しいただきありがとうございます。白山中居神社や阿弥陀ヶ滝をはじめ、石徹白周辺のいろいろな場所をご案内できて嬉しく思います。今日は生と詩、あるいは旅といったキーワードを中心に据えながら、互いの実践や経験についての話を交差させるなかで、あわ居についての考察を深めたり、そこから派生的に知を伸ばしていくような時間にできればと思っています。まずは阪本さんが一貫して追及されている詩人のシュテファン・バチウについて、簡単にご紹介をお願いします。

いできますか。

阪本：シュテファン・バチウは歴史の災厄に追い立てられ、ルーマニア、スイス、ブラジル、ラテンアメリカ諸国、北米、最後にはハワイ、と、ひろく世界を旅した、知られざる流謫の詩人です。第一次世界大戦直後のルーマニアに生まれ、若くして時代を牽引する詩人として認められますが、ファシズムに傾く体制において鬱屈し、第二次大戦後には共産党独裁体制へと移り変わるなかで反体制詩人・ジャーナリストとして圧殺され、スイスへと逃れました。せまる追手を振り切るように大西洋を渡り、ブラジルへ政治難民として亡命。そこでポルトガル語とスペイン語を身につけ、詩人・ジャーナリスト・翻訳家としてラテンアメリカ各国を旅し、各国の軍政や全体主義体制へと反抗する論陣を張ります。

一九六二年にはシアトルの大学でラテンアメリカ文学・文明論を講じる客員教授に招聘されましたが、同地滞在中に、ブラジルで軍事クーデタが起こり、愛する第二の故郷リオデジャネイロへの帰還を断念。今度は太平洋を渡り、一九六五年、ハワイはホノルルへと移り住みました。世界の涯での群島から、ヨーロッパ、北アメリカ、ラテンアメリカ各地の新聞や雑誌に、詩や批評、政治評論を寄稿、すべての記事をあわせればその数は七〇〇〇を越えると言われています。また、遍歴の途上で出遭った夥しい数の詩人や作家、政治家、芸術家の友人たちに手紙を送り、作品を募っては送り返すことでできた詩誌 MELE International Poetry Letter 『MELE 詩の国際便』（ハワイ語で、「詩や歌、祈り」の意。以下、MELE）を刊行。一九九三年にホノルルにて客死するまで、海と大陸を越え、世界大にひろがる詩のネットワークをつくり上げました。

バチウは、敏腕の国際政治記者でありながら、国家や民族といった集合的規範、イデオロギーの大きな言説を

めぐる諷いには加担せずに、絶えず目の前にある具体的な人々や出来事について書きました。彼の文学は、たどり着いた土地の先々で生を交わす、かけがえのない「他者」のことを言葉にして留め、そのささやかな日常をこそ恩寵として歌う詩でした。災厄に見舞われるたびに喪われる時や土地、友情を交わした人々に想いを馳せ、深き〈郷愁〉とともにそれらの記憶を刻印していくことに、バチウの文学の本領がありました。詩や回想録などの文学作品は「手紙」のようなささやかさ、親密さを基調としたもので、発行部数も少なく、大規模に流通するものではありませんでした。そのため、地球上のいずれの土地においても、ほぼかえりみられることはありませんでした。その無名性はまた、ルーミア、ラテンアメリカ、そしてハワイといった、西洋中心の世界からすれば周縁とされる土地ばかりを歩んできた道行きによるものでもあるのでしょうか。

このようにバチウは忘却の淵にある、知られざる詩人なのですが、私は、二〇〇五年〜二〇〇六年にルーミアに留学していた時に、偶然に MELE を手にとることにになり、その十数ヶ国語で書かれた詩が同居する一冊に心惹かれたのです。そこから、さまざまな縁があつて、シュテファン・バチウの遍歴の足跡を追いかけ、その世界大の詩のネットワークを今の時代に浮かびあがらせることを志すようになりました。拙著『シュテファン・バチウある亡命詩人の生涯と海を越えた歌』（コトニ社、二〇二四年四月刊）は、博士論文をもとにしたものですが、形式化された学術的成果に収まることを望んだものではなく、ただ純粹に、詩人の生を現代の世界に差し出したかった。今の世においてこそ、バチウは顧みられる価値があると信じるゆえの試みだったのです。

岩瀬…なるほど。現代という時代においてこそ、バチウの歩んだ生が希求されるのではないかと……阪本さんが感じられているその「価値」について、さらに詳しいお話を聞かせてください。

阪本…現代は「他者への想像力、他者を想い遣る力」が、ひどく切り狭められている時代である気がします。勝ち負けとか、敵と味方とかいうような簡単な二項対立に落とし込まれて、そういう視点で人は世の中を判断し、自分がどちらなのかを決め、また他者にそれを強要する。バチウはジャーナリストでしたけれども、大きな国家やイデオロギーの対立として意見表明をするのではなく、できる限りの生身の経験を大事にしながら、具体的に自分が出遭った人間、場面から判断して言葉を紡ぐということをしていました。例えばバチウは、チェ・ゲバラに案内されたキューバの監獄を印象深く回顧している。生身の経験があるから、彼はゲバラをフォローすることをしなかった。反戦の人はゲバラを偶像化したわけですけど、でもそういう大きな物語になりそうなくところで、バチウは一步踏みとどまって、個々の生に想い至そうとした。物事を自分の眼で見、思考する、あるいは見えない消されてしまった存在のことを想像しようとする、彼にそれをさせているのが、やはり旅なのではないかと思えます。ひとつひとつの出遭いであるとか、「他者」との避けられない接触からしか「真実」は立ち現れてこない、そうした信念がバチウにはあつたのだと思えます。「情報」に徹底的に囲い込まれ慣らされ支配されている現代的日常は、画一的な方向へ人を押し流す力がとても強いようにおもいます。生身の経験を置いてきぼりにして、ネット上の情報の取捨選択が考えることに代わられてしまっている。バチウは、時代を越えて、そのことへ警鐘を鳴らしているように思えます。

岩瀬…生身の経験を大事にすることの重要性。非常によくわかる気がします。そしてそうした態度をバチウが持っていた背景には、「旅」があつたのではないかと。おそらくここでの「旅」というのは、一般的にその語から連想される意味合いとは少し異なるものなのかな、という印象を抱きました。

阪本…いまこうして息子の渚とあわ居に来て時間を過ごしているわけですが、それは場所を移動するという意

味合いにおいてだけではなくて、そこでのひとつひとつの出来事がもう旅なのだと思います。家に居て、一つの料理を家族のためにつくるのも旅だと思う。渚がどういう時間を学校で過ごしたんだろうか、妻が大学でしている授業内容はどんなだろうとか、そういうのを想像しながら日常生活をするだけでも、すでに詩であると思います。そうした日常が、明日あるとは限らないのが歴史。大きな歴史は、小さな個人の生の営みには無頓着ですよね。でもバチウは、そうした人々の生きるささやかな日常によって書かれる歴史があるというんです。僕は、恥ずかしながら日常を放擲したようなところで、バチウを追いかけていたところがあったのですが、そのバチウが大切にしているのが何よりも日常の詩学であるということに、後々、自分が日常に直面するなかで気づきました。その時に、深く反省しました。子どもや妻には感謝してもしきれない想いがあります。

あと、子どもって捉えどころがなくて、未知そのものですね。子どもも日々変わる。彼と向き合うなかで、自分自身もどんどん変わってきてます。子どもが水先案内人になってきてるといふのか……子どもによって日常が深掘りされている感覚がすごくある。いわゆる旅というのは自由な感じがしますよね。家族から離れてバチウを追いかけてハワイやルーマニアに行っている時は、僕一人が世界と対峙している感じ、あるいは世界と共になっているっていう感じがしていたのです。そこでさまざまな導きがあつて明らかになっていく謎がある……それは途方もない喜びなんです。でも、日常の家族との時間のなかでの旅というのは、言い方に問題があるかも知れませんが、ある意味では、不自由ですよ。好きなようにはいかない。譲歩してばかり。でも自分の圏域とは違うところで生きないといけないからこそ、まったく異質なものと出遭えるということがある。そうして得られた眼差しが、今の自分を形づくっている。

岩瀬…なるほど、面白いですね。バチウを追うために、身を投げうって様々な土地を旅していたのに、でも

そのバチウ本人が生きる上で重視していたのが日常性というのか、ささやかなものへのよろこびであつたという……そのことにあらためて気付いたことで、これまでとはまた違った阪本さんの生がひらけているというのか……。

阪本…ちゃんとバチウを読んでいたら、それに気づくはずなんですけどね。自分が思い描いた道や、先を歩んでいる人の道を、そのままに歩めるわけではない。旅にあつては常に学び逸れていくから。学び逸れていくはずなのに、自分が頭の中で過信する道に固執しすぎると、周りが見えなくなりますね。

あるいは逆に、学び逸れていくなかで出遭うものが、自分の中で、どんどん膨れ上がっていったということもあると思います。日本、ルーマニア、スイス、ハワイ……それぞれの土地のもつ宇宙の深み、その魅力は遥かにバチウ個人を越えてありますから。バチウがささやかな日常を相手にしていたから、「このように小さく平凡なことにとどこまでの価値があるのだろうか」と少し物足りないって思ってしまった時期もありました。しかし一周回って気づかされたものこそ、バチウに対して物足りないと思ってしまうものだった。もちろんどちらが良い悪いではないと思います。僕らのささやかな生こそは大事だよねと云って、社会とか歴史に対して盲目的になつてしまったら、自分から奴隷になることに等しいですから。いろんな準拠棒があつて、そのなかでいかに自分たちが自律性を守り抜けるかということが何より大事なのだと思います。

### ◎詩よ、抵抗せよ

阪本…現在のウクライナもガザもそうやと思いますけれど、ここまで圧倒的な不条理が満ちあふれていると、

人間が不活性になってしまおうと思います。「仕方がない」とか、「覆りようがない」とか「暗いことだらけだね」っていうかたちで、社会のさまざまな場所でそんな空気が作られてしまって、抗えなくなってくる。少なくともそうやって、僕らが沈んでいくことによって、力を得てしまう誰かがいる、そういう力学があると思う。

でも、「日々笑顔でいて、生きることを精一杯やって、互いに支え合うということだけでもすごく立派な抵抗だよ」と相方のイザベルが、ある時言ったんですね。それにすごく救われたんです。そしてそのことを『シユテファン・バチウ』のあとがきにも、熱く書いたんです。それこそが、バチウの詩を貫き通している、すごくシンプルな思想のあり方だとも思ったから。

普通に考えれば、バチウは絶望してもおかしくないわけです。彼は、喪失とノスタルジーを絶えず抱えながら、言葉を紡いだ詩人です。彼はその遙かな旅において得ることも多かつたけれど、失つてばかりの人でもありません。かけがえのない数々の出遭いと同じ数だけ、避けられない別離に見舞われた。でもそのひとつひとつを言葉にして、自分のいのちのなかに息づかせていた。彼は「詩よ、抵抗せよ」って言います。だから、言葉にすることは、抵抗なんです。

バチウが、ホノルルの浜辺でサンダルを履いて散歩をしていると、砂粒がサンダルと足の間に挟まり、ざらざらとする。そこには異物感があるわけだけれど、彼にとつてその一粒一粒が今まで歩んできた土地の記憶なんです。そして、それは砂時計の落ちていく砂、とめどなくこぼれ落ちていく時のカケラでもある。彼はそういったものを詩の言葉によって、ふりまくんですよね。サンダルについた砂を、希望とともに大洋にふりまく。その砂つぶが、祖国だということです。それが自分が還つてゆく場所だと。それは国家とも名付けられないし、明確なひ

とつ土地でもなく。

ルーマニア語の言い回しに、形あるものもいずれは儂く灰塵に帰ってしまう、その諦念を表す言葉があつて、「*praf și pulbere*」。「埃と塵」といいます。これはいのちそのもののメタファーでもあつて、結局、何をすることも諸行無常、塵や埃になつてなくなつてしまうということを云っています。彼の代表的な自伝が *Praful de pe toba* で、これは訳すと「太鼓に舞い散る埃」です。太鼓を叩くと打面の埃が舞い散り、弾け飛んでいきますね。ここでの「太鼓」というのは軍隊とかマーチ、ひいては「行軍」として描かれる大きな「歴史」を表す。「埃」は歴史に弾き出され、離散するしかなかった小さく儂い人間、つまり自分たち詩人であるということ……何をやっても歴史から弾かれてしまうのだけれど、でもそういう小さな存在としてのよろこびというものがある。

バチウは、同じく、友人でもあるエクアドルの詩人ホルヘ・カレラ・アンドラーデによる“*Aquí yace la espuma*”という詩句を引きます。「海の潮の泡は、ここに佇み」という意味です。すべては「海の泡」のように長い時をかけて此岸へ辿り着くも、一瞬のうちに消え無くなつてしまう……。でも、実は、その泡は、かわらず渚に在り続けてもいる。そのことへの希求……諸行無常のようであり、でもその「瞬間」は詩の中に凍結されてここに在る。これが希望だということです。旅というのは、喪失に溢れているものだけれど、どこでくつついてきたかわからない足裏の砂粒ひとつのような記憶でさえ、生きることと繋がっている。言葉がそれを証する、その実感はバチウは誰よりも大事にしていました。

岩瀬…いろんな圧力や不条理、歴史の不可避な流れといったものがあるなかで、そこに振り回されながら、なお抵抗すること、自分の言葉を紡ぐことはとても難しいことですよ……先ほどのささやかな抵抗の話ではない

ですけど、今の暗い社会のなかで、笑顔でいることだつてすごく難しい。

自分の話で言えば、二〇一五年にイスラム国に日本人が二人拘束され殺害された事件であるとか、ウクライナとロシアの戦争、あるいは先日の能登半島地震もそうですが、その都度、自分自身になにか直接的な被害があったわけではないにしても、社会に対しての絶望というか、「ああ……」と思ってしまうことは、やっぱり多々あります。イスラム国による日本人殺害の話で言うと、自分はあくまでネット上でいろいろな情報を集めただけですけれど、そのなかで自分に起こったのは、それまで自分が想定していた未来というものが、全部そこで無くなつてしまったということでした。しかもそれは長女が生まれてすぐの出来事でした。

人間って「こういう過去があったから、未来もこんな感じになるかなあ」という、ある程度の予測や傾向のよくなるものがあると、わりと安心して日々を生きられるところがあると思います。でもあの時は、そういうものが全部なくなつてしまった。自分がこの世界のどこに居るのがわからない感覚がしばらく続いて……そのなかで色々ともがくわけですが、一番痛烈に感じたのは、至極当然のことですけど、自分はいつか死ぬんだなということでした。

そうなつた時に、この限られた人生のなかで、他者とちゃんと関わることをしたいなというふうに素直に思つたんです。そこにこそ、何かがあるんじゃないかって……良い意味で、誰かによつて自分が傷つけられて、自分自身もまた誰かを傷つけるというような……ここでの傷つけるというのは、もちろん痕跡を残すという意味合いですが、そういう相互侵犯的な生をひらいていこうと、そういう時間を重ねていこうと思えたところで、なんとか自分を立て直せたところがあったんです。

自分は岐阜県の大垣市に生まれ、イスラム国の事件があつた頃は、実家の三代目として書道教室を営んでいました。でももうどうやってもそこでは生きられなかつたんです。それは別に迫害されたとかそういうことではなく、そこを自ら離れるという選択をする以外に道がないというくらいに、精神的におかしくなつてしまつていた。過疎地域への移住というと、多くの人から見れば、能動的にやつていくように映るかもしれないけれど、自分としてはそうせざるをえなかつたところの方が大きいわけです。そのことをもう少し深く見ていくと、そこには今の社会的状況であるとか、そこで支配的になつていくコミュニケーションの様式に耐えきれなかつた部分があつたのだと思います。結局、自分はそういうものに押し出されて、今家族とともに、この石徹白という土地に居るんだらうなという整理をしています。

でもそれをしたがゆえに、あわ居を通して未知の他者と出遭えたり、自分が望むようなコミュニケーションができていく感じはあります。それこそ、「日常を旅にする」じゃないですけど、あわ居を育てていく過程、ここで時間を重ねていくなかで、いろんな交わり、いろんなひらかれが生まれている。もちろん、いろんなものは推移していくので、その都度そこで精神的にかき乱されることはあるわけですが……でも、そういうことを重ねるたびに、より力が抜けていつている感覚があります。

阪本…僕も会社勤めを凡そ三年間やっていた時に、「ここではもうやつていけない」と思いました。当時、僕は比較的大きな企業で働いていて、織物商材のバイヤーの仕事をしていました。その企業は中国の工場と取引をしていて、三年目にもなると海外に視察に行きますよね。その工場の環境が、あまりに劣悪でしたし、現地話を聞いても、業界全体が、当時中国の安い労働力を求めて、より奥へ奥へと工場地を開拓している最中でした。

日本の企業が大きな工場を作れば、そこには小さな町ができません。多くの人々が、土地を離れて、労働者として集まってくる。でもその町がずっと続くわけではない。企業は、さらに労働力の安い土地を求めて、つねに新たな土地を探しているからです。

元々の工場は潰れ、別の土地へ移ってゆく。すると仕事がなくなった人々の町はどうなってしまうのか。人々はさらに土地を追われ内陸へ、さらに貧しくなるために移動して行くのではないか。さらには、企業社会とか日本 システムは、軍部みたいな部分を、いまだにひきずっているんです。会社で「大本営」っていう言葉が違和感なく使われたりするんです。「これは大本営決定だから仕方がない」って。それに対して、疑問に思う人もほぼいないわけです。陰でいるのかも知れませんが。そうすると「もうここにはいられないな」と思うわけです。

何より怖かったのが、社内の電子システムでした。前年、スリッパを一万足売っていたとして、よく売れたから次は十万足売りましようとなった時に、その数字を入力するのは一瞬です。でもその瞬間に何が起きるのかというと、中国の工場の単純な労働量が十倍になる。それまで一日八時間労働だったのが、十三時間労働になってしまうかも知れない。僕が一個数字を入れ替えるだけで、そういうことが起きてしまう感覚のおかしさ……。でもそれをみんな普通にこなしている。なんなら「旧正月に労働者たちがいなくなるのが面倒くさい」と言い出す人もいるのです。経済合理性とか利益追及をして、感受性を奪う環境で生きていくことは難しい。精神的にも切実な状況になって、僕は会社を脱け出しました。なんとか通い続けた会社で、自分にとって唯一の息をする方法だったのが、本を読むことでした。特に今福龍太さんの本を貪るように読んでいました。この人に手紙を書かないともうどうしようもない、という状態にまで至って……。手紙を出し、東京まで会いに行きました。そして、大阪に戻った次の日に会社に辞表を提出していました。

はじめて今福さんに会った時に、「君はルーマニアにいたのなら、シュテファン・バチウのことを知っているか？」ということ言われたんですね。そこで自分は「知らない」と答えたわけですけれど、家に帰って、自分の部屋にあった以前ルーマニアで買った詩誌をふと見ると、シュテファン・バチウの名前があり、しかも主宰していることがわかった。これは不思議なことなんですけれど。二〇〇五年、自分がまた学部生だった頃にはじめてルーマニアに行き、現地でよく古本屋に行っていたんです。そこで一冊の雑誌を手にした。そこには十数カ国語が書かれた詩が無秩序に掲載されていて……。読めない言葉でいっぱい溢れていたことが逆に魅力に思えるくらいだったんです。自分はびっくりしてその場で詩誌を買ったのです。それがシュテファン・バチウがホノルルで刊行していた詩誌 MELE でした……。僕は当初は、何でもいいから今福龍太さんに学びたい、そう思って弟子入りしたのですが、この MELE の偶然、むしろ必然もあり、シュテファン・バチウを追う方へ向かっていったのです。

### ◎出遭うことの詩

岩瀬…まさしく出遭いの話ですよ。自分が思うのは、そういう出遭いというのは、システムの歯車として時間を過ぎていっているなかでは、なかなか呼び込めないということ。そういうところから自ら脱出して、良い意味での宙づりの状態、どっちつかずの状態にいる時にこそ生じるものなのかなということ。そして「確かさ」というものは、そうした出遭いのなかでこそ、実感できるものなのではないか。そして「確かさ」を感じ取れているところにこそホームがあるし、居場所があるのではないかと、そう思っているところが自分にはあります。

つまりどこに所属しているとか、どういう肩書を持っているとか、国家であるとか……そういうところから得られるアイデンティティに「確かさ」はなくて、その都度出遭う他者、場所、モノなどとの相互作用のなかにこそ、その瞬間にこそ「確かさ」があるのではないか。それはつまり詩ですよね。そういう詩を不断に手繰り寄せていくところにこそ、その人のかけがえのない生の展開があるのではないか、そう思っているところが自分にはあります。けれどもそういう「確かさ」を徹底的に疎外しようとする力が高まっているのが、現代の社会なんだなということも同時に感じている。

阪本…今の社会では、「お前は何者なのか？」ということをや常に問われますよね。小さいころから「将来何になりたい？」と聞かれて、そこで職業を一つ挙げることから始まり、その後は受験という目的に向かわされ、しかもそこでは点数という規範化された量で測定される。その先に、社会が用意した「何者か」があつて、それに当てはまらない人は、どこか不完全であるというような認識を植え付けられる……。

それに学校教育では、他者を想像するとか、ケアするとかいうことはほとんど教わらない。数字で測定可能な深みのない能力を自己達成の目標として一律に走らされる。教育は、皮相な「自己実現」のことばかりです。これでは、世界は自分に閉じてしまう上、その自己も表層に留まって、内実まで深まっていけない。そうして実際、他者への想像力を欠いた社会になっているように思います。

そういうことかというと、バチウって何者かわからないんですよ。ルーマニアではジャーナリストとか文学者とか色んな職を転々とした。その後大学で教えていて、彼を慕っている人は多いから、そういう意味では教師かもしれないけれど……でもどの職業名によっても彼は言い表せられない。それに彼はいつも人について書いている

んです。自伝で言えば、章タイトルが全て他者の名前になっていて、しかもそれは、歴史の陰に追いやられてしまった人の詳細な記録なんです。もちろんそこに自分が出てくるんだけど、でも主人公はいつも「他者」なんです。それはハワイ時代もそうだし、ラテンアメリカ時代もそうです。そんなこと、なかなかできることではない。でもそのことが、何より彼自身をあらわしている。誰に読まれるでもなく、そういうものを書いているのがバチウなんです。

これは、とても大切に面白い在り方だと思います。「お前は何者なのか？」ということが問われる近代社会に対して、そうした規範的な命令には無頓着に、バチウは「他者」のことばかり考えて、想いと言葉を尽くして生きていた。こうした生き方は、僕らに対してすぐ大事な想像力の持ち方を、あるいは、自己についての考え方を提示してくれているような気がしています。そういう生き方をバチウができたのは、結局は彼が旅人だったからだと思うのですね。自分がその土地に根付いて何かを生産していくのではなく、来訪者とかまればとであるという視点をいつも失わなかった。見て、聞いて、自分を通り抜けていくものの愛おしさについて、彼は言葉を紡いでいた。

岩瀬…今お話を伺いながら、書籍『あわ居―〈異〉と出遭う場所―』の制作にも関わる部分があるなあと思っています。『あわ居―〈異〉と出遭う場所―』の制作にあたって、自分が一番考えていたのが、「あわ居って何ですか?」「私たちはあわ居で何をやっているんですか?」という問いに対する回答を、書籍によってしっかりと示すということでした。その時に、主宰者である自分たちが、饒舌にあるいは一方的に、あわ居について語るのには嘘だなと、まずは思った。そこで綺麗にあわ居のプレゼンテーションをしたとして、もしかしたらそこで「あ、そういう場所なんだな」というような認知はされるかもしれない。けれども本当のあわ居の姿はそこには映らな

いという確信がありました。だから、自分たちが直接的に、あわ居について「こういう場所です」と言及している箇所は、必要最低限になっています。ただいくらかは書いてしまっているのも、バチウほどの禁欲さはありません（笑）。

一方で力をいれたのが、様々な方との対談であり、あわ居の体験者へのインタビューです。そこではもちろん、あわ居が何かということが明確に示されているわけではないし、仮にそこであぶり出されるあわ居の姿があったとして、それはあくまでも個人が私的に捉えたものだから、それがどこまで普遍的なあわ居の姿を投影しているのかはわかりません。でもそこにこそ、あわ居の姿が映るのではないかと自分は思っています。むしろ、そこにしか、あわ居の姿はないのではないかと思っている。

自分たちは自分たちを作っていくためにも、あわ居をやっているわけですけど、それは、その都度ここを来訪される方との交わりであったりとか、そこで起きる出来事であるとか、そういうものが堆積していくなかで、自分らも予期せぬところで展開していつています。その意味でも、自分たちの姿、あるいはあわ居が何なのかということは、事後的ににじみ出てくるものではないかと……先ほどの「何者かわからない」というお話とも繋がってきますけど、こちらの一方的なプレゼンテーションから生じるコミュニケーションもあるかもしれないけれど、そうではなく、じかに応答することで発露するものを見たいし、そこでこそ自分たちも作られていくんだなあという感覚を、実践のなかで確かに感じています。

### ◎詩としての旅

阪本…ひとつお聞きしたいことで、例えば来訪者の方はどういうふうな動機で、あわ居にいらっしゃるんですか？

岩瀬…旅に行くときって、割とそういうことが多いと思うのですが、やっぱり日常で行き詰っているとか、自分のネットワークのなかでは、もうどうにもならない状況にあるとか……そこをひらいていくきっかけが欲しいという方が一番多いと思います。何を自分が求めているかはわからないのだけれど、何かを求めているというふうな……。

阪本…そこでは必ずしも解決を促すというわけではないんですね。

岩瀬…そうですね。問題解決というのと、いまある秩序やシステム自体は固定したままで、そこで起きている問題に対処するというイメージがありますが、それとはおそらく違います。本棟で実施している「ことばが生まれる場所」というと、言語的にその方の状況を整理をする部分はもちろんあるので、場合によっては問題解決に近い要素も多少あるかもしれませんが、どちらかと言えば、その方の採用している既存の秩序やシステムそれ自体を揺さぶるというか……ケースによっても千差万別ですが、体験者の方のインタビューを読んでいると、「異化」に近いようなことが、わりと多く起きているのかなという気がしています。「世界」が少しずつ見える体験といますか。

例えば、ある女性がひとりで「ことばが生まれる場所」に参加した際、彼女は彼女も知り得ていなかった自分自身を、その場で見たというケースがありました。それは私たち主宰者との応答関係のなかで発露した姿です。

正確に言うと、もしかすると、そういう自分がいることを彼女は知っていたかもしれないけれど、そこに肯定的なものを見ていなかったがために、彼女はそれを後景に退けてしまっていた。そうした姿があわ居の場であらわになったとしても、そこで何か問題が解決されるわけではありません。ドミナントな自己への認知に対しての、オルタナティブなそれが、応答関係のなかでふつと垣間見られた、ただそのことが起きたのだと思います。その経験をしたからといってすぐに劇的に日常が変わるわけでもなく……でもそれはとても大きな出来事として、彼女の中に残り続けていくような気がするんです。

その意味では、あわ居というのは、その人自身も知らないその人自身が出てくるような、ある意味での、出遭いの時間をつくっているという側面があるのかもしれないですね。昨年、私が精神的な苦境のなかで、京都に阪本さんを訪ねたあの時間、あの韓国料理屋で展開したダイアログというのはまさにそういう時間だったと思います。あの時は「顔」からふつと自分の深淵、自分の知らない自分自身を覗きこまれるような、そんなおどろおどろしさが確かにありました。けれどもそういう時間こそが、本来の旅の醍醐味なのではないかと。つまりは出遭いですよね。詩です。そうした他者との創発的な出遭いにこそ固有の時間があるし、生の中にきちんとそういう時間を織り込んでいくことでこそ、全体化の波に抵抗することができるのではないかと、自分はそう思っています。

阪本…なるほど。創発的な出遭いというのは、一体どこからどうやって出てくるんでしょう。

岩瀬…あわ居の場と言えば、そういうものが、自分たちの意図だけで成り立っているとは全く思っていないです。どれだけ細分化しても細分化しきれないものがそこにはある気がしています。

阪本…岩瀬さんたちが石徹白に移住を決めた時の話もそうですけど、人が旅するとか、移動するときって、自分以外のものも織り込まれて、ある別の通路が出てくるところがありますよね。

岩瀬…その意味でも、いろんな要素が有機的に連結して、そこに新たな道が見えてくるというような、そういう時間があわ居で生じるといえるか……それを作っている。でも作っているとは言いつつも、自分たちとしてもよくわかっていないところで、それは生まれている。自分たちの狙ったようになれば良いというわけでもない。でも確かに何かが起こっているという……その意味でも、あわ居で起こっていること、むしろあわ居という場所自体が、自分たちにとっても不思議な場所ですよ。得体が知れない。

阪本…得体が知れない……それで言うと、少し話は逸れますが、僕がハワイに行く時に、いつも泊めてくれたのは、ある老夫婦がいます。女性の方はジャン・シャルロ記念館という、ハワイの壁画家の資料を集めた美術館のキュレーターをしていました。バチウはシャルロの盟友だったので、そこにはバチウの資料も数多く収められていたのです。そこに通い詰めるなかで、彼女ととても仲良くなりました。この老夫婦、ブロンとギャレットという二人ですが、その二人は今まで出遭った人間のなかで一番美しい人間だと僕は思っているんですよ。会えて良かったって。なんならバチウ研究は、この人たちに会うためにやっていたんじゃないかって思うくらい<sup>1</sup>。

ふたりは、ハワイのマキキ地区にあるビルの最上階のペントハウスに住んでいます。インドネシアの芸術世界に深く入り込んだアート・ヒストリアンでもあるふたりの家には、古代美術のさまざまな品が溢れていて、とても怖い場所なんだけれど、護られている感覚もある。ある日とても驚いたのは、ペントハウスのテラスからパンチボールという大きな火山クレーターをのぞむと、眼下に共同墓地があつて、その中心にとっても大きな榕樹（バナヤン）があるんですね。その樹が、どうしても見てみたくなって、ふたりを誘っていつてみることにしました。そしてなんと、樹の木陰にバチウのお墓があつたんです。それは信じられない繋がりというか……得体が知れないというところで言えば、そういう計算できないことというのが、この世の中には確かにあるのかなと思わされました。

### ◎偶然と必然

岩瀬…そうした不可思議な出来事について後から考えた時に、「もしそれが起きていなかったら、今の自分は一体どうなってしまったていたんだろう」と怖くなる自分が多いです。たとえばある樹の姿に、自分が今後どのように生きていったら良いのかをふつと知らされたり、あるいはある人物と出遭つた時に、自分の歩んでいく道がぼんやりと映し出されたりとか……本との出遭いなどもそうかもしれないですが、後から考えた時に、「あの出来事がもしなかったら……」と考えると怖ろしくなる。そういう出来事って確かにありますよね。

そしてあわ居は、そういう偶然であり必然でもあるような時間、あるいは出来事が立ち現れるような、そういう場所でありたいと思っている。さつきも少し触れた通り、そうした出来事は自分たちだけでは引き起こせないわけです……でもそういうよくわからないものが確かに起きてしまう、しかもそれが、その時、その人に必要な

形で起きてしまうという、そういう場所としてあれたらなと。

阪本…そうですね。それは一切コントロールできないことですよ。でもその瞬間というのが、自分の原点となることがある。そういう時って、手が先に動いたりしますね。本棚で言えば、それを取ろうと自分が思ったわけではないのに……。

岩瀬…能動でもなく、受動でもなく、でも能動でもあり受動でもあるというか……中動態と言っても良いかと思いますが、その曖昧なところで手が動く。それはおそらく、日常の自動化した秩序とは別のところで、何かが生きていくことだと思えます。その不思議な瞬間というのか、世界においての出来事というのか……その現場に関わっていたい。その瞬間にこそ、その人がその人の固有の生をひらいていく重要な何かがあると思うので。

自分自身が、そういう出遭いをこれまで重ねてきました。そのひとつひとつの出遭いに救われ、ひらかれてきた。そしてこれからもそういう出遭いを重ねていきたい。それらの出遭いは痕跡として身体に残り、ひとつひとつが今の自分を形作っています。あわ居の話でいえば、もしかしたら一回しかいらっしやらない方もいるかもしれないですよ。でもそれはそれで良いと思うんですよ。「僕らのこと覚えてる？」なんて聞くもんじゃないですよ（笑）。

阪本…（笑）。

岩瀬…でもあわ居の時間のなかで、互いに痕跡を残し合う関係性を築いていけたら良いなということを確かに

思っているんです……少し話はそれますが、昔の人って、人だけじゃなくて周りのいろんなものを、自分で命名していたと思うんです。それは「これはみかんだよ」って先に誰かから教えられるというかたちではなく、まずは自分でじかにそれを触ってみて、そこに応答関係を成立させて、そのうえで名付けていたと思う。自分を含めて、そういう順序で世界の何かを命名しようとするはたらきが、今の人間はひどく弱っているように思うし、むしろそれをしない方が生きやすいと錯覚してしまっているところがあると思います。でもそうやって周りのいろんなものに触れて、応答し、互いに痕跡を残し合うようにして生きていけたら、それが旅としての生涯、詩を織り込んだ人生になるのかもしれないという気もしています。

阪本…僕らがこの世の中を見ている視点は、あまりにも規範化されていますよね。国家とか民族とか、ジェンダーとかいろんなものがそうですけど、時間感覚にしてもそれは同じことです。「一生をどう生きるか」とか「毎日をどう生きるか」とか、あるいは「小学校一年生から六年生までどのような時間を過ごすか」とかもそうですね、すべて規範化されている。粹のなかで切り詰められている精神は、もっと伸びやかであるべきとも思いますが。自然界の時間感覚は、人間界のそれとはまったく別で、もっと大きくて、もっと繊細です。人間の外側は無限大・無限小にあるのに、人間は自分たちの時間をすごく固定化したものとして作ってしまっている。そういう外側を、たとえばハワイ、とりわけビッグ・アイランドに行くときまざまざと見せつけられます。

キラウエア火山の麓で二ヶ月過ごしたことがあります。そこは歩いて三〇分くらいでハレマウマウというネイティブハワイアの聖地がある場所でした。大自然は、人間の時間感覚とか記念碑であるとか、そういうものはおかまいなしに壊していくところがあるわけですが、二〇一八年の大噴火では、かつて僕がその周辺で歩いたところを全部溶岩が覆いつくし、ハレマウマウ自体も崩落して無くなってしまいました(二〇二〇年の噴火で再度溶岩

湖が形成されているが、現在は立入禁止)。しかし、滅びと再生はともにあると、ハワイ神話を生涯をかけて研究してきた友人は教えてくれました。溶岩の波は、彼らの神話においても怖ろしいものとして描かれているけれども、むしろ高揚するものでもあるのだと……溶岩流が大地を薙いだあと、島のように点在する燃え残った森を「キプカ」といいますが、そのキプカから、植物は不毛の地に種を飛ばし、新たな生命のサイクルが始まっていく。人間からすれば途方もない時間感覚ですが、その宇宙的な時間を人間も内面化し、災厄に直面しながらも、その時々、新たな始まりを生きていくことができる、と。それは日本も、あらゆる土地でも、一緒のはずだと思えます。僕らの時間を支えている、別の時間のサイクルがある……でもそういう別の時間が、今の社会ではあまりに見えないから、それを立ち上げる言葉というのが、詩として希まれているのではないのでしょうか。それが先に話したような、ささやかな日常の詩学の中にどのように織り込まれるのか、大切な問いとして持っています。

## ◎直線の外へ

阪本…「書く」という話で言えば、それは他者から贈与されたものに対して、自分の言葉で贈り返すということだと僕は思っています。つらいのは、それがちゃんと贈り返し切れているのかということですよ……先ほどお話ししたブロンとギャレットのふたりについても、自分は何でこの人たちと出遭って、なぜそこで言葉を紡ごうとしているのだろう。バチウについて書くのであれば、この方たちについても書くべきじゃないか、と。最近まではそう思っていた……そこに意味を見出そうとしていたんでしょうね。

この人たちに遭って今ここで言葉を持ちうるものが何なのか……その「何」を言葉で突き詰めるということ、僕はしていたのだと思います。それが自分が生きている何よりの現実だから。相手には「いつもお前は

ここに居ない」って怒られるんですけど(笑)。ここに居る現実と、旅における現実がすぐ混在している。でもそこで反発していたものが、反発しなくなってきたところがある最近がありますね。それに今は、書くことだけが求められているわけじゃないのかもなって……。

それが何でかというところ……これは最近気付いたことですが、ある出来事が自分にあつたとして、言葉はそれを直接的に、直線的に語れるというものではないわけですよね。出来事は一つでも、自分の中にいろんな形をしながら存在していて、言語化とか意識化ができないレベルで発酵していたりもする。それが数年、数十年かけてようやく、ものとして出てくることもあるし、仮にものとして出てこなくても、日頃の佇まいとして形をとる、そういうことがあるんだということを想うようになってきました。

唐突ですが、最近、僕の書いた論文を読んだ、会ったことのない人から連絡が来たのです。彼は日本出身なのですが、いまルーマニアで、バチウがかつて住んだ家からすぐそのところに住んでいる。彼も詩を志した人で、長いことパラグアイに住んでいた。そこでは抑圧的政権に反抗する先住民運動に関わつたらしく、その闘士に師事していた。でもその闘士が亡くなった後、彼は、その闘士の家系を辿り、その人生を本にすべく旅に出て、パラグアイだけではなく、パリやヨーク、さまざまな土地を訪ね歩いて資料を集めていくことになった。そのなかで、彼はタイに行つて、ルーマニア人のパートナーと出遭い、コロナのこともあつて、ルーマニアに飛んだのだそうです。そして何のゆかりもないのに、ブラシヨフでユースホステルをやることになった。

なぜルーマニアの人と結婚し、ルーマニアに来て、そこでホステルをやっているんだらうと、彼は一年くらい悩んでいたそうです。でもある日、自分の家のすぐ横に、バチウの記念館があることに気付き、いろいろと調べ

ていくなかで僕の論文を読んだ。そして日本から僕が旅を続けて、世界中の誰よりもバチウのことを調べていることに驚いた。

特に、彼が着目したのが、インターネットのない時代に、民族や国境を超えて、全く知らない地球の裏側にいる人間と一緒に、自分たちの生きることへの問い、あるいはそこから出てくる言葉を共有してゐた MELLE という詩誌のあり様です。そのような連帯があつたということには、僕もそうですが、彼にとっても衝撃的なことでした。そのようなつながりこそが、これからの言葉のありうべき姿なのではないかというのを彼は思ったとのこと。それでこの間、彼が日本に帰ってきた時に、僕の家に来て、そこで一緒に詩誌のプロジェクトをやらうという話になった。

岩瀬…えー(笑)。すごい(笑)。

阪本…ルーマニアと京都とハワイで MELLE のリバイバル版ができないかと思つています。彼はホステルをやっているから、世界中から人が泊まりにくる。武器の調達をしにウクライナの兵士も泊まりにくるそうです。さらにはロシア人も泊まりにくる。パレスチナの人も、イスラエルからも人が泊まりにくる。気まずかったり葛藤があつたりするわけですが、彼は詩をもつて、この状況に何か応えることができなかつたかと思つている。

彼はパラグアイの恩師を追いかけてこれまで旅を続けてきました。それが急に途絶された。ある植木鉢からいきなり引っこ抜かれて、別の植木鉢に突き刺された。そこでいったんは、生きる意味を失つていたそうです。でも、新しく、全く関係ないように思えるけれど、どこかで通底しているようなことを得たことで、今は推進力をもつ

て生きている。僕はそのあり方に、とても感化されました。そしてこれはまさにバチウが繋げてくれた縁ですよ。

思ったのは、彼みたいにはないけれど、人間というのはぶつ切れでも良いんだということです。いろんな来歴があつて、そこに一貫性もなければ、急にやることが変わりもする。でもそれが生成変化ということだと思ふ。さつきも言った通り、ハワイで導いてくれたブロンとギャレットのことを、僕はずっと言葉にしようと思つていたんです。あとはバチウについても、これから何十年かけてバチウ論をどこまで深めていけるかということを考えていた。でも一方で、家のこととか、色んな土地をまわつてその土地を知っていくというような行為を自分がしていることに対して、分裂してしまつていと捉えているところがあつたんです。でもだんだんと、それらはそれぞれに別個のことだけれど、別個のことではないのではないかと思ふようになってきました。要するに、さまざまな土地、さまざまな時代が僕の生のなかに入り込んできていて、無数の斜線が引かれている。人間だけではなく、日々に出遭うあらゆる存在の記憶が、そこに混ざり込んでいて、クロスオーバーしている。そうしたあり方から、言葉は紡がれるものだと思いますけど、でもそれらが具体的な形にならないわけではな。

岩瀬…わかります。他者から見ればすごく不安定に見えるかもしれないし、何をやっているのか良くわからな、一貫性がない、飽き性に見える、「あなた将来大丈夫？」みたいなところがあつたとしても、でも本人の感じて生きていることの強度というか、その都度そこにあるひらかれや、「確かさ」を重視する在り様の方が、生命体としては生き生きしているんじゃないのかなと自分も思います。

先ほどの「何者か？」の話ではないですけど、先に言語で自分を規定したり、外的な目標をあらかじめ設定してしまつと、自分の中の重要なものを制御してでも、そちらに積み上げないといけなくなつてしまふ。それに関がらめになつてしまふ。それは自己疎外ですよ。そうすると出遭いもおそらくなくなり、仮にあつたとしても、そこから生成変化へ向かいづらくなつて思ふ。自分の過剰さに対して、負のレッテルを貼つてしまふようにもなつて思ふ。

でも本当の創造というのは、自分でもよくわからないところで結晶化するものだと思います。今の自分が頭の中で望むものと、「世界」が希求するものが一致しないことは往々にしてある。だからこそ「これが何になるのかわからない」という部分を常に抱えつつも、でもその時、そこにしかない「確かさ」やよろこびを重視する方向にこそ、何かがあるのだと思ふ。そこにしか「世界」はないと思ふ。何がどう連結するのか、どう絡まり合つて、それらが結晶化するのかは生命だけが知つていふことであつて、それはもうある種の神秘なわけですよ。だから確固たる自己同一性とか思惑のようなものは潔く捨てて、常にわからなさを抱えたまま、生命に身を任すなかにこそ、真の創造があるのだと僕は思います。創造は生命がするのであつて、自分がするものでは決してない。「世界」や生命、あるいは創造は、いつでも「ままならないもの」であるように思ふ。

阪本…けれども今の社会はその内発的な生命の伸びやかさや強度を、積極的に奪つていふような気がします。論文をいくつ書いたとか、どんな資格をもつているか、どんな地位にいて、どんなことを教えているかとか。自らの内側から湧き起る熱情ではなく、産業化された社会における規定に合わせて、人は常に計算しているようです。自らを道具化する。自分を、存在ではなくて、能力にしてしまふ。今話してくださつたことは、きわめて大事なことですけれど、教育できるものではありません。今は、Aができる、Bができるつていうような、パッケージ化された何かを、ある方式の中で、学生たちに移植していくというのが大半の教育になつていふ。

岩瀬…しかも難しいのが、教育する側も保証はできないわけですよ。「そこを生きて良いんだ」と言ったところで、それはある面から見れば、周りからも理解されづらい、ある種の危うい道じゃないですか。だからそうではないパッケージ化された道を、というふうにしておくのが無難なのかもしれない。でも自分の場合で言えば、大学の恩師とかその後に出遭った様々な方が、ぐわっと、その危うい道に誘ってくれたところがあった。それは決して強要されたということではなく。自分にとっては、そういうのが本当に有難かったんです。

その意味では、あわ居がやっていることも、ある人からみれば、暴力にもなりうるものだと思います。でも生きていくうえで、外部との出遭いがなくなってしまうたら…それはもう人間にとっての生きていくこと自体が、かなり危うくなってしまうのではないかと、そういう危機感もあります。だからこそ、直線的な時間の流れとは別のところにある時間を体験する、あるいはかつての固有の時間の記憶を想い出すような体験をする。そういうことがその人の強度ある生を支える基盤になるのではないかと、自分で、自分たちはあわ居を営んでいます。

阪本…今の社会は、問題なく、滞りなく、気持ちよくということだけを、幸せだと錯覚させて、出来る限り内側に、というふうにする力学が働いていますから、それはほんとうに重要なことですね。

### ◎他者の顔

岩瀬…さきほどの老夫婦のお話ではないですけど、他者から自らを問われることは、見方によってはとても煩わしいことかもしれない。特に現代のような問題なく、滞りなく、気持ちよくということを優先する場所におい

ては……でも本来それはものすごく大事な経験ですよ。他者のまなざし、あるいは「顔」から、自らの在り様を問いかけられること、そしてその出来事を反芻すること……『ことばの共同体』でも書きましたけど、石徹白に生まれていた徹さんという方の語りに、自分はとても揺さぶられました<sup>2</sup>。一年半ほど前の話です。揺さぶられたと同時にひらかれた。外へと連れ出された。それで徹さんはその後、数ヶ月して亡くなった……あの時に聞いたのももちろん徹さんの私的な記憶ですけど、あれはもしかしたら、もっと大きな記憶だったのかもしれない。そういう出遭いがあったなかで、じゃあ自分はこれからどうしていけばいいのか、ということは、今ももちろん考え続けていますよね。

阪本…僕の経験則ではないですけど、自分のなかで「これだ」と思う時って、自分ごとではないですね。徹さんの記憶も、岩瀬さんが自ら追い求めたものではなく、記憶の方から岩瀬さんを訪うものであったから、そこまで深くまで入り込んだのでしょうか。

岩瀬…もしかしたらそうかもしれないですね。

阪本…献身というか、何かに捧げている時というのが、かえって自分本来の道を歩ませてくれているというのか……バチウに対してもそうでした。自分が一番うまくいっていない時って、バチウを手段化してしまう時やと思います。バチウを研究対象にして、それを使って何か言おうとしてしまうとか……でもひらかれる時というのは、無我夢中じゃないけれど、自分を忘れていく時ですよ。

岩瀬…僕も石徹白に移住を決めて、後からものすごい葛藤があったんです……改修がとにかくつらいという(笑)。そこで手を止めたら前の生活に戻らないといけないわけですが、どうしてもその選択肢が目の前にちらつく。そういうふうには一年くらい宙づりになっていた時に、ブラジル移民の写真であったりとか、戦争体験者の手記とか、リサイクルショップにあった、滋賀県の高賀大社の昔の宮司さんが書いた書作品であるとか……そういうものに自分はまなざされたんですよ。

まなざされたというよりは、あれはもう憑かれていたような気もする(笑)。それくらいに強度のある体験だった。そしてそこで自分は、あわ居を作ることに対して「これは自分たちだけの話ではないんだ」というのか……もつと言うと「歴史からの要請」のようなものを感じたんです。自分がつくるのをやめてしまったら、何かが止まってしまいうように感じた。それで結局つらいのはあんまり変わらないんですけど(笑)、でもそのなかに面白さとか世界が書き換わっていく感触がだんだんと出てきたりもして、なんとか完成までこぎつけたようなところがありました。

### ◎時を編む

阪本…何が自分を突き動かすのか、ということですよ。しかもその出遭いも、自分自身が設定したものではなかったりもする……。

岩瀬…生きていくうえで通路が閉ざされた時、それでもその先に別の線を伸ばしてくれるのは、まさしく他

者ですよ。それは生身の人間かもしれないし、誰かの残した本かもしれないし、ある場所かもしれない。あるいは樹木、もしかしたら風かもしれない。そうした他者との出遭いによって生命は流動していく。おそらく人は出遭いを重ねるなかで、自分の生命が、決して自分だけのものではないのだと実感していくのではないでしょうか……誰かの残した線の上に、今の自分がいることを感じ、さらにその線を自分が伸ばしていく。

誰かが残した形あるものがあつたとして、もしかしたらそこにすぐに生命を感じ取れるわけではないかもしれない。でもある時そこに、ふっと微かに生命を感じ取れたときに、それを自分なりになぞったり、引っ張ったりすることが人間にはできる。ある種のリレーのようなものかもしれないですよ。

阪本…たぶん、色んな線を伸ばしていくだけなんです。既に引かれている線を伸ばして、また別の線に乗り換えていく……簡単に理解はできないけれど、でも確かに身体が反応して繋がっていくことこの持つアリティ。それはやっぱり自分の外側に出て、右往左往しないと身についていけないですよ。

岩瀬…そうしたものの出遭いを、いかに手練り寄せていけるのか……少し話は逸れますが、僕の専門領域のひとつである書道で言えば、書道史というものがあつて、そこに載っている作品ももちろん素晴らしいわけですが、でもそれはあくまでも、ある観点から人為的に整理された歴史に過ぎないわけです。それに載っていないところにも良い書はいっぱいあります。でもそうした正当と言われる歴史から排除されたような書は、普通に行っているとなかなか出遭えないんですよ。それにそういうものを目にした時というのは、まさに自分が問われる瞬間でもあります。

それで自分の字の系譜、自分がどうしても書いてしまうものは、正当と言われる書道史とは少しはずれたところにあるような気がしています。そういう時に往々にして起きるのが、正当だと言われているものから自分はずれているという理由で、そこに負のナラティブを作ってしまうことだと思います。自分もそれをやっていました。

でも自分は、さつきお話ししたような、正当の歴史からはずれた書にその都度出遭い、そこに自分なりの線を伸ばしていくことで、否定的ではないナラティブをだんだんと構築しているようなところがあります。この時に思うのが、もしそうした歴史に埋もれた書がこの世に存在していなかったら、もしかしたら自分は自分の字に対して、否定的に捉えつづけていたのではないかということです。「正当の書道史に収録されているような字」を書かなきゃいけないと思ひ込み続けていた。

それで何が言いたいのかというと、正当と言われるようなものは、それとしてあっても良いですけど、それだけが道ではない、オルタナティブはいくつもあっていいはずだということです。でもそのための通路は往々にして隠されていたり、埋もれていたりする。そこが怖ろしくもあるし、でも実は醍醐味だったりもする(笑)。そしてこれは書道史に限った話ではないですよ。あらゆるジャンル、むしろ「生き方」というところについてもまるっと適用できる話だと思います。

阪本…重要な問題ですよ。人間は歴史に容易に飲み込まれてしまいます。歴史に残らないといけないとか、長く語り継がれるとか……もちろん長く語り継がれるのは大事なことですけれど、ある単一化した基準としての歴史に記録されるということではないと思います。無数の導線が絡まり合った糸玉としての世界があって、ある糸を引っ張ったら、別のところにある糸と結ばれ繋がっている、そのように交通している何かから届けられると

いうものがあると思います。それは直線的な歴史の在り方ではないですよ。バチウの文学、MELEも、まさに今いったような存在です。MELEには、さまざまな個人が書いた言葉が海と大陸を超えて交通している。ハワイの市井の人や学生の書く詩もあれば、ノーベル賞を獲得した大詩人オクタヴィオ・パスによる詩も載っている。MELEを僕が手にしたのは二〇〇五年のことですけれど、その号にはハワイ語の詩がありました。とてもじゃないが読めない。でもとりあえず持つておく。そしてその十年後、MELEを持って、そのハワイ語の詩を寄稿した本人に会うことになるのです。そこで「これはどういう意味か？」と訊いて、はじめてそこで内容を読んで理解することができた。しかもそこに本人との出遭いもついてきて。

そういう関係性の在り方もあるわけですよ。十年をかけた読書、海を越えて旅することでわかる意味というものがある。これも一つの受容のあり方です。絡まり合った時間、日本、ハワイ、ルーマニアという絡まり合った空間があるなかで、ある時にヒュッとひらかれる道がある。それが何より生きていくということ。生きるということの「真実」が、そこにあるような気がします。時間と空間を超えた言葉の小径というものがあって、それを歩む命と結びついている。存在は、すでにそうした道を孕んでいるのではないのでしょうか。それこそが時の綾なのだとおもいます。

対談実施日：二〇二四年二月二十八日

阪本佳郎（さかもとよしろう）／文学研究者  
1984年、大阪生まれ。2020年、東京外国語大学大学院博士後期課程修了（学術博士 PhD.）。詩人シュテファン・バチウの足跡を追って、ルーマニア、スイス、ハワイと移動を続けて調査。バチウと親交を結んだ人々、詩人の愛した土地を訪ね歩き、「MELE : International Poetry Letter」をはじめ散逸した資料を収集。2018年バチウ生誕100周年の記念祭をホノルルと京都にて主催。バチウの足跡を辿る中で出遭った各地の詩人や作家、芸術家たちより作品を募ってできた詩誌「MELE : ARCHIPELAGO」をバチウへのオマージュとして2019年に刊行。『シュテファン・バチウ ある亡命詩人の生涯と海を越えた歌』（コトニ社）を、2024年4月に刊行。

# あわ居 の 記憶

「あわ居の記憶」は、「ことばが生まれる場所」「あわ居別棟」の体験者の方  
に実施したインタビュー記録集です。どのインタビューにおいても、あわ居  
において体験された、かけがえのない時間、生き生きとした時間についての  
記憶が鮮やかに象られています。

「そのざわざわには独特の質感があるんですよね」

1985年生まれ / 2021年7月に「ことばが生まれる場所」を体験



— まずは、あわ居での時間がどのようなものだったかお話いただけますか？

いろんな面で、自分の生き方やあり方を、問い直された時間でした。あわ居という場だけでなく、石徹白という地域の中にあるあわ居だから、という部分も自分にとっては大きかった気がしています。石徹白の自然の中には、見たこともない蝶や、見たことのない色のトカゲがいて。あとは蟻がとっても大きかったり。そういうところからも、まずは別世界にいるんだという感覚がありました。私はあわ居で、最初にお風呂に入ったんですが、建物は古いけれどすごく綺麗に掃除されていて。ただのお風呂なんだけれど、ハーブの香りもして。すごくもてな

されている感覚をとどこころに感じるって言うんですかね。人に丁寧に接しようとしている、その在り方をとても受け取った時間だったなあっていうふうに思います。

— 面白いですね。蟻やトカゲが目飛び込んできたというのは、もともと菊地さんにそうしたものに着目する傾向があるのでしょうか？

もともと、そういうものに着目する傾向はないですね。普段は見ないです、そもそもあまりいないので。蝶が飛んでいても、モンシロチョウとか見慣れているものしかない。そういった意味でも、見たことのないものが目に飛び込んでくることで、

色んなものを根底から問い直す、その前提が作られた感じがありました。山羊を飼っている家があったりもして、ただ石徹白を歩いているだけで、常識が壊されていくわけです。あわ居という劇場に行く前の道で、色々壊されていって、あわ居に入っていくって、さらに壊されていく(笑)

— 石徹白の風景や生活の様子などを目に入れた段階で、まずは日常とのギャップを感じられたということですね。そのうえで、あわ居に入ってみて、さらに感覚の広がりがあった。

そうですね。例えば、シャンプーやリンスなども、都会の宿泊施設で使われているような、効率性を重視したものではなく、自然に配慮したものが備えられていました。在り方と置いてある物が一貫しているというか……。眼に見えるものと感じるものが一貫している。そういう部分に対しての衝撃がまずありました。お子さんたちがおしほりを運んで来てくれた時も、「なんか感動！」という感じで(笑)。あとは、崇さんが、最初に出迎えてくれる時に、雰囲気……。その時はちょっと言葉にはできなかったんですが。あとから美佳子さんと二人で話した時に、お客さんが来る時に、崇さんは「どんな人なんだろう、この人は」っていうことを、すごく感じようとするんだという話

を聞いて。あ、それだけ気合がはいっているんだなと(笑)。それを聞くと、最初に崇さんから感じたあの雰囲気は、そういうことだったんだなって。

例えば都会でどこかに泊まりに行くと、「いらっしやませ」って出迎えられる、「はい二〇二号室です」って感じで流れていきますよね。でもあわ居に入った時は、一人の客としてではなく、一人の人として迎え入れられているなあとということが、ありありと感じられましたね。「三十代の女性。一泊いくら払ってくれる人」として受け入れるのではなく、向き合うというか。菊地美希という、ひとりの人として接してもらえているという感覚がすごくありました。だから、ある種の良い緊張感はあったかもしれないですね。

例えばどこかの宿に行ったとしても、一定の距離感があって、物と物として対峙しているというか。他人と他人で接している感覚になることが私はあるんです。でもあわ居に行った時は、人として接してくれるから、お風呂でもきれいに使おうって思うし、お部屋に入った時の調度品も、すごく出迎えられるような感覚がした。美佳子さんのご飯もそうですし、ご飯に対する愛情もそうですし。全てが私に向き合ってくれている、歓迎してくれている感じ。あったかくて、これまで味わったこ

とのない、こそばゆさというか。ざわざわ感。なんなんだろう、これって。良い意味での違和感ですよ。今思い出しても胸がきゅんとなる感じ。ざわざわした感じ。

——ざわざわですか……。

そうですね、なんだろう……。そのざわざわには独特の質感があるんですよ。物語の中にいるっていうか……。前に高いお金を払って一人でスイートルームに泊まってみたことがあるんです。その時間もまあ豊かではあったんですが、でもすーって流れていく感じだった。後から振り返ってみて、「ああ、なんかパンがおいしかったなあ」とか、「朝日がきれいだったなあ」とかそれくらい感じ。でも、あわ居の時間って、例えば雨の音もですし、こんな急に風が冷たくなるんだとか。見るもの、聞くもの、刺激が多すぎるというか。刺激がないところにいったはずなのに、感じるが多すぎて、ちよつと忙しい。でもそれが心地良いんですよ。感覚が機敏になってるっていうんですかね。それはすごくあると思います。崇さんや美佳子さんやお子さんが作られている空気から、それが生まれているところがあるような気がして。神殿の中に入った時って、ただの建物なのに、独特の感覚があるじゃないですか。厳かな感じというんですか。それがあわ居の中にあるっていう感

じですかね。だからこそ生まれてきた対話の質があったように思います。

——対話の中で印象に残った場面などはありますか？

(ノートを見せながら) ノートに書き残してあるんですけど。これが崇さんのページで、こっちが美佳子さんのページ。忘れないうちにとまって、帰りの電車の中か、どこかで書きました。特に印象的だったのは、崇さんの言葉でいうと、「自分の中の醜悪な部分を認める」ですね。崇さんがうわべだけの会話でできない話だったりとか、今のあわ居の運営の形態に至るまでの葛藤だったりとか。そういう話を分かちあってくれて。一年前の私は今よりもずっと悩んでましたけど、自分の醜悪さを受け入れきれいなと言いか。まだ良い人であろうともがいていた。良い人であろう、優秀であろうともがいてるからこそその苦しさがあつた。

でも崇さんは、良い意味で諦めて受け入れている。その潔さみたいな部分を、在り方からもすごく感じて。自分が認められてない自分の醜悪な部分を、目の前でちゃんと認めている人がいるって言う事を感じた時に、それを認めていない自分が対比的によく見えるようになった、そういう感覚がありましたね。

あとは、内側の軸に沿って生きるか、外側に従って生きるかの話もしましたよね。私はそもそも内側がブレブレだから、内側に沿って生きることの意味さえよくわからない感じだったんです。多分その起点となるのが、自分の醜悪な部分を受け入れるところなんだろうなあって。

あとはやりたいっていう気持ちで起点になってやっていると、応援してくれる人だったり、広めてくれる人が出てきて、商いになっていくんじゃないかなって思ったり。生かし生かされ合うようになっていくんじゃないかなあって。私は今までも、やりたいっていう気持ちは色々あつたはずなんですけど、どちらかと言えば、やらなければならぬとか、こんなダメな自分はずっとましにならないかなって、そういうところはずっと生きてきた。

でも、ここ最近、ここ一ヶ月ぐらいで、「あ、これかもしれない」っていうものが、見えてきているんです。それって一気に変わったりする人もいるのかもしれないけれど、私にとっては、その種を撒いてくれたのがあわ居の時間だったのかなって。あわ居で撒かれた種が、徐々に徐々に発芽というか、この一年間で根を張って、積み重なって、今この一ヶ月で何か起きています。そういう種を撒いてくれたり、肥料を与えてくれたりし

てくれたのが、あわ居の時間だったのかなっていうふうに思います。

私の中にもともとあるものを見てくれたというか……対話の中で、私の強みを見て、あるものを生かす形で光を当ててくれた感じが、あの時あつたんです。そういつた中で、それまで点だったのが、線になったり、薄い線がちよつと濃い線になっていく感じがあつたりもして。「そこにも可能性があるのかもしれない」とか、「そこで自分は生きていてもいいのかもしれない」って。「もつと役に立てることもあるのかもしれないな」って。とても勇気をもらつた。今年も絶対行きたいって思ったんですよ、あわ居に。それくらい感情が動いた。一年前のあわ居での時間が、論理的に、今にこう繋がってますという説明はできないんですけど、こんなに感情が動いたっていうことは次も、絶対何かがあるなあというふうに思いますね。

——感情が動いたというのは……。

なかなか言葉にするのは難しいんですが……。例えばお二人との対話だったり、お二人の在り方、石徹白という場所や人たちから感じるものを見ながら、私たちが生きてる今の資本主義社会って、ほんとダメだなって(笑)。これすごい思ったんです

よ。私はなんて世界を普段生きているんだらうって(笑)。人間が一人芝居をしているというか。勝手に問題を作り出して、勝手に大変だと言い、またそれに対処するための事業を生み出しているだけなんじゃないかって(笑)。そういうところで、頭を強く打たれたような感じがありましたね。衝撃といっても良いですね。

あとは、あたたかさも感じた。美佳子さんと夜に話している時に、「明日の朝、何が食べたいかな？」って聞いてくれたんです。私の好きなものをたくさん聞き出してくれて、「できる限りやってみるね」って、朝作ってくれたんですよ。「いつもだったら、こんなにチャレンジして料理はしないんだけど、美希ちゃんだったら受け止めてくれる気がするから、失敗するかもしれないけど、作ってみた」と言ってくれて。そこで思ったのは、「受け取るという事が一つの才能になり得るのかもなあ」って。そのことに私は気づいていなかったんですよ。そこでもまた、私にもともとあったものを見つけられた気がした。それまでは、受け取るなんて誰でもやってるし、むしろ何もあげてない。私はあげたいのに、もらってしまってるって思ってしまったんです。

でも、受け取る事によって相手が幸せになることがあるんだ

て。同じ好きな料理をしてるんだけど、全然やることが違う。体験として違うものを仕事の中でやっている、それがすごい楽しいんだよね」という話をされていた。

料理って人によつては面倒くさいものだと思うんです。私も料理は好きではあるんですけど、面倒くさいって思うことの方が多い。どんどん料理が省力化できるように、商品なども設計されていると思うんですよ。なのに、その面倒くさいことに対して、こんなに楽しそうに向き合ってる仕事してる。楽しみは自分で作ることができるんだなあって思いましたし、そうやって楽しんで生きてる人の魅力を感じられたことは大きかったですね。上にながらなきやとか、できるようにならなきやとか。そういう風に思ってるって生きてきた私としては、弾けるように楽しんで、それで魅力的って、それはもう枠外の概念だったんですよ。「めっちゃめっちゃ頭きれるようになって、めっちゃめちゃ仕事できるようになって、それでようやく魅力的」っていうふうに思ってきた私としては、なんかもう、そういうことじゃないんだなって。

——そういう揺れや衝撃があった中で、逆に不安になったりはされなかつたですか？ これからどうしていったら良いんだらうって途方に暮れてしまったり。

なあって。失敗するかもしれないけれど、美佳子さんが新しい料理にチャレンジしたっていうことが、美佳子さんにとってもすごく楽しい出来事だったらくて。音符がみえるくらいルンルンされていたんですよ。それを見て、「受け取るってことが、こんなに相手に喜んでもらえることでもあるんだなあ」って。「私が今回、料理にチャレンジしたのは、美希ちゃんが受け取ってくれると思ったからだよ」って美佳子さんが言ってくれて。なんかもうあったかいし、なんかもうガンだし、パニックみたいな(笑)

——はげちゃったみたい(笑)。

そうですね、そうですね。固定観念が。なんて狭い枠で考えていたんだって。なんて狭い、自分一人で作った劇場の中で生きていたんだって。自分で自分を生きづらくしていたんだって。世の中にはこんな考え方があったのかと。そういう衝撃を、あたたかさと共に受け取る場面がいっぱいありました。あとは、美佳子さんが小学校の給食の調理を週に一回されているという話も印象に残っていますね。すごい楽しそうに話すんですよ。「家の料理だと四人分しか作らないから、家だったら量をはかるなんてほとんどやらない。でも給食だと何十人分も作らなきゃいけないから、塩何グラムとか、ちゃんとはかって入れて

ありますあります。やっぱり私は小学校の頃から点数をとって、努力してできるようになる、優秀になるっていうふうにして三十数年間を生きてきたから。そちらのルールがあるんだなって思っても、すぐそっちには行けないんですよ。だからどうしたらいいんだらうっていう葛藤をこの一年間ずっとしていた。あわ居に行ったらその翌月くらいから、私は二十四時間三百六十五日ずっと眠いっていう症状になっていて。病院に行ったら「過眠です」って言われて。今も眠いんです。

でもきつと、眠いっていうのは、偽りの自分を生きるのをやめなさいってことなのかなあって。対話の中でも自分で居ることを優先するという話がありましたけど、これがなかなかできないんですよ。それってどういうことなんだろうって。それも含めて、小手先でどうにかするのはやめなさいって意味で眠くなってるのかなあって。そんな風にこの一年間思ってたんです。それで、ここ一ヶ月くらいで、「は、これも」っていうものが出てきた。いろんなものが積み重なって積み重なって、表面張力のようなふれてきて。「は、これも」って。だから、あわ居から帰ってきてからは、ずっとひしめきあっている感じでしたね。

——最後になります、雨の音や、風、虫などが普段よりも凄くクローズアップしてきたというお話を序盤にされていたことが非常に印象的でした。最後に、もう一度、そのあたりのことについてお話しただいても大丈夫でしょうか。またその時の感覚は、日常に帰った後でどういふふうになったのかなという点も興味があります。

トカゲを見てた時は、冒険してる感じでした。石徹白って人も少ないですし、木々もいっぱいで厳かな感じがあるなかで……。ちょっとすいません。すこしきれいすぎますけど、絵本の中に迷い込んだみたいでした。そう、鮮やかに光景として出てくるんですね。場面場面が。画として出てきます。その時の感覚も。夜六時くらいに、「あ、七月でもこんな寒いんだ」って思ったときに、雨が降って、すごいしとしとしたきれいな音がしていて。

ひんやりする感覚も都会とは違う。なんていうか……。ほんとに冷たいっていうか……。なんだろう、冷たさの感覚が違う感じ。普段雨だったら、嫌だなあとか、雨くさいなあとか思ったりするんですけど、なんかそうじゃない。もうちょっと神秘的なものとか、すごく素敵なものとして、私の記憶に残ってま

すね。とにかく厳かなものとして。崇さんからしたらそれが日常なんでしょうけど、私からすればあの雨の音や風の感じは、とにかくすごい新鮮でした。初めてといってもいい感覚でしたね。

とりあえず、帰りの電車の中で涙が出たわけですね。「帰らなきゃいけない」って。そこからは石徹白やあわ居での衝撃を同僚にたくさん伝えました。「トカゲが！」みたいな(笑)。でも人間って怖いもので、三日くらいすると、もう日常に戻っているんですよ、脳が。戻っているんですけど、でも葛藤は生まれちゃったものだから。向き合い続けてましたね。そうすると、「今の環境にも悪くない部分があるじゃないか」とか、環境にどうこう言うよりも、「私はこういう世界をつくりたいんだ」っていう部分に焦点が向かったりとか。そういう意味で、けっこう物の捉え方が変わったかなっていうことは思いますね。「あれ、私この洗剤使ってた良かったんだっけ」とか。「この食べ物、食べて良かったんだっけ」って。日常に対して問いが出てくるというか。あとは生き方としても、こういう風に生きなきゃいけないっていう、ある程度の正解の幅みたいなものがこれまではあったんですが、それを広げた上で、周りを見れるようになった。枠が広がることで認知の広がりがあって、この一年間の変化になったのかなって思いますね。

インタビュー実施日…2022年5月1日  
聞き手…岩瀬崇（あわ居）

## 「他人事として自分のことを見られていた感じがあった」

30代女性 / 2021年4月に「ことが生まれる場所」を体験

— Dさんにとって、あわ居の「ことが生まれる場所」はどのような場でしたか？

どんな場だったか……まずはとても居心地の良い時間でした。美佳子さんがモロッコに行かれていた時の体験談はよく覚えていますし、しゃべり口調に特徴がありますよね。まずはそれにすぐく癒されました（笑）。

あわ居に行ったのは、それまで住んでいた東京から、実家の静岡に帰ってきたばかりのタイミングで、とても混乱していた時期です。対話のなかで色々な言葉を頂いたことで、中間のグレーな感じを受容することができました。それまでは白黒はっ

きりさせなきゃという焦りとか、自分を責めてしまうところがあったんです。でもあわ居の時間を通して、白でもなく黒でもない、グレーでOKっていうところを自分自身に許せた感じがありました。許容範囲が広がった気がします。

あわ居に行った頃は、都会の私と、田舎の私という感じで、分離していたんです。都会でキビキビ動いている自分と、生活環境が全く違う大自然の中で暮らしている自分。その二人が存在しているような感覚がありました。あわ居の時間を通して、あいだのグレーのところでちゃんと一つの自分自身になっていく感覚や、離れかけていたところが一つの塊になってくっついてくる感覚が生じたことをよく覚えています。

でもそれがどんな言葉がきっかけだったのかまでは覚えていないんですよ（笑）。でもたしかにあったんです。初日の夜に私が話したことを踏まえて、次の日の朝に、崇さんが、「昨日の夜におっしゃっていたのって、こういうことなのかもしれないですね」って言ってくれて、その言葉がとても印象的で……でもそれが何か思い出せません（笑）。

— 私が覚えている範囲だと、静岡にひとりでお店をひらいている人がいて、Dさんが静岡に戻ってから、何回かそのお店に行ったという話をされました。その人は移住者で、まちづくりにも関わったり、自分の意志で実践をしている人なんだということにも言及されています。その場所が気になっているという話をされましたよね。

一方で、Dさんは東京にいる時に、すごく友達に恵まれていたという話もされました。仕事のリサーチも兼ねて、休日はいろんな場所や店に行くのが好きなんだという話も。でも、静岡に帰ると、東京の時の友達はいないし、お店も東京よりは少ないから、静岡ってどうなんだろうなと思ってしまおうという話をされていたと思います。それらを踏まえ、もしかすると環境

に左右されている部分があるんじゃないかっていう、ひとつの仮説を投げた気がします。お一人でお店をひらかれている方のように、自分がそこを面白くするっていうモチベーションで日常をすすめていくというよりは、既に周りにあるお店とか場所とか、周りにいる人といった環境要因に、自分の面白さを委ねてしまっている傾向があるのではないかと。

たしかにそんな話をした気もする……あ、でも今の話でちょっと思い出したことがあって。あの時そうやって言ってもらって気づいたからか、今は環境に左右されない自己生産型の人になっているんです。あわ居の後のこの一年を通して……なんだろうな……多分私、もともとが自己生産型の人なんです。ワクワクすることや楽しいことを自分で作る人間。ただあの時期は、そうじゃなくなっていたのは覚えているんです。

メンタル的にも体力的にも、かなりどん底にさがっていた時期だった。周りの環境の影響をモロに受けやすい時期だったんですね。自分からは何も出てこなくて。周りが面白ければ面白くなるし、周りがつまらなかつたら自分もつまらなくなる。その時は自分が自己生産型だったことすら忘れていたんですよ。あわ居に行ったのはちょうど一年ほど前ですが、明らかにそこ

が一つの転機になっている感じは確かにありますね。

あとは、あわ居のある石徹白の環境自体に、少しタイムスリップしたような感覚を覚えました。私が小さい時に見ていた、おじいちゃんやおばあちゃんの家みたいな風景。人口も少なくともに出ている人もあまりいないし、世にも奇妙な物語に迷い込んだような感覚でした。自分の中で、都会か田舎かの二択しかなかったけれど、それとはまた違う世界に行っちゃったっていう感じがしましたね……。

結局、過去に東京にいて、静岡に戻ってきて、これからどうなるんだろうっていう不安が強かったんです。でもなんていうか……「今を生きよう」ってなったんです。あわ居に行った頃の私は、ちょうどうつ病から抜け出す手前ぐらいのタイミングでした。外に出ることが、リハビリの一環みたいに自分のなかでなっていて……それまでは全部にやられちゃうんですよ。情報が入ってくると、それにメンタルがやられてしまうから、テレビもつけられない。外を歩いていても、街の看板一つにやられてしまったり……ドラッグストアにも行けませんでした。それくらいメンタル的に落ちていたんです。なので環境に左右されやすい部分が、すごく色濃く出ていた時期だったと思います。

て、場所も関係なくなるんだろなという感覚がそのあたりから出てきました。

—— なんとというか、そういうものは、すぐに切りかわるわけではない気がします。自発的に働きかけたり、意識的に自分でやってみたり。試行錯誤を繰り返した部分がきつとたくさんあったということですよ……。

そうですね。やらなくても生きてはいけるけれど、やった方が面白いだろうなっていうことに対して、最初は腰が重かったんです。環境にやられているだけの状況が続いていました。そこから自分でアクションを起こすのって、エネルギーがいるんです。でも一回ちゃんとエネルギーを持って、アクションを起こせば、めちゃくちゃ必死になってきて、それが楽しくなってくる。その繰り返しや積み重ねが、メンタル的にもすごくリハビリになっていきました。ちょうど一年前のひどかった時期から比べて、今はだいぶもとの自分に戻れているなあっていう感覚があるんです。

もともと友人には十二月ごろにあわ居をおすすめされていたんですけど、あまりにその時は体調が悪くて、一人で出歩けない状態でした。だから「外に出れるようになったら行くね」と。

あわ居に行った以降の話で言うと、とりえず目の前のことをやってみるとか、今を生きしてみる、朝起きて今日一日を生きる、ということの繰り返しをしていました。例えば、あわ居に行ったのは、私の誕生日のすぐ後だったのですが、その年の誕生日は部屋にこもって、ただ時間が過ぎていくだけの誕生日だったんです。だから、今年の誕生日は、とにかく周りに感謝を伝えたいと思った。それまでダウンしていた時期が長かったから、三十四歳になることができたことへの感謝の気持ちをみんなに伝えたいなと思って。住所がわかる人みんなに贈り物をしました。

しかも、ただプレゼントを選ぶのではなく、いま自分がこの土地にいるからこそできるプレゼントを選びました。手紙が八十四円で送れることをふまえて、八十四円で送れる範囲の贈り物をするといったかたちで、縛りをもうけた。そういう時間が一番楽しくて。でも、私はもともとそういう人間だったんです。それを忘れていました。そういうのを必死でやっている時間って、周りの環境も関係ないし、場所も関係ない。ただ自分ありきで、自分から全部がポコポコポコ生まれてきているんです。そういう時間が続けば、都会だろうが田舎だろうが、場所は関係ないなと。誰と一緒にいるとか、朝とか夜とかも関係ない。だから、そういう時間が続けば、居心地の良さも続い

それで四月にあわ居に行けたことは、自分の中では「旅ができるほど、元気になったんだなあ」っていうのが一個あったんです。すごく信頼している友人からのおすすめだったから、私としては、なるべくはやく行きたくて。やっと外に出れるようになって元気になった、その最初の行き先、スタートがあわ居だったんです。そのスタートからちょうど今で一年経つんですけど、今めちゃくちゃ元気なんです（笑）。スタートの入りとしては、すごくいい時間だったなと思っています。

今思い返すと、あの時は、いろんなことが意識できていなかった。今になってみれば、過去のこととして、客観的に見れるんですが、当時は視野が狭くなっていました。「なんでこうなってるんだろう」って常に自問自答。一人で考え込んでしまっていた。どうしたら良いんだろうって。自分を好きになろうと思って、毎日自分自身と対話をするんですが、結局相手は自分だからうまくいかないんです。なかなか周りの友達には言いづらいのもあって……話を聞いてくれるのは一人の友人と母くらいでした。そういう時期だったから、あわ居に行くと、素直にわーって出てくることを否定せず聞いていただけ、それを踏まえて、全然違う視点から客観的に話を投げてもらえたことが、とても大きかった。

——考え方の広がりのようなものがあつたということ  
でしょうか？

そうそう、それです。その時は特に意見や感情が偏りがちだった。自分の中だけだと、引き出しも少なく、すごく小さな世界の中で考え込んでしまっていた。あわ居での時間では、直接的に何かがぐさっと刺さったというよりかは、丸く包み込んでくれるような感覚があつたことをよく覚えています。あとは、対話のなかで、私に全くない視点をいくつも投げてくれた。「もしかしたらこういう可能性もありますよね」と、全く違う角度からの投げかけをしてくれたんです。そこから話が膨らんでいった覚えがあります。

——ある事実やある状況に対して、「これってこういう  
考えもできませんか？」とか、「もしかするとこういう  
意味合いがあるのでは？」といったふうに、解釈に幅を  
持たせていくなかで、対話が深まっていった……。

そうですね、直接的にグサツと刺さるっていうよりは、崇さんや美佳さんが共有してくれた内容を、私も客観視できる空間でした。自分のことを、引いて見ている感じですね。引いて見れるのが、その時の私にはすごく大事だったし、ありがた

ツルツルの球体みたいなものを崇さんが投げてくれたとしたら、それって立体で三六〇度どこからでもつつけるから、それに自分で茶々をいれる感じでした。私は基本的に、自分のことを一方的に喋るのは得意なんですけど、誰かと一対一で対話をして、キャッチボールのようにするのって、慣れている人とはできるけれど、苦手意識もあるんです。語彙力もないし。言葉の選び方も下手です。相手の話を聞くことや、投げてくれたものに対してキャッチして返すということに対して、すごくコンプレックスがある。だから会話も止まりがちなんですよね。自分の中で思考が停止しやすい。

でもあの時はスラスタ話せていた。崇さんと美佳子さんと私の三人で、ちゃんとキャッチボールができていた覚えがあります。自分一人では出てこなかったようなことがたくさん出てきた。「もしもそうだったら」と仮定して、そこに対して自分やみんなで茶々を入れる。すると、違う視点での自分が出てきて、うまく受け答えができていた感覚がありました。自分の内側だけを向いていたのが、少し解放されて、ほぐされていく感じがありましたね。

うつ病の期間が半年から一年くらいあったんですが、その前はもともと楽しいことを、自分で発見する人間だったんです。

かった。だからこそ、理解できることがありました。それまでは、自分自身で完結していたんです。たぶん家族や母に相談して、私が「こう思ってるんだ」って話をして、良くも悪くもまっすぐ刺さってくるんですよ。私の自己内での対話の範囲をそんなに超えないというか……話を聞いてもらったり、話を投げてもらうことにうれしさはあるんですが、視野の広がりはないんですよ。

でも、あわ居では、初めてお二人にお会いしたこともありましたが、話を聞いてもらって、そこから返ってくる言葉の解釈の角度が異様に広いです。だから私も返ってきた言葉をキャッチして、ちゃんと離れたところで、自分を理解できる。特にその時期は、私にとっては周りで起こることが、直接刺さってきて痛い時期だったから、あまり人と喋りたくなかった。でもあわ居での時間は、他人事として自分のことを見れていた感じがあつた。そのなかで話した内容が、自分の人生経験のなかでは聞いたことのない解釈や例えばかりで、突拍子はないんだけれど、でも納得感もあつて。それを受け入れるのが心地よかつたんだと思います。

例えば、崇さんが投げてくれた言葉に対して、それが私のことではないかのように、自分で茶々がいれやすかつたんです。

でも、うつ病の期間に、視野が一気にぎゅって狭くなつちやつて。それであわ居に行つて、対話して、ちよつとほぐれて、解放されて。そこから今に至るまで、ちょうど一年ぐらい経ちますが、前の自分に戻つたんじゃないって、またちよつと違う自分に更新したような感覚がありますね。もとの自分を取り戻したっていうよりは、少し違う自分に進化したように思います。あわ居での対話を通して得た気づきは、多分その前のうつ病期間のところがないと発生してない。そう考えると、うつ病期間にすら感謝ができるんですよ、自分の人生単位で見た時に、「なつて良かったなあ」って。

性格面でいえば、もともとすごく人見知りの赤面症だったり、周りの目を気にしやすい傾向を持っていましたが、今はいい意味で、前よりもどうでも良くなつて、サバサバしています。輪血でA型からB型に入れ替わつたぐらいの変化がありますね。それが嬉しいし、良い変化だなと思っています。住む場所に対しても、都会にいた時は田舎がいいなあって思うのに、いざ田舎に帰ってきたら、やっぱり都会が良いなあと思うっていう感じで、ないものねだりをしていたところが前はあつた。その結果、自分が分離してしまつていた。

でも今はわりとどこでも良いし、どっちでも良いやつて。そ

れはちゃんと軸が自分に戻ってきたからなのかなと思ってます。そういう意味でも、前にあった恐怖心や、こだわりのようなものが、いい意味でなくなってきたという感覚がありますね。自分の芯がちよっとずつ太くなってきている。平たい言葉ですが、自分を好きになってきている。あ、そうだ。あわ居に行った後に、自分の中から出てきた名言があるんです。「私は私であることが何よりラッキーなんだ」っていう言葉が出てきたんですよ。自分は自分のことを責めがちだったんですが、私がこの私であるということが、一番の幸福なんだなということに気づきました。

——受容度が高まったというか……良い意味での諦めなのかもしれないですけど……。

いや、ほんとそうなんですよ。肯定的な諦めなんだと思っています。でもそれができると、心が楽になる。そういうところまで今来ていますね。自分自身や過去に対して、良い意味で仕方ないとか、肯定的に諦めるってことを覚えた気がします。そう思うとだいぶ進んだなあ。あわ居で対話した時間は、こうやって確実に発酵されていた感じがしています。発酵され切った結果、もう思い出せなくなっている(笑)。私にとっては、思い出せないというのは、あまり悪いことではないん

です。あわ居から帰ってきて、対話の内容を踏まえて、実際に意識して行動して、一年経って。今はもう発酵されきって浄化されて、忘れている(笑)。だからそろそろまたあわ居に行こうかなと。それで一年ずつ積み重ねていきたいぐらいですね。

インタビュー実施日…2022年5月2日

聞き手…岩瀬崇(あわ居)

## 「あわ居での時間は『悠久の自然』だなんていう感覚がありますね」

30代男性 / 2020年12月に「ことが生まれる場所」を体験

——「ことが生まれる場所」は、Mさんにとってどんな場でしたか？

その時は、正直かなり疲れていて、仕事のこと、結婚をしているパートナーのことなど、これからどうしているかとかと、いろいろと考えて模索していた時期でした。真つ暗の中、手探りで自分にとっての大事なものを思い出そうとしながら歩いている感じで。方向性を見出そうとしているなかで、コンパスは持っているけれど、針が時々ぶれる。航海に出ようとしているんだけど、天候が危うい。地図がしっかりと読めておらず、この方向で本当にあっているんだらうかという不安があったり、道に迷っている感じもある。そんな状況でした。

——特に印象深かった場面はありますか？

食事中や食事後の対話の時間ですね。特に美佳子さんが加わってからの対話の中で、パートナーとの関係性について、三人で話し合った時間。何て言うのか、空間がぐんと重くなったと言うか……しっかりとした時間になった感じがしました。自分が向き合うべき時間が始まったなって。例えば、料理をする時には、まずは何を作りたいかをイメージして、収穫をし、調味料を集め、調理台に向かうといった手順を踏みますよね。その手順のなかで少しずつ、作る料理への解像度が上がっていく感じがあると思います。それと同じように、自分が思っていたこと、考えていたことを場にだして、それらをつなぎ合わせて、さあどこを見ていこうか、どうそれらに興味づけて言葉を作っていくかとかという、そのための環境が整った、「いま調理台に立った」というような、そんな感じがありました。

——あわ居にチェックインしてからは、まずはMさんの中にある、いろんな断片を洗い出している時間だったということですね。

そうですね。すぐに何か起きたというよりは、最初はまず、感じるというところがスタートでした。家族や仕事の仲間、知

あわ居での時間を通して、コンパス自体の揺れがビシッとして、周りの視界も、天気がすうつと晴れていったような実感がありました。ただ、それはその場自体で変化を実感したというよりは、後からあわ居での時間を振り返るなかで、感じる事ができたという印象ですね。向き合うものの解像度が上がっただけではなく、現実を直視できた部分が強かった。一言で言えば、対話や空間のなかでの体感を通して、パートナーや仕事に対してのモヤモヤに対して、「自分にとって大事なことはこれだったんだなあ」とか「そういうことだったんだなあ」と実感できる、そんな時間でした。

人に自分の状況を話すことは、これまでもしてきたけれど、初めて会った人にそういう話をしたことがあまりなかったので。「この時間に何が起きるんだろう」とか、「自分はこういう気持ちなんだらう」という部分で少し不安もあったんです。でも僕の場合はそこからすぐに楽しめる方向に入っていました。

その後、食事や対話をしていくなかで、自分自身の現状についての話を一回出し終えた後、そこに対して、崇さんと美佳子さんが感じられたことが返ってくる。そこで返ってきた言葉を自分が新たに飲み込みなおす。そんなことが起きました。お二人と対話しながら、自分も溶けて新しくなっていくような対話。対話の中で、「それはこういうことなのかもしれない」という、状況に対しての新たな意味や解釈が出てきた。そして自分がそれを受け入れて、また対話を展開していく。そういうことが起きていました。

——Mさんが話してくださった内容や事実に対しての、あらたな解釈や見方が対話から出てきて、それを受けて、また新たな対話がひらかれていく。そんなイメージでしょうか？

そうですね。アンラーン（学びほぐし）とも言えるかなと思います

ます。編んであるセーターをほどこいて、いったん元の毛糸にもどして、そこからまた自分の身体に合わせてセーターを編みなおすというか<sup>1</sup>。

——対話をしたなかで、特に印象に残っている場面や内容などありますか？

うーん……今パツと思ひ出されるもので言えば、美佳子さんが自身の過去の人間関係の話をしてくださった時に、「その時は相手に一〇〇%非があると思っていたけれど、今はやっぱり半分半分ぐらいで、自分も悪かったと思う」という話をされました。そこで自分がふっと思ったのは、今の自分は、パートナーが一〇〇%悪くて、僕は全く悪くないという、そういう世界の見方をしていないかな、ということでした。仮にそうでないように語っていたとしても、本当に五〇対五〇で、自分がその状況を引き起こしている者として、その責任を負っていたのかということ、その場で考えさせられた。そういう内省がありました。

1 刘宿俊文他編(2012)『ワークショップと学び3まなびほぐしのデザイン』pp.24・26、東京大学出版会

山中居神社での時間を思い出したりしていました。

——あわ居の空間の印象や体感についてはいかがでしたか？

空間は異空間な感じがしたんですね。あわ居に来る前に、石徹白の人と話したり、白山中居神社を訪れた流れのなかで、そういう石徹白地区の流れとはちょっと違う感じの空間だった。石徹白なんだけれど石徹白ではない場所に入った感覚がありました。

入口すぐの暖炉のぬくもりが、まずはすごく良かったですね。包まれた感じ、迎えられた感じ、安心感があった。あと印象に残っているのは、食事の時に、僕が持ってきたみかんを、サラダにトッピングして出してくれたんですね。即興だから、「時間がかかっちゃう」とか、「時間通りにいかないんだ」って美佳子さんはおっしゃっていましたけれど。そういうところに、大事な友人として迎え入れられているような感覚を覚えました。あとは、個人的に僕が好きなので。本がたくさん部屋に置いてあって、ひとりの時間になった時にいくつか手にとってみましたね。安心した瞬間がたくさんありました。

あとは後半に、崇さんから「すべてを引き受けることが大事だと思う」という言葉の投げかけがありました。僕は来たものに對して、反射的に「これはこうだ」とか、「これはこうなんじゃないか」というふうにしてしまう傾向がある。だからその言葉を聞いた時に、自分は「受け止めるということができていないのではないか」ということを感じた。来たものに對して自分を変容させながら、それに応じていくことができないんじゃないかと、向き合えていないのではないかと、ということをお考えさせられたんですね。

崇さんのその言葉は、いろんな意味に捉えられる言葉だと思っただけです。だから、いろんな自分の言動、それまでの気持ちなどを振り返りながら、あわ居を出てからも、色んな瞬間にその言葉を思い出していましたね。石徹白から帰る途中、実は凍った峠道でスリップして、車が三回転したんです。でも三回転したにも関わらず、車は壁にぶつからず、すっと方向転換して進むことができた。その時に、なんだろうな……スローモーションじゃないですけど、「自分はいま、本当に真摯に生きられているのかな」ということを考えさせられて……「地に足をつけて生きているのか」と言うか……足をすくわれたように感じました。「ちゃんと生きろよ」と言われた気がします。その後にも崇さんの言葉を思い出したり、あわ居での時間、あるいは白

少し話はそれますが、僕が昔ホームステイをしていたフィリピンだと、ご飯を食べる時に、家族だけでなく、近くに住んでいる親族が集まって、普通のご飯よりも少し豪華なご飯を食べる時があるんですね。せっかく来てくれたからお祝いしたい、この料理を食べてもらいたいって。その時の招かれている感覚にも似ていましたね。僕が来ることを特別に思ってくれている感じと言うんでしょうか。例えばビジネスとしての民宿に泊まったり、ホテルにチェックインする感じとはまるで違うし、実家や友達の家で食事をするのもちょっと違う。自分自身が特別な存在として大事にされて、招かれている感覚があった。

もちろん、自分が日常から引きずってきた緊張感や疲れ、初めて会う人に対しての身体的な硬直を最初は持っていました。でも、暖炉のあたたみや、料理、空間の雰囲気、空間の素材、木の板のぬくもりや布やラグ、本や照明、音楽など、そういういろんな要素が、総合的につながりあっていくことで、自分がほぐれていって、体の感覚や実感が見えてきた。もちろん大切な友人として招かれたような感覚のなかにも節度はあって、そのなかでのリラククスができたという印象でした。あわ居での時間に安心できるものをたくさん認知できたから、同じように自分が大事にしているものを開示してもいいなあと思えたんだと思います。そして開示したものが、ちゃんと受け取られたなあ

とも思えた。

——そうした体感や出来事があわ居であったなかで、日常のなかで起きた変化などは何かありましたか？  
もちろんすべてが直接的に作用したということは言えないとは思いますが……。

とても抽象的な言い方ですが、俯瞰的に物事を見れるようになった部分は多少あるかなと思います。自分として生きることや、現実に向き合うことの深さが変わった気はしますね。仕事においても大きな変化があつて、どこか腹が据わつた感じがあります。例えば仕事で、場の進行役をするときに、自分の実感と繋がりがながら、堂々と発言することができるようになった気がします。同僚からはもともとそれができていると言われてはいましたが、でも前は、自分自身と自分から発せられる言葉が、多少離れている感覚がありました。自分の身体的な感覚から少し離れて、その場に必要とされている言葉を、頭で考えて伝えていた。

でも今は、自分がその場に入った状態で、自分の実感から言葉を紡ぎ、自分を活かしながら、対話や場、人に対して、関係性やプロセスを紡げるようになったという感覚がありますね。

し方というか、家の中での会話が特に変わったかなあと思っています。「また自分は同じことを言ってるなあ」とか、「だから伝わらないんだよなあ」って気付いたり。自分の行動や意志が変わればどうなるのかを、良い意味で俯瞰しながら見る事ができるようになった気がします。あわ居に行く前は、反射的な対応が多かった。「何でそんなことをするの?」とか、「何でそんなふうなの?」といったかたちで、自分が感じたことをパッと言葉にして、出してしまっていた。

でも今は、自分が感じたことをすぐにパッと出す前に、自分は二人の関係性においてどういう形を願っているかとか、相手の行動の背景といったものも考慮しながら、言葉を発したり、関係を紡ぐことがだんだんとできるようになってきましたね。すべてが完璧なわけではないですが。前は、自分とパートナーを切り離したうえで、軸を自分だけに置いて、自分の意見を言っていたんです。でも今は、自分と他者、両方に軸をおいて、もう一個レイヤーが上がった状態で、言葉や関係性を紡げるようになった感じはありますね。

——引きすぎて自分を出さないわけでもなく、逆に押しすぎて自分を出しすぎてしまうわけでもなく。関係性のなかでのすり合わせをしつつも、そこに「自身を

場を俯瞰していながら、そこから離れていない状態を維持できるようになったし、自分の腹から言葉が出ているから、自分の言葉が他者に伝わっている感覚があります。仕事仲間からもういうフィードバックを実際に受けました。仕事をやめるというタイミングだったということも影響していたかもしれないけれど、自分としてはあわ居で過ごした時間がそうさせてくれた部分があるような気がしています。

——判断基準がより自己本位になってきた部分もあるのでしょうか……。

そうですね。前は自分が場を俯瞰している時は、そこから自分は抜けていたんです。その場に自分がいなかった。だから「客観」になっていました。「今はこういう状況ですよ、だからこうなれば良いんですかね」といったかたちで提案をして自分と切り離して場を見ていた。けれど、今は自分もその場に含まれながら、場に繋がりがながら、場の中で、言葉を紡いでいる感覚が強くなりますね。

——仕事以外の場面では、何か変化はありましたか？

……やっぱりパートナーとの接し方は変わったかなあ……接

滲ませることが前よりもできるようになってきた、そんな印象を抱きました。

そうですね。そうだと思います。

——最後にあわ居について一言いただけると嬉しいですよ。

あわ居は自分が自分として息づいて良いのだと感じられる場所だと思えます。星野道夫さんの言葉に「悠久の自然」というものがあるのですが、自分はあわ居で過ごした体験というのは星野さんのいう「悠久の自然」を想うのと同じような時間を過ごしたなあと感じています。少しだけ引用させていただきます。

日々の暮らしに追われている時、もうひとつの別の時間が流れている。それを悠久の自然と言っても良いだろう。そのことを知ることができたなら、いや想像でも心の片隅に意識することができたなら、それは生きてゆくうえでひとつの力になるような気がするのだ。

あわ居があること、そこに生きている人がいること、そして自分があわ居で時間を過ごしたという体験があることで、力を与えてもらえると言うんですかね……なんて言えはいんだろ……その事実だけで、自分が今いる現実が満たされたり、日常が豊かなものになる。そんな感覚を覚えています。今を生きるうえでの変化を与えてくれている。あわ居の時間を日常の近いところで再現しようとしても無理で、それも含めてあわ居での時間は「悠久の自然」だなんていう感覚がありますね。

インタビュー実施日…2022年4月27日および5月17日

聞き手…岩瀬崇（あわ居）

「もともとが多分そういう人間だった。

今、それに気づきました(笑)」

1988年生まれ/2021年11月に「ことが生まれる場所」を体験



——まずは勅使河原さんにとって、あわ居での時間が

どのようなものだったかお聞かせいただけますか？

伺った時が、ちよつと迷っている時期でした。子どもたちと関わりながら自然のことを伝えていくことに対して、私はどういう方ができるのかなっていう迷いがまずありました。あとは東京で、子どもに関わる仕事を会社員として担いながら、どういうかたちで私なりの表現と重ねて行けるんだろうとか。絵の仕事もしているなかで、それとのつながりに関してもモヤモヤがあったり。働き方だったり周りの方とのコミュニケーションのあり方などに関しても、違和感や迷いがある時期で。この先自分がどういうふうに表示をしていくのか、表現が

できていくのかなっていうのを、自分で整理しきれない状況が続いていました。

そういつたところで、あわ居にちよつと委ねたかった部分があった。自分一人だと、今自分がどういうふうに感じて、どういふふうに進んでいきたいかっていうのが、ぐちゃつとなってしまう状況だったんです。そこを対話しながら整理できたいいなあっていう気持ちがありました。あとは友人が地方に移住を決めて、そこで暮らしを作りながら、子どもたちを受け入れ、見つけていくっていう仕事をはじめたので。私も土地を見つけたいなと思いはがらも、なかなか踏み切れないっていう怖さがあったりしたから、なにかきっかけになったらいいなと

思ってたんです。

あの時、私は体調が悪かったですよね。意識が遠のくくらいに体調が(笑)。でもあわ居で対話をしていくなかで、すごく大切な言葉を対話の中から拾うことができた。対話について言えば、導いてくれているっていうよりは、寄り添ってくれているっていう感じがあったんですね。私の話はあまりまとまっていなくて、あち行ったり、こち行ったりするような感じだったと思うんですが、それに対して、どこまでも寄り添ってくれているなあということを思いました。

例えば、一緒に過ごしている仕事仲間とかスタッフとの関係性に、少し違和感を覚えているっていう話をした時に、「それはもしかすると、今いる場所やチームが単純に合っていない可能性もあるかもしれない」っていう話を、崇さんがされましたよね。私は、そこに馴染まないといけないって思ってしまったんですけど、「いや、こっちは扉あるよ」みたいな感じで開けてくれる感じがあったんです。寄り添いながら、「いやいやそれだけじゃない、こういう考え方があるよ」と。あとは本も紹介してくれましたよね。私も絵を書いたり、子どもたちを自然に連れ出して行く時の関わり方として、「学校の先生はそういうことを言うけど、こういう生き方もあるよ」と、意識

を変えていくことを大事にしているんです。そういう寄り添いをあわ居に行って、対話をするなかで感じられて、案になった感じがありました。

——案になった感じですか。

すごく記憶に残っているのが、「自分に必要ないと思ったものは、バンバン捨てて良いと思うんです」って崇さんが言ったんです。バンバン捨てて良いって(笑)。その時に美佳子さんが、「この人はこういう感じだから、それができるだけで、普通の人はなかなかそこまで捨て切れない。捨てるからこそ孤独になったり、色々生きづらさもあつたりするからね」という話をしてくれて。その時は、美佳子さんと崇さん、両方の意見があるのが、なんかいいなと思っていました。でも、自分が「本当はこうしたい」って思ってる方向に進めないでいるのって、「孤独になりたいくないなあ」とか「わかってもらえないだろうな」って色々と思ってしまうからなんですよね。

だから、崇さんが言うように、「バンバン捨てていきたい」っていう気持ちがあるなあって。ちよつと迷っている時期だったから、その話がすごく良かった。「バンバン捨てて良い」って言葉は、本当に私のお守りみたいになっていて(笑)。

ずっと毎日のように思い出していた。じゃあ私にとつて何が不要なんだらうとか、何が自然なんだらうみたいなのを、ちっちゃいことでもよく考えるようになった。そういった色々なことが重なって、変化が起きたんですよ、自分の中で。

もちろん、石徹白から戻って来てから、すぐに変化があったわけではないんです。でも今は、自分が何かしたいって思ったら、すぐにそれをするっていう状況にわりとなつてきているんですよ。不思議なことに。自分の中で制限をかけていたものがパーンって外れた感じがする。確かに「ちよつと怖いなあ」とか、「これで生きていけるのかなあ」って思ったりすることもあるんですけど、それを上回る「これがやりたい」っていう事がどんどん出てきている。それを形にした時に、自分が伝えなかったことがちゃんと周りに伝わっている感触もあるし、そこに人がついてきてくれてる。共感してくれる輪が広がっている感じがすごく心地良い。自分が「こうしたい」って思ってたものに対して、集まってくる人たちがすごく心地良い。「分かってくれる人がいるんだ」っていうことを知れたことがすごく嬉しい。だから何て言うんだらう……まずその一歩踏み出せたっていうことを、あわ居でさせてもらえたのかなあって思っています。

る人に話そうって今は思っています。

——明確に行動基準が変わったのかなあという印象も受けます。

そうなんです。だから、ほんと不思議で(笑)。なんでこんなに切り替えられたのか、わからないんですが……本当に。何でだろう……例えばあわ居に行く前に、「自分も土地を見つけたり、個人の活動をしていきたいけれど、金銭的な部分、経済的な部分ですごく怖いんだ」という話を友人としていたんです。それに、自分一人で活動していくってなつた時に、どれくらい人が共感してくれるのかもわからないから、その怖さもあるという話をしていくくらいで。あの怖さはいったいどこに行つたんだらうって思うんですよ。あ、でもあわ居で、「こういう人もいるんだなあ」って見れたのが心強かつたのはあるかもしれないです(笑)。

あ、でも今ちよつと思ひ出したんですけど、私、もともとちよつちやい頃から、ずつと絵を描いていたんですよ。欲求のままに、絵で表現していくのがもとと好きだったんです。絵を描いた時に人がどう思おうと関係ない、「だって私はこう思うんだもん」っていう表現が好きだった。もともとが多分そういう人間

あとはあわ居で、自分のつくる世界を信じている人の話を聞けたっていうことも、強く影響を受けた部分がありますね。自分の作りたい世界が、建物や物質的なところを含めて形になっていて。そこに泊まって、じかに接して……なんて言うんだらう。「あ、私も表現したいな」って思えたんですよ。前は、わりと他者目線というか、「相手はこれが必要だから、これをする」みたいな感じで生きてきたところがあつた。相手はこうしてもらったら嬉しいかなっていうところで動くことが、自分の喜びとすり替わってしまったところがあつたんだと思います。それが最近はだんだんと自分目線になってきている。それが一番かなあ。

——なるほど。違和感を捉えるセンサーが変わつた部分があつたりもするのでしょうか……。

そうですね。前だと違和感を殺しているような部分があつたんです。でも、「いや、これは違和感だよ」ってちゃんと気付けるようになった。あとは自由に自分が表現していったり、何かを形にしていってという時に、どういう仲間とやつた方がいいのかなという部分も含めて、自分の表現したいものが一番出せる状況を自分で作っていくっていうことができるようになったんですよ。だから自分の願いは、まず理解してもらえ

だつた。今、それに気づきました(笑)。あの怖さはどこ行つたんだらうって思っていたんですけど、今の状態の方が自然なんだと思う。だからもとに戻つた感じもしますね。意図して自分を変えていっているわけではないのに、状況的には劇的に変わっていて。すごく生きやすくなっているんですよ。

自分が信じてるものを、誰になんと言われようと形にしたいんだっていうふうに、あわ居のお二人はあわ居をやられていて、そういう人と出会つたっていうのが、一番自分の中ではバチツときた感じもする。そうですね……それに尽きるのかもしれない。私が鬱々と、悶々と悩んでいることって、なんか上辺だなあ。あわ居で対話をしていてそう感じました。そんな悩みより、自分が本当はどう思っているのかっていうところに、もうちよつとフォーカスしたいなって思えた。

——自分の中にある、よりセンシティブな部分に焦点が向くようなあり方に切り替わつた部分もあるのでしょうか。

ほんと、そうだと思います……そうそう、感覚が変わつていった感じがありますね。かなり細かい、繊細な自分の気持ちを拾うようになってきた。でも逆にそれがすごく心地よくて。「私、

もともとそういう人だわ」って。それが自分の個性かな、っていうふうにだんだん思えてきた。繊細なこと、ちっちゃいこと、そういうのが好きなんですよ。

——先ほどの違和感の話にもつながりますが、もしかするとこれまではそうした繊細なものを、ないものとして扱っていた可能性もあるかもしれないですね。それが、「あ、そこ拾っていいんだ」とか、「あ、こういうセンサーが自分の中にあるなあ」って気づいて、「自身の性質を取り戻したっていうふうにも捉えられる気がします。自分自身の中にあつたセンチティブな部分を、すごく丁寧に扱うようになったというか。

そうかもしれない……丁寧にいう言い方はすごく合っていますね。丁寧に扱うようになったし、構え方が変わったからこそ、共感してくれる人も、同じような人が増えた。お互いに、小さいこと、繊細なことを拾って良いっていう認識でしているから、コミュニケーションが楽になつていくし、子どもたちと接する時も、私自身が前よりゆったりしています。前は、「こういう方向に導かなきゃ」みたいなのが若干あつたりしたんです。でも今は、そういうところじゃない部分というか……：この子の種ってどういふところなのかなっていう部分を、ただただ

て思うこともあれば、「いやそうじゃない」って思うこともある。それを繰り返しながら、自分の中に立ち止まることができ。自分ひとりだと、いつもサラッと流していたことに対して、いちいち立ち止まれた。自分の気持ちとか、自分らしさが一個一個ポコポコ出てきた感触がありました。

——いつもはこれくらいで済ませておくっていうレイヤーがあつたとして、あわ居の対話の中で、その奥にもうひとつのレイヤーが見えてきた。すると、そこに眠っていた自分の感情や欲求が見えてきた。そんなことが起きたのかなという印象を抱きました。

そうですね。なんか、言葉を与えられなかったものに、言葉の刺激と言うか、そういうのを加えて……：そこがちょっと見えてきたみたいな。

——そこに怖さはなかったですか？ 自分の中の真実とか本心を見ることへの恐怖心というか。

うーん……まあそういうのもあつて……でも話してる時って、あんまり整理はついてなくて。家に帰ってきた後に、対話の時の自分の気持ちをポコポコ思い出しながら、自分一人で内省し

見る。時間はどれくらいかかってもいいから。そういうことができるようになってきた。繊細なものでも拾っていいんだっていう部分に対して、あわ居で過ごすびつと、何かを押してもらえた感じがありますね。

あとは、こういう事まで話していいんだっていうところですよ。私はもともと自己開示していくのが得意なタイプではなくて、言葉で話すのがすごく苦手なんです。でもあわ居では、とりとめがなかったり、まとまっていけない話、人に言いづらい部分やプライベートな部分も含めて、全部話していいんだっていうところの驚きがありました。対話をするっていうことで、ちょっと身構えてたんですよ。私、対話できるのかなって(笑)。最初は対話しなきゃみたいなところもあつたんです。でもすごく心地良かった。すごく積極的に寄り添いながら、他人の私に対して踏み込んで来てくれるっていう感じがあつて。そこには心地良いだけじゃない、気づきがたくさんあつた。

例えば、「それってこういうことですか？」って崇さんに言われた時に、自分の中に「そういうことじゃない」っていう気持ちが出てきて、「ああそういうことじゃないんだ」っていう自分の気持ちにふと気づいたり。積極的に「それってこういうこと？」って聞かれるから、それに対して「ああ、そうそう」っ

ていった時に、そこでの違和感や、そこで感じたことを噛み砕いて、自分をあらためて知っていった部分がありましたね。だから対話をしている時は、確かにちょっと怖いと言えは怖い。でもただ単に、自分が分かってなかった部分が見えてきて、それが怖いだけです。「私って、何で今、崇さんの言葉に対してこう思うんだろう」っていう部分を、しっかり考えるところまでは、リアルタイムでは全然できなくて、大抵のことは、家に戻ってきた後に分かった気がしますね。

——吟味する時間や状態をホールドできたというか。

そうですね……。

——今、違和感ありましたか？(笑)

そうですね、今のはちょっと違和感ありましたね(笑)。でも、こういうことなんですよね。すごい嬉しいというか楽しい。自分一人だと、こういう内省の仕方ってできないので。「こういうことですか？」って、何度も何度も言われると、「なんかちょっと違う」とか、そういうことは自分で思えるから。で、何が違うのかって、すぐには出てこないんですけど、でもそこに目が向くようになる。

——ひとりだと黒か白かになってしまっけれど、それがあわ居での対話の中だと少しほぐされるといっか。白と黒の間に、見えていなかっつ別の色があることに気付くといっか……。

そうですね、それが楽しい。あの時とは私も変わってるから次にあわ居に行つたら、私を感じる事つて、どうなるのかなとも思っています。今の自分を確認しに行きたいつていっ部分もありませんね。自分が本当に求めていることや、自分が本当にしたいことを、あわ居の力を借りて確かめに行きたい。

——わりと今、順調といっか、自分の欲求に素直になれてるみたいなおつしやつていましたが、それも確かめに行きたい……。

そうですね。たぶん人つて日々変化しているから。自分らしさつていっ芯の部分はありつつも、常に流れていると思つています。今の自分つて、その流れの中でゆらゆらしていると思つています。そこをキャッチしに行きたい。あんまり変わらない本来の自分は取り戻しつつあつて、それはそのままだと思つていっけど、ゆらゆらしながらいる自分を確かめに行きたい。こう

だと自分が思つていても、それも色々動いていっと思つていっから。リアルタイムな自分をただ見つめに行きたい。あわ居で過つした方がその精度が上がる、といっつと語弊があるかもしれませんが、でもそんな難しいことじゃないんです。単純にそれを楽しみたいだけつです。「こう思つてたけど、実はこうなんだ」つていっふに。アートの作品を見るのと同じつですよ。自分自身をもつと知つていっく、今の自分をキャッチしていっくの、あわ居に行つてそれをした方が、自分で考えているより楽しい。

——鏡のようなイメージでしっか。

そうそう。すごく楽しかつたんだと思つていっます。自分を知つたといっのが。私は、固定観念が壊されていっくような体験がすごく好きなタイプだから。それに対して怖いつていっくのはなくて、むしろその体験を重ねて人生を過つたといっくタイプなつです。あわ居で自分自身に対しての固定観念をぶち壊してもらつたといっか……それがすごい楽しかつて。だから何か悩んでるとか調子が悪いから行つていっくよりは、本当に些細なことでもいいから、そういうものを見にいきたい。何か新しい作品とか鏡を見るみたいなおつなかもしれないつですね。こうだと思つてたけど、ちよつと違つていっく。大きいことじゃないから、またそれを見たいといっく。

——自分の中にあるのに、まだ見えていないもの、あるかもしれないものが、映し出される予感があるといっか……。

そうそう。だから一回行つたからもう終わりとかじゃなくて、なんか定期的に行きたいくなるような感じがしまつたね。

インタビュー実施日…2022年5月6日

聞き手…岩瀬崇（あわ居）

# 「テンポが崩されて、少しずつ自分のリズムが出てきた感じがします」

1987年生まれ / 2020年10月に「ことはが生まれる場所」を体験



—もう一年半くらい前になりますが、あわ居での時間などのようなものだったか教えてください。

もともと友人におすすめされて、言われるがままの来訪だったので、良い意味であわ居の場に対して、イメージしすぎているところがありました。そういう意味でもあわ居での体験は、驚きに満ちていたように思います。何かを受け取ろうとか、サービスを受けようといった態度ではなくて、ここは自分も働きかけていく場なんだということをすごく意識したところがあった。それが面白かったし、すごく緊張したところでもありました。

—緊張ですか……。

時にも自分はそうしてしまうところがあるのですが。

—なるほど……食事や対話の場で特に印象に残っている場面などはありますか？

当日の対話の中で特に話したテーマが即興性についてでした。例えばワークショップを例にして、ルール通りに動いたり、台本通りにやるだけではなく、想定を超える動きや即興性を持たないと、良いものにならないのではないかと話をしました。あとはサービスとホスピタリティの違いの話。人を喜ばせることや、自分を表現するといったところの話をしているなかで、徐々にその辺りに自分が大事にしたいことが渦巻いているんだなあとこのことを感じていました。

そうした流れのなかで、美佳子さんがサササッと出てきて、「さっき即興性の話をしていたから、私もアドリブで作っちゃった」と言いながら、柿と海苔と春菊のかき揚げを出してくれました。「海のもの、山のもの、果物が合わさっているし、予定にもなかったし、正直味もわからないけれど、さっきの話を聞きながら作って見たよ」と。その料理を頂いた時に、今までの話の流れが回収されたような気がしたんです。

これは僕自身のキャラクターや性格もあるのですが、妙にサービス精神が旺盛だったり、相手が欲しがっている話題や流れを演出したがつてしまう部分がちよつとあるんです。だからあわ居は、僕が受け取るだけではなくて、対話や相互関係を通して何かが生まれる場なんだって思った瞬間に、すごく肩ひじを張ったんですよ(笑)。なんとか良い時間にせねばならぬとか。仮に僕を値踏みされたときに、ちよつとでも面白い人って思ってもらいたいなとか(笑)。そういうスイッチが入りそうになる緊張感でした。自分を大きくみせようというか。魅力的に思ってもらいたいのために頑張る。素じゃなくて、ちよつと鎧を身に纏う感じ。こういうのは、仕事上でのプレゼンテーションの

予定通りのレシビヤ、献立を出すだけでは、美佳子さんの中で、何かが満点じゃなかったのかなって。でも正直チャレンジじゃないですか(笑)。食材の組み合わせもそうだし、予定にない料理を作ることも。全てにおいてチャレンジングなのに、それを怖がらずに表現してしまっている。それまで対話の中で話していたことが、「要はこういうことかもしれない」というかたちとして最後に出てきて。そのことが自分にとって面白かったんですよね。「あ、こういうことか」と。実感を伴って受け取れた瞬間に、なにか面白さを感じました。

—面白さ、と言うと……。

なんだろうなあ。ニヤニヤしちゃう感じとか……でもエントナーテイメントという感じではなくて……ちよつと待ってくださいよね……でもあの瞬間がすごく印象的だったのは確かなんです。なんなんだろう……少し話がそれるかもしれませんが、まず、対話に関して言えば、何かを決め打ちして話すというよりは、良い意味で散らかしてくれましたよね。「こういう話をしたら話が深まるかも」というところにフォーカスして、その都度、崇さんはスツといろいろな話題を差し出してくれました。それが自分に合う場合もあるし、もちろん合わない場合もあるんですが。だからこそ、深く深く内面に潜れるような対話になっ

たという記憶があります。

その流れの中で「一番自分の出力が高くなるやり方やスタイルを見つけた」という話になったんですよ。美佳子さんが「私はいろいろ職を転々としてきたけれど、料理という方法が一番出力が良いのよね」ということを話してくれて。「絵を描くことには終わりがなくて、次の日にまた書き足したくなっちゃうけれど、料理って食べられたらそこで終わりだから、その潔さが私の出力に合ってると思うんだ」といった話をしてくれた。

そうしたなかで、「自分にとって、一番気持ちのいい出力の仕方って何なんだろう」という問いが、あの時自分の中に浮かんできていたんです。あとは「自分がワークシヨップをひらくときの、自分なりの一〇〇点の取り方って何だろう」という問いも生じていた。対話や流れのなかで、そういう問いが、ポンポン出てきていたんです。そんな自分の前に、美佳子さんやあわ居なりの解答として、ひとつの仮説として、そのかき揚げが出されたように自分には思えたんですね。それが面白かった。謎が解けた感じがした。「こういう形も一つの答えとしてあるよな」って。

——かき揚げというモノを受け取りつつも、そこに何

まずは自分を満たしてあげないとダメだよっていうところを、お土産してもらったなあと。それは夜の時間だけではなく、翌朝の朝ごはんの時間も含めてですね。もっと自分を満たしてあげたい。それをしないと相手から奪われてしまう、ということとをひしひしと感じました。相手側に矢印が向き過ぎて、相手を悪者にしたと思うていたモードから、自分を満たす方向に矢印を向け直す。そうすれば結果的に、相手に向ける矢印の性質も変わるんだろうなあと。

その理想形については、もともと半分は気付いていたと思うんです。でもそこが直視できていなかった。半分は自分が変われば解決したかもしれないことも相手のせいにして、相手が悪いと決めつけて。自分の変えなきゃいけないところや悪い部分をあまり直視していなかった。でも対話だったり、食事だったり、一人の時間も含めて、もっと自分を満たしてあげれば大丈夫かもしれないという気持ちが出てきた……そうですね……半分は気付いていたけれど、ちょっと目を背けていたところを受け入れた感じはあるのかな。自分を表現してみるとか、自分を殺さずに内側にあるものを一〇〇%出力することができれば、他の人にも寛容にいられるんじゃないかって。だから僕は、あの時のかき揚げのように、もっと自由に、即興性をもって「やっちゃった！」みたいなおちゃめさを持って、表現した

か違うものを受け取った感じというか……。

そうですね。自分の性格もあるけれど、頭や心がすごく回転するわりに、手足が動いていない時がけっこうあるんです。変に哲学してしまうと言うか。すごく考えているのに、出力が良くない状態が多くなる傾向がある。そうしたなかで、ひとつの出力の形としてかき揚げが出てきた時に、「自分も何か表現したい」とか、「何かを外に出してみたい」という感覚が芽生えたんですね。難しく考えずにやってみたら良いのかもしいっていう、カジュアルさを感じた。「良い時間にせねば」とか、「相手を満足させる時間にせねばならない」とか、そういう思い込みを背負い込んで、難しく考えすぎていたところに、「気軽にやってみよう」というモードに入れた感じがあったんです。自分の今後のふるまいや行動そのものに、気楽さが生まれた感じがあった。

ちょうどその頃は、人間関係で色々あったりもして、モードが暗めだったんです。その問題に向き合わなければとか、抗わなければとか。そこへの意識が強かったんだけど、少し楽になった感覚があった。つき物がポロツと落ちた感じ。自分のなかの満たされていないものや、根本的な部分が見えた気もしました。人間関係において、その相手がどうこうっていうよりは、

いなくなって思えたんです。そこが整理された気がする。

——良い意味でわたしたちが自分のベースでやっているところの作用もあつたのかもかもしれませんね(笑)。

あわ居という空間や場に対して、二人が選んできたこと、意思決定してきたこと、逆に選ばなかったことについても色々と感じていました。ひとつひとつに意志が宿っているし、「これでいいやー」って妥協していない部分がすごく刺激的だったんです。意識が行き届いている。それを感じたのも大きかったですよね。夕食が始まったときに、崇さんが目の前に座っておしゃべりをはじめるとか(笑)。「え、今？」みたいな驚きがあった(笑)。ただ、それは崇さんがそういうスタイルを望んでいるということ。食べる人からすれば、ちょっと緊張するんだけど(笑)。あと、美佳子さんが料理を出すベースもゆっくりでしたよね、それが心地よくもあつたのですが(笑)。それらいろいろを含めて、二人のペースだったんですよ。それによって良い意味で、自分自身のペースがかき乱されていった。ある意味、術中なんだろうけれど(笑)。空間の作り方や時間の使い方も含めて、全部が面白かった。

——興味深いですね。あわ居のベースやあわ居の基準

でその場が展開されていて、そこでは確かに普段のご自身のペースが乱されていた。でもそこでふっと力が抜けたり、自分も表現を試みようかなとか、自分を大事にしようかなという感覚が立ち上がってきた……。

そうですね、それはすごくあるかもしれません。どのタイミングか分からないですが、対話の途中で、カッコつけようというモードも多分なくなっていました。良い意味で乱された。僕は沈黙がすごく苦手で、何か喋らないといけないんじゃないかって焦ってしまう。でも崇さんや美佳子さんは、沈黙も良しとしてくれた。僕にとってはそれもペースを乱してもらっていたということだと思います。「会話のキャッチボールだから、沈黙はダメだ」っていう、いつものモードじゃなくても許してもらった感じ。

——乱されているんだけど、乱されていないっていうふうにも捉えられそうですね。

ですよね、逆ですよね。あ、今あの場で話したことをふと思いついたんですが、テンポとリズムの話をしましたよね。テンポは時計が刻む一定間隔なもの。リズムは自分の気分や体調から織りなされる有機的なもの。僕があわ居を訪れた時は、テン

ではなく、自分自身のリズムに乗ったら、気持ちよく一日を過ごせた感覚があった。あの時は不思議な気分だったんですね。体内時計というのかな。なんか自分のリズムが刻めるようになったというか。自分でコントロールしようというよりは、「今来ている波に乗ろう」という気持ちで時間を過ごせた。体質がちよっとだけ変わった感じが、あわ居を去った後も残っていた気がする。

——面白いですね、リズムで生きている時は、即興的に外からの働きかけに応じることが必要になる。一方でテンポで生きている場合は、どちらかと言えばあらかじめ設定した目標や動き方を、いかに効率的にできるかという部分にフォーカスしているのかなという印象を抱きます。

確かにそうですね……あわ居で過ごす時間の中で、自分のテンポが崩されて、少しずつ自分のリズムが出てきた感じがします。テンポで生きている時は、指揮者になってしまふんですよ。テンポを乱さず、ととのえていく。ズレずに進んで行くと気持ちが良いといった感じで。でもリズムで生きている時は、大きな流れの中で、波を捉えてふるまおうとか、次の一步を踏み出そうってなっている気がします。だから、自分のリズムで生き

ぽで生きているモードに入ってしまったかと思っていて。テンポよく話したり、食事の時間もお風呂の時間もテンポよく過ごさなきゃって。テンポの視点からあわ居での体験を見れば、「いやいやこんなゆっくり、遅くまで食事するってどうなのよ(笑)」ってことになるのかもしれない。でも、リズムの視点からすれば、すごく心地の良い時間が流れていた。沈黙を許してくれたら、言葉が待ってくれるところも含めて。むしろ自然というか、良いリズムを刻めた気がする。

翌日の朝も、朝ごはんが出てくるのがゆっくりでしたよね(笑)。話が弾んだこともあり、食べ終わった時には、予定の1時間くらいオーバーしていました。しかも食べ終えた後に時計を見たら、時計が止まっていたんですよ(笑)。「ああ、時空のゆがみはここにも現れているな」と(笑)。面白かったのは、その後もリズムを大切にしながら過ごせたことです。あわ居を出て向かった石徹白洋品店でスタッフの方と楽しく話をしていたら、一日に数本しかないバスをタイミング悪く逃してしまっ

けれど、「今からちょうど、郡上八幡に行くから、乗っていきなよ」とスタッフの人が声をかけてくれて。無事、目的地に到着することができました。バスに乗れなかったおかげで、その後の予定もとんとん拍子に進んでいった。時計のテンポで

ている時は、自分中心ではなくて、目線がもう少し高くなっている。「今大きな流れがこうなってるから、こう動いたら気持ちがいいかも」みたいな感じなのかな……今この瞬間の波に乗ろうっていうイメージというか……。

——そう考えるとあわ居のペースというものは、なんらかリズムによって構成されているものなのかもしれないですね。

そうですね。それはとてもありますね。沈黙の時間もそうですし、言葉が発されるのを待つてくれることは、テンポを重視する生活においてはありえないですね。テンポだったら乗り遅れちゃう。誰も待つてくれない。沈黙は許されないのですからでもあわ居には、僕のリズムを尊重してくれるような感覚があった。対話の展開の仕方も、答えを焦らせないですね。

あわ居のお二人と一緒に時間を過ごすと、自分自身の体内の時間の刻み方がちよっと変わるんだらうなあ。社会とか他人のペースに巻き込まれて、自分のリズムが聴こえなくなつた時に、思い出すのがあわ居なんだなって。僕があわ居に滞在した時に、ちよっと雨も降っていて、曇り空で、「今、何時なんだ？」って、時間かわからない感じがすごくあって。それがすごく居心

地がよかった。そこで別に正しい時間を知りたいわけでもなくて。あの変な感じが大事なだろうなあというか。

——そうした出来事があわ居であつたなかで、その後  
はどんな時間を過ごされたのでしょうか。

あわ居を出た後、友人に会いに多治見市に行きました。あわ居を出発した後、残りの旅の行程では、できるだけグーグルマップと、ヤフーの乗換案内、食べログは使わないって決めたんですよ。それらにすぐ頼りすぎていたし、決められたルールやルートの中かで、自分が安心しきってしまったって感覚があつた。それは誰かが決めたテンポに自分を合わせることだと思ふ。ツールに頼る一方で、自分自身のアンテナや感覚が弱っている自覚が芽生えていたんですよ。例えば食べログの点数を見ないと、不安で店に入れないとか。

そして、それらを使わずに時間を過ごすなかで、「なんかこのお店良い気がする！」って思つて入つたレストランが、当たり前だったんです。あとは、立ち寄つた図書館でたまたま見つけたCDショップの情報を頼りに、そのお店を訪れてみたら、店主と気があつて二時間くらい話し込んでしまつたり。気持ちよく話し終えて店を出たら、ちょうど新幹線に乗車する時間になった。一部で仕事がしづらくなつたり、うまく噛み合わなくなつたところもありましたね。それは僕の中では新鮮だし、良い意味で刺激的な出来事でした(笑)。

——そうした違和感にどう対応されているのかという  
ところに、とても興味があります。

どう処理すればいいんだろうなあって、悩んでいましたね。色々チャレンジはしました。平日はテンポで生きて、土日はリズムで生きるといったふうに切り替えてみたり。もつとアグレッシブに、ちゃんとリズムで生きるために、転職や部署移動も含めて今の仕事を見直そうとしたりとか。リズムに重心を置いたうえでテンポをコントロールできるようにしようとか。違和感や居心地の悪さといういろいろ戦いました(笑)。別の話で言えば、もともと僕は料理が好きなんですけど、それがもつと楽しくなつてきた気がするんですよ。リズムで生きられる時間が料理の時間になつてきたというか。そう思えたあたりから、自分のリズムで生きられる場所とか機会を確保するようにしているという意識が強くなつた気がする。ただ、それでもテンポ多めで生きてしまっていますが(笑)。

——なるほど(笑)。良い意味での葛藤が生まれたいう

なつていたりもしました。そんなミラクルが続いたのがすごく気持ちよかつたんですよ。あわ居を出てからも、自分のリズムや感覚を持ち続けることができ、その後も心地よく過ごせたとつていうのが僕の旅だったんですよ。

それで日常に戻つていつたわけですが、正直に言えば、そのリズムで仕事ができるかと言われると、現実問題、そうではなかつた。むしろ、すごい引力でテンポの世界に戻されるから、違和感がすごくある日々を過ごすことになる。窮屈な感覚がとて強かつた。ただその違和感自体が、すごく有難いことだと思つています。それまでは自分の仕事に窮屈さを全然感じていなかったんですよ。むしろ「便利だし、楽だ」と思つていた。

でも、あわ居で自分のリズムを少し取り戻した後だと、今の環境が気持ち悪いつて思っている。それが、僕のなかでとても新鮮だった。仕事もそうだし、人間関係においても。テンポを重視する環境がやっぱり不自然だつてことが分かつてきた。社会とか世の中は変わつていないんだけど、自分の見方や立ち方が変わったからこそ、感じる窮屈さや居心地の悪さといったものが増えたんです。増えてしまつた、とも言える。それは僕にとって、働き方や生き方を考えるいい機会だつたと思ひます。ただ、自分が仕事のテンポに合わせることが苦手になつた

で、そこをどう引き受け、どう昇華させるのかかとい  
う部分は、今も模索しているということでしょうか。

そうですね、葛藤は続いています。ただ原体験として、自分の中でそれまで信じていたテンポが壊れた瞬間の感覚は覚えてる。だから、「あ、今ちょっとテンポで生き過ぎている」とつていう時に、それに気づいてブレーキをかけられるようになっていくのはあるんです。けれど、あの時の、あわ居や岐阜で過ごしたあの時間を、東京で過ごす毎日の中で再現したいかと言えどそうでもなくて。自分にびつたりなりズムとテンポのバランスを作っていくために、あれこれと日々考えていますね。

あとは、僕と同じようにあわ居に滞在したことのある友人がいることが、自分の葛藤を前に進める助けになつてもいます。その友人たちと、時々あわ居のことを一緒に振り返つたりするんだけど、「あわ居のあの感じが必要だよな」みたいに、説明要らずで話を通じる(笑)。それを語る相手がいるのがすごく有難い。仲間との共通言語としてあわ居があるとえば良いのかな。あわ居での体験を一緒に語れる友人がいるっていうことがすごくうれしい。岐阜から帰つてきて、パートナーにあわ居のことがあつたのかを話しても、あんまり響かなかつたんですよ(笑)。あわ居での体験を、口で説明す

ることには限界があるのだと思います。一方で、さっき言ったような、あわ居で同じような体験をした友人が周りにいて、「そうそう、あれだよね」って言える共通のイメージがあることが、すごくうれしい。

—— 共通して体験した時間や空間があったとして、それはたぶん完全に一致したかたちでの体験ではないですよね。けれど、そこに分かち合えるものがある。

それぞれ、あわ居で感じたことや得たものは違うし、それぞれに持ち帰ったものがある。体験は千差万別で、全く同じ事を体験した人はいない。でも、あの空間、あの時間って良かったよねって分かち合える。日常にもっとああいうものを持っておきたいよねって。根っこは、みんな同じように感じているんじゃないかな。

インタビュー実施日..2022年5月11日

聞き手..岩瀬崇(あわ居)

## 「自分と空間が馴染んだ感じって言えばいいんですかね」

20代女性 / 2022年3月に「ことが生まれる場所」を体験

— 約一ヶ月半前のことになりましたが、Kさんにとつて

「ことが生まれる場所」はどのような場でしたか？

今までの人生のなかで、一番自分のことを他人に話した時間でした。そして今までで、自分のことを一番考えた時間だったなと思います。私はいつも忙しく生きてるので、自分に対する悩みが出てきても、その二秒後には違うことを考えてしまうんです。だから自分のことについて集中して考えるということも、今までしてこなかった。でもあわ居に行った時はすごく自分と向き合えた。あれほど人に自分のことを相談したり、自分の人生を一からふり返って話す機会は初めてだったと思います。

— 特に印象的だった場面などはありますか？

対話の時間ですね。主に仕事のことや人間関係で悩んでいるという話をしました。そのなかで、これまで自分がしたことの悪い行動を自分がすることに対して、自分自身が踏みとどまってしまう部分があるのではないかと、ということも強く考えさせられました。失敗することを恐れて、いつも同じAボタンを押してしまっている、それでいつも分り切ったAという結果が返ってくる、というサイクルを繰り返しているのではないかと……Bボタンもあるのに、失敗を恐れたり、不慣れた状況にいくのが嫌で、自分はそれを押しつけないんじゃないかって。対話のなかでそういう仮説が出てきた時

に、それはまさにその通りだなあと思ってたんですね。自分が求めていた言葉だったというか……自分ひとりでは見つけられなかった自分の問題点が、対話のなかから紡ぎ出されていった。そのことがとても印象に残っています。あの時は、とにかく自分のことに悩んでいて……何かを変えたい、自分を見直したいという気持ちがあつて……ありました。このままでは良くないから、解決策を見つけて出して、自分の人生を良いものにしていきたいという気持ちが強かった。その意味ではあわ居での時間はターニングポイントだったんですね。

— かなりの行き詰まりの感覚があつたのでしょうか

……。

ずっと円の中でぐるぐる回っている感覚がありました。「どうしたいんだろう、どうしよう」というところで、抜け出せなくなっていましたね。変わりたいっていうポジティブな気持ちはあるんですが、自分一人ではもちろん無理で……だから全く知らない人のところに行って、話をして、客観的に解決策を探ることが必要なんだなあと感じて。それであわ居に行きました。

もともと、友達や知っている人に悩みを相談するということが得意ではないんです。社会人になって、せっかく休日会っ

ているのに、その貴重な時間に私の悩み相談をすることが、向こうからすればつまらないだろうと思ってしまう……もっと楽しく時間を使いたいと思ってしまう。ネガティブなことを話すのが、私自身、好きではないんですよ。それに、相手が話したいこともあるわけですね。

だから、自分も腹を割って話せないし、友達に知られたくないことだつてあります。一方で、あわ居での対話では、それまで誰にも共有していなかった悩みを初めて話せました。そのことがすごく自分にとっては大きかったです。あわ居ではお金も発生しているので、「この時間は完全に私の時間だ」っていうところで、時間を気にすることなく話せたのも大きかったかなと思いますね。加えて、対話の質についても、気を遣われていないと言うと少し語弊がありますが、正直な返答をしてくださいましたよね。率直な回答や、本心からの言葉を頂いたということを思いますね。

— そうした率直な言葉が返ってきたことに対しては、  
どのような感情が芽生えましたか？

納得しました。「確かにそうだな」というかたちで……普段は他人に何か指摘されると心を閉ざしてしまう部分があるので

すが。あわ居に行った時は、はじめての人の対話ということもあるし、自分自身が路頭に迷っている状況だったから……良い意味でオープンな状態でいられたんですね。だからすつと言葉が入ってきて、一〇〇%素直に受け止められた。私が気づきたくなかった部分や、気づきたいとは思いつつも、認めようとしてこなかった部分が、言語になったことで、納得感がありましたね。とてもすっきりした。

言葉で整理ができたことで、あわ居から帰ってきた後、自分からアクションを起こすようになってきているのかなと思います。その移行はスムーズにいった気がしますね。それですべてが解決したかと言うと、そういうわけではないですが……新しい行動を起こす時のハードルが、自分の中では低くなった気がする。それはひとつの大きな変化だなあと。

例えば仕事に関しては、以前よりも丁寧に人と接するといふか……そういうことを心がけるようになりましたね。以前は、自分のために指摘や注意をしてくれる人がいても、それに対して私はイラついたり、無視をしたりしていました。でも今は、仮に一度イラッとしても、自分のなかに一度飲み込んで、色々考えたうえで、答えを出すということができるようになりました。まだまだ足りない部分はありますが……そこはひ

ももとの目的が自分のことを話したり、相談をするという部分にあったことも影響しているとは思いますが、それを差し引いても、自分と向き合うことに集中しやすい環境だったなど。あとは、私はモロッコに縁があるので、モロッコの話をしたりとか、モロッコ料理をあわ居で食べられたというところもとても印象的です。対話が大事な目的と言いつつも、ご飯もとても楽しみにしていたので。胃も心も満たされたっていう言葉があります、まさにそれだったなと思います。ご飯がとてもおいしかった。

——新幹線やバスなど乗り継いで、片道六〜七時間ほどかけて、あわ居にアクセスしていただきましたよね。そのアクセスの悪さについてはどのような印象でしたか？

私にとっては移動の時間もすごく大事な時間でした。もともと海外での滞在経験もあり、長距離移動に慣れている部分もありましたが、それ以上に、移動中に自分のことをじっくり考えたりして、向き合う状態へとだんだんセットされていった気がします。東京から離れるにつれて、だんだんと心が落ち着いていって……真剣に考えられるようになっていきました。確かに

とつ変わったかなって思います。あとは、自分の弱点が見つけたので……新しいものに挑戦しないことや、失敗することを恐れていること。それがわかったことで、そういう部分が出そうになった時に、自分で気をつけるようになってきていますね。あわ居に行くまでの状態に比べれば、確実に数歩進んでいるなあという感触があります。

——その他に印象に残っている部分はありますか？

あわ居の空間や石徹白という集落の中で、時間を過ごしたということ自体がとても印象に残っています。一言で言えば、非日常的な体験だったのだと思います。例えば、いつも暮らしている場所からすぐのマンションの一室で対話をしたとしても、日常から地続きな気がして、なかなか良い時間にならない気がするんです。なので、まずはあわ居という遠く離れた、初めての環境に行つて、一泊するということがとても大事なことだったのだと思います。あわ居の周りにはお店を含め、刺激的なものやほとんどないですよ。もし周りにかわいいお店があったら、大事なことを話した後でも、そちらに気がいってしまって、話した内容を忘れてしまうということが起きうると思うんです。その意味でも、あわ居や石徹白は、目にも心にも優しく、ずっと自分がゼロに還れるような場所だと思います。

道中は長かったです、全く負担には思いませんでした。

こうやって（オンラインで）インタビュウを受けている今も、家の近所で工事をしている、雑音が部屋まで響いてくるので……雑多な環境にしていると、イライラしてしまったり、うるさいなあと思ってしまう……集中力も削がれてしまいますよね。でもあわ居や石徹白は本当に静かで、自分を邪魔してくれるものが何もなく。だからこそ、落ち着いて考えることができましたし、考えていない時間は逆にリラククスして時間を過ごすることができました。その意味では心が落ち着いていた時間でもあった。たぶん、私は普段、常にイライラしてしまっているんですよ……日常でイラッとするポイントが多いから、心が忙しく動いてしまっているんです。加えて、あれもしなければ、これもしなければというふうに、常に考えてしまつて……ストレスを抱えているなあ……。

——あわ居の空間についてはどのような印象をもたれましたか？

周りが川に囲まれているので、館内でも常に水の音が聴こえますよね、それがとても良いなあと思いました。薪ストーブも心地よかったですし、館内の照明もすべて落ち着いた色でした

よね。家や会社にあるような真っ白な蛍光灯だと、「何かやらなきゃ」とか「仕事をしなきゃ」といったふうに自分はなってしまうのですが……そういうことが一切なかった。入ってすぐの土間やダイニングの部分も、余計な物が一切なくて、とても落ち着ける空間でした。私、ほんとに落ち着いたんですよ……入った時の感動から始まって。部屋に入って少し時間が経っただけなのに、もうずっと自分がこの場にいたかのような……そんな落ち着きを感じました。初めて来た場所だっという感じがまったくしなくて……自分と空間が馴染んだ感じって言えばいいんですかね……自分がよそ者じゃない感じ。例えばホテルにいると、自分はよそ者だなんていつも思うんですが、あわ居ではそういうのが一切なかった。あれだけ空間に自分がフィットしている感覚は、自分の人生のなかで初めてと言っても良いと思います。

あとは、あわ居のご家族とも一日同じ建物にいたわけですが、それに対しての抵抗や違和感も全くなかったです。例えばホテルだと、隣に人がいても全く知らない人が泊まっているわけですよ。ホテルの廊下で人とすれ違ったり、ホテルの部屋に従業員が入ってくることで、普通はストレスを感じると思うんです。一方、あわ居は、普段みなさんが家族で住んでいる家に泊めさせてもらうという形態になっていて、普通に考えれば、

朝、顔を合わせたたりもするし、接する場面も多くて、そこには違和感があるはずなんです。でも、そこへの違和感が全くなかったんです。そういう意味でも、自分はそこに馴染んでいたんだと思います。家族の一員になったような感じもあって、安心感がありましたね。何も気にしなかったし、気にならなかった。

——最後にあわ居について、なにか一言いただけると嬉しいです。

あわ居とはとにかく環境が素晴らしいと思います。自然があって、川に囲まれていて、古民家で、といったハードの部分での環境がまず一つ。もう一つは、自分のためにじっくり向き合っている話を聞いていただけという意味での環境ですよ。その環境の中で自分を見つめなおす経験ができたということが、自分にとってかけがえのないものになったと思います。精神状態がかなりしんどい時期だったので、悩みを吐き出して、軽くなっただけ……あの経験があって、今はわりと心が落ち着いている状況なんです。私にとってあわ居は、悩みや問題がまた出てきた時に、また頼りにしたい場所ですね。だから気軽に行く場所ではないと思います。もし必要な時期がきたらまた伺えればなと思っています。

インタビュー実施日…2022年5月21日  
聞き手…岩瀬崇（あわ居）

『あぁどうしよう』『って気持ちがるわぁーってわき起こっていた』

佳祐さん…1989年生まれ/麻梨子さん…1990年生まれ  
2022年4月に「こぼが生まれる場所」をご夫婦で体験



■佳…佳祐さん  
■麻…麻梨子さん

——「こぼが生まれる場所」に「夫婦で参加されるから、約一ヶ月ほどになりますが、当日の時間はお二人にとつてどのようなものでしたか？」

■麻…もともと申し込みをさせてもらったのは私だったので、当初は、私自身が今後どう生きていきたいだろうかという部分についてのお話をまずはひとつしたかったのと。あとは郡上市に移り住もうと私が言っているなかで、「佳ちゃん（佳祐さん）は本当にそれで良いのだろうか」という部分の話ができて

ばいいなあと思っていました。当日お話をしていくなかで、「どちらかというとお二人の関係性や、お互いにどう思っているかという部分を、しっかり対話した方が良さそうですね」と崇さんが言ってくれて、夫婦二人の話や、佳ちゃんが本当はどう考えているのかという話に移行していきました。

普段、二人だけで話しても、なかなか難しいところがあるんですよね。私が「どうかな？」って聞いても、佳ちゃんは「大丈夫」とだけ返答して、そこで終わってしまう（笑）。でも、あわ居で崇さんや美佳子さんが入ることで、「本当にそう思われていますか？」というかたちで彼に突っ込んでくれたり、私たち二人の対話の流れをサポートしてくれたりするなかで、じっ

くりとお互いの思っていることを出しあえた。そこが自分としては大きかったなあと思っています。

あわ居の雰囲気に加えて、石徹白という場所が持つ力もあると思うんです。あそこから話せた側面もあったんじゃないかなって感じています。もちろん思っていたことの全部が解決したかって言われると、そうではないんですけど。でも私がその時に気になっていることは聞けたし、佳ちゃんとこれからどう歩んでいこうか、二人で考えるきっかけになりました。はじめの一步を歩めたという感覚がありましたね。

居の時間を通して少し知れた。あとは僕自身に対しても色々質問をされたり、じっくり話を聞いてもらったりすることで、自分の気持ちや思っていることを言葉にする良い機会になったなあと思います。

■麻…これまでぐっと踏み込んだ話をしてこなかったんだと思います。自分自身にも踏み込んでほしくない場所があって、そこに踏み込まれそうになった時に、私は少し距離を置いてしまいたくなってしまふ。だから佳ちゃんに対しても、もし私が嫌な踏み込み方をしてしまったら、同じように距離ができてしまふ気がするから、そうなるのは嫌だなあって。だからどう踏み込んだら良いのかわからず、じたばたしていたところがあった。

■佳…僕の場合は、あわ居について「色々話す場所だよ」という程度にしか聞いていなかったもので、正直ちょっとびっくりしましたね。けっこう長い時間喋るんだなあ（笑）。でも居心地はすごく良かったです。普段住んでいる家で、二人でご飯を食べていても、あの時のあわ居でしたような話はこれまでしたことがなかった。僕が自分のことを自分から話すことなんて、めったにないんですよ。いつもは、りいちゃん（麻梨子さん）が九〇％話して、僕は一〇％くらい。普段はそれが僕にとつて心地良いから、それで良いと思うんですけど。ただ、りいちゃんからすれば、あまり僕のことを知れないっていう残念さがあるのかも。そのあたりのりいちゃんの気持ちがある

でも、あわ居で話したことで、「あ、ここまで聞いて良いんだ」って分かったり、逆に「ここまで踏み込んで話をしていかないと、これから二人で関係を築いていくのは難しいだろうなあ」って思いましたね。結婚してまだ一年も経っていませんが、夫婦って言うよりかは、まだカップルなんだなって。これから共に歩んでいくパートナーなんだろうところに対して、自分の中でも少し意識の切り替えがありました。「嫌われたくないから、ここはつつかないでおこう」ではなくて、ちゃんと二

人で歩んでいきたいからこそ、踏み込んだ話をするのって大事なんだなあって。お互いが「こういう話はした方が良いよね」という部分の認識についても、すり合わせができたんじゃないかなって思います。

ただ、話していくなかでは怖さのようなものも感じて。「これ以上踏み込んで、関係性が壊れたらどうしよう」という恐怖ですね。私は親とも、友達とも、仕事仲間とも、喧嘩が苦手なタイプです。仲直りの仕方が分からないんですね。佳ちゃんともこれまで喧嘩をしたことがない。だから、この話をし続けて、彼との関係性が壊れてしまった時に、どうやって関係性を持ち直して良いかがわからない。だから対話が展開していくなかで、「ああどうしよう」とって気持ちがあわあーってわきこつていた。

でも、後から「あ、私は今まで嫌われるのが怖くて、そこに踏み込めていなかったんだな」とっていう気持ちもありました。それで、次の日の朝に二人で散歩した時に、「楽しいことは二倍に、つらいことは半分に」とっていう自分がイメージしている家族の形の話をしました。しんどいことを片方が抱えているということに対しての、自分の中の違和感や、さびしさがあったから。

■佳…僕自身は、あまり踏み込まれたなあっていう印象はないんです。もともと自分の中に話したくないことはないと思っているから。でも、今まで話したことがないから、どうそれを言葉にして良いかがわからないっていうことはたくさんある。「本当にそう思っているんですか？」って深く突っ込んでもらえたことは、たぶんここ十年くらい、なかったような気がしています。すごく久しぶりな感覚でした。自分起点で深い部分を話すことはないけれど、でもどこかで「知ってほしい」とっていうふうにも自分は思っているのです。そういう意味で、自分が話したくないことを聞かれた場面はなかったかなあって。自分の中の言葉にできていないところを言葉にすることを、手伝ってもらっていたっていう感覚ですかね。

——言葉にすることを手伝ってもらっていた感覚があつた

たという部分について、より詳細を聞かせていただけますか？

■佳…まずは空間が大きいですよ。石徹白の雰囲気もそうですし。あわ居の扉を開けた時の印象や、館内の照明、料理、静けさ。環境すべてが、落ち着いて話ができる空間だったなっと思えます。

んなことないよ」とって返答をしてくる。それに対して私は「あ、そっか」と納得して、そこで話が止まってしまった場面がありましたよね。その時に崇さんが「本当はどうなんですか？」って彼にツツコミをいれたり、踏み込んでくれた。第三者だからこそ見える違和感を、ちゃんと場に返してくれていた感じがありました。だから、二人だったら「あ、そっか」で終わってしまったって対話が、ちゃんと展開していった部分があったのかなあって思います。

これまで「あ、そっか」で終わってしまったのは、それ以上踏み込んで「嫌われたくないなあ」とっていう気持ちがあったのと、もう一つは踏み込む言語がなかったからですよ。本当は聞きたいことがあるんだけど、どうやってそれを引き出せば良いのがわからなかった。だからあきらめてしまっていたんだと思います。例えば「うん、そうだよ」とって返事があったとして、その言葉の裏にもいろんな思いがあるわけですよ。その裏を聞こうとして質問をするんだけど、違う部分に対しての返答をされてしまつて。「あ、聞きたいのはそこじゃないんだよ」とって(笑)。あわ居からの帰り道に車で佳ちゃんと話していたのは、「りいちゃんは質問の仕方が下手くそだよ」とっていうことでした(笑)。その言葉ももらったので、そこは頑張りたいなと思っています(笑)。

■麻…あとは、普段の食卓もそうなんですけど、相手と向かい合っていると、相手の顔を見て話すことになるから、けっこう緊張するじゃないですか。だけど、あわ居だと、隣に崇さんがいて、前に佳ちゃんがいる配置だったので、少し話しくいこととは、崇さんの方を向いて、崇さんに投げれば良い(笑)。直接のボールの投げ合いが夫婦間で行われるんじゃないかと、崇さんを経由することでキャッチボールがちゃんとできた感じがありましたね。私は感覚的に伝えてしまうタイプで、話を聞いた佳ちゃんが「よくわからないなあ」と理解できないことがよくあるんです。でも、そこに対して、崇さんが「それはこういうことなんですかね？」って言い換えをしてくれたり、伝え返しをしてくれましたよね。通訳って言えばいいのかな、そういう要素があったから話しやすかったんだと思います。特に佳ちゃんはそうだったんじゃないかな。

■佳…そうですね。崇さんが通訳をしてくれていた感じがする。りいちゃんの言葉を、崇さんが言い換えをして、それが僕に届いてくるっていう感じ。

■麻…あと、今話して思い出したのが、私が佳ちゃんに對して「こうなんじゃないの?」って聞いた時に、佳ちゃんは「そ

——それまで運用してきたお二人のコミュニケーションのパターンがあったとして、あわ居の時間のなかで、そのパターンの故障している部分が見えたり、更新するきっかけのようなものが見えたという感じもしますね。

■佳…そうかもしれないですね。あ、あと今ぱつと浮かんだのは酵母菌ですね。酵母菌が入ると醸造や発酵が起きるじゃないですか。あわ居は、そういう発酵するための媒体のような感じでしたね。酵母菌が入ることで、全然違うものが生まれてきた感じがありました。

——そうした時間があわ居であったなかで、なにか日常に変化などはありましたか？

■麻…あわ居の時間があって、直接的にこうなったということとは言えないんですけど良いですか？

——はい、もちろんです。

■麻…まずは八月に郡上に移住することを決めました。八月に移住、九月に結婚式をします。移住や結婚式にあたって

のお金の話とか、家を買う、買わないといった話を、二人でちゃんと向き合いながら、最近し始めています。あとは、私は「tsunagi」というお店を月に一回のペースで運営しているんですが、それを郡上でどうするのか、また、次の仕事をどうやっていくかという部分に対しても、二人で話をしています。そのなかで少し感情的になることもあるんですが、その感情的な部分に対して「こういうことだよ」って伝え直したりするようにしていて、なるべく諦めないかたちでコミュニケーションをとろうっていう意識の変化はあったように思います。

あわ居に行く前は、「佳ちゃんが本当はどう考えているのかわからない」っていうマインドでした。でもあわ居の時間を通して、佳ちゃんが私のことを純粋に応援したいと思ってくれていることがわかった。一方で、あわ居の対話の場でも少しお話しした、佳ちゃんの奥底にも本当はやりたいことがあるんじゃないかという部分については、例えば移住先の郡上で出会う人や周りの人との関係性のなかで、彼の中にやりたいことが芽生えるんじゃないかと考えることができるようになりました。これまでは、私と佳ちゃんとの関係性のなかだけで、それを解消しようって思ってしまったんだなっていう気づきがありました。

か変化などはありますか？

■麻…そうですね…その先を問いかけたり、つかみにいくやりとりはまだ完全にはできていないのかもしれないですね。例えば「今日どうだった？」って聞いて、「良い感じだったよ」って返ってくる。その「良い感じ」の裏にあるものを、より深く問いかけるコミュニケーションは、まだしっかりとできていないと思います。でも、自分自身が嫌われたくないから、ここで話をストップしようっていうコミュニケーションのやり方は捨てて、ひとつ踏み込んだ質問をしていこう、先を掴みに行こうっていう気持ちは前よりも確実に出てきています。

あとは、あわ居での時間のなかで、自分自身が本当に思っているところであったり、弱い部分の気持ちもさらけ出すことができたから…そこはわりとスムーズに話せるようになってきていますね。「ここは淋しく思ったよ」とか「あの時のあの言葉はひっかかっている」とか、今までだったら言わなかったことも、ちゃんと意識して伝えることができていいのかなあ。まだ一ヶ月しか経っていないので、全部が全部そうではないと思いますけど。

——まずは一緒に考える時間が増えたということですが、ね。その時の話し合いの深さについては、これまでと何

対話の中で「仕事の悩みや相談したいことは友人に話してるし、りーちゃんにはその部分は求めてない」と佳ちゃんに言われて、少なからず、その時はショックだったんです(笑)。でも全部が全部、自分が担わなくても良いんだよなっていうふうにも思えてきていて。そのの荷物を降ろして、そのうえで、じゃあ私として、どう佳ちゃんと関わっていけるかなあという部分に視点が移ってきていますね。私と佳ちゃんが向き合うんじゃないかと、私と佳ちゃん、どういう未来に向かって行けるかなあって。これまでは、私と佳ちゃんが向かい合って、私が佳ちゃんに対して何をしてあげられるんだろうって思っていたんですよ。でも今は、私が佳ちゃんの全部を解決するとか、良い方向にもっていくとかするんじゃないかと、夫婦としてどういう関係性や暮らしを作っていけるかなあっていうふうになってきています。

■佳…未来の話をすることや、二人で一緒に考える時間が増えたなっていうふうには思いますね。それがあわ居の時間を通してなのか、これから移住や結婚式が控えているからなのかはわからないし、どちらもあるとは思いますが。

かもしれないなあ。

■麻..でも、自分のことを喋ろうとしてくれているのかなあ。というのを感じるけどね。あとは、私が悩みを相談したときにも、「それはどうしてそう思うの?」とか「もつところしたら良いんじゃない?」みたいなかたちで、かなりがつつり指摘をしてくれるよね。今までだったら、ツッコむと私が不機嫌になってしまうから、不機嫌になるくらいならツッコまないっていうパターンになっていた。だから私がお機嫌でいるために、佳ちゃん「うんうんそうなんだね」って聞いてくれてたんだと思う。でも、最近、そういうコミュニケーションが減っている印象がある。多少、私がお機嫌になっても、より良くなるためにはどうすれば良いのか、お互い入り込んで話をしたり。

■佳..そうかなあ...自分としては、そこまで意識して変えている感じはないですし、意識的にこうしようってやっている部分はあまりないけれど、もしかしたら無意識のところ、コミュニケーションのやり方が変わってきているのかもしれない。僕が気づいていないだけで。あとは、りいちゃんのコミュニケーションが変わったから、僕もそれに応答するかたちで、変わった可能性はあるのかも。でも僕の内面の話は、あの後も二人ではそんなにしていないですね。そこに関しては、これからやっ

ていくことなのかもしれないです。

——なるほど...少し話はそれますが、佳祐さんはご自身の言葉になっていないところを、省察し、言語化する場面があわ居の時間でたくさんありましたよね。そこには普段はあまり使っていない筋肉を使う感覚に近いものがあつたのではないかと推察します。そうしただなかで、自分の奥底にある気持ちとの関わり方について、その後、何か変化はありましたか?

■佳..自分でわがままに生きるとしたら、どんなことをしたのかなあ、どう生きていきたいかなあって考える時間は増えたような気がします。考えはじめたら面白くて、わくわくする。その結果として、「こんなことやったら楽しそうじゃない」って、りいちゃんに伝える回数は増えた感じがします。

■麻..たしかに、「郡上でこんなことやってみたら面白そうだよな」とか、「りいちゃん、こんなことやってみたら」とかというアイデアがぼんぼん出てきますね。前はそんな話はあまりしなかったけど。今は郡上に一緒に行くっていう共通の話題があることで、そういうやりとりが増えたのはありますね。

——少し変な言い方になるかもしれませんが、これまでの生き方や働き方を継続させていくのであれば、そういう夫婦間のコミュニケーションが必要ではなかった、とも言えるのかもしれないですね。郡上に移住するということになった時に、これまでとは違う夫婦間でのやりとりや関係性が必要になってきていた、そういうタイミングだったのかもしれない.....

■麻..そうですね。今聞いて思ったのが、あわ居に伺ったタイミングで、まだ郡上に移住することを一〇〇%決めていたわけではなくて、七割くらいは行きたい気持ちがありつつ、でも残り三割では「本当に住めるんだろうか」という気持ちもあつたんです。それで一週間郡上に滞在してみても、それを確かめてみたというところが大きかったんですね。それで、二人で郡上に住むことを具体的に考えるってなった時に、「彼の本心がわからないなあ」とか、「ここはちょっと切り出しづらいなあ」だったり。このままの自分や二人の関係性では良くないんじゃないかと感じていて。それもあって、あわ居に行きたいと思つたんです。そういう意味では、あわ居での時間が、夫婦関係で気になっていた部分を捉え直すだけでなく、移住に向けてもいいかたちで作用したなと思つています。

インタビュアー実施日..2022年5月29日  
聞き手..岩瀬崇(あわ居)

「そう、自分でも凝っているって

自覚があまりないんですよ」

1988年生まれ / 2022年7月に「ことが生まれる場所」を体験



— 早登美さんにとってあわ居での時間はどのようなものでしたか？

すごく必要な時間だったなあと思っていて、一人で行って本当に良かったなあと思って思います。今回は夫からの誕生日プレゼントというところで、あわ居での時間をプレゼントしてもらったんですけど、一歳と四歳と六歳の息子がいるなかで、まあ上の二人はともかく、一歳の子を置いて行くことに、最初はずつとそわそわしていました。

子どもが一歳ぐらいの時のお母さんの状態って、肌身離さず、長い時間赤ちゃんと一緒にですね、妊娠の期間も含めれば二年

くらい。物理的に一人の時間とか、自分の軸での時間の流れ方って、ほとんどなくて。そんななかで、やっぱり精神的にも色々ホルモンのバランスもあって、自分一人では自分のメンテナンスがしづらい環境に置かれているなあって思っていた。家庭内だけだとちょっと限界があるよなあっていう状況だったなあって。個人の人生の流れとしても、家族っていう単位での変化の大きさにしても、チューニングすることが多すぎて、私は当時いっぱいいっぱいでした。

いろんなところでめまぐるしく変化が起きている日常のなかではなかなか止まらないから、メンテナンスを諦めていたところもある。普通に何も意識しなかったら、止まらないままに、

日々をとりあえずこなしてこなして、っていうふうになるのが、ほとんどなんじゃないかなって思っています。そのなかで、すごくメンタルが鍛えられたり、誰かからみて素敵なお母さんっていうふうに映ることが仮にあったとして……それができるお母さんってけっこうすごいなとは思っています。赤ちゃんといると、それだけで「ああ幸せだなあ」って思ったり、「もうこの他に何にもいらんじやないかな」くらいに思ったりすることもある。でも一方で、「これで良いのか？これだけで果たして良いのか？」って思うこともある。「この子をとったら私じゃなくなっちゃう」みたいな感じというか……子どもだけが自分の存在を肯定してくれる、っていうふうにもなりかねないのを不安に思ったり。

そういつたことを考えているタイミングであわ居に行って、家族ではない人に、今の自分が感じていることや今の感覚を伝えて、それがどういうふうに映るかを伝えてもらったり、あわ居の本棚に手を伸ばして、そこに書かれたことから自分の奥底にある願いが読み解かれていたりして。すごくハッとさせられた時間だったなあって。ちよつと立ち止まる時間をもらえたことがすごく良かったなあって思いますね。

— 母親とか、妻といった日常の役割から離れた時間

だったという部分もあるのでしょうか？

そうですね。離れていたと思いますね。個としての私を、まっとうと受け入れてもらった場だなって思っています。「〇〇君のお母さん」とか「旦那さんの家族」っていうところをきつかけにして人と繋がるのが、郡上に移住してからはすごく多かったの……そうじゃない出会い方も大事なんだなって、すごいハッとさせられたというか。あわ居では、自分の感覚というか、自分はこういうことをしているのが楽しいとか、こういう本が気になるとか、そういう個としての自分の特性や在り方みたいなものだけから、そのまま交わられたなって気がします。その時間がすごく居心地が良かったし、身体がよるこんでいる感じがしました。

出産をすると、どうしたって赤ちゃんのお母さんとして居る時間が多くなりますよね。いつも抱っこしていたりとか、常におなかの中にいたりとか。常に赤ちゃんと一緒にの私という感じ。私だけで何か動くとか、私の軸でどこかに行くとか、そういうのはあまり……自由にしようとしても、思い通りにいかない。本当は行きたいけれど、「この子がいるなかで、あそこに行くのなら、この子と家にいた方が穏やかかなあ」って天秤にかけて行かなかつたりとか。穏やかに、この子といる時間が一

番っていう感覚に自分は産後なりやすいのかもしれない。それが決して悪いとは思わないんだけど、でもずっとそういう感覚ばかりだと、だんだん自分の感覚がボケていってしまうような気もして。それが怖いなあっていう不安はある。それでもやっぱり赤ちゃんと一緒に、私は子どもと自分を分けて考えられないし、あまり考えようとも思わないんだと思います。

——なるほど……普段とは全く異なる状況に置かれたあわ居での時間のなかで、だからこそ見れた部分とか、何か立ち上がってきたことなどはありましたか？

……うーんなんだろう……今もこうやってだっこしてまっすぐ、あの時は、物理的にも軽かったし……「ああ、なんかなんでもできる」みたいな……少し早めにあわ居に着いて別棟にさせてもらった時に、だんだんとひとりモードの自分になってきて、そこで過ごした時間がすごく良かったんですけど。「対話の時間で話したいことがあれば、何かメモとかメッセージで共有してもらえたら」っていうふうにその時に言われて。でもその時は、「自分の抱えているものとか、滞っている部分って何かあるかなあ」とぼんやりとした感じだったんですね。その後、本棟にチェックインをして、最初にお茶を出されて少しお話しした時にも「最近どんな感じですか？」っていうふうに聞いて

てくれましたよね。でもその時も、特に何もそういうものは出てこなくて……。

それで、食事と対話の時間が始まって。普通の一泊の一人旅行だったら、素敵な宿で、おいしいもの食べてみたいな感じで、それで終わるんだと思うんですけど……でも、子どもを含めて、いろんなものがとれている身軽な状況のなかで、いろいろとお話をするなかで、ひとりでは潜り切れなかったところや、自分の深い部分まで見にいった気があります。そういう深いところまで潜る環境を作ってもらっていたのかもしれないですね。自分の考えたいことに絞って話げできたのかなあ。チェックインの時点では、ただ私が一人の時間が欲しかっただけで、それだけで満足くらいな感じもあつたんですね。素敵なお宿とおいしいご飯、みたいな感じで、それだけで満足みたいな(笑)。でもやっぱりふたを開けてみたら、自分や家族だけでは気づけなかった、ぐつぐつしていた滞りがあふれてきて。手帳いっぱい言葉を書くことになりました。それが一番のおみやげになったなあって思いますね。

——空間になじんだり、食事や対話が進むなかで、だんだんとゆつたりとした状態に移行していったという感じなのでしょうか……そのなかで、「あ、ここが実は

ひっかかっていたんだ」とか「あ、ここに自分は何かを感じているんだ」という部分にフォーカスする構えに、段階的に移っていったのか……。

そんな気がします。○歳から一歳児を育てている時って、不思議な感じで、自分のことを大事にしたい気持ちもあるけれど、自分のことだけを考えているのも気持ちが悪く感じてしまつて。だから、自分のことを直接考えたりする機会を設けられると、「いやいや私は今そんなことを考えられるフェーズじゃない」とか、「今のままでオッケーなんだ」というふうになりがちな気がする。たぶん普通にお茶したり、子どもを連れて家族と一緒に、っていう状況であれば、仮に話をするにしても、「まあ、これは自分で解決すれば良いと思ってることなので」と言つて、解決策はもう自分で見えているっていうふう

ていうことですよ。自分はわりと自分の中で考えるのが好きなタイプだから、ある問題に対して「結局はこうなんじゃないの？」って、自分の中で一周して結論を出した気でした。自分でもかなり考えて、この答えに至っているから、それはもう終わったことだ、つてしていた。自分が作った仮説を信じすぎた部分があつたのかもしれないですね。

——「ご自身のなかである程度、「これはこういうふう」に解釈すればいいんだな」というふうに固定されたものに対して、あわ居での時間を通して違う解釈や視点が出てきたり、異なる光の当て方が生じたとか……ある種の「ほぐし」のようなものが起きたというふうでしょうか……。

でも実は本当は、自分の中では違った視点からの考え方が欲しかったりしている部分があつて。そういうものが崇さんや美佳子さんとの対話のなかでチラッと見えたときに、「何それ、すごい気になる、もっと聞きたい！」ってなつたんだと思う。すごい食いついた部分があつた。「え、そういう見方もあるの？」みたいな感じで(笑)。実はもっと知りたい自分が奥底に居たっ

ほぐし……そうですね……固まっていた何かほぐされたっていうことか……そうかもしれない。確かに。そうですね。ほぐされた感じ。あ、そういえば私、この間、無重力マッサージをやってきたんですよ、温泉で(笑)。その時も、「私は全然凝っていないから、全く必要ない。マッサージなんて全然好きじゃないから」と感じてだつたんです。でも、「すごい気持ち良いよ」とってみんなが言うからやってみたら、「確かに私、けっこう凝っていたかも」と(笑)。たしかにやったら軽くなったわっ

という(笑)。そう、自分でも凝っているって自覚があまりないんですよ。毎日こんなふうに子どもを抱えて、だっこして、おんぶして。身体的な凝りだけでなく、色々な人と出会えば色々な感情が動いたりとか、内側で色んな筋肉も使っているはずなの。

——そうしたある種のほぐしがあわ居の時間にあつたとして……特に印象に残っているエピソードなどはありますか？

三つくらいあって、一つは崇さんが話してくれた「事象は生ものだと思ふ」っていう言葉ですね。「生もの」っていう表現の仕方が、私のなかで、はっとさせられたなと思っていて。事象って向こうから働きかけてきたり、すごい重なって起きたりする、予期せぬものだと思うんです。自分の予期の範囲を超える出来事が、次々に起こるタイミングが生活のなかにあつたりして。その変化にけっこう戸惑うことが多いなあって思った時に、でも変化に戸惑い続けることが人生なんじゃないかって。時はいつでも流れていて、変化していくものっていうか。前はあんなにそうだと思っていたことが、今はこれだけか思わない、みたいなの。その繰り返しでしかないって言うんですかね。そういう変化を受け入れたり、変化を許す。自分が守りたいっ

れができれば、すごく自分が豊かになるなって思いました。誕生日にもう一つ、自分が大きくなる、自分を肥やすものを受け取ったなあって思います。

二つ目は、美佳子さんがされた心の純度の話ですね。色々な人との出会いがあるなかで、何を自分のなかに受け入れていくのかっていう話をしました。自分に必要なものと、そうじゃないものの見分け方とか……自分の守りたいものとか、愛したいものを見つけていくっていう話のなかで、「どんなことを大事にしているんですか？」って私が聞いたんですよ。そして美佳子さんが「心の純度を上げておく」っていう返事をされたんですよ。自分の純度がちょっと下がるような感覚がする場所とか物からは、あえて意志を持って離れたりと。あとは食べられているものの影響も大きい気がするとか、余計なことをしないとか。それを聞きながら、私もそういう心の純度を大事にしたいなあって思いましたね。ちょうどいま、岡野家は家の物を断捨離中なんですけど、もらったから取っておこうじゃなくて、そういう物理的なところもそうだし、人との関係性もそうですよね。そういうところも意識してやっていけたらいいなあって思うタイミングでした。

三つ目は、表現のあり方の話。あわ居本棟が、宿泊と食事だ

て思っていたものにしがみつくんじゃなくて、環境が変わったら、それに対応してちゃんと自分も変わりたいっていう思いが、ちょうどあの頃高まってもいた。

その頃自分に起きていた事象に対しても、ちょっと俯瞰してみる時間が、あわ居の時間のなかであつたんですよ。それは自分のなかで新しい視点が芽生えたタイミングでもあった。それで、「この感覚だとわりと生きやすいな」って思ったんですよ。起きてくることに対して、抗えば良いってものでもない。抗っても無駄な場合もある。でも何か起こった時にちゃんとそこに応えてから、流されるようにしようって、あわ居の時間のなかで思えた。ただ受け入れて、ただ流すんじゃないって。そこがすごくしっくりきたんですよ。

生ものだから、その都度の事象にも鮮度があつて、そこを逃してしまつたら旨味も抜けてしまう。どうせだつたらおいしいうちに、みたいな(笑)。そういう感覚をすごくもらつた気がしています。ハードルが高かつたり、調理するのが「ちょっとなあ……」って時は、おっくうになったりすることもあるけれど。でもそれを調理したらすごいおいしい珍珠かもしれない。自分がそれを食べたらすごく自分にとっての栄養になつてもっと元気になるかもしれないっていう感覚が芽生えた。そ

けでも本当に本当に素晴らしいのに、「そこでは完成していると思っていない、対話をしてはじめて表現として成立する」っていうお話をされて。それがすごく素敵だなって。建物として、レシピとして完成させてそれで終わりではなく、そこに人や対話に加わって始めて完成するっていう。場づくりとか対話のなかにしか出せない、その人らしさがあるっていうか……：それを活かし響かせて表現し続けていく在り方。それを体現している崇さんと美佳子さんに大きな感動を覚えました。表現という言葉に、ただただ引け目を感じている自分の何かをとかしてくれた気がします。

——なるほど……そういったことがあわ居の時間にあつたなかで、もちろん直接的にというわけではないとは思いますが、何か日常に変化などはありましたか？

生(なま)の事象に対しての反応の仕方は、すごく変わったかなあと思っています。すごく納得感を持ちながら、いろんなことを受け止められるようになってくる気はしますね。ひとつの事象があつた時に、都合の良いものだけを調理して食べる、っていうふうではなくなつた。えぐみがあるものでもちゃんと食

べる。そこに世界が私に対して働きかけようとしている何かがあるんじゃないかって。それが心の純度に繋がってくる気がしますよね。

甘いものだけ食べても良いはずなのに、なんでえぐみのあるものが目の前にやってくるんだろうって……もしかしたら自分が一皮むけるための、何かのかなって……それを受け止めたいと今は思っています。純度を上げるって話になると「甘いものばかり食べている方が純度が高いんです」という話もある気がするけれど、でもえぐみのある物が来ているのであれば、「なにかしらこれは調理しないとイケないなあ」という感覚が今はあります。そういうタイミングなんだろうなって思えるようになりました。

——引き受けるというか。来たらやるしかないんだ、  
みたいな(笑)。

そうですね(笑)。で、せっかくなら、おいしく調理しようかなあみたいなの。そういう構え。そうですね、構えですね、あとは覚悟。私は、「なんか嫌だ」とか「これは嫌い」という感じで、割と堂々と流すこともできちゃう人なんです。でもちょっと立ち止まって、うまく応じることができるようになるといい

なあって思えるようになったのは、少しの成長なのかな。あわ居に行って、一ヶ月ですけど、自分のなかでは大きく変わってきていると思います。それによって前の私と、今の私との違いを、周りがどういうふうに見ているかは、答え合わせができていないのでわからないですが。でも自分のなかの納得度は上がった気がします。納得感があつて進めている感じがある。まだまだできていないことも沢山あると思いますけどね。

インタビュ―実施日…2022年8月25日

聞き手…岩瀬崇(あわ居)

# 「まず大前提、あわ居で歌う予定はなかったわけじゃないですか(笑)」

1998年生まれ / 2022年7月に「ことが生まれる場所」を体験



— まずはあわ居に来られたきっかけと、真優さんにとって当日の時間がどのようなものだったかお話しいただけますか？

七月に仕事の長期休暇がとれて、その期間に福井県でひとつ用事ができました。それで福井県のすぐ隣の石徹白に知り合いが住んでいるということで、その方にお会いしたかったというのもありましたし、あとは石徹白という場所自体も気になっていたのです。福井に行くタイミングで石徹白に行くことを決めました。それでその方に相談したところ、石徹白にあわ居という場所があるということを教えてもらい、「ことが生まれる場所」に参加してみようと思いました。

張っていくのか、別の道も考えるのか、っていうところでふわふわしていた時期でした。

— 初日の夜は、仕事についての話を中心にしましたよね。そのなかで特に印象に残っている場面などはありましたか？

そうですね…話していくなかでひとつ自覚できたことがあって。自分自身が一番力が湧いてくるときは、誰でも彼でもというよりは、目の前にいる人に対して向き合っている時なのかなって言う…小川糸さんの『食堂かたむり』っていう本の話や、接客の話もあの時させてもらったと思うんですが、「この人のために」っていうのが、自分の活力になるんだなあというのを改めて思いました。今まで漠然と、仕事のなかで「あ、今は自分のパフォーマンスが高いな」っていうことを思うことはあったけれど、対話のなかで、改めてそれを俯瞰できたというか、言葉にできた気がします。納得といたらいんですかね。話していくなかで、自分がこれまで達成感を得てきた色々なことがリンクして…自分が力を注ぐべくトルと対象をちゃんとわかっていると、自分も力を発揮できるし、より相手にもよるこんでもらえるっていうことが整理できた気がします。

一言で言うときいたくな時間だったなっていうのを感じています。空間もそうですし、お食事もそうなのですが、総合的な時間というところで、ぜいたくだったなあっていうのがすごく心に残っています。なんか心地よかったなあって。眠りにつく瞬間もとても記憶に残っていて、リラクセスしていたなあって思います。香りも用意してくださいましたよね。自分の色んなセンサーが安心したのかな。

その時は、仕事を始めてから三年目になったこともあって、仕事にけっこう慣れてきている部分がありました。できることが増えてきているなかで、だからこそ、このまま今の場所で頑

— 二日目の朝の時間は、真優さんにとってどのようなものでしたか？

二日目で一番印象に残っているのは、やっぱり歌ったことですね。なぜ私があそこで歌おうと思ったのかは、あまり記憶にないんですが(笑)。たぶん、美佳子さんも朝食の時に席に着かされて、三人で話しているなかで、私がライブで歌を歌うこともやっているっていう話になって…お二人に自分の歌を聴いてもらいたって思ったのと、あとはあわ居の空間で歌ってみたって思ったのかな…ただ、「自分が歌います」って言った時に、めちゃめちゃ緊張したことは覚えています。決してノリだったわけではなく。

本当に自分がやりたいことを言葉にする時ってすごく緊張するんですよね。やるべきこととか、こうしておいた方が良いとか、そういうことは全部無視して、本当に自分の中から湧き出たやりたいことをやる時に、私は緊張するんです。むしろ逆に迷惑ではないですが、この場の何かを止めてしまおうんじゃないかも考えてしまつて…ドキドキした…それこそ、チェックアウトの時間もちょっと過ぎていましたし。歌っていいのかな、伝えていいのかなって…。

——緊張ですか……それで実際に歌われてみていかがでしたか？

緊張については、「歌いたいです」って伝えた時が一番のピークで。歌いはじめの時も若干緊張はしたんですけど……。だんだんそれは緩やかにはなっていきました。それで、緊張よりも、気持ち良く歌わせてもらったなあというか……。あわ居の空間がすごく音が響くこともあるし、お二人がすごく受け入れてくれた環境でもあったし……。ちゃんと届いたかはわからないですけど……。それで歌った後に、美佳子さんから言葉を頂いて。今後、一人とか、二人とかに対して歌うっていうのは、やりたくなってると思いました。「歌」って正解がないというか……。数字で表せないですし、マルもバツもつけられない。ただただあの時、歌を歌えて幸せだったなあっていう余韻が残った。たぶんあのあわ居での歌の時間は、二〇二二年の印象に残る時間のベストスリーに入ると思います。

——えー、そうなんですか……何か手ごたえがあったんですかね……。

そうですね……録音もしていないので、わからないんですけど。

た。ただ気持ち良く、心地よくというか、鼻歌のプラスチックの感じだったというか。

——いつもよりも、さらに内発的というか……。「やりたい！」が湧き上がってきて、それをそのままに表現した。

そうですね。殻の中にひながいるというか。自分の「やりたい！」が殻の中にあつたとして、それがピリピリっとヒビが入って、パカッと割れて、キラキラキラってなつたっていうか（笑）。あとは無理をしていなかったなと思って思います。等身大って言うのならいいんですかね。歌った曲も自分が大好きな中村佳穂さんの『忘れっぽい天使』だったし。歌うからには、その人が知っている曲にしなければ、っていうのもその時はなかった。

チャレンジっていうと、今の自分から背伸びをすることだと、言葉として認識しているんですけど。でもあの時はチャレンジというよりは、ただただ今の自分を等身大で素直に表現した時間だったなあって。それをやるっていうところに、ちよつとの勇気が必要でしたけど。でも、あわ居という場所や、あわ居のお二人が、ちゃんと聴いてくれるだろうっていう安心感や信頼感があつたから、それがうまく折り重なって、実現できたことだっ

何かこう……うまく歌えたとかではなく。私は歌を歌う人で良かったなあっていうか……。すごく幸せだった。

——あわ居に来られる前とか、その他にもいろんな場所でライブをされていると思うんですが、それとはまた違った感じだった……？

そうですね。まず大前提、あわ居で歌う予定はなかったわけじゃないですか（笑）。だから別に誰からも求められていなかったわけですよ。ただただ自分がその時に、「ここで歌いたい！」って気持ちが出てきて、それがかなえられた。他のライブであったり、歌を発表する場っていうのは、「こういう場があるから、歌ってくれない？」って言うふうに、基本的には依頼されてやりますよね。または逆に自分が場所を作って、ここで誰かに歌うぞって決めて、それでやる。その意味では、ひとつの枠があつて、そこでパフォーマンスをするという感じ。

でもあわ居のあの時間は、何もなかった白紙の状態から、急に自分の中から芽生えた「やってみよう」という気持ちをかなえた時間だった……。なんかすごい自由だったんですよ。何をやるでも良かったし、どう歌っても良かった。別にギターがあつたわけでもなく。衣装ももちろんないですし。制限時間もなかつた。

たなつて。

私がやりたい音楽というか、やりたい表現ができた感じがしたんです。私はこの先、歌で稼いでいくとか、そういう予定は今のところはないですけど……でも歌うことは、とても大切なことで、これからもやっていきたい。音楽と自分っていうテーマは、私の人生のテーマなんです……。そのなかのひとつの答えではないですが、「この時間を忘れたくないな」って思ってますよね。スキルアップすることを目指す音楽も、もちろんあると思うんですが……。それを含めながらも、最終的には心から歌を楽しむことだったり、聴いている人も一緒に幸せな空間がうまれるというか。そういう時間、瞬間を作っていきたいって……。あの時に得た感触は今もちゃんと残っていて、でも逆にあの時間を超える歌は歌えていない……。それは全然悪い意味ではなく。あれ以上の瞬間がまたうまれたらいいなと思うんですけど……。

——なんというか、解放感があつたのでしょうか？

そうですね、解放感がありました。歌い終わった後に、私は泣いちゃったと思うんですが。それをあえて言葉にするとすれば、解放感だったと思います。あふれてきた。本当は常にそう

いうふうに歌っていたいんだと思います。それが本心。だから嬉しかったっていうのもあったのかもしれないです。

——出しても良いなっていうオッケーのサインを、真優さん自身で出せたっていうことなのかもしれないですね。

その時は考えてもみなくて、これは今思ったことなんですけど、あわ居という場所は、お二人の想いからできている場所でもあるわけですね。それこそ誰からも頼まれていないじゃないですか。そういう場所だったり、そこでお二人と時間を過ごしたことが、自分をそうさせたのかなって。

初日の夜に崇さんと話した時に、崇さんは好き嫌いが激しくて(笑)、わりと自分に正直に生きてきた分、失敗やうまくいかないことも多いんだ、みたいな話を美佳子さんがしてくださいましたよね。あとは、美佳子さんがモロッコにいらっしやっした時のお話とかも聞いたりするなかで、自分もそういうふうに、自分の本当にやりたいと思うことをやるとか、心に素直に生きるとか、そういうふうになりたいなあって思ったんですよね。加えてあの心地の良い空間とか、食事があり。そうしたなかでふつつつと……：自分にオッケーサインを出しても良いのかなっ

て思ったんだと思います。

——身体がウズウズしたというか……(笑)。

そうですね。あ、あとは、私、接客業をしているわりには、あまり喋るのがあまり得意ではなくて(笑)。自分の気持ちを一番表現できる方法が歌だったんです。正直、夜の時間も、崇さんが色々質問をしてくださることに対して、「私、ちゃんとうまく答えられているかなあ」とか「困らせていないかなあ」とか考えていたんですよ(笑)。で、朝はもう少しリラックスしていた気はするんですけど、でもやっぱり喋るのはそれほど得意ではないから……：「私はこういう人なんです」っていうのを知ってほしくて、歌を歌ったんですよ。

——なるほど。対話のなかで「困らせてないかなあ」と、「こちらのことを気にされている部分があった一方で、でもそういうものとはいっさい関係なく、ご真ん中にストレートを投げ込むように、「歌うぞー」ってなったというの、ある種、正反対の傾向とも言えますね(笑)。その両極端があの日間のなかで出た(笑)。

そうですね(笑)。たぶんもともとの性質としては、後者が私

なんだと思います。わがままですし、自己中心的ですし。今ちょうど実家に戻ってきているんですけど、家族と過ごしていると本当にそう思います。それに人生を振り返ってみても、基本的には好きなことをやってきたと思うので……：だから、素が出た、素が出せた時間だったと思います。旅っていう非日常の、それも全然知らない土地で、素が出せたっていうのは、すごくありがたかった。だから私はお二人やあわ居という場所にすごく感謝をしていて。どうしても旅をしていると、色々なイレギュラーがあつて、いろいろとストレスがかかりますよね。人や環境もはじめてですし。そうしたなかで、あのあわ居での時間、あの歌の時間だけは、本当に素になれたなって。すごくほっとした。

インタビュー実施日…2022年10月31日

聞き手…岩瀬崇(あわ居)

「あの時はちよつと古い湯のみで。なんか  
そういうことばっかり覚えてるよね」



柳澤龍さん…1986年生まれ / 鄭伽倻さん…1983年生まれ  
2022年8月に「ことばが生まれる場所」を体験

■龍…柳澤龍さん

■伽…鄭伽倻さん

—あわ居の「ことばが生まれる場所」に参加された  
きつかけについて、まずはお話しただけですか。

■龍…きつかけは、長良川カンパニーの代表理事で、郡上市に住んでいる岡野春樹君の紹介ですね。ちょうど僕は適応障害になってしまったタイミングだったんですが、春樹君も昔一度、自律神経失調症になったことがあったから、その頃どう過ごしていたかとか、その後どう変わったかっていうことを聞いてみたいと思って、郡上に遊びに行くって言った時に、あわ居さん

を紹介されました。是非行ってみて欲しいって。薦められたことは断らない性質なので、軽い気持ちでというか、まずは何ったというのが経緯ですね。

—今回、ご夫婦での参加でしたが、お二人でお越し  
いただいたのは、どんな背景からだったのでしょうか？

■龍…まだ僕らも今年結婚したばかりで、結婚前を含めても、一緒にいるようになって三年目くらいなんです。一緒に旅をして、世界を見るなかで、お互いの言葉や価値観の違いが、良い意味で見えるといいなあって思っていました。僕も旅好きで色々な場所をたくさん見てきているし、伽倻さんも色々な旅をし

てきたけれど、一緒に旅ってこれまでなかったの。

—「ご予約のフォームやご参加の動機は伽倻さんが書  
いて、お送りくださいましたよね。

■伽…そうですね。予約した時は龍さんの体調が安定しなくて…抗うつ剤が馴染む前だったのもあるのかも。自分の身体の置きどころがわからないというか…歩けなくなっただけで東京の総合病院に転院して典型的な適応障害と診断されたんですが。「なんか変だ」ってなった時点では、動悸と微熱がだらだらと続いていました。オンライン会議をひとつ終えるたびに崩れるように仮眠してね。郡上に行くことは決まっているのに、なかなか龍さんの手が動かないので、私が勝手に予約したんです。

■龍…五月下旬に歩けなくなつて、六月半ばに病院で「うつ」だと診断を受けたんですね。それで仕事は七月頭で休職にしました。そこからはだいたい気が楽になったんですけど。ただ、気持ちは元気なだけけれど、動いたらすぐに凹むという日々が続きました。

■伽…本人も自分がどこまでできるかできないのか、判断で

きない。自分の体力がどのくらいあるかさ認識していなくて、急に限界が来てしまう。頭も身体も気持ちも、全部バラバラだったよね。

—そうした流れや背景があったなかで、八月にあわ  
居にお越しいただいたわけですが、ご予約の時点で二  
つのが気になっているというのを伝えていただき  
ましたよね。一つ目は龍さんが個人としてこれからど  
うしていくのかという部分。もう一つがご夫婦として  
これからどうしていくかと言う部分。「霧がかかった  
ような状態」という表現もされましたね。当日は  
お二人にとってどのような場でしたか？

■龍…まずあわ居に到着するまでに、あまりに山奥でびっく  
りしました。あわ居の手前にある橋を見たときはちよつと心が  
折れましたもんね。これは車で渡れない気がするって(笑)。あ  
わ居は手前に橋があることで、そこだけが良い意味で「私たち  
(あわ居の世界)」っていうのを醸している気がする。

それで、あわ居の館内に入ったわけですが、入った時は嬉し  
かったですね。空間がすごく嬉しかった。何て言うんだろう  
…主(あるじ)が見えるというか。その空間を作った主が

誰なのかということが、はっきりと分かる空間だっていることを感じました。それは僕にとってはすごく喜ばしいことです。ここにいる主が、この空間でもあるっているか……。

お茶の世界って主客があるけれど、主の方が場をとりしきるわけじゃないですか。でもいわゆるホテルって逆で、お客様は神様って感じで、要望にはなんでも応えるのがサービスなわけですよ。その点で言った時に、あわ居は空間から、主の精神性だったりと、人柄だったりとかが、まるっと感じられたというか……主自身が「わたしです」って言ってくれている空間であることが、すごく嬉しかったですね。

建物自体はたぶん前に住まれていた方から引き継いだものだと思いますが、和紙が貼られていたり、モロッコの色があったりして、随所に主のアイデンティティが感じられた。ご家族がそこに住んでいる場所でもあるから、生活と仕事を切り離さないことを大事にされている感じもしました。なんていうかそういうのは空間から読み取れてしまうものだと僕は思うんですよね。

お風呂に入っていた、よもぎも印象に残っています。たぶん周辺で自ら栽培して、自ら用意されたものだと思うんですが、

そこにもやっぱり人が見えるじゃないですか。あとは、食前のあたたかいカクテルとか、リンゴジュースになにかが入ったおいしいやつ(笑)。何が入っているのかよくわからないけれど、その辺りの物も入れつつ、作られたんだと思う。

あとは雨の音も印象に残っていますね。普段は雨の音ってすごく嫌なのに……あわ居の周りを流れる川の音も印象深い。あわ居の空間だけじゃなくて、あの日の外の環境まで含めて、「あの日に雨が降っていたんだなあ」っていうことや、あの日のことを覚えているって言うんですかね……普段はたぶんそんなことはないんですけど。あの日のことは、なぜか建物の外のことまで覚えています。客室の窓から、少ししっとりした空気が流れてきたこともすごく鮮明に覚えている。

■伽…わたしもぼんやりと、でも鮮明に覚えています。橋を渡って、川を越えて、母屋に入る。主観があつて俯瞰もしていて、青みがかつた深緑の奥に進むテールランプの赤が橙や茶色や灰色に溶けていく。音や湿度、灯りも含めて、あわ居の空間と時間に深く包まれる静謐さがありました。あたらしい領域に入るのに、守られているようにも感じられた。

私にはときどき、写真に撮ったときのことしか覚えていたら

なくなる時期があるんです。そこでの記憶は撮影対象やそれに直接ひもづくものではなく、シャッターを切る前後の感情や情景を動作に重ねた記憶で……そういう時はあまりいい状態じゃないんです。そこでは撮っていないとかがすっばり抜け落ちてしまう。でもあわ居はその感覚とはかけ離れていて、撮らずとも皮膚や呼吸に近いところでちゃんと記録している。

■龍…お茶も出してもらったよね、よもぎの。あの時はちょっと古い湯のみで。なんかそういうことばっかり覚えてるよね。

■伽…ねえ、あれは儀式だったと思うの。よもぎ茶とよもぎ湯でならされて、よもぎとりんごの食前酒で外からも内からもすっかりほだされてしまう。でも普段はそんなに覚えていないですよ、もつと流している。だからこそあの時間は特別なものだったと感じるのかもしれない。時間が過ぎるのが惜しい。でも過ぎていく時間に焦ったり、終わるのが怖いっていうのとはまた違って。

——なるほど……お食事含め、対話の時間のなかで、印象深かったエピソードなどはありますか？

■龍…僕は食べるのが好きなので、けっこう忙しかったん

ですよ(笑)。「おー、なんだこの食べ物は」とか「なんか色んな味がする」っていうのと、でも崇さんが話してくるのを「ああああ」って聞いているっていう(笑)。自省を深めながら話していると、料理が出てきて「おいしそう、あったかいうちに早く食べなきゃ」っていう(笑)。でも、モロッコ料理、すごくおいしかったし、楽しかったです。やっぱりとうもろこしをよく覚えてる。はじめてご自身で育てたとうもろこし、ということでしたよね。

対話の部分で言うと、まずはとても楽しかった。自分の中で、前から楽しんでるし、親しんでもいた価値観といたら良いんですかね……自分が組織の代表であることや、仕事のことを考えると、社会人として利益を出して、責任を果たし、信頼を勝ち取るっていうことが今までも先にきてしまっていました。でも本当に一番自分がわくわくする価値観としては……真木悠介さんの『気流の鳴る音』っていう本知ってますか？ 僕が二十歳の頃に読んで、一番最初に感動した本なんです。あまりに衝撃的で、一番覚えてる本。で、あの本を通して僕は、自分の生きている世界と他人の生きている世界が異なっているんだっていうことの面白みを感じた。

メキシコ・インディオの人が、草を切る前に祈りを捧げたり、

カラスが飛んだら家に走って逃げ帰るといふような話が本には書かれていたと思うんですが、同じ人間であるはずなのに、生きている世界が、自分たちとは全然違う。そして、僕はその方が居心地が良いと思っています。グローバル資本主義とか、フラット化する社会とかって言うってしまった時に、どこに住んでもみんな同じ人間だったらすごく切ないなって。で、僕はそうはなりたくなかったんだけど、なんかそういう方向にどうやら走ってしまったみたいで。「街を良くするためには、そこで勝ち残るしかない」って。でも実はそこに自分自身が、全然わくわくしていません。社会に蔓延る自己責任論だったり、希望のもてない感じとかもあって……社会を守ろうっていうプロパガンダがあったりもしますよね。

そういうのをいったん無視して、そのうえで、そこらへんに色んな世界が広がっていること、色んな世界を生きている人がいることを感じとっていくっていうことが、大事な気がしました。僕にとっては、崇さんも、自分とは全く違う世界に生きている人だというふうに見えた。それもあってか、僕も「自分にしかない世界に生きたかったんだよなあ」っていうのを、あわ居で思い出した気がします。

最後にお薦めしてもらった安富歩さんの『複雑さを生きる』

いるのはわかる。

二日目の朝、夫婦としてこれからどうしていこうかというところについては、私が言葉になる手前の霧がかった部分を、どうしても崇さんに伝えられなくて。先に進めなくなってしまう。そこで「あ、龍さんと話するときと全く同じだ」って、はっとして（笑）。ずっと一緒にいるんだからわかってほしいと私は思っていたんだなって、崇さんを通して気がつきました。

■龍…二日目の朝は、わりと崇さんと美佳子さんの話を聞いていた印象が強いんですが、あわ居が今の形での運営に至るまでのお話もしてください。美佳子さんが料理をつくるのが丁寧な分、提供がとてもゆっくりになってしまっただけで、崇さんが対話をする中で、時間を稼ぎ（笑）、そこがうまく相殺される話とか（笑）。世間一般からすれば弱みになるような部分を、強みに変えてしまっただけか。あとは、誰しもその人の突出した部分（「こぶ」）を持っていて、それは社会的にはあまり役に立たない部分かもしれないけれど、もしかしたら百人に一人くらいには、ものすごく良いかたちでその「こぶ」が刺さるかもしれないってお話もありましたよね。そういう「こぶ」をあらわにして、他者と関わっていける社会であっていいんじゃないかっていう。

も買ってみて読んでみたんですが、久々にあまりわからなかったんです。でもそれがすごく心地良かった。わからないっていうのは、僕にとっては居心地の良いことです。違う思考回路、違う世界観で書かれているなっていうことが感じられるということだから。自分にはまだそれらのことが理解できていないっていうことがわかったのと同時に、それを楽しんでいましたね。

■伽…私は散文や短歌みたいな、言葉で表現するのは好きなのですが、会話や即興が得意ではなくて。そういう意味で一日目の夜は安心して、おいしく食べながら龍さんと崇さんの話に耳を傾けていました（笑）。はじめてのモロッコ料理は、爽やかなのにやさしくて、スパイスやハーブの香りがしました。美佳子さんがお料理を運んでくれるたびに、対話の妨げにならないように間を読んで、モロッコやこの辺りのことを教えてくれる。到着したときはもう薄暗かったので、まだ見ぬ石徹白の土地や家族の畑、美佳子さんに補完されていく想像上のモロッコをかわりばんこに思い浮かべながらいただきました。

対話を重ねていくなかで、龍さんがそれまで「ぎゅ」ってかたくなに、塊になっていたのが、だんだんほじめていくのが見えて。「ああ、来てよかったなあ」って。内容はわたしの理解が追いつかないこともあったけど、龍さんの中で緩まってきた

そのあたりのお話を聞きながら、「こういう二人もいるんだなあ」って。僕が結婚を決意するきっかけになった、ある硝子作家のご夫婦がいるのですが、もし旦那さんが亡くなったら、もう硝子を作らなくなるって奥様はおっしゃっているんです。僕はどちらかと言うと、お互いが自立していた方が良いんじゃないかって思っていたので、そういうのは少しもったいないというか、危ないんじゃないかって思っていた。でも、いつ行っても素敵なご夫婦です。たぶん世の中の本を読めば、お互いが自立していた方が安心だっというのがあると思うんですが、でもそれも一つの考え方に過ぎないんだなって。だから、崇さんや美佳子さんの生き方や関係も、そういうのもあって良いんだなっていうことを思いましたね。

■伽…対話のテーマによるところが大きいかもしれないけど、夜の崇さんと、朝の崇さんが全然違って（笑）。二日目の朝は、こどもたちを学校に送り出したあとで、美佳子さんも対話に参加してくれたんです。家族とのやりとりのなかで、崇さんがお父さんになったり、夫になったり、個としての崇さんになったりしながら、怒りとか喜びとかかなしみとか、色んな感情がポコポコ湧いてくるのが、とっても人間で。美佳子さんは美佳子さんで、崇さんとは全く違うリズムを持っているので、一見ど

る部分がありますか？

■龍・自分の「こぶ」というか、鍛えた気もないのに、ここだけなぜが出てしまっているっていう、そういう部分を愛でるようになった気はしますね。社会に自分を合わせにくいんじゃないかと、より怠惰な方に向かうようになったなあ。実は会社の代表を降りまして、今日から平社員になったんです。今日が平社員一日目。使命とか大義とかを手放して、直観に委ねてみてはどうかっていう話が対話のなかであったと思うんですが、平社員になったこともあって、最近和使命とか大義を手放しつつある感じがあるんです。思いだけではやっぱり駄目だったみたいで。

あとは、あわ居で感じた「楽しかったなあ」という自分の感覚とか気持ち良さを通して、「あ、そうだ自分は前はこういうことを楽しんでたんだな」という記憶が自分の中に蘇ってきたところはあると思います。「こういうのが楽しかったんじゃない」と。使命とか大義を手放して、そっちの楽しい方向にもっと行こうって思っていますね。あれから良くも悪くも仕事に関する本を読んではないんです。社会的に強くなるうっていうのはそっとしておいて、今自分が関心のあるのはここだっというところに焦点がいつているのかな。自分がわくわくする

うやって折り合いをつけているのか不思議なのに納得してしまいう説得力がありました。「そっか、いいのか」と。おふたりを見ていて「また来たいな」と思いました。

■龍・崇さんの娘さんが、二日目の朝、目にゴミか何かが入って、崇さんが色々おろおろして、処置をしたり、でも「お客さんが来るから戻らないといけないんだ」とか言ったりもしていましたよね（笑）。

——良くも悪くも僕らのプライベートな部分が出てしまっていたということですね（笑）。

■伽・なんて言えば良いんだろう……生きるっていうのはそんなに美しいものじゃない、だからこそ美しいと言うか。「この現実と試行錯誤の積み重ねが我々であり、夫婦である」と。昔の話や現在の話を往還する中で、間接的に言ってもらったような。だからプライベートは出てしまったのではなく、出してくれた。動物の群れで年長者がまずはやってみせて、それを若者がまねたり学んだりするのに似ているなと思いました。

——そうした体感が当日あったなかで、何か間接的にでも、その後の生活にちょっとした変化が出てきてい

感覚を取り戻している感じがありますね。

■伽・わたしは、とかふたりの話ですが、あの後も順調に夫婦喧嘩を繰り返して（笑）。お互いに消耗するのであんまり笑えないんだけど、この間もちよつと大きな喧嘩があったんです。でもそうやって生きていくしかないのになって。わからない、わかりあえないを、すり合わせながら。そこに対しての感情はばつぱり明朗ではないんですけど、でもただただ陰鬱なわけではなくて。程よい諦めのなかでやっていこうかなって今は思っています。

あと、あの時のあわ居での時間や空間を、今でも想い出していますね。現実逃避か白昼夢かはわからないけど、脳みそだけぼつとそこに飛ばして。そろそろ起きなきゃいけないけれど、まだ眠い時とかに、あの朝に行ってしまう。

あわ居での二日目の朝、わたしがまだお布団のぬくもりの中にいる間に龍さんはひとりで散歩に出掛けて、外もすぐく良かったよって勧めてくれてるんですけど、私は全然身体が動かなくて。歩いてみても部屋から数歩の廊下のつぼとか、花とか、隣の部屋の崇さんの書を眺めたりして。今考えてみると、私はそこに居たかったんだなって。緑や光が風に揺れるのをただ

見ていたい。余白に抱きしめられながら、この場所を味わっていたい。その感覚は、私の小さい頃の記憶と結びついているような気がします。

私がそろそろ方向性を決めなければならぬ時だったと思うんです。兄が「将来何になるつもりなの？」と聞くので、私は「ちよつと薄暗いところでたばこを吸いながら本を読みたい」とって答えました。すると兄は「それはお母さんじゃないか」と。記憶の中の母は今のわたしと同じくらいの年齢で、想像するに彼女にとってちよつと大変な時期だった。でも彼女が台所で本を読むときは、しがらみや役割から離れて、唯一ひとりで彼女らしくいられる時間だったと思うんです。湿度や明るさが、当時暮らしていた家の台所と似ています。自分が心地よいと思う状況とあわ居が結びついているんだと思います。

インタビュー実施日…2022年9月25日

聞き手…岩瀬崇（あわ居）

# 『ない』って思っていたけれど、本当は自分の中にあるじゃんって」

1989年生まれ / 2022年8月に「あわ居別棟」を体験（5泊6日）



— あわ居別棟におひとりりで五泊六日滞在されてから、約三週間が経ちました。まずはあわ居別棟に滞在されようと思ったきっかけや背景について、お話しいただけますか？

二〇二二年の五月にオンラインの「プロセスダイアログ」で崇さんと対話をするなかで、「今の雄飛さんにはあわ居別棟滞在が合うのではないか」とおすすめされたことがきっかけですね。その頃は特に、今の仕事や生き方に対しての違和感というか、しっくりきていない感じがありました。そもそもなぜ今の会社や働き方を選んだのかと言うと、もともと「社会問題を解決したい」ということを自分は強く思っていたからで

す。そのなかですつとやっていました。それで三、四年くらい前ちよつと長くなるので詳細は割愛しますが、自分の家族の問題が落ち着いた時に、自分の中で「社会問題は、もうこだわらなくて良いや」っていう気持ちの変化が起きた。

それによって、何で頑張るのか、どう生きるのかっていう部分の、ひとつの自分のアイデンティティというか、OSのよなもの終わりを告げた。そこでなにか新しい自分の生き方が始まるのかなあということを漠然と予期しながら、でも動き方は変えずに、ある意味自分を放牧していたような時間が続いています。でも放牧していても、何かしっくりこないし、むしろやりたくない仕事、この人とやりたくないなあみたいな仕

事がどんどん増えていって。

— どんどん「あれあれあれ？」ってなっていた時に、なんかOSは変わったんだろうけれど、ソフトウェアが前のままで、あんまりしっくりきていないんじゃないかっていう……そんな感覚にどんどんなっていった。一言で言うと、「このまま働いて定年を迎えたとしたら、めっちゃ後悔しそう」って。でも、「どうすれば良いかわからない」みたいな悩みを、五月のオンラインでの対話の時に崇さんに話しました。

その時に、崇さんが、スペインのサンティアゴ巡礼なども例に出しながら、「何か全く違う日常に身を置くことだったり、普段とは違うリズムの中に埋没してみることが大事なんじゃないか」という話をしてくれて。その流れであわ居別棟をおすすめしてくれましたよね。それで人体実験じゃないけれど、そこで自分が何が見てきたのか見てみたいっていう期待があつて、八月にとれた、一ヶ月間の休暇を使って別棟に滞在することを決めました。

— 別棟には五泊されたわけですが、そのなかでの過ごし方はどのような感じでしたか？

基本的には、「別棟で生活をしていた」という感じに近いですね。教えてもらったレシピを見つつ、料理をして。まああんまりしっくりやってないですけど（笑）。三食しっかり食べて。目の前の川に入ったり、散歩したり、読書したり。ただ片手にはずつとノートがあつて、その時々で気づいたことを常にメモしたり、考えたいときにはノートをしながら、ぼんやり庭で座りながらたばこを吸ってノートに書くっていう。ノートに書くっていうか、自分がその時に考えていることをメモする。全体的にはそういう時間が半分くらいを占めていたと思う。

— 半分も（笑）。

ジュリア・キャメロンさんの考え方で、モーニングページというものがあるとすよ。朝起きたら、A4のノート三ページ分、とにかく書くっていう。A4のノートですごく大きくなるから、書くことがなくなってくるんですけど。書くことがなくなったら、「書くこともないわー」って書くっていう（笑）。その目的は「排水すること。自分の頭の中に、溜まっているものをとにかく出し切ること。外在化することを通して、自分

1 ジュリア・キャメロン（2017）『新版 ずつとやりたかったことを、やりなさい。』pp.44-56、サンマーク出版

でそれを客観的に眺める意味もあると思うんですが。とにかく空っぽにすることを大事にしている考え方なんですよね。

実は三、四年くらい前から、年始の三十日間だけブログに日記を書いてみるっていうことをやっていて、そのなかでわりと面白い気づきがあったんです。ただ、ブログだから、それは外部に公開していたんですね。だから、より自分の中の汚いものとか素直な考えを出すって考えた場合、ブログに書くのはやめて、手帳の方が良いなあって思っ。それで今年くらいからかな、手帳に書くっていう実験を始めていた。その流れで、八月中はなるべく毎日書きたいなって。滞在中はモーニングページというくりくりで朝書くのではなく、リアルタイムというか、その都度その都度思ったことを書くっていう感じでやっていました。

——深く考えて、それを逐一メモするっていう行為は、日常のなかだとなかなか継続するのが難しい部分もありますよね。

そうですね、一つは時間の問題で、忙しさのなかで書き続けられないっていう面があると思います。あとは、そういう忙しい日常に埋没していると、自分の感覚がそもそも鈍いというか、

鋭さがない気がするから、あまり良いことが書けなかったりする。自分にとって大事なことが出てこなかったりするんだと思いますね。さっきお話しした年始に三十日間ブログを書くのは、忙しさが落ち着く時期だからできる、というのもあります。

——別棟では、お仕事も一切持ち込まず、たしかインターネット接続もほとんどされていなかったですよ。それも含めて、別棟での五泊六日は、日常よりも自身を探索する構えがとつていたり、感覚が鋭敏になっていたっていう部分があったのでしょうか？

そうですね。

——そうしたなかで、特に印象に残っている時間というか、「この気づきは自分にとって大きかったな」っていうエピソードなどはありますか？

三日目の夜ですかね。月を見ながら外でぼーっとしていた時、自分の半生を振り返っているなかで、ある事に気づいた時間が特に印象に残っています。少し長くなりますが、それに至るまでのことを話すと、まず自然をみながら何か気づいたり感じたりするのが自分の趣味だというところがあるなかで、別棟での

初日とか二日目は気づいたことのメモばかり書いていたんですよ。後から見ると、「浅いこと書いてるなあ」ってなるんですけど(笑)。例えば初日に川に入った時に、めちゃめちゃアブに襲われて。でもアブって面白くて、なんかぼーっと立って考え始めると襲ってくるんですよ。だからこれは「考えなくてもいいから、感じたり、とにかく動け」っていうサインなんじゃないかって思ってみたり(笑)。

あとは、散歩中に小高い丘みたいなのところに行きついて、ぼーっとしていた時に、気持ちの良い風が吹いていて。自分が吹かれているというか、一緒に風になっている感じというか。自分の身体の中を風が通り抜ける感じがあったりして。普段自分が住んでいるところだったら絶対感じない風の感じ方をしているなあって。そんなような気づきが、いくつかあって。

とにかく普段の都会でいたら絶対やらないような、何かに「気づく」っていうことを自分はやっていんだと思う。都会ではなかなかそういう自然も周りにないから。これはあわ居から都会に戻ってきた後に、本を読みながら気づいたことですけど、自分が都会に生きているなかでは、何かに「気づく」っていう感覚や機能自体が弱っていたから、まず別棟での初日とか二日目っていうのは、「何かに気づく力」の回復に時間を使っていた

たんだなっていうことを思いましたね。

ただそれとは無関係に、初日や二日目はとにかく体調が悪かったじゃないですか。謎にずっと体調が悪かった。だるくて頭が痛くて。ノートに向かって「さあ書くぞ」とやろうと思っていたら、なんかきつくて寝ちゃうってということが何回かあった。で、寝ちゃうときは、「ああこれ今考える時間じゃないんだ」って思っ、また散歩に出かけるっていうことをしていました。

それで、二日目の夜だったかに、少し崇さんたちと話すタイミングがあって、「自分が自然とやっていることに、自分の固有のものを探るヒントがあるんじゃないか」みたいな話をしたんですよ。で、それがけっこう自分の中でひっかかった部分があったんです。で、三日目の夜に、自分ってどんなことに反応していたのかとか、もつとと言うと自分の半生を振り返った時に何が起きているのかっていうことを考える気分になっていたんですよ。けっこうリラックスした状態で。月を見ながら、ぼーっと考えていて。

もともとは社会問題に取り組むこと、もつとと言うと、ある社会起業家の生き方に憧れを抱いていたんです。その人の本なん

かを読んで、「こういう社会問題の解決の仕方をしたいな」ってすごく思っていた。でもその気持ちがなくなってから、自分がついついやってしまっていたことって何だろうって思った時に、インタビュをされている自分を妄想している自分がいることに気づいたんですね。で、「これ何なんだろう」って思った時に、「あ、自分はずっと目立ちたいっていうか、注目されたいだけだったんじゃないか」っていうことに、素直に気づけたんですよ。気づいちゃった。それが三日目の夜に起きたことです。

そしてそれは過去に対して新しい解釈が生まれたっていう感覚に近くて。今まで社会問題をかっこよく解決したいって思っていたけれど、それは手段に過ぎなくて、要は人から「すごい」って思われたいっていうか……社会に見つけて欲しいって思っていたというか。で、今でもその願望を引きずっているんだなっていうことを、けっこうしみじみと思ってしまう。自分の中ではそれはかなり醜い願望なんですよね。「そういうの、ださい」って思っている自分が頭にいる。頭にはいるけれど、でもそれを自分はやってしまっているよねっていう。そんなことを月を見ながら思いました。いや、月は視界には捉えていたけれど、ぼぼ見てなかったから、月は関係ないのかもしれない(笑)。でも起きたこととしては、そういうことが起きた。

だった。

そのうえで、その後の思考の変化としては、それを願ってしまう自分がいるのは仕方がないから、それを踏まえようでどうやっていくか、どう考えていくかっていうところが自分の中で大事な問いになってきています。それで、改めて思ったことは、「誰かからすごいって思われるのって、本当に大事なことなのか」ということ。「インタビュされた後も人生続くしなあ」とか(笑)。

今までの自分の生き方を考えた時に、人から注目されるための技術みたいなものは持っているし、たぶん実行できるけれど、それをやった時に感じるむなしさみたいなものは、確かに自分も経験してきたなって……わかりやすく言えば、広告業界の賞を取るみたいなことなんですけど。「そんなの意味ないよ」って自分は思ってるんですけど、でもそれをやってしまう自分がいて。そのむなしさも、自分の中ではなんとなくわかっているというか、感覚としてあるので。

だから、あの月を見ながらの体験を経た自分としては、世の中に当てにくというか、バンドする生き方はできないなあとか「こうすれば、人は喜んでしょ?」とか「こうすればヒット

何て言うんだろうな、隠蔽された自己みたいなものを、その時自分で見つけたのかなって……「ない」って思っていたけれど、本当は自分の中にあるじゃん、っていうことにちゃんと気づいた。「ああ……いた」って直視してあげられたというか……見落としていた自分の部分を見つけてあげられた。だから、自分のなかでは何て言うか……自分の全体性を回復したっていう感覚に近いんですよ。その時に、より自分自身に近づけた気がする。

——そこで見えたものがその時のご自身にとっては醜悪なものだったとしても、でも「たしかに今自分はそう感じているんだな」っていうことを見るのができた。そのことが雄飛さんにとって大きかったということですか? ありのままの自分を見れたということ……。

そうですね……感覚的なことを言うと、それも本当は自分なのに、「そんなの自分じゃない」ってずっと否定していた自分を、「ああそれもやっぱり自分じゃん」っていうふうに受け止めてあげられたっていう……どこか癒やしに近い感じがありましたね。素直に受け止められた。だからまずそれ自体が大事な時間

するんでしょ?」って頭では分かるんですけど……でも自分の基準のなかで、「こういう生き方をしたい」とか、「こういうものが良いはずだ」っていうのを譲れない自分がいるのは重々承知していて。そっちを大事にする以上は、人や世の中から「すごい」って言われることは、もしかしたら望めないかもしれない。「じゃあどちらをとりますか?」ってなった時に、僕はもう、今自分が大事に思うものをとりたいなっていうふうに思えたので。注目されたり、すごいっていうふうに思われなくても、「自分がやり続けたいことってじゃあ何なの?」っていうふうに問いが変わっていった。

——なるほど……ということは、「自分の中に醜悪なものがある」って認められたことで、その自分から、一歩離れた視点に立って、っていうことが言えるのかもかもしれないですね。ありのままに、今の自分を見たがゆえに、そこから距離を取れたり、そういう性質から離れるためにどうしたら良いのかっていうところに、意識が向き始めたということなのかもしれない。

そうかもしれないですね……自分としても不思議なんです。そういう醜悪な自分の願望に対して、「これはもう自分の性というか業だから」みたいに解釈して、「注目されるためだけに

生きていくんだ」っていうふうな考え方もあるはずなんですけど……そうはならなかった。「なんかそれむなし」とか「ださい、貧しい」とって客観的に思ったんでしょね。というか、これまでも、「ださい、貧しい」とって思っていたとは思わんけど、それは他人の話であって、自分の話じゃないって思っていた(笑)。でも「それ、自分じゃん」とって(笑)。

そういう自分がいから、だったら離れようって思った。つまり「俺はそういう生き方をしていない」とか「それをしていない生き方ができている」とっていう前提で生きていたんだと思います。でも「あれ？」って(笑)。あわ居からこちらに戻ってきてても、常に考えてしまう自分はいらんですよ。「こういうことをすれば、こういうことが起きて、取材されている自分がある……みたいな(笑)」。でもそれをやつちやつた時に、「あ、またやつちやつてる自分があるな」とっていうふうに眺められる。

—— ちよつと突き放してご自身のことを見ているよう

な感じがしますよね。そしてそこに、自分への葛藤と

か摩擦みたいなものが出てきているのかなという感じ

もします。

そうですね。少し長くなるかもしれないですけど、そのあたりについての話をしますね。今感じていることとしては、改めて、あわ居別棟で真木悠介さんの『気流の鳴る音』を読ませてもらったのが良かったなあと思っています。

—— たしか初日に私がお薦めしたんですよね。

そうですね。それでその本に「心のある道を歩く」という言葉があって。あの言葉がすごく好きなんです。自分もそうありたいなあって、ただ素直にそう思っていて。その気持ちが大きくなればなるほど、外からすごいって思われることが、どうでも良くなってくるんだと思う。そのことに、より実感が湧き始めています。

それでちよつと面白いことがあって……実は昨日まで一週間、箱根の宿に一人で籠っていたんです。あわ居別棟に行った時に感じたことを踏まえて、一ヶ月の休暇を終えて社会に戻った時に「こういうことがやりたいんだ」とっていうことをそこで作ろうと思つて……でもそれがめっちゃめちゃうまくいかなかった(笑)。

2 真木悠介(2003)『気流の鳴る音』p.157、筑摩書房

それって、文字通り、さっきの『気流の鳴る音』に書かれていた「心のある道を歩く」ことだなんて思えたんです。ちよつとしたことに感動したりとか、鳥が話しているのに出会えたりとか、木を見上げた時に気持ち良かったりとか。なんかそういう意外なことに出会っていくこと自体が楽しい。『気流の鳴る音』に書かれていましたけど、この道は別にどこにも続いているけれど、それでも歩むんだっていう感覚が、自分のなかではすごくしっくりきたんですよ。

自分は途上に関心があるし、道自体が大事だったんだなあって。だから、石徹白の散歩中に思った「偉大なものを見つけない」「偉大」とってというのは、「道の途上にあるもの」を指していたっていうことだと思うんですよ。あの時はてっきり、「目的地にある偉大なもの」とっていうふうに、自分で勘違いをしていた。で、道の途上にある物に自分が感動したりさえしていれば、別に人からすごいって思われるっていうのはどうでも良いことだなんていう気持ちが増している。

それで浄安杉から帰ってくる時に、ふと「偉大なものを見つけない」とって言う言葉が出て来たんですよ。で、「あ、そうか自分は、浄安杉みたいな偉大なものに惹かれるのかな」とってその時は思った。でも今となってはそれは「スリーディングだったなと思うんです。そのことについて今は違う解釈を持っている。その解釈が変わったのは、箱根で、地図にも載っていないような道を歩いていた時に、僕は偉大なものとか目的的に興味があるんじゃないかって、何かに出会えそうな道を歩くこと自体が好きなんだなっていうことに気づいたからなんですよね。

—— なるほど……一ヶ月の休暇を経て、明日からまた仕事や社会に戻られるわけですけど、今の気持ちとしてはどのような感じですか？

気持ちとしてはすっきりしていますね。まず、わからないこととはわからないというか。待つことができている状態にはいると思います。あわ居の滞在中に書いた言葉を読み直すと、ほぼ答えは書いてあって。「自分は必死さが報われる世界をつくりたいのかもしれない」っていう言葉があわ居の滞在の後半に自分の中で出てきていて。そのお話は、あわ居での最終日の出発前の時間にもしたと思うんですが、その時は「これだ！」って思いながら帰ったんですよ。

で、箱根で、「必死さが報われる世界をつくるためにできることを考えるぞ」ってやったらまた眠くなって、全然考えが進まなくて、「これ、何かが間違っているな」って。実は、あわ居で「必死さが報われる世界をつくりたい」って言葉が出てきたときに、納得と同時に違和感もあったんですよ。間違っていないけれど、何かが違うかもしれないって。必死さが報われることで僕は確かに感動はできるんですけど、でも「必死さが報われる世界をつくる」っていう言葉には、「自分をちゃんとよろこばせる」っていうことが書いてないなって。自分のことが抜けている。そのことにすごくびっくりした。一緒に冒険するということ、僕自身もちゃんとそこに巻き込まれていることが、とても大事だと今は思っています。自分が巻き込まれていないくても、必死さが報われれば良いっていう態度だと、全然ピン

とこない。

——そのあたりのことが整理できたことで、明日からの仕事や日常生活に、何か良い影響が出てくる予感もあるのでしょうか？

そうですね。ただ一方で、どういうふうになれば、そのあたりのことを生活や仕事の中で体現できるかというところに関しては、全く自信はないです。自信がないというか、そういうのって、いったいなんなんだろうなって。でもそこには納得感もある。最初はそれが体現できる企画を、今すぐ完璧に作り上げてっていうふうに思っていたんですけど、でもまだその形は、自分の中に現れていないんだなって。だからその都度、実験しながら修正していくしかないだろうなって改めて思っている。「これがベストだ」っていうものはまだ作れないと思うので、「これは絶対に違うな」っていうものをちゃんと排除していくことに注力することを、まずはやっていくんだと思う。

——なるほど。休暇前と同じ職場に戻るにあたって、やはり少しどしどしとした感じがあるのでしょうか？

そうかもしれないですね。この一ヶ月の休暇中も、「この仕

事入れないかな？」って連絡が来ていたんですが、それを受けるか、受けないかの判断がつかなかったんですよ。そこで、「あ、軸がまだちゃんとしていないんだ」って思ってた。でも今は、なぜそれが自分にとってその仕事を受けるべきではないのかが、自分で説明できる。自分がしっかりしたんだと思います。

インタビュー実施日…2022年8月31日

聞き手…岩瀬崇（あわ居）

# 「心に水がすーって注がれるように、言葉が入ってきた」

1997年生まれ / 2023年9月に「ことが生まれる場所」を体験



——まずは、あわ居の「ことが生まれる場所」に参  
加されたきっかけや、その時の花さんの状況についてお  
話いただけますか？

あわ居のことは、もともと知人を介して知りました。もともと私は、宿泊業に興味があるのですが、ただ単に泊まる、泊めるというよりも、そこでの会話とか、その人と向き合うこととか、そういう作業が好きだから、宿が好きなんだと思っと思っています。知人とそういう話をしているときに、まさにそういうことをやっている場所があるよということ、あわ居を教えてください。それですごく気になり、行ってみたいと思っていたのがそもそものきっかけです。「ことが生まれる場所」に参加

したのは九月だったと思うのですが、六月のはじめくらいから私は会社を休職していたんです。けっこう精神的に（バランスを）崩しちゃって。それで宿に興味があったから、（九月の後半から）徳島の宿泊施設で一ヶ月インターンをすることにしました。車で徳島までアクセスする道中、せっかくだから色んなところに行こうということで、あわ居にも行きました。

——当初の動機付けとしては、花さんが宿泊業に興味があるなかで、人と向き合うような形態でやっているあわ居という場所を、少し覗いてみたいという部分が強かったという感じですかね。それ以外の動機付けはありましたか？

——例えばどんな言葉が印象に残りましたか？

うーん……メインはやっぱりそれですかね。あわ居をやっている岩瀬さんご夫婦が、どんなきっかけであわ居をやるようになったのかとか、今のような形態での営業を、そもそも狙っただけなのかとか。今の形に落ち着いた経緯や背景などを、シンプルに知りたいなと思ったのが大きな理由です。あとは、自分が休職して、これからどうしようかっていうタイミングで、自分自身とある程度方向性が似ている人たちとお話をして、考え方に触れてみたいなっていう部分がありました。今の状況を共有して、一緒に考えたりしたかった。

崇さんの言葉と、美佳子さんの言葉、それぞれにあったんですけど。崇さんだと、「言語化できない状態を大事にしている」という言葉ですね。今もですけど、その時も、これから私自身が目指していくものが定まっていないう状態で、「宿泊業！」や「カフェ！」みたいに、「これを目指しています！」っていうものを、一言で分かりやすく言えない事に対して、焦りを感じているっていう話をあわ居でしたんですよ。

でも、例えば「宿です」とか「カウンセラーです」みたいに、今の時点で既にその何かが見えてしまっている、目指す価値がないとは言わないけれど、面白くないような気もする、っていうような話を崇さんがされて。むしろ、今言葉にできない職業であったり、言葉にできない状態が大事だと思ってる。それが「なるほどなあ」って思ってる。私は逆に、そういう状態に焦ってしまったので。むしろそういう状態こそ良い状態なんだっていうか、大事なんだなって。

それで、実際に行ってみて、あわ居は宿業ではないなと思ってきました（笑）。私は色んな宿に泊まる時にメモをつけていて、「この宿はこういう印象だった」とか感想を書くんですけど、あわ居の場合はそういうジャンルにはもはや入らない（笑）。自分としてはあわ居で受け取るものとか、それこそ印象に残った言葉とかがたくさんあって。普段、日記も書いてるんですけど、あわ居のことはその日記帳に、A4サイズで見開き四ページくらい書きました。印象に残った言葉を自分なりにかみ砕いて、解釈するとか。そういうことをしたいなって思うくらいに、あの時間に受け取ったものは多かったです。

あとは、美佳子さんだと「イライラがチャンスだと思ってる」という言葉ですね。これは、さっきの言語化できない状態の話とは、また別ジャンルの話になるとは思うのですが。二日目の

朝に、美佳子さんと二人になった時、パートナーとの話になりました。そこで、相手に対してイライラしてしまうっていうことを話していたら、「本当は〇〇して欲しい、でもそれをしてもらえなかった、だからイライラする」っていうプロセスがあると思ってるっていう話を美佳子さんがされたんです。つまりイライラは二次的な感情に過ぎないと。イライラは、「こうして欲しい」とか「分かかって欲しい」っていうサインだと美佳子さんは思っているって。

イライラすると、良いことないじゃないですか。だから、イライラは嫌な感情だっていう印象が私にはあったんです。否定的な感情というか……だから、イライラを感じる自分に、また嫌悪するというか。そういうループをどうしたら良いのかなあって、ちょうど考えている時期でもあった。だから、逆転の発想というか。イライラはチャンスだって、良いものに捉えているのがすごく印象的でした。

——今、パートナーとの関係性についてあわ居で話されたというエピソードが出てきましたが、さきほど話されていた当初の動機付けを踏まえると、もともと、パートナーのことについて話す予定はなかったのではなにかと推察します。そういうことを話そうかなあと思っ

——普段は一人で考えたり、悩んだりすることの方が多いのでしょうか？

そうですね、ほぼ完全に一人です。なんというか、壁打ちみたいな感じで、人と話して、言葉にして整理できたなあみたいなこともあるにはあるんですけど……基本的には一人で思考を深めていると思います。他者と一緒に考えを深めていく場合があるとしたら、パートナーとですけど……でもそれは五〇%対五〇%ではなくて、ひたすら聞いてもらおう感じに近いので、その時も私がぐるぐる頭の中で考えている感じですかね。

——そうなる、「パートナーのことを話してみようかな」と花さんが思ったのはわりと珍しいことだったか……？

たしかに……そう思うことの方が少ないと思います。あの時は、言っても否定されないうえに安心感が前提にあったと思います。「それは違うと思う」とか「その感情はおかしい」みたいな感じで、悩み自体を根本から受け入れないタイプの人が、私はすごい苦手なんですけど……そういう人には最初から心をひらく気は起きないですよ。だからまずあの時は、安心感があつた。それでいて、（あわ居の二人が）私と違うタイプの人だからな

たタイミングやきつかけのようなものが、花さんのなかであつたのでしょうか？

あー……なんでだろう……確かに私もパートナーのことを話しながら、もともと予約時に書いた内容と違うから話してよいのかなあとは思いつつ……でもなんか話したいなあと思って。「全然これまでとは違う話ですけど」って、自分から話し始めた記憶がある。「パートナーいるんですか？」とか聞かれた記憶はないですし。

たぶん、最初はあわ居という場所自体に興味があつて。その外側というか、方法みたいなものだけしか見ていなかったと思うんです。でも話して行くなかで、岩瀬さんたちの人柄がわかってきて、なんていうか……普段、自分が考えていることとか、悩んでいることとか、そういうもう少しやわらかい悩みみたいなものが、自然と出てきたんだと思います。心の中に。それがどういうタイミングでとか、そのきつかけになった言葉みたいなのは、すぐには思い出せませんが……やっぱりお話をしているなかで、お二人の考え方に触れて、（パートナーのことを）今話してみたら、どういう言葉がもらえるかなっていう気持ちになつていったんじゃないかなあ……。

のかな。似ている部分もあるけれど、私の思いつかない視点や意見がもらえるかもっていう期待もあつたのかなあ……だから「言ってみようかな」って思つたんだと思います。

あとは、あわ居の話を（岩瀬さんたちが）された時に、「世の中にないから」とか「狙った」とかじゃなくて、違和感を一個一個取り除いていった時に、今の形態になつたっていう話を聞けて。それがすごくいいなと思つたっていうか。自分たちの個性を受け入れて、できないことはできないものとしてやっている。自然な流れでこうなつたんだなあっていうふうに思えて。そういう背景もあつて、「自分たちをそのまま受け入れてきた人たちなんだな」っていう印象を、岩瀬さんたちに持ったからっていう部分もあるのかなと思います。

けつこう私自身は、人といういろと喋つたりするのは好きなんですけど、でも本当に自分の心をひらいて、自分のことや、悩んでいることを色々と人に話すことは逆に少ない。意外と壁が厚いというか（笑）。九割五分くらいひらいていても、本当にセンチティブな自分の悩みは人に言わないというか……：ドライな言い方をすると、あまり人に期待してないんだと思います。別に相手を嫌いになるとか、そういうことではなく。逆に相手の悩みを聞いたりするのはすごく好きなんですけど。そういう

意味でもあわ居の二日目の朝の時間は、自分のパーソナルなところまで話したなっていう感覚でした。

——今のお話もそうですし、先ほどのイライラの話とか、言語化できない状態についての話もそうだと思いますが、あわ居の時間では、花さんの日常的な習慣や、これまでの思考の範囲をならか超えた部分があったと言えるのかもしれないですね。

そうですね。それはあつたと思います。例えばあれから、イライラすることがあっても、「あ、今イライラしているってことは……」っていうふうに考えられるようになって、より建設的に相手に伝えられるようになったというか……「今イライラしている」ということをただ伝えるんじゃなくて、「これが欲しいんだけど」っていう言い方ができるようになってきた。これまではイライラが感情だと思っていたけれど、そのイライラの先にもうひとつ感情があるということを知ったので。そこが何だろっていう自分で考えられるようになって。その部分が自分で相手に伝えられるようになると、相手もより理解が深まるというか。相互理解が進む。以前は「イライラしているなあ」ということは自分で認識できていたけれど、それ以上には行けていなかったの。その意味で、もう一つ踏み込めるようになって。

たというか。

でも今は「ここがどうしても合わないなら、このタイミングではこういうことは止めておいた方がいいか」とか「そもそも今はぶつからなくても良いじゃん」とっていう感じになってきていて。自分を受け入れたことで、そういうふうに変わってきているのかなあとは思っています。俯瞰的に自分を見れるようになったんだなって。

——なるほど、興味深い変化ですね……これまで話してくださったことを踏まえて考えたときに、あわ居での時間は花さんにとつていったい何だったと思われませんか？

あわ居を通して自分と向き合うと言うか……崇さんと美佳子さんと話したり、空間などを通して、自分自身の深いところにある気持ちに向き合う場所……という感じですかね、一言でいうと。一人じゃ考えつかないところがありました。岩瀬さんたちとの対話があって、深掘りすることができたというか。オペみたいな笑。見られたっていうか笑。自分の心臓をひらいて、見せたみたいな。

た。

前から、自分のそのままの気持ちを抑え込まずに受け入れるっていうことに対しては、意識はしていたんです。でもそれでもまだ自分を否定していたというか……型にはめていた自分に、もう一個気づいたというか。「こういう感情を抱いちゃいけない」とか「こういうふうにならなきゃいけない」とか。無意識のところで「こういうものだ」というふうには自分でしてしまっていることに気付けた。こうなってきたのは、あわ居の時間が大きなきっかけであることは間違いないです。ただ決してそれだけでそうなっている、というわけではないと思います。

あわ居の後、徳島には三週間ほどかけて車で移動をしました。その期間にいろんな人に会うなかで、自分の性格が変わってきているというのが、自分でもよくわかるんです。前はとにかく、何が何でも向き合うところがあつたのですが、今は良い意味で、必要のないところは、避けられるようになったというか……例えば、パートナーとうまくいかない時に、「どうしてうまくいかないのか」「どうすれば良かったのか」という考えを、これまでではしていました。うまくいかないことがわかっているのに、ぶつかって、ぶつかつたこと自体に悩むっていうタイプだった。

なんかあの時感じていたイメージでいうと、心に水がすーって注がれるように、言葉が入ってきたなって。そういう感覚がありました。私は言葉がやってくる時に、「なんでこの人こういうこと言うんだろう？」っていう感じで、一回一回自分のフィルターを通して、考えてから飲み込むタイプなんです。そういう意味で言ったのか、どういう背景があつてこの発言をしているのかっていうことを、考えながら話すタイプ。だからストリートっていうよりは、自分の中をかみ砕いて言葉を飲み込む。でもあわ居の時間では、なんていうか、そのまますーってすー、すーすーって入ってきた感じでした。

——解釈しない感じというか……言葉は思考に大きく関連するものだと思うんですけど、その時の言葉は身体に浸透してくるような感じがあつた……？

そんな感じですね。ほんとに、そのままを受け止めるというか。そのまま入ってきた感じがして。それがなんか不思議な感覚でした。ざばーっていう感じじゃなくて。すーって。美佳子さんでいうと、イメージ的な例えを使って話をされることが多いから。テクニカルな面でいうと（笑）、それも要因だったのかなとは思いますが。映像として入ってきたっていうのがあつたと思いますね。

——自分の中に、もともとなかった解釈とか、日常とはちよつと違うものが入ってきているのに、すーっと入ってきたつていうのはとても興味深いですね。これまでの自分の価値観とか考え方の外に行くことつて、けつこう危険だつたり葛藤が伴うこともあるように思います。抵抗したり、拒否したりするつていうことも往々に起きうるような気がしていて。けれど、そういうものを、滑らかに受けとつた感じがありそうですね。

けつこう私は斜に構えるタイプで、その人の言っていることが、筋が通っていないつて思つたら、聞かないつていうか、聞いていないふりだけするところがあります(笑)。絶対にうのみにしないつていう気持ちがけつこうある。世の中でどれだけ信じられていても、私が納得しない限りは受け入れないつていう、そういうタイプだと思つています。でも、逆に言うと、自分が「なるほど」と思つたら、それは受け入れるんですよ。だからフラットに、筋が通っているかどうかつていう判断だけをしてる。

有名な人だからとか、実績を積んでいる人だからとかは考えないし、無名だからとか、子どもだからとかつていうのも考え

ない。そういう意味であわ居で滑らかに受け入れられたつていうのは、私の中で筋が通つていて思えたからなんだと思います。なんでもかんでもは受け入れない。休職していて、色々なことを考えないといけない状況だから、受け入れられたつていうわけでもなかったかなと思つています……まあでも、筋が通つていてつていう部分もありながらも、総合的だったのかな……場所の雰囲気とかも含めて。ただとにかく、水のようにすーつていのは初めての感覚でした。自分でもびっくりした感じですよ。リアルタイムで「なんか(ことばが)すーつて入ってくるなあ」つていうのがあつたし、後から振り返つて言葉にした時に、「あれは水みたいだったなあ」つて。

インタビュー実施日…2023年11月30日

聞き手…岩瀬崇(あわ居)

## 「あれ、僕ってこういう時間、普段だったら何してたんだっけ」

20代男性 / 2023年5月に「あわ居別棟」と「ことばが生まれる場所」を体験（計3泊4日）

——まずは、あわ居に来訪された時の、Yさんご自身の状況や動機についてお話しいただけますか？

動機としては、知人におすすめされたのがきっかけです。その時の僕の状態としては、二〇二一年の二月に、当時一歳三ヶ月の一番下の妹を事故で亡くしたなかで、将来への不安を感じていて。自分が何をしたいんだろうとか、自分とは何者なんだろうっていう部分でひっかかるものがあったので、まずは自分と対峙する時間を欲していたというところがあります。あとは大学に通いつつも、リモートワークを中心として、毎日フルタイムで働くような生活をしていたので、仕事をしない時間をあえてつくりたかったというところもありました。オンラインで

の無料相談で、崇さんにそうした背景をお話しするなかで、「あわ居別棟」で二泊して、そのあとに本棟の「ことばが生まれる場所」に参加するのが良いのでは、という話になり、滞在を決めました。

それで実際にあわ居に来て、まずは別棟に二泊滞在したわけですが、最初は「何をしたら良いんだろう」っていう状態です…何か持て余しているなって。それに対して葛藤する気持ちもありましたし、あとは日常のなかで、楽しいと思いつながらしている仕事に注力しすぎて、仕事と生活のバランスが、仕事が八割、生活が二割っていうような感じになっていったんだなっていうことを感じた。そのなかでまずは、チェックインの時に崇

さんにおすすめされた東畑開人さんの『居るのはつらいよ』という本をちょっと読んでみようかなって。僕は本に触れる機会がもともと少ないタイプなので。

その本は、三〇〇ページくらいあったから、読み切れるかなってドキドキしていたんですけど…そういう意味では、何かをしないといけないではなくて、自分がやりたいなと思うこととか、普段できていないことに触れてみる時間が、別棟の滞在では作れたのかなって思っています。ただぼーっとする時間だったり…仕事をしようと思えば仕事をすることもできる環境ではあったわけですけど。呆然としながら、ただ居たっていうのか。

——「何かしなければ」か「持て余しているなあ」といっただけの感覚はどのくらいまで続いたのでしょうか？

最初、別棟にチェックインをして、すぐに白山中居神社に行っただけです。その後、そのまま石徹白の大杉も見に行っただけです。その時は観光みたいな感覚で、持て余している感じも特になく。それで別棟に帰ってきてからも、ご飯をつくるっていうところまでは特に何も感じなかった。それでご飯を食べ終わり、普段だったらパソコンをひらいて仕事をするけれど、別棟ではパソコン

は閉じたままにしておくって決めていたので。その時に「あれ、僕ってこういう時間、普段だったら何してたんだっけ」って。

当たり前だと思っていた仕事をするということが、実は別にやらなくても良いもので、でもそれをするを当たり前みたいに思っていたんだなって。で、何をしたら良いんだろうと。一日目の夜はそこで葛藤していました。でも、次の日の朝起きた時には、その「持て余している」っていう感情はなくなっていましたね。生活をするじゃないですけど、何をしてもなく居ていいんだなって思えたというか。求めるところが、変わったというか…：自分がその場所、その時間に求めるものと言ったら良いんですかね…：たぶん環境に慣れていなかったところもあったのかもしれない。その環境に順応していなかった感じがあったというか…でも別棟で生活するなかで、「あ、ここ居心地が良いな」って。慣れを感じていったところがあつた。そこで生活することに慣れたから、あの場所に居ることにドキドキしなくなった。ここに居てもいいんだって。

自分自身、色んなところに行くこととか、遠出することに慣れてはいるんです。ただ、出張で宿泊するとか、旅行で宿泊するっていうことだと、宿泊をする理由が、仕事のためにホテルに泊まるってか、観光のためにここに泊まるっていうと

ところで理由付けができると思うんです。でもそういう理由付けが、別棟は難しいなと思った。「何をしても良いよ」っていう状態になった時に、何を選べば良いんだろうって。で、一日過ぎとしてみて、ただ居続けるっていうのか、無理にそこに理由づけをする必要もないんだなって思ったところがあつたんだと思います。

——— することが決まっている滞在には慣れていたけれど、特にすることがない状況に投げ込まれたときに、少し戸惑いがあったということですね。「ここに居てもいいんだな」っていう感覚が立ち上がってからは、どんなことをされていましたか？

本を読んだり、珈琲を入れたり。お茶を飲んだり。生活の質が高かったなと思いますね。食事の時に時間を感じるっていうか。朝昼晩、おなかが減ったらご飯を食べるっていう。普段はやつぱりすぐに時計を見る環境にいるので。時間を気にせず、ゆつたり過ごすっていうところがあつたと思います。

僕の中でひとり憧れている人がいて。その人は、素敵な暮らし方をされているんです。例えば、朝、珈琲豆を挽き、珈琲を入れ、珈琲を飲みながらゆつくり本を読むみたいな感じで、ひ

——— その意味では、目的がないとまでは言わないけれど、やらなくても良いのにやった行為が、あわ居別棟滞在中にはわりとあつたということでしょうか。

そうですね。本にしても珈琲にしても、お茶にしても……ただぼーっとその場所に座っているだけっていうのもありましたね。寝転がるわけでもなく、二階のソファーにただ座っていました。もちろん色々と考えちゃうんですけど。

あとは、二日目の夜の話で言うと、別棟においてあつたメモ帳とボールペンで色々書き出すっていうこともしていました。なんか感情がモヤモヤしてきて。本を読んだり、自分の時間を大切にすなかで、それでも「今後自分はどうしたら良いかわからない」っていうのが出てきてしまった。「そもそもなんであわ居に来たんだっけ？」とか。自分に問いを持ってしまつて。

それで、「これは何なんだろう」って考えていった時に、自分の中で二〇二一年に当時一歳三ヶ月の妹を事故でなくした経験がやっぱり大きくて。そのあと、「妹にとって」かっこいい兄ちゃんでありたい」って思って頑張ってきたけれど、でもそれって結局、僕のエゴでしかなくて。妹はおそらくどこかで見てくれていると思うんです。でも妹にまだ縋っているというか。

とつひとつの時間を大事に過ごしている。その方をみて、僕は「生活の質が高いな」って思うんです。それと同じことではないですが、少し近しいことができていたのかなと。

生きるうえでお金を稼ぐことは必要な部分だと思っていますし、別に仕事をするのが悪いことだとは思いません。他の人からみれば、出勤がなく、リモートワークで働いて、っていう僕の日常の働き方をうらやましいと思う人もいるかもしれない。でも僕は、パツパツな生活ではなく、自分との時間というか、ゆとりを持って暮らしているその人の生活をうらやましいなっと思うところがあつて。僕もそういう生活がきたら良いなっと思う部分がある。

——— 「自分との時間」というのは独特な言い方ですね。

仕事をしているのも自分との時間ではあるんですけど(笑)。どこか観点が違うというか……仕事の時間は目的がはっきりしている。お金のためとか。でも珈琲を入れるのは、別に入れなくても良い。それをやらなくても良いけれど、でもオプショナルとしてそれをあえて自分でつけているところがあると思うんです。本を読むのもそうですよね。

妹にかっこいいと思ってほしいところ、動機付けをして、前に進もうとしている。その動機づけに妹を使っているだけなのかなって思ったり。

もちろん前提として、その動機づけがあつたからこそ、前に進めたっていうところはあつたとは思うんです。でも結局、それって本当に自分の人生なのかなって。妹のためとか、何かのためっていうところで理由をつけて、もしそれでうまくいかなくなつたときに、妹に責任転嫁できちゃうよなって思つて。あの人のためにやったからこういう失敗になつたとか。自分のためにそれをやるのではなく。

妹のためにここまで突き進んできて、ここまでは成功というか、良かったなっと思う。そこはポジティブに頑張れたなっと思うんです。でももしも、これから人生で大きな挫折をして、その時に「妹にかっこいいって思われたい」っていうモチベーションでやってきたことが失敗だつたって自分が思ってしまうことがあつたとしたら。妹との思い出がネガティブなものに変わる可能性もゼロではないというか……嫌いになったり、そこに責任を押し付けたりして。自分のエゴで前に進めてきたのに、責任を押し付ける矛先があるっていうことに、その時モヤモヤしてしまつた。で、「どう」感情のなかで、自分は妹に

かっこいいと思われたかったんだっけ」とか、妹との思い出とか、いろいろパーツとメモ帳に書きだしたんですよ。

—— 妹さんが亡くなって、「かっこいい兄ちゃんでありたい」と突き進んできたなかで、その動機づけが少し揺れたというか……。

そうですね。何をもって自分がこれまでやっていたのかがわからなくなっただけというか……なんでなんだろうって。なんで自分は「かっこいい兄ちゃんでありたい」って思ったんだろうって。自分の人生というテーマがありつつも、でももともと僕には「この人が笑顔になったら良いな」みたいに、他人を優先するところがある。そのなかで自分のことをないがしろにしまっていたな、っていう過去もいくつあつたりして。だからこそあらためて、自分のために生きるとか、自分の生き方って何なんだろうって。そういう問いが生じてきたというか……。

—— 日常の中では実は深い部分では感じていながらも、ないものとして扱っていたものがポコッと出てきたというか。日常の自分に対して距離ができたというか。いつも自分を見ている視点とは違う視点がそこで生まれているようにも感じますね。日常の自分に対して「あ

から聞こえてくる。自分にとって、この家にいるのが苦しくなりました。だからなんとか前に進もうと思って、自分の奥底の潜在的な部分に向き合うことにふたをしたからこそ、そのあたりの記憶が抜けていたというか。その時は、前に進もうっていう気持ちしかなかったから、すっばり抜けてしまっているな、っていうのは今でもありますね。

—— すべてを思い出したわけではないとは言え、そのあたりの記憶が少しだけ、別棟滞在中に立ち上がってきたわけですね。

そうですね。映像として出てきましたね。妹が溺れて、僕が救急車に同乗したんですが……その車内での様子であつたりとか。妹が救急車から降りて、親が待合室に来た後に、「この病院では集中治療を提供することができないから」と告げられて、小児医療センターに運ばれた時のこと。僕と母と姉はそこで、もちろん不慮の事故ではありつつも、警察に事実確認を受けました。署に行って、「相談室で話を聞かせてください」って言われた。それで家に戻って、寝て、次の日にまた病院に行く……。

そのあたりはすごく忙しなかったんですが、でも僕たちは生

れ？」みたいな。

そうですね。それはあつたと思いますね。時間に余裕があつたっていうのも要因としてあつたと思うんですよ。非日常的な時間だったからこそ、日常のいつもの自分に対して目をむけることができたというか。

あとは妹についての記憶が少し思い出せた部分もあつた気がします。妹が溺れたのが二〇二一年二月だったんですが……救急に運ばれ、小児医療センターに運ばれて。妹は十二日間くらい延命をされながら……でも「絶対回復する」「一緒にまた生活ができる」って思いながら、ずっと病院に通っていて。それが二週間もなかったのに自分たちのなかでは三ヶ月くらい経っているような気がしていた。それで妹が亡くなっても、そのことを受け入れられなくて。僕はその時高校三年生で、その後、高校の卒業式を三月末に終えました。

自分にとって妹はとても大切な存在で、朝に「おはよう」って言いに行くのがその時の自分のルーティンだったから。それがぼつかり抜けてしまったところがありました。前に進まないといけないけれど、親や兄弟が悲しんでいる姿がそこにはあつて。親が夜泣いているのを聞くとか。すすり声が他の部屋

きないといけないし、なんとかやっていこうって思っていた期間だったから……そのあたりのことが、記憶から抜けていた……その時の記憶を別棟で思い出して、苦しくはなつたんですけど。ところどころの記憶はもちろん、もともとあるにはあつたんですが。でもすべて繋がっていなかったというか。時系列を忘れるくらい忙しかった。なんとか無理にでもやろうとしていたところがあつた。

だから十二日間の流れですかね。そのストーリーというか、妹の身体にどんな変化があつたかとか、家族が「なんとかしよう」って思っていたところとか。そういう時系列で繋がっていなかったところ。なんで「かっこいい兄ちゃんでありたい」って思っていたんだっけ、っていうことを考えているなかで、その十二日間のことを思い出したのかなって。で、こういう二日目の夜のモヤモヤは、三日目も持ち続けていたとは思わんですが……まあでも三日目はまた珈琲を入れ、本を読み、お茶を飲み……みたいなことをしていた感じですね。

—— そういった流れのなかで、本棟に移動して、「こたばが生まれる場所」に参加されたわけですが、その時間はいかがでしたか？

うーん……本棟に移動して、まずは「人の声が聞こえるな」って。やっぱり僕は家族が多いので。誰かが居るっていうのが当たり前で、一人でいるっていうのがなかなかなかったから。変な感じでしたね。一人になるのも大切だけど、人の声がするっていうのも、僕にとってはかけがえないものなのかなって、まずは感じました。

あと、僕のなかで特に印象に残っているのは、崇さんや美佳子さんと対話をしている中で、自分の感情が素直に出たりとか、そのなかで自分についての問いを投げられたり、いろいろ引き出されていったことです。あとは、崇さんと二人で話しているときと、美佳子さんを交えて三人で話すときとで、がらっとその場の雰囲気が変わったことも印象的でした。誰と話すかによって、自分の感情やテーマ、言葉選びが変化しました。

——対話の内容的な部分ではいかがでしたか？

そうですね、妹の話も含めてかなりセンチティブな話を、感情を出しつつできたのかなって印象は残っていますね。あとは仕事の話。僕がどういう道に進めば良いのかってところで、このまま正社員になって、リモートでフルタイムで働くことを続けて良いのかとか。結局自分がどういう人間になって

いきたいのかっていう部分の話をした記憶があります。

——仕事についての話で言うと、こういう可能性も考えられるんじゃないかとか、こういう解釈もあるんじゃないかといったことを、私たち自身も積極的に対話のなかで場に出していたということをよく覚えてます。今のYさん自身の価値観とは少し異なる意見や、違う角度からの解釈を積極的に扱ったというか。

そうですね……それについては、実はその時は悲しかったというか……淋しかったのかわからないですけど……自分が「これで良い」と思っただけで選んでいいことや、今考えていることに対して、「こういう意見もあるのでは？」とか「どうも考えられるんじゃないか？」みたいに、色んな話をしてきた。そのときに、モヤッとした感情があったんですけど。今になってみれば、それも良かったとは思っているんですけど。

あわ居から家に帰る途中、車で運転している時にも、けっこうモヤモヤした感情があって。なんか楽しかったとか、行ってよかったとは思いつつ、わざわざ遠出して、「それってどうなの？」っていう問いを投げられたこととか、その時の言葉に対して、「ありがとう」って受け取れない自分があることに対し

ても葛藤していました。あとは「せつかくこういう時間を作ったのに」っていう感情もたぶんあったんでしょうね。

つまり自分のなかで、あわ居に行ってみても答えは出なかつたんですよ。自分が何者なんだっていうことに対しての答えが滞在中で、これという答えが出てこなかった。今になってみれば、答えが出てこなかったということに対して、もう少し冷静に見れるわけですが。でもその時は、答えを求めていたの……答えを求めてあわ居に行った。「これが答えだ」っていうのが欲しかった。だから、答えを持って帰れなかった時に、「なんのために来たんだっけ？」とか「求めていたものが得られなかった」って。結局、あの時の僕は何かを求めていたんですけど、うね。

でも、これは一ヶ月とか二ヶ月くらい経ったあとですけど、あわ居で撮った写真を見返していた時に、「あ、あわ居に行っただけ良かったな」っていう感情が出てきたんですよ。

——それまではわりと「行かなきゃよかったな」みたいな……(笑)。

あ、いや、行ったことに関してはポジティブに捉えてました

けど、その時得たかったものは得られなかったから……でも大きかったのは、あわ居から帰った後にちょっと人間関係でいろいろとあって。そこで自分の感情と向き合ったり、自分がどうありたいのかを改めて考えるような時間があったんです。その時に、こういうふうに自分と向き合っていた時間があわ居の時間だったんだなって。あの時、あわ居で出てきた感情が、自分にとって良いものだったんだなっていうふうに思えたんです。それであわ居で撮った写真を見返しながら、「行ってよかったな」って。

当時は、求めていたことを答えとしてもらえなかったっていうところに、モヤモヤしていた自分がいたんですけど、そこに對して腑に落ちたというか。「あの時行って良かった」って思えたことが、答えだったんだって思っても良いのかもしれないなって。モヤモヤしたことも含めて、あの時いろんな感情が出てきたことは、自分と向き合う練習の時間だったんだって。そういう時間をあわ居で作ることができたのかなと今は思っています。その意味では、向き合うことができていなかった自分、モヤモヤしていたのかもしれない。

——なるほど。私たちとしては、「ことは生まれる場所」の時間で、いろいろと話をするなかで、わりと

Yさんは整合性がとれているという印象を抱きました。「「こういうことがあって、だからこうなって、だからこれからはこうしようと思つてます、こう考えています」といった感じで。逆に言つと、整合性がとれすぎてしまつているのかなというふうにも感じた。もちろんそれはそれで一つの秩序を形成しているわけなので、悪いことではないとは思いつつ、でもそのなかで、将来への漠然とした不安をはじめとするモヤモヤを、Yさん自身が感じていたという事実はあつたわけで。だからもう少し余白というか、ざらつきがあつても良いのかなとは思つたんですよ。Yさんのその時点での考え方に対して、「そうだよな」とつてわたしたちが頷いているだけでは、どこかもつたないというか。だから、別に押し付けようとしたわけではなく、可能性として考えられることとか、今のYさんの思考の枠の外にあるような考え方を、いろいろと対話のなかで場に出していったという背景がありました。だから、Yさんがそのなかでモヤツとしたのであれば、私たちとしてはそれは良かったなつて思えますね。

価値観のズレではないですけど、「僕はその価値観は持てないなあ」とつていう部分もあつたと思うんです。自分とは違う価

することも受け入れにくくなつてしまふ気がします。

——現代は、いろんなことをすぐに変換してしまふ時代なのかなと思つています。「これだったらこれをすれば良い」とか「こういうことは、こう解釈しておけば良い」とみたいな感じで。そういう意味では、そのモヤツとしたものをいつたん解釈しないというか、変換しないというか。わからないままにしておこうつて思えた部分もあつたのでしょうか？

僕は「わからない」とつていうことを、人に言うことが苦手だつたんですよ。自分の中で「わからない」とつて認めることも苦手でした。今の自分で解釈をしようとしても、よくわからない。でもその「わからない」とつて感情を持っているのが嫌だからふたをして、「次に行こう」とつてやっていたんだと思います。その意味では「わからなから」とつていうことを受け入れても良いなつて思えたからこそ、モヤツとするものに対しても楽しむ姿勢でいたいなつて思えたのかもしれない。

——すぐには受け入れられないし、すぐには自分の栄養として吸収できないけれど、でも若干気になつた部分があつたというか……。

価値観を聞きつつも、これから自分が選択していこうとしている進路や生き方のなかでは、その価値観はマッチしないところがあつたので。だからこそモヤツとしたところもあつたと思えます。もちろん今も、その違う価値観を受け入れられるほど、変わったかと言つたらそういうわけではなく。あの時、価値観や考え方の違いを話しているときに、僕は否定されているのになつていうふうにも思つてしまつた部分もあつたのかな。

でもあのようなかたちで、違う価値観の話聞いたからこそ、「あ、そういう考え方もあるんだな」とつていうところで、種とかエッセンスというか。自分はすぐにそれを取り入れようとは思わなければ、例えば二年後とか三年後に、もしかしたらそういう価値観が腑に落ちることがあるかもしれない。なんでもかんでもすぐに受け入れる必要はなくて、自分が必要だつたら受け入れれば良いやつて思えたんです。

普段の生活のなかで、なんとなくいつも同じ仕事をするとか、いつも似たようなことをすれば、表からみればうまくいっているように見える。でもそこで何か変化が生まれているのかと言えば、決してそうではなくて。モヤツとしたものを感じるからこそ、「本当にこれで良いんだっけ？」つて考えることができるんだと、今は思える。そういうものを感じなくなると、変化

そうですね。最初から「無理です」じゃなくて、中途半端に、ふわふわ置いておこうつて。イエスとノーで判断するのではなく。そういうものを自分の中に置いておくボックスができた部分もあつたのかもしれない。モヤモヤしたけれど、でもその感情が、自分にとつていつか役に立つかもしれないというか……自分の中でひっかかる部分があつたり、何か感じるところがあつたということだと思つたので。

インタビュー実施日…2023年12月5日  
聞き手…岩瀬崇（あわ居）

「それが小さい頃、私にとって、すごく  
幸せだったなあって」

1977年生まれ / 2023年8月に「あわ居別棟」を体験（2泊3日）



——まずはあわ居別棟に滞在された動機や、その時の川合さんご自身の状況についてお話しただけですか？

年に数回行くくらいに、石徹白の集落や白山中居神社、阿弥陀ヶ滝のことが大好きで、もともと興味のある土地だったので、夫と喧嘩してついでに、ちょっと行き詰っちゃって。夫のお母さんが高齢で、一人暮らしをされていたんですけど、急に調子が悪くなってきた…ほけてきたのが理由で、こっち（自分が住んでいるマンション）に引越すか、引越さないかっていう話になったんです。あ、引越した後だったかな。私の背景

としては、そういう時期だったんです。それで、夫との意見の相違とか色々あって…「あ、ちょっと一人になりたい」って。

すぐに向き合っても絶対喧嘩に…というか、感情的になっちゃって、落ち着くまで一人で何も考えずに、一回態勢を整えたいって。ちょうど娘が二泊三日のキャンプに行く予定で、その集合場所が名古屋駅だったので、そこで娘をおろして、そのままひとりで郡上や石徹白に行こうと。本当に何を自分を望んでいるのかとか…なんていうんだろう…どうしてここまで夫に対して怒ったのかとか。そういうことを人にぶつけるんじゃなくて、自分でどうにかしたかったですよ。自分で考えるというか、一回フラットにしたいなあって思った。

——（笑）。けっこう遅くまで起きていらしたんですか？

いえ、そんな…もう眠くなったら寝るみたいな感じで…いや、音楽聴いていたのかな。二階で。何聴いてたかな…ちょっと忘れたんですけど。

——食事が終わって、お酒も飲み終わって、それで二階で音楽を。

そうですね、そうですね。上でダラダラ、うにやうにやしなからずっと音楽聴いて。寝るでもなく、起きているでもなく、ぼーっとして。うん。普段聴かないような音楽だったような気がします…娘といると、好きな音楽聴いたら、絶対にかえてって言われるんで、そう、うん。聴いていましたね、ずっと。

——娘さんや旦那さんがいるとできないことというか、本当に心からご自身がしたいことを満喫していた。

そうですね、その時やりたいことを、やっていました。

——それで、二日目になって、朝食を終えて。レイトチェックアウトだったので、チェックアウトの時間は十三

——チェックインは夕方だったと記憶しています。まず初日はどんなふうに通ごされていましたか？

ちょっとこれは後付けなんですけど、昔から私は海とか山とか、自然の中に行くと、いったんリセットされるというか、自分に戻れるというか。なんていうんだろう…ぶれてたなあっていうのが分かったところがあったので。ちょっとそういうところに行きたいなあ。それで前から気になっていたあわ居さんにご連絡させてもらったら、ちょうど空いているっていうことだったので。

食材を買い込んで来ていたので、自分で好きなように作りました。その時は辛いものが食べたかったです。いつもだったら、そういうのは、他の家族がいるとできないので。もう自分で思うがままにめちゃくちゃ飯をつくり（笑）。食べたいものを食べる。お肉だけ焼くとか。そんな感じで、ホルモンが食べたいってなったらホルモンどっさりみたいな感じで、作って食べて。それで、飲んで（笑）。ビールとか日本酒とか、お酒も買い込んできていたので。一人で酒盛りをした。全然寂しくなかったです（笑）。

時のご予定だったと思うのですが、たしかお昼前から、「延泊を」ということを伝えてくださいましたよね。延泊をされようと思った背景は、どのようなものだったのでしょうか？

あー、なんだろう。まだ気持ちが悪くまっぴりになっていないから、自分の中でまだ足りない、もうちょっと私は一人になりたいって思った。あと、もったいないっていうか。もうちょっとここに居て、なんかここで過ごしたいなあって思った。

ずっと雨が降っていたじゃないですか。で、そのしつとりとした感じ。植物が雨に濡れるとか、木が雨に濡れるとか。しとしとっていう雨の音とか……なんだろう……昔、小さかった頃、感覚を思い出したっていうか。なんて言えば良いんだろう……なんか、何もしないでぼーっとしていて。雨が降って。見慣れた植物というか……山だったからかな。なにか見慣れた植物が雨にぬれている姿とかを見てたら、なんかああもうちょっと居たいなあって。何かがすっきりするような感じがしたんです。うん、そうですね。小さい頃、若い頃に体験した自然の中での感覚みたいなものを久しぶりに思い出して……もうちょっとここに居て、それに浸っていたいなあって思ったんです。

り。そういうのが、あの時の私には、すごい心地よかったです。私が昔住んでいたのは、九州の福岡で、そこまで田舎ではないんですけど。今住んでいる場所よりは緑も多いけど、石徹白ほどは田舎じゃない感じ。で、雑草で、小さい豆がついている……カラスノエンドウかな。カラスノエンドウがうわぁってあって。それが生い茂る土手みたいなのが家の近くにあったんです。それに寝転んで、草がわぁって。横向いても草、こっち向いても草に当たる、草に触れるみたいな。そこでよくゴロゴロして。それが小さい頃、私にとって、すごく幸せだったなあって。それを……なんかそういうのを久しぶりに思い出しました。

——小さい頃というのは……。

一番記憶に残っているのは小一、小二くらいなんですけど。それが、うん……そうですね、そういう小さい頃をすごく思い出しましたね。あその景色と、雨は。今マンションの三階に暮らしていて、そんなに都会っていうほど都会じゃないですし、ちゃんと緑はあるんですけど、それでも思い出すことはないですね。普通に生活していたら。あの時は、全部だった。五感全部。匂いもだし、感覚としても。あの時の空気。何を考えていたかまでは覚えていないんですけど、その時の自分の気持ちとか、

——窓越しに植物を見たり、雨の音などを聴いたりしながら。

そうですね。緑側の窓を全開にして。最初はストレッチとかしていたんですけど。そのうち緑側の廊下で、そういうこともせず。ほんとに何もせず、ただぼーっとして。うん。遠くを見たり、雨を見たり、雲を見たり。ただ座って。ほんとそれをずーっと二時間くらい。

——二時間ですか……確かにあそこ窓からの風景は、目の前に川が流れていて、植物が生い茂っていて、っていうのがあると思うのですが……。

でも逆に雄大な景色とかではないじゃないですか(笑)。ほんとに私にとっては、なんて言うことのない景色なんだけど。でもずっと居たいって思ったのは、それだったからかもしれない。

——逆に身近だったというか。

そうそう。ドクダミを見たり、花の名前は知らないけどよく生えている花を見たり。ヨモギが生えているなあって思った

良い気分だったこととか。そういうのを全部思い出しましたね。触れた感じも。うん……そうそうそうそう。

——普段は思い出せるものではなかったわけですね。

そう。でもバラバラには思い出すかもしれない。昔こんなことがあった、とか。小さいころ、カラスノエンドウの原っぱでゴロゴロするのが好きだったんだよとか。そういうところでは思い出せても、それがどんな感じだったかまでは思い出せないですね。そうなんです。でも別棟に居るときは、「あ、そうだったそうだった」って。それで、それがたぶん私がニュートラルに戻るっていうことに近いような気がしたんです……なんて言えればいいんだろう……今生活していて……なんかでもね、感覚があるんですよ。自分がずれている感じ。普段生活していたらそれが当たり前だから分からない。ずれていることすら気付けない。でも別棟は、なんか呼吸が浅い状態で行ったら、呼吸が楽になった感じとか。深く息が吸える感じ。深く吐ける感じ。

——普段は、これが自分だ！っていうのが感じづらいなかで、別棟で風景を見たり、雨の音を聴きながら、「あ、これが自分だったなあ」みたいな感覚を、昔の記憶やその時の全身的な感覚を思い出しながら体感さ

れていた……でもおそらく、その時間が継続したとしても、チェックイン前の、日常のいざこざが解決するとか、それに対する解決策が見つかるとか、そういうことが起きるわけではないですよね……それでもそういう時間を、もう少し味わっていたらいいと思われたのは、今振り返ってみて、なぜだったと思われませんか？

あの……普通に心地よかったっていうのと……わかんないですけど、例えば一人でいたいって思って、家で二日間を一人で過ごしたとしても、たぶん問題解決についてばかり考えていたと思うんですよ。「相手がこうだから、こうで、私はこうだから、こう思って。どうやったら良いんだろう」って。でもそこでは答えが出ていなかったと思うんですよ。悶々として。堂々巡りじゃないけど。それよりも、なんか自分の内側をととのえる……例えば自分が疲れている時って、イライラして、人にあたって喧嘩しやすくなったりとか、人に優しくできなくなったりとかする時がありますよね。

別棟にいたら、そういう疲れがとれるなって思ったから……心の疲れが。それでそういう疲れがとれた状態で接したり、問題に向き合ったりしたら、ちゃんと自分の力と言うのか、そういうのが発揮できるんじゃないのかなあって。うん……心がた

「こっしよつ」というものが、具体的に見つかったというところではおそらくですよね……もうちょっと抽象的なところでひらけたというか。

そう。そう。あの……その起こっている事象っていうのは、いつも違うんですけど、同じポイントで夫と喧嘩してるなってずっと思っていたんですよ。で、なんでなんだろうって考えていたんですよ。それで……どっかで実は気付いていて……自分なんじゃないかって。自分の……なんだろう。鏡なんじゃないとかか。夫婦は鏡……ああ、ずっと思っていたかも……ああ違うなあ……夫もそうなんですけど、けっこう私、精神論じゃないですけど、人間の仕組み、心の仕組みみたいなものを二人でよく話なんです。で、いつも同じポイントで喧嘩するっていうのは、自分の中に絶対なにかがあるって思っていて。でもそれが何かが見えなくて、っていう感じだったんです。うん……。

あ、それで、話がすごい飛ぶんですけど、あわ居さんからの帰り……チェックアウトして、とうもろこし<sup>1</sup>を途中で買った後に、知り合いのところに行っただすよ。結婚相談所の人の

1 あわ居のある石徹白地区は、とうもろこしを一つの特産品としており、収穫の時期には集落内や峠道などで直接販売をしている。

ぶんむちゃくちゃ疲れていたんだと思います。うん、それでちょっと、今旦那と向き合っても、良くない方向に行きそうだなあっていうか。なんていうんだらう……うん、自分じゃない答えを出してしまいたい感じがしていたので。もうちょっと、もうちょっとと思っただ、二泊滞在しました。

——普通いざこざが起きると、その場で問題解決をしなくなると思うんですが、でもその時点でその問題について考えるんじゃないかって、いったんその現場から距離を置いて、まずご自身のフラットな状態を取り戻すことにベクトルを向けたわけですね。それで、二時間ほど、ぼーっと風景をただ見ていた時間があって。その後はどんなことが起きましたか？

うーん……これ、言い方嫌なんですけど……自分とつながれただっていうか。なんかこの言い方嫌で、私はあんまり好きじゃないんですけど。なんだろう……うん。直観とかも戻ってきたし。視界が……考えることがクリアになって。もちろん解決していないので、ここはモヤモヤしていたんですけど、でもあでもない、こうでもないじゃなくて……。

——視界がクリアになったっていうのは、問題に対して

ところに。私、その結婚相談所で結婚したんですけど……その方は少し変わったところがあって、「もう一生の付き合いだから」って、婚活の時からずっと思ってくれている人。もちろん旦那のことは知っているし。その婚活でなんか……ここを磨いたっていうか。この部分の話ばかりだったんですけど。「モテるにはこういう服を着なさい」とかそういうことじゃなくて。このころのあり様とか、自分がどうやったら相手と幸せになれるかとか……そういうマインドの話が多くて。

だから、その人にちょっと聞いてみようって。同じポイントで喧嘩ばかりしてるって思ったことについて。で、話しているうちにちょっと気づいて……小さい頃の思い込み、自分の思い込み。なんかわかんないけど、誰かから植え付けられた思い込みみたいなのをまだ手放さずに持っていて。そこが旦那の言動のある部分に反応して、敏感になってしまっていることに気付いて……それは本当に……誰もが持っているのかなあ。ちょっとわからないんですけど。

ずっど……何だろう……いてはいけない子だと思っていたんですよ、ずっど。小さい頃から。たぶん何かあったんでしょね。それをずっど引きずっていて。それがだいたい薄れてきたと思っただんですけど、結局そこだったんだなって。自分の全

部をまったく肯定していなかった。自分をどこかでジャッジしていた。そういう状態だったんだなって、気付いた。そういうことに向き合うために、必要だったんです。あわ居さんの時間が。たぶん、あのまま感情的にイライラムカムカしたまま、同じようにその人に話をしにいても、たぶんそういうふうな気持ちになかったと思うんですよ。こんなにはやく気付けなかったと思うんです。うん……いったんニュートラルに戻れたから、その後がサクサク進んだ気がする。

——ムカツとした状態でその方に話に行くこと、あわ居別棟での二泊三日を経て話に行くのとは、川合さんのの中から出てくるものや、問題や状況に対しての向き合い方の深さや角度が違ったというか……。

そうですね。そう。それで、あの後、大喧嘩をしたんです、やっぱり(笑)。もう全部をお互いが出し合うくらいのお互い大喧嘩。でも、その後すごい仲良くなって。なんか一歩一歩夫婦に近づいている感じがして。それでまたその後、怒涛のようにならないことがあって。

義理の母が、私たちの住んでいる場所の近くに引っ越してきた、これまでは普通に歩いていだし、普通に話せていたんです。

……。

……そうですね、うん……今までだったらあきらめていたかもしれない。もうダメだ、もういいやって。これ以上はもういいや、無理無理みたいな。言うのも無理だし、言っても理解してもらえないみたいな。相手の話を聞くのも無理だしてみたいにして、どこかで歯止めをかけていたんですけど。うん。

——感情的にわあーって言ってしまっから、という理由で別棟に滞在されて、その後、結局わあーって出されたわけですけど(笑)。そのわあーの出し方というか、自分の言葉を出してくる場所といたらいいか。そういう部分に何かしらの違いがあったということなのでしょうか。

そうですね、そこは違っていました。うん。あわ居さんに行っていた時は、もうわけがわからない怒りだったんですよ。なんで私こんな感情が生まれてくるんだらうって。全くどこから湧いてくるのかわからない感情だったんです。怒りが。怒りだったり悲しみが。で、それがあの時間を経て、なんだろう……落ち着いたっていうのもあるし、クリアな怒りだったり、クリアな悲しみだったり……うん、そんな感じになりました。わけのわか

が、急にぼけちゃって。歩けなくなつて。今は介護が必要になつてつていう現状なんです。それで、何だろう……つながっているなあって思つて。今の生活にはやつと慣れてきたんですけど。その間も、いろいろと自分を保つのが大変で。でも今考えると、全部つながっているのかなあつて思つて。

あの喧嘩は、より深かった気がします。お互い本当の気持ち……深いところで言い合えて、深いところで知れて。「この人は本当に私のことを大切にしようとしてくれている」っていうか。信頼して良いんだ、みたいな。そのことを改めて……揺るぎないつて。本当に揺るがない土台ができたっていうような喧嘩でした。ニュートラルになつて、自分を出す準備ができていたんだと思います。態勢を整えるじゃないけれど。そんな感じだった。

——自分を出すつていうのは、感情的に出すのとは、また違つたかたちということでしょうか……。

そうですね……まあ最後は感情的でしたけど(笑)。でも、なんだらう……うん……。

——肯定感というか、「言つてもいいんだ」みたいな

らん自分が言っている言葉と、ちゃんと自分の軸から発している言葉つていうのは、違つたつて。

——「わけがわからない」つていうのは、一応自分から発しているけれど、少し衝動的というか。頭の中だけで発しているだけの言葉と言つたら良いのか……。

そうそう、それもあるし、あとは自分の思い込みから、発してしまう言葉だったりとか。どうせ私は、みたいな。だけど、ちゃんと自分の軸からというか、自分の軸が定まった時に発する言葉は、それとは多分違つたつてないかなあつて今回思つたし、今も思つています。

——腹の底からというか……。

そうそうそう。ほんとそんな感じでした。だから、こつちも本気だから、向こうも本気つていうか。真剣に言葉を出してくれて。それで最後は大仲直りして(笑)。で、そこからやつぱりあの……お互い感謝を忘れないようにしようつて。色々と傾向と対策を出して(笑)。それで今に至ります。

——なるほど……少し話を戻していければと思うので

すが、二日目のお屋に昔の記憶を思い出した時間があつたなかで、三日目のチェックアウトまでのお時間はどのように過ごされていましたか？

あの後は、石徹白の大杉に行ってきたんですよ。それでそのあと車で温泉に行つて、別棟に戻つてきて、残りのホルモンと辛いものを食べて。そのあとは一人でカラオケ大会をして(笑)。誰もいないから(笑)。

—— えー(笑)。まあでも(歌う声は)川の音で消されま  
すもんね。

そう(笑)。でも一応気をつかつて窓は全部閉めました。そう。人と(カラオケに)行くと歌わないような歌、自分の好きな歌ばかり二十回歌うとか。そんなカラオケ大会をし、それで寝ました。

—— 余韻みたいなものもあつたのでしょうか？昔の記  
憶が思い出された後の時間というのは。

そうですね……あ……石徹白の大杉に行つた時に、大杉がなんか色々色々と話した気がして。石徹白の大杉さんが(笑)。で、「なんでも良い」って言われたんですよ。私は昔から石徹

白の土地が好きなので、移住を考えた時期もあるんです。でもお義母さんのこともあつたりで、頭がムニムニして。それで、「ここに住んだ方が良いと思う？」って聞いたら、「どこに住んでも良いし、住まなくても良いし、人を愛しても良いし、愛さなくても良い。どうでも良い、どっちでも良いよ」みたいな感じで。「怒つても良いし、怒らなくても良いし、喧嘩しても良いし、しなくても良いし」みたいなことをずっと言つてくたのかは分からないですけど。でも、どちらにしても、のんびりぼーっと別棟で過ごしたあの時間がなければ、それは聴こえてこなかったと思います。

—— 良い状態だったわけですね。

そう。それで、そうだよーみたいな感じで、大杉にバイバイして帰ってきたんですけど。でも私、前にも同じことを大杉に言われていたんですよ。「しなきゃいけないとかこうじゃなきゃいけないなんて一個もない」みたいな。もつと言うなら「恨んでも良いし、恨まなくても良いし」みたいな。「どっちでも良い」って。そのことも一緒に思い出して。そう。そういうふうに、たまに会話みたいなのができるんです。他のものどもでもそれはやっぱり自分がニューtralじゃないと。そうなん

あるような気もしますね。

大きいですね。自分が何が好きで、どうしたら気持ちよくできるのかっていうことが一個分かつたっていうことだから。私にとつては大きな変化だなあつて。それで、夫ともいつも話していたんですけど、山に移住しようって、お家を買おうって今話して。来年から本格的に動き出そうと思つています。ご縁で、そういうところが見つかれば良いなあ。

—— あわ居別棟では、何かに向き合つたというよりは  
ゼロになり、向き合つたための状態を作つたというか、  
ととのえたというか。それで向き合うこと自体はチェッ  
クアウト後にされて……そんな時間だったという印象  
を抱きますね。

あ、あとはあわ居さんから帰つてきて、あわ居別棟つて、キッチン窓から緑がすごく見えるじゃないですか。あれがすごく好きで。ああやって緑をみながら、料理をしたら落ち着くなあつていう自分の性質が分かつて。なので、家(マンションの三階)でも窓全開にして、カーテンも全開にして、そしたら若干そこからお山が見えることが分かつて。だから今はお山を見ながら料理をしています。今までは家に居る時は、ずっとカーテンを閉めていたんです。でも今は全開にして、夜も全開にして。それだけで、だいぶところに風が通るといふか。すーってするなあつて気付いたの。

—— 細かな変化ですが、それは、すごく大きな変化で

インタビュー実施日…2023年12月13日  
聞き手…岩瀬崇(あわ居)

『「さや、さけるー!」『できる!』ある!』みたいな(笑)』

1974年生まれ/2023年8月に「あわ居別棟」と「ことばが生まれる場所」を体験(計3泊4日)



— まずは、あわ居にお越しいただいた時の阪上さん  
の状況や動機、背景について、お話しいただけますか？

状況としては、会社を退職して、どこか自然豊かなところに  
移住したいということを考えていて。ただ考えてはいたけれど  
も、具体的にどここつていうところまでは絞り切れておらず。あ  
と、実際に移住してやりたいことっていうのも具体的に煮詰  
まってるわけでもなく。漠然とやりたいことはあるにも関わ  
らず、「でもそれ、自分にやれるの？」っていう疑問とか……  
自分に対する、ちょっと不自信を持ったような状態でしたね、  
まだ。そういう感じていたので、ちょっとあわ居さんの環境に  
身を置いて、自分の棚卸しをしてみたいなっていうのがあった

のと。あともうひとつは、あわ居さんに対しての純然たる興味  
ですね。なんか、自分が住みたそうな場所で、私がやりたそう  
なことをやっていらっしゃる方がいるっていうのは、どうい  
うことなのかっていう。その二点で、伺いました。

— あわ居にお越しいただいたのは、退職されてから、  
どのくらいの時期にあたるのでしょうか？

退職したのは(二〇二三年の)三月だったので、ちょうど半年  
弱後ですね。退職してからの半年間は、やっと仕事から解放さ  
れて。「自分が自由にできる時間ができたぞ、きゃっほー」み  
たいな感じで、長い時間がとれないとできないと思っていたこ

とを、しらみつぶしにやっていた時期でしたね。瞑想の合宿に  
行ったりとか、そういうことをやっていました。

— 最初にご連絡いただいた際は、いきなり予約とい  
うかたちではなくて、オンラインの無料相談の窓口か  
らでしたよね。そこで、その時の阪上さんのご状況に  
ついての話を伺いながら、最初にあわ居別棟に二泊し  
て、その後、本棟の「ことばが生まれる場所」を体験  
されるのが良いのではないかと「ご提案をしました」。

そうですね。

— あわ居別棟での二泊三日の時間はどのようなもの  
でしたか？

別棟の時間はね……なんていうんですかね。自分がやってみ  
たい生活の予行演習ができたっていう。私の中ではそのことが  
一番大きかったです。やりたいものっていうのはあるんだけど、  
でもそこまで自分で環境をととのえるのは時間がかかりま  
すよね。周りから雑多なものを取り除くとか。たぶん自分でコ  
ツコツやっていけるタイプの人間であれば、とづくにできてい  
たっていう話はあるんですが。でも自分は、憧れるんだだけ

ども、それをやったら自分がどれだけモチベーションが上がる  
かわからないから、なかなか手をつけられずにいた。そういう  
ところに(別棟があることで)一足飛びにそういう状況にもつ  
ていけたっていう。で、「やっぱりこれがベストだ」っていう  
ふうな味わいをさせてもらうことができたんです。「これ!ほ  
んとにこれだ!」っていう。

で、別棟に居るわたしを、そっとしておいてくれるんやけ  
れども、なんていうのかな……例えば「お野菜これもあるわよ」  
とか、「あれもあるわよ」って持ってきてくださったりとかして、  
心を配ってくれている感じがあった。なんかそれがすごく心地  
よい滞在で。安心して自分一人で石徹白の自然の中に身を置く  
ことができた。そういう印象を持っています。

これは私の性格的なものもあると思うんですけど、完全放置  
じゃなくて、見守ってもらえている状態での放置っていうのが  
一番自由になれる人間なんです。完全放置されてしまうと、  
逆に不安になってしまうというか、なんというか。(でも逆に)  
人がいたら、その人は何を考えているんだろうとか、どう思わ  
れているんだろうとか、別にそんなこと気にしなくても良いだ  
ろうに、たぶん気になっちゃうんですね。そこに余計な労力を  
働かせてしまいがち。

チェックインの時に、美佳子さんがすぐフレンドリーに迎えてくれて、話をしてくれたんで。その時点で、なんか岩瀬さんたちの感じがわかって、そこでもう安心。もちろん、その前から安心はできていたんですけど……なんて言ったらいいのかな。完全に放っておかれても、それはそれで楽しかったとは思うんですけど。でも、私は（石徹白地区の）ラジオ体操に声をかけてもらったりとか、あの絶妙な感じがすごく好きでした。たぶんそれは人それぞれで、もっと自分の内面に入っていきたいっていう人だったら、もっと完全に放っておいてほしいっていう人もいるかもしれないし。

——なるほど……いくつか気になった点があるのですが、阪上さんが、別棟で感じられた「やってみたい生活」とか「やっぱりこれがベストだ」というのは……。

ととのつた、落ち着いた生活環境。自分に対しても丁寧な生活環境と言うか。鉄釜でご飯を炊くとかね。プラスチックのものが、なるべくない感じとか。あのへんですね。うまく言葉にできて伝えられているかわからないですけど。都会で、時間を短くして、便利な生活をしようと取り入れていたもの……雑なものっていうと変な言い方ですけど。そういうものと距離を置

いた生活って感じ。

——都会での生活やそこでの時間の流れ方と、別棟でのそれとの間に、ちよつとギャップがあった部分もあったのでしょうか？

そうですね。その時に（自分が）身を置いていた大阪での日常のスピード感とは違うものだったっていう感じですね。あの時は、大阪でのスピード感が日常で、それが当たり前だと思っていて、自分の中でそれに合わせにかなきゃっていう焦りがあった。たぶんそれが自分はずっと抱えていた焦りのもとなんかと思うんですね。常に焦りに追われているような状態。そこで「焦るな、焦るな」と言われても、その焦りから逃れられないみたいなのがあった。でも、そこが日常なんだよねっていう、アンバランスな感じがあったんです。

兵庫に移住した今から振り返ってみたら、日常をどのポジションに置かかっていうことで。なんて言ったらいいんだろうな。あわ居さんは一種の非日常だったかもしれないけれども、私はそのあわ居さんのポジションの方に日常を寄せた方が、安心して日常を送っていける人間なんだろうな。都会の方の、あつちに日常を置いてしまうと……うん。苦しくなっちゃう人

間なんだなっていうことが……。

——当時、大阪に住まっていた時の日常というのがまず一つあつて。そのなかであわ居別棟に滞在するというのはその時点では非日常的な行為なわけですが、実際にそこでされていたのは、「ご飯作って、洗濯して、散歩してついでに、日常的な行為だったわけですよ。その意味では、大阪においての日常とは違う日常があるんだみたいな。こういう時間が、普通の日常になる可能性もあるんだ」という感触もあつたのでしょうか……。

あー……そうですね。まさしくその通りです。ご飯作るも、洗濯するも何もかもあそこでやっていたっていうのが、すごく大きかったです。イメージがつかめました。なんだろうな……何をしても嬉しい。自分が、例えば、ご飯を作ることが嬉しい。寝て起きて嬉しいとか。そういう感じですね。

——嬉しい、ですか……。

旅行に行っているわけだから生活ではないんですけど、でも生活の疑似体験をしていたわけなので。だから自分が生活すること、生きていくことに対して……うーん……なんて言ったら

いいんだろう。生きるよろこびみたいな感じですかね。素直に。自然の中で、自分のペースで、自分でいられる。自分のやりたいように、生活ができて。目に見えるものとかも。がちがちやしてると……片づけることは苦手なくせに、がちがちやしてするのが嫌っていうところがあるんですけど（笑）。だから、がちがちや感がなかったのも良かったんだろうなとは思いますが。あとは土地の力とか。ちゃんと地面に根ざして、自然と共に生きているような場所じゃないですか。うん。なので、そこに同化して、根源的に、動物本能的に嬉しかったんだと思う（笑）。

——「こういう自分もいるんだ」という部分もあつたんですかね……。

えーと……そうですね。頭の中で、こういうことできたら良いよねって思っていたものが「あつた！」みたいな。しかもそれを「私、今やってる！」みたいな。うん。イメージだけだと漠然としていたので。それを五感で感じられて、今ここに居るっていうのが。そうですね、それが嬉しかったんでしょうね。「いや、いける！」「できる！」「ある！」「みたいな（笑）。

——可能性がひらいたというか。「つつちだ！」みたい

な確信というか。

そう、そこは大きいです。あわ居さんに滞在したおかげで(その後の移住が)一気に動きました。確信ですね。「あれが良いなあ」じゃなくて「これだ!」っていう。うん。

——「これだ!」っていうのは、あわ居別棟と同じ環境に住むとか、同じしつらえにするという話ではおそらくないですよ。別棟にいる時の、阪上さんの状態とか、感覚とか。そういうのを感じられる生活環境を「作ろう!」っていうそういう感じですよ、おそろく。

そう、そういう感じですよ。在り方ですね。友達とか自分の周りの人に、自分の思っているやりたいことの話をすると、必ず「そんな夢物語みたいなことを、あんたにできるの?」とか「どうするの? 食べていけるの?」とかいう感じで、徹底的に潰されるんですよ。たぶん。たぶんじゃなくて実際に。そこまできつい言い方ではないにしても、「いいね、そういうの」とか言いながらも、「でも大丈夫なん?」っていう(笑)。近い人間ほど、そういう反応になる。

——そついうのもあって、どこか疑心暗鬼というか、「ほ

——それで、あわ居別棟に二泊されて、その次にあわ居本棟での「ことが生まれる場所」に参加されたわけですが、阪上さんにとって本棟の時間はどのようなものでしたか?

まず、はじめに崇さんがじっくり話を聞いてくださったじゃないですか。ご飯の前に。うん。そこですごい勢いよく話をしちやっとなあっていう覚えがあります。いろいろと、えらい時間をかけて。今もそうなんですけれど、私の話し方って、あんまりまとまりがないんですけれども、ちゃんとそこを、うん。話を聴いてくれて、有難いなっていうのと。あとは、話それちゃいますけど、こんな広い空間、ひとりを使って良いのかなって笑。別棟でも思いましたけど、本棟は余計そう思いましたね。

——それで、お風呂に入られて。その後、食事をしながらいろいろな話をしたと記憶しているのですが、特に印象に残っている場面などはありますか?

それはね、中動態の話です。崇さん自身が中動態的なあり様を大事にしているという話をされていたと思うんですけど。うん。で、私自身も、中動態的な人間なんだなって思って……なんているのかな。崇さんは(そのあたりのことを)言語化していく

んといけるのかな?」って思っていたのが、「もう」って「ち行つてやれ」みたいになった(笑)。

そうですね。なんか天秤で言ったら、ずっと自分のやりたい生活の方に、おもりを置きたいのに、どうしても人から言われることを気にして、そうじゃない、大阪での生活の方にどんどんどんおもりをのせてしまっていて。全然なんか針が触れないって思っていた時に、「どん!」って大きい分銅を置いてもらえたみたいイメージでしょうかね。

——たしかオンラインでの最初の相談をした後、滞在日について調整をしている際に、「今面接を受けていて、そこに就職する可能性もある」という旨をメールに書かれていましたよね。堅実で、現実的に見える方にやっぱ戻ろうかなみたいな。そういうゆらぎも当時あったのだとお察しします。

そうですね。そっちの方が堅くて良いんじゃないかみたいな(笑)。そこに就職を決めていたら、大阪に残ることになっていたわけで、(兵庫に移住をした)今から考えたらあれ以上大阪に住み続けるって考えられないんですけど(笑)。

ことで、この世の中にうまく繋がっていつている気がするんですけど、私の場合は、中動態なのに、色んなことを言語化せずここまできちやちやっつたっていう部分があつて。対話のなかでそのあたりのことを話している時に……。

(当時のメモをみながら)そうそうそう。今ちよつとだけまとまりました。あのね、私は言語化するために、すぐ時間がかかる人間で。スピーディーに生きていると、言語化している時間がないんです。ないから、私が言語化をやっていると、ほんまに日常生活のテンポが何テンポずれてくるのっていうくらいずれてきちゃうので。で、そこを端折っちゃっていた部分があつたなって。今、ふつと思いました。

もう一個は、私が不快な感覚への耐性が低いっていう話で。崇さんだったら、例えば執筆するってなった時に、生みの苦しみにみたくに、そこには不快さもあるけれど、でもそこを耐えて生み出してはるんやけれど。なんやろう……そういう不快さに耐えられなくて、逃げちゃってる部分が私にはあるのかもねっていう話に、あの時になりましたよね。私が大学院の時に、研究テーマが探せなかつたっていう話もしたりして。

で、ほんとにそれはその通りだと思いましたし……そこは自

分の中でも、どこかで思っていたところがあつたから……耐えなければいけない不快と、耐えなくても良い不快っていうのがあつて、その区分けがすぐく下手で、生きづらいついていうか……耐えなくても良い不快に耐えて、耐えなきゃいけない不快に耐えられないがために、どんどん迷走しちゃっていたんだろうなつて。うん。

今から考えてみたら、(私にとっては)都会の生活っていうのは、耐えなくていい生活に耐えていたということだと思います、ほんまに……自分が言語化が苦手な部分を、食事をしながら話をしていくうちに、それこそ中動的じゃないですけど、崇さんがなんとなくの私のイメージを掴んでくれて、言語で返してくれるんですよ。で、その言語をこっちが咀嚼して、自分の心で確かめる、そういう時間を過ごせる場所でした。

——それで、現在は既に兵庫に移住をされているわけですが、あわ居での三泊四日を終えた後の時間について、お話しただけですか？ 直接的に作用したかは別として、「ご自身のなかで生じた何かしらの変化であったりとか……」。

うーん……：自分に対してよい意味で優しくなりました。たぶ

ためには、自分に対する自信とどうか、信頼とどうか。それがあつてのものだから。そこが必要だったんだなつて。そこに对する方向性があわ居で作られたのかなつて思います。飛行機の揚力が働き始めたみたいな感じ。うん。今まではどれだけ飛ばうとしても飛ばなかつたのが、そこでふつと飛びはじめたみたいな。たぶんあわ居さんに居るときは、あがりはじめのところだから、自分では実感がなかつた。だから(その時には)「あ、ここで」っていうのはなかつたけれども、日数を置いて振り返ってみると、確かにあそこからだつたと思います。

それは浮か、沈むかつていうメンタル的な話で。飛びたい飛びたいって思っているのに、いくら滑走路を走つても、なか知らんけど地面の方に引きずられるだけで。どこまで走つても飛ばないから、もう私、このままたつまで経つても飛ばないかねえ、と思つてたところの、揚力。あがる力ですよ。

——人つてわりと常にせめぎ合いとどうか……悪い方に引つ張られる力が働いている一方で、未来をよくしたいつていう力も働いていて。それでいうと、今は後者の力が強くなつてきているところがあるのでしょうか。

うん、うん。そうですね。前半にも天秤の話をしましたけど。

ん。なんて言つたらよいか……なんかもつと自分が人に合わせられないのがダメで、人に合わせなければいけないと思つていた。もともと。でもそこは、そこまで気負わなくても良くて。あ、そうそう。それがあつたからこそ、小さいコミュニティのところに移住を決断するのが怖かつた。合わせなければいけないと思つているから。合わせようとしてしまつて、でも結局合わせきれない自分がいて。そこで崩壊するのが、なんとなく薄々自分で目に見えていて。うん。けど、それもバランスの取り方があるんだつていうことを、あわ居で聞けて。

雑な言い方をすれば、「それで良いんだ」つて。なんだろう。自分のメンタルポジションを良い場所に置くための、取捨選択……もうそれは、メンタルを持ち崩した時に、散々言われてきたことではあつただけけど。それは別に、都会みたいな多数(の人が)いるところに暮らそうが、少数しかない場所に暮らそうが、ベースの部分の関係ないというか。一緒つていう感じですかね。

——耐えるべき不快と、耐えなくても良い不快の整理が少しづつできつつある感じもしますね。

そうですね。おそらく。うん。ただそれを整理していく

ほんまにバランスが……どうしても自分がやりたい方向、動きたい方向にいかない。なんかこうおさえつけられているつていうか、こうほんまに地面に引き寄せられていくつていうか。そういうバランスだつたのが、一気に変わるポイントだつたなつて思つていますね。

——そのおさえつけられていた、つていうのは、いつた何によつてだつたのでしょうか……。

そうですね……：自分の生き方に……戻る。あ、でも戻るでもないかあ……いつとき、自分ではない何かになろうとしていた時期がずつとあつて。それは何でかと言つと、自分のままでやつたことを否定された経験があつたからです。うん。否定されて、それと同時に何をやつてもうまくいかなつたから。で、何をやつてもうまくいかなつた時に……：自分のやり方で何かをやろう、氣力を湧かそうと思つていたら、身内の者に、「たとえ納得できなくても、まずはアドバイスされたとおりに、なぜやつてみないのか？」と非難されて。なんていうのかな。それまでは何か問題を解決する時に、ちゃんと説明してもらつて、「それなら納得できる」つていうところをやつてみて、自分のやりたいようにやつていたのに。

で、納得しなくてもやらなきゃいけないだろうけど、でも納得していないことはできないし……みたいな感じで。なんだろう……自分のコントロール方法を自分で見失ってしまった時期がずっとあったんですね。で、そんな状態になっちゃって、まずまずなんかコントロールできないし、周りからもわけわからないやつと思われちゃうし、っていう悪循環があつて。ここから抜け出したいけども、ほんとにもうなんかわかなくなっちゃって。抜け出せなくなってますが……それがぼんっといきなり抜けちゃったっていう。そういうことなんですよ。

——なるほど……その、ぼんっといきなり抜けたっていうのは、いったい何なんですかね(笑)。

(笑)。うーん、ねえ。そうですね。そこを言語化したいですよね……うーん、それは、いきなりではないんですよ。うん。あわ居に行つたから、そこから、ばすつと抜けたっていうわけでももちろんないです。それはないんだけど……だからあの時には、そこまでの手ごたえがあつたわけでは、もちろんないにしても……でも、ほんまに、あそこらへんから変わっているんですよ。

あわ居の対話のなかでは、移住先としてどこに、っていうの

も決めてないっていう話をしていましたよね。そう言ってたんやけれども、あの後一週間くらいで、今住んでいる場所に、とりあえず行ってみようって決めたんですね。あわ居を離れて、その後も旅行をしているうちに、だんだんとそこで良いような気がしてきた……あ、これが一番あれかも。とりあえず身を置いて感じるこの大切さをあわ居で感じたから、とりあえず身を移してみても、そこで自分が合うかどうかを試してみればいいじゃんって。そういう踏ん切りがふわつとついたのでですよ。そこで。むしろそれが必要だなって。

——そこですぐにお試し移住を始めたんですか？

あ、いや。その時点では役所に電話をして、今住んでいるところ(移住体験住宅)をおさえさせてくれたっていう手続きをしただけです。せかせかやってもしんどくなるだけだということ。実際にお試し移住するまではすごい間を置きました。九月月上旬にとりあえず移住したいと言ったんだけど、実際に移つたのは十一月の半ば。そこでそういうセレクトができてるっていうのも、良いパフォーマンスのために自分に負荷をかけずに、こうしたらいいんかなっていう自分なりの選択ができてきたっていうことなんです。

——なんというか、そうした精神的な変化があつたことについて、やっぱり明確な因果付けはできない感じがします。でも、「自分の生き方でいつてやれ」っていうところに対して、いろんな要素が絡まって、そうなたのかなということはお話のなかで確かに感じます。

そのまとめがしっくりくるかもしれないです。全体的な流れのなかで、そういうことが起きたというか、なんというか……私の感覚としては、それを別に整理する必要もないかなって(笑)。うん。

——よくわからないけれど、身体がそっちに動いたっていう感じがしますよね。頭でぐうぐうはなく。

そうですね。うん。私は本当はあまり頭で考えすぎない方が、良い人間なんです。考えるのはあくまで補助なんです。感覚に対して理屈づけするための頭なのに、先に方向を決めるために頭を使おうとして、五里霧中に入っちゃっていたんだと思います。

インタビュー実施日…2023年12月24日  
聞き手…岩瀬崇(あわ居)

# 「怖さよりも、『その先に何があるのか』ってどう興味勝つちやつた」

2001年生まれ / 2024年3月に「あわ居別棟」と「こぼが生まれる場所」を体験（計4泊5日）



— まずは日暮さんがあわ居に来訪された際の、背景や状況についてお話しいただけますか？

もともとあわ居のことは、だいぶ前から知人を介して紹介されてきました。それで、大学卒業を控えたこのタイミングで、あわ居という場所の力を借りて、自分になにか変化を起こしたいなと思って。このタイミングで行ったら、自分の中に何か良いことが起こりそうな気がしたので、それで行ってみよう。今まで僕はすごく悩みが多くて……例えば両親の関係がうまく

いっていないとか、自分のセクシュアリティのこととか、付き合っている人との関係とか……そういう悩みを、なんとかしようとしてもうまくいかなかったり、自分の望む方向とは違うところに行ってしまったりして……すごく嫌な感じのまま、それでもずっと頑張りが続いていたんですが、でももう自分ひとりで頑張るのが嫌になってしまっていた、そういう状況でした。

1 セクシュアリティというセンシティブな話題が出たこともあり、インタビューを匿名で掲載することや、または当該部分を必要な形で削除したうえで掲載することなど、様々な可能性を日暮さんと一緒に探り、検討したが、日暮さんの強いご意向もあり、文章はそのまま、かつ実名で掲載をする、という判断に至った背景があったことを、ここに記しておく。

— 最初はオンラインの無料相談の窓口からお問い合わせいただきましたよね。そこで日暮さんの当時の状況や背景について話を伺いながらプランを検討し、結果的には、別棟に三泊四日滞在した後、本棟の「こぼが生まれる場所」に参加という、計四泊五日の滞在になりました。まずはあわ居別棟での時間はどのようなものでしたか？

まず初日の話をすると、僕は公共交通機関であわ居までアクセスしたんですが、別棟で使用する食材を買うのを忘れてしまいました（笑）。ここでは崇さんや美佳子さんが助けてくれて、食材を分けてくれたり、翌日、ついでに用事があるからとスーパーの近くまで車で乗せていってくれたりして、なんとかかなったわけですが……。

それで別棟では、最初は主に読書をしながら時間を過ごしていました。崇さんが事前に選んでくれた本のなかで、安富歩さんの『生きる技法』や深尾葉子さんの『魂の脱植民地化とは何か』が特に気になりました。特に『生きる技法』の方は、自分のな

かで共感するものが多くて。「表面的な平穏さは、毒である」という言葉がその本の中にあつたのですが、それは今の自分ですごく表現しているなあと。

それで三日目になって、その日も読書をしようかなと思って、しばらく読んでいたんですけど、でもなかなか読書に身が入らなくて。それでちょうど外が晴れていたんで、せっかくだから外を歩いてみようと思って、午後の二時半くらいから外に出かけました。別棟のすぐ近くに、大師堂への階段があるのが見えたので、最初はそこに向かってみたんです。でも階段に雪がめっちゃめっちゃ積もっていて足場が悪いし、階段をのぼった先も、入って良いのかどうかわからなかったから、そこは途中で引き返しました。それで、初日に渡された石徹白のマップを見ながら、白山中居神社とか長走滝がある上在所のあたりが面白そうだなと思って、そっちに行ってみることにしました。

その方向を目指しながら、最初は車が走るような大きい道を歩いていんですけど、でもその道を歩いていたはずなのに、

2 安富歩（2011）『生きる技法』p. 50、青灯社

3 長走滝は、白山中居神社の東側の林道を進んだところにある、落差十五メートルほどの斜瀑。

どんどんどんどん雪の積もった道を自分が歩いていることに気付いて。しばらくしたら、そこが道なのか畑なのかよくわからないくらいに、雪が積もっているところに入ってしまった。でもそこを歩かないと奥には進めなくて……そこで「一瞬」、「引き返そうかな」とも思ったんですけど、でもせっかくなのでここまで歩いてきたわけだから、なんか引き返したくないなって思って。そのまま歩き続けることにしましたんです。

——その時は、たしか靴を履いていらしたんですよね。

はい。運動靴でしたね。事前のメールで、崇さんからも「雪が多いので長靴をおすすめします」とか「靴下も二重履きを」とか言われていたんですけど、でもまさか、こんなに雪が積もっているはずはないと、どこかで思っていたので……なので、靴と足の間に雪が入り込んで、もちろん靴はべちゃべちゃよ、めっちゃめっちゃ歩きづらかったですね。

でもそうやって歩いているなかで、一瞬、自分の歩いてきたところを振り返って見たんです。そしたら辺り一面、雪が積もっているなかに、自分の足跡がはっきりと残されていて。それを見ながら、自分のなかでどこか嬉しい気持ちになっただけです。自分と石徹白の世界との関係性が見えたというか……自分

が歩いたことで、この真っ白な場所に足跡がついているんだ、っていうふうに思えた。なんだろうな……そのうれしさもあって、もつと奥に進んでみようって思いました。

進んでいくなかでは林みたいなところもあったんですけど、そこも進んでいかないと目的地の長走滝には辿り着かないということ……そこもなんとか抜けていこうと思っただんですけど、でも足元を見てみると、なんか確実に人間ではないものの足跡が雪の上にあたりして。そこで「もしかしたら動物に襲われちゃうんじゃないか」って怖くなって、引き返そうとも思っただんですけど、でも怖さよりも、「その先に何があるのか」っていう興味が勝っちゃった。僕はあわ居に泊まっているわけなので、崇さんや美佳さんが心配するかなとも思っただんですけど、でも何かあったら自分でなんとかしようと思っただけ……たまたまちょっと怖いことには変わりがないので、周囲をよく見ながら、慎重に先へと進んでいきました。

それで、雪に覆われていて、そこが道なのかどうかすらわからなかったところをずっと歩いてきたなかで、雪が積もっていない新しい道が、先に続いているのがはっきりと見えたタイミングがありました。そこでなんだろうな……自分がいろいろと悩んでいるなかで、人生に対しても問題意識が向いていたか

ういう景色と出会えるような旅をしたいなあとも思いましたね。自分でもよく分からないものに出会ったという感覚が大きかったです。

——自分でもよく分からないもの、と言つと……。

うーんと、なんだろうな。あわ居別棟のなかにいて本を読んでいるなかでは、少なくともそこで言葉と出会うというところに身は置いているんですけど……でも別棟でしている、ご飯を作るとか、寝るとか、何かを飲むとかって、普段の生活でも同じことをしているの。そこではなんていうか、その先が想像できるというか……自分としては「なんか分かるものに囲まれながら時間を過ごしているなあ」という感じだった。それとは違って、散策は周りを見渡しても自分の知らないものだらけだし、靴はびちょびちょで、歩くのも結構大変だったけど……でもそのなかで、ちょっとしたうれしさもあったりして、でもそもそも自分は嬉しい気持ちになるなんて思っってもいなかったから……だからそういう感情に出会うことも予想外だったんですよ。

——なるほど。それで別棟に戻ってこられたのは、夕方前くらいでしたよね。

ら、「人生っていうのも、きつとこういう感じで道が続いていくんだろうな」っていうことをそこで思っ……自分のなかでちょっととした感動がありました。それで、どんどんどんどん先に進んでいったんですが、その途中にも水が少しあふれていて歩きにくい道があったり、もつと大きい鹿の足跡もたくさんあったりして、何度も「やっぱり引き返そうかな」と思っただけですけど、でももう目的地も近かったので、「もう進んじゃおう」って。それでようやく、滝のある場所までたどり着いたんですよ。

実際、その滝を見てみて、なんだろうな……なんか思っただのと全然違っていた（笑）。自分が想像していたのは、めちゃめちゃでかい滝で、もつとインパクトがあるものだったんですけど、実際はすごいコンパクトで……そこまで大きなものではなかった。そこでは「こんな感じなんだ」くらいの感想しかなくて、そこまでの印象はなかったんです。でもその後、ふつと周囲を見まわした時に、そこに滝以上に感動する景色があったんです。その景色を見て、思わず涙を流しそうになった自分がいた。それを写真にどうにかしておさめたいと思って、撮り続けていたんですけど、何度写真を撮っても、さっき感じた景色がそこに映えることはなくて……それで自分の人生のなかで、こんな一瞬と出会い続けていけたらいいなあって思っただし、こ

そうですね、日も暮れ始めていたのでそろそろ帰ろうと思って。途中、美佳子さんから心配のメッセージがあったりもしたので、それでようやく別棟に帰ってきたという感じですね。三日目はそんなふうを終えて、四日目は、僕が朝起きるのが苦手なこともあって、昼前に起きました。その後は、縁側のところで寝転がったり、飲み物を飲みながら一息ついたり、読書をしたりといった感じで時間を過ごして、その後十七時に本棟の「ことばが生まれる場所」にチェックインしました。

——本棟での「ことばが生まれる場所」はどのような

時間でしたか？

なんだろうな……今思い返してみると、もっとあの時間のなかで過ごしたかったなあという感じですね。崇さんと美佳子さんと話して、すごく自分の中に言葉が湧き起こってきたし、崇さんと美佳子さんから受け取った、印象深い言葉もたくさんありました。例えばさつき触れた滝まで歩いた時のエピソードは、「ことばが生まれる場所」の時間のなかでも共有したのですが、それを共有した時は、言葉がドバドバと自分の中からあふれてきたというか……雪の上を歩いていた道中のプロセスとかあの時の情景が、話をしながらどんどん蘇ってきて、そのままどん

ながら、その時に思いました。

それで、今はあわ居から戻ってきて二週間くらいが経って、いつもの日常にいますけど、今話したところに関連する部分で言うと、これまで「男とも付き合いたいな」って思っているながら、そうできていない自分がいたので、今は同じセクシュアリティの人と出会うための動きをとってみたりもしています。今までそういう動きをしてこなかった分、そこで自分と同じようなセクシュアリティの人と出会えたことで、今はすごく自分が正直に生きられているなと思うところがありますね。自分はこれまでの人間関係で、みんなと仲良くなるのに、最低でも一年くらいかかってしまう感じで……それくらいかけないと話せる立場になれなかったんです。でも、同じセクシュアリティの人との間だと、自分のセクシュアリティを隠さなくても良い分、仲良くなるスピードが違っていて。言いたいこともすごく話せるし……たった数回しか会っていないなかでも、話が尽きないくらい車で話したりとか……なんていうか、自分の行きたい方向に行くだけで、こんなに心地よくいられるのかと思って、この先をもっと進み続けたいなと思って、今を過ごしていますね。

——なるほど……その他に印象に残っているエピソード

などはありますか？

ほんと、勢いのままに言葉が紡ぎ出されていったという感じでした。そこで崇さんから「その体験が日暮さんの原点のようなものになっていくのかもしれないですね」というようなことを言われて。「たしかにそうかもしれないな」って思ったし、というよりは「そういうふうにしていきたいな」って思いました。

(当時のメモを見返しながら)あとはなんだろうな……これまで自分が言いたいことをちゃんと他者に言えないことだったり、自分が自分の情動や感情にふたをして、社会や人から要請された自分を生きてしまっていることだったり……そのせいでずっと自己嫌悪とか不安、しがらみにつき纏われていることとか……それがすごく生きづらいとか。そういうことを話したりしました。そういうなかで、これまで自分がしてしまっていた、「心にふたをして、言いたいことをいえなくなってしまう」ことは、いったんやめてみようって……まあでもやめてみようって言うって、これまで自分はそれをしてきたわけだから、結局はふたをしてしまうとは思うんですけど……でも、そういう自分をちゃんと認識したうえで、「あ、今の自分はふたをしちゃっているな」って思った時には、ちゃんと「思ったことを言おう」って。「相手に合わせたところで言葉を紡ごうとしているな」って自分で気付いた時には、それをやめてみて、ちゃんと自分の言葉で言おうって。それを心がけたいなって、いろんな話をし

そうだなあ……僕は大学を卒業し、四月からはシステムエンジニアとして働くわけですけど、これから社会人として生きていくにあたって、なるべく遠慮をしないというか……このインタビューの冒頭でも少し触れましたが、僕は別棟で使う食材を持つてくるのを忘れてしまい、最初に石徹白のバス停に着いた時に、崇さんから「もしかして、別棟で使う食材忘れた？」と言われました。そこで僕は、崇さんや美佳子さんの力を借りずに、自分でなんとかしたいと思って……それで、僕は「お米を分けてもらえたら、自分は大丈夫です、それでお願いします」って言うっちゃったんです。でも「それはあわ居という場所の体験が貧しくなってしまうことでもあるから、すごく残念なことだ」って、その時に崇さんに言われて……そこで自分自身、気付かされたことがありました。

自分の心にふたをしているというか、ちゃんと言えていなかったというか……相手のことを想って言った言葉であるように見せかけて、でもそれはよく見てみると、自分自身のことばかり考えていたものだった。自分の身の回りのことしか見えていなかったというか……自分の本音を相手に伝えるってなった時に、「こうなるかもしれない」ということばかりを自分で先に考えてしまっって、結局言えなくなっちゃってみたい……」こ

うなるかもしれない」というのは確かにあるかもしれないけれど、でもそれは誰かに実際にそう言われたわけじゃない。自分で思い込んでしまっている部分もあるんだなということに気付いて。そういうところに陥ってしまうよりは、自分の言葉でちゃんと伝えることだったり、自分のことを正直に伝えた方が、結果的にはお互いにとって良いものになるんじゃないかって、そこで思ってた。

それであわ居から帰ってきてから、ふたをしていたものを晒すのが本当に怖かったけど、それでも自分の思っていることや話していなかったことを、相手に全部ちゃんと伝えてみた、そういう出来事がありました。そこでは自分にとって、ズキンと胸に突き刺さるような言葉が相手から返ってきたりもしました。でもちゃんと言えたおかげで、大変だったけど気持ちとしては苦しくなくて、清々しかったです。だからこれからも、そうした「ちゃんと伝える」という部分は大事にしたいなって。

あとは、本棟での二日目の朝は崇さんと美佳子さん、三人で話をしたわけですが、美佳子さんからは新卒で写真スタジオで働いていた頃のエピソードなんかを聞いて、社会で生きる術を助言してもらったり……それ以外にも働くことについていろいろと話していくなかで、自分はシステムエンジニアとして就職

して働く道をとるにあえず選んではいるんですけど、自分のやりたいことをやって、それを続けていく人生もあるよなあ、ということを思ってた……そのなかで「自分のやりたいことって、何かなあ」っていうことを考えていったときに、自分はやっぱり作曲をやりたいがっているなあということに改めて気付かされた。昔、授業のなかで作曲をしたことがあったんですけど、でもそこで熱が冷めることはなかったんだなって……だから、作曲をし続けられる生き方を選んでいきたいなとか……何が良いかっていうのはまだ分からないですけど、とりあえず今はあわ居から帰ってきて、自分に対して作曲をやらせてあげています。あとは旅もこれからたくさんしていきたいなと、今はそう思っています。

インタビュー実施日…2024年3月22日

聞き手…岩瀬崇（あわ居）

## 随想：「旅のつづき」 岩瀬美佳子

旅は止むことなく続いているのかもしれない。この土地とあわ居へ辿り着いたのも、その旅の途中。あわ居は場所でもありますが、起る現象そのものでもあり、構成するあらゆる要素が語に含まれています。有機的に変化していく、その中に浮遊しているものを追うのもまた旅。縦横無尽の旅の拠点として、私たちはこの土地を選んだように思います。清らかな水の巡りを感じ、この土地特有の静謐さとともに暮らしたかった。

ここへ越してから知ったことでしたが、私の父もこの土地へ旅人としてやってきたことがあったそうです。私がモロッコへ向かった年齢の頃の父は、かつてこの土地へ。私が子どもの頃から、旅に出なさいと何度も伝えてくれた父の旅先がこの土地であったことは、この土地で、私の旅が続く理由でもあるのかもしれません。

母はそこへ、花を美しいと感じられるのなら大丈夫だと添え、姉はいつでも自由を乗せてくれました。私を支えてくれた人々はいつまでも私を支え、日々共に暮らす家族は、私のままで旅を続けさせてくれて、しばしば旅を共にします。ここへやって来る人とも、気の置けない友人とも、ふと出会った人とも。



わからなくなったら旅をすればいい。それは父の言葉だったのか。答えはなくても、それを掴もうとすることに旅路はあるように思います。私はそうしてどこまでもいつまでも、旅をするのかもしれない。花が咲かない春はなく、どの花もそれぞれに美しく生を全うし、それらは繰り返されるので。

旅に目的や意味はなくても良いのかもかもしれません。しかし何を探し、何を求めているのか。目指すものは、どこか楽園のようなものだろうか。巡礼の目的地なのだろうか。生きている限りたどり着けないのだろうか。それはどんなところなのだろうか。子どもの頃に描いたような世界なのだろうか。そんなとりとめのないことを思う時は大抵ぼーっとしながら、考えるようで考えていないような、どこかふわふわした感覚でいます。手がかりを探しているようで、そうでもなく、ブラブラとあてもなく歩く。それこそ旅先での動きによく似ているかもしれない。その散策には地図がなくなるときがある。東西南北がわかり、大体のまとまった土地のイメージがあり、ある程度の計画も立てられる、そして何となくその上を歩いているのだが、ここがいったいどこなのか、どこでも、どうでもよくなってしまう時間がやってくる。

無意識なのだろうか。それとも記憶なのか何なのか。際限ない浮遊感の中を、彷徨っているだけのよな時間。しかしふっと、目的地のようなところへ辿り着くことがある。その日は空気も光も、心

なしか春めいていて、それでも肌寒く、ストーブに手をかざしていた。その、あまりに何気ない、とある瞬間、唐突に辿り着く。かつての光景と情景と感覚が、まるで今の出来事のように蘇る。

\*

十数年前、母は突然、小笠原諸島へ行こうと私を誘いました。世界遺産となって人がたくさん訪れるようになる前に行ってみたいのだと言いましたが、それはきつと行き詰まっている私を思っていたのでした。この旅では案の定、地図がわからなくなりました。島では母とひたすら歩き、宿泊予定の停泊船へ。船までは迷いながらもなんとか辿り着くのですが、船が小さく揺れ続けているからか、私は迷子の心地のまま。何の気なしにつけたテレビからは、始まったばかりのモノクロ映画が流れていました。とあるロシア兵と、とある原住民の物語。私はその中でさえ彷徨うことになりました。二人は猛吹雪の中を凍えながら歩いて命からがら、こちらまで凍えてきそうで見守るのも耐え難い。それなのに目が離せません。しかしやがて二人にふっと灯火が宿ります。小笠原の温暖な気候とはほど遠いその世界は、この旅に意図せず強い印象を残し、今のこの地の印象とどことなく繋がっています。

翌日は鯨を探す船に乗り、途中シュノーケリングを体験しました。私も母も初めてのことで潜り方

すらわからない。少し潜れたとしても、苦しいばかり。一緒に泳いだ記憶がない母は、いったい大丈夫であるのか気になりながらも、それでも「潜りたい、潜りたい」。そして少しだけ思い切ると、ふと海に吸い込まれるように潜ることができました。それはほんの一瞬のことでした。恐怖を伴った時間。しかしその先に、あまりに完璧に世界は美しく広がっていたので、私は絶句し、息をすることを忘れそうになりました。目に映るものは何もかも知らず、捉えきれず、夢を見ているようでした。ただただ圧倒され鼓動が大きく速まりました。

この世界を見てしまい、私はこれからいったいどうしたら良いのだろう。  
戸惑いがあり、少し苦しい。

そしてすぐにいつかの大学教授のくぐもった声が耳に飛び込んでくる。

あなたたちはもう海に潜っています。

そこにはどれほどの深淵がありますか。

その世界に潜りこみ、美しさを味わってください。

それこそがあなたの哲学です、と。

その世界では自分はよそ者のようでありながら、それでも当然のようにその世界の一部として自分が織り込まれている。私はまるで住人のようにその世界の構成要素となり、こちらがどんなことを考えている人間であろうが、さほど問題ではない。ここにずっといたいと、少しでも思ってしまった。

\*

私はストーブの傍で、そこが旅の目的地なのだと思に落ちた。あの心地こそが、と。それこそあれが、楽園のようなものだったのかもしれない、と。

モロッコもそうだ。城壁に囲まれた土壁の街には、財宝のようなものが散らばっていた。おとぎ話のような世界は漆黒に転んでも光り輝き、私は私でいることしかできず、しかも街の身体の仕組みの一部のように、そのまま守られた。その街から向かったサハラ砂漠は深海のようでもあった。全く乾燥しているのだが、暑くて、少し息苦しいのが放心を誘うからか。そこもまた目的地のように思われた。砂の粒が大丈夫だと言ったように聞こえた。一粒一粒がそう言っ、その声の重なるとつもない安心感はいつまでも私に残り続けている。

あわ居のすぐそばでは川が流れていて、その音は止むことなく聞こえてきます。ある時ふと、これは胎内で耳にするであろう、母の血流の音と似ているのではないかと気づきました。その音の中で、胎児は生命の歴史を辿るような壮大な旅を始める。そして生まれ出た私たちの旅は、そこからさらに続いていきます。流れる川の中を、音楽の中を、言葉の連なりの中を、記憶の中を、草木の中を、声の中を、星々の中を、深海の中を。ただの日常のようでいて、でもその目でしかないその日の中を、日々の微細な違いに目を凝らせば、その向こうには果てしない、わからない世界がいつでも広がっています。そこにはもしかしたらいつでも求めているものがあり、そこから物語は創出されてゆくのかもしれません。

物語はどう続くのか。そう問うてくるかのような静けさが、この土地にはあります。目指す場所への戸口のようなものは、一瞬だけ大きく開くように思うのですが、そこへと進むことは少しの覚悟がいるのかもしれません。しかしそれこそが旅の広がりであり、物語の展開となる。戸口の向こうには暗闇もあるのかもしませんが、光は必ず差し込みます。私はどこか、海のように、砂漠のように、この土地の自然やあわ居で、その戸口が開かないものかと思っているのかもしれません。そしてここに来てくる旅人へも、戸口の在りかを案内できないものかとも。こうしてあわ居の旅も続きます。

## 年表



2014年9月

観光ではじめて訪れた石徹白の土地の力に圧倒される。もともと中山間地域への移住を考えていたものの、当時は石徹白に住むという選択肢も、そのイメージもまったくなかった。一方で、滋賀県や三重県、岐阜県などのいくつかの地域を移住候補先として見てまわっていたものの、どこかピンとくるものがなかった。

2015年9月

知人を介して、現在のあわ居となる築90年程の古民家を紹介される。はじめて古民家を現地で見、夫婦で「ここだ!」と思う。

2016年3月

現在のあわ居となる古民家を正式に譲って頂く。

2016年4月—2019年3月

二拠点居住のような形態をとりながら、月・火・水・木曜日は岐阜県大垣市で家業の仕事をし、金・土・日に現在のあわ居となる古民家を、自ら改修する生活を約三年間続ける。釘とビスの違いすらわからない状態から、勢いだけでスタートした改修作業に四苦八苦しなながら、友人の大工や左官屋、地元の工務店のお力添えなどもあり、なんとか約三年に及ぶ改修作業を終える。

2019年4月

あわ居オープン（オープン当初は一日一組限定の民宿の形態で運営）

2020年3月

二拠点居住をやめ、石徹白に完全移住。

2021年3月

民宿としての運営をやめ、現在の事業方針へと転換。

2021年7月

書籍『ことばの途上』を刊行

2021年7月—12月

あわ居の敷地内にありながら、ほとんど使っていなかった築四十年ほどの倉庫を、ほぼ自力（水回りや電気、壁の立ちあげ、足場の組み立て等を除く）で改修し、あわ居別棟を完成させる。

2022年3月

あわ居別棟オープン

2022年5月

あわ居ホームページ上に「記録集（インタビュー・対談）」を作成。また「プロセスダイアログ」「オンライン無料相談」を開始する。

2022年9月

「フィールド学習」を開始

2023年10月

書籍『ことばの共同体』を刊行

2024年5月

書籍「あわ居—〈異〉と出遭う場所—」刊行に向けたクラウドファンディングを実施。48名の方々から768,000円ものご支援をいただく。

2024年12月

書籍「あわ居—〈異〉と出遭う場所—」を刊行

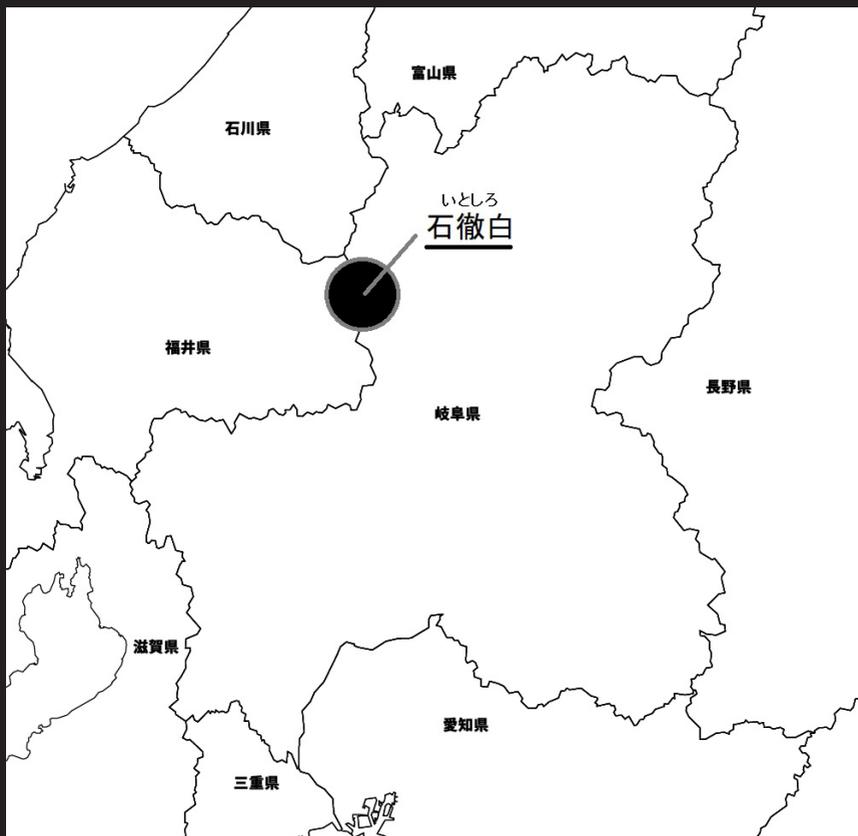
# 石徹白 (いとしろ) いとしろ

石徹白は、霊峰白山の南麓に位置する人口二〇〇人程の小さな集落で、標高七〇〇メートルという高地にある。福井県との県境に位置する岐阜県郡上市最奥の集落であり、また県内有数の豪雪地帯。土器や石器が出土していることから縄文時代から人が住んでいたとされる。集落内に鎮座する白山中居神社は景行天皇12年(82年)に創建されたという古い歴史があり、養老元年(717年)に泰山大師が白山に登拜し、白山信仰が広がった。平安時代から鎌倉時代にかけての白山信仰が盛んな時代には「上り千人、下り千人、宿に千人」と言われるほど多くの修験者が出入りし栄えたとされる。昭和30年代までは210戸1200人強の人々が住んでいたが、過疎と高齢化

が進み、現在は100戸200人弱。近年は、小水力発電をはじめとする地域づくり活動等の影響もあり、子育て世代40名ほどが移住している。

参考

• 石徹白区公式ホームページ <https://itoshiro.net/>



## 周辺の見どころ

### いとしろ大杉

白山登山道の入口から続く、石積みみの階段420段をのぼったところにある推定樹齢1800年の杉。樹高24m、周囲13.4m。泰澄大師が白山を開山した際、使用していた杖がこの大杉になったという伝承がある。国の特別天然記念物に指定されている。



### 白山中居神社

白山信仰の中心として信仰を集めた神社。景行天皇の御世にイザナキ、イザナミノミコトを祀ったのが始まりとされ、その後、泰澄大師が社殿を修復し、社域を拡げた。境内は、宮川のせせらぎと杉の大本に囲まれ、荘厳な雰囲気漂う。



### 阿弥陀ヶ滝

日本の滝100選、岐阜県名水50選の滝。落差は約60mとされ、東海一の名瀑と言われる。白山中宮長滝寺の僧、道雅法師が滝の北側にある暗い洞窟で修行し護摩をたいたところ、阿弥陀如来の姿が浮かび上がったところから阿弥陀ヶ滝と呼び名がついた。葛飾北斎が浮世絵「諸国瀧廻り」で描いていることでも有名。



#### 参考

- 岐阜県公式ホームページ <https://www.pref.gifu.lg.jp/>
- 石徹白区公式ホームページ <https://itoshiro.net/>
- くくるをめぐる <https://kukuruwomeguru.com/>

## あとがき 岩瀬崇

本書『あわ居―〈異〉と出遭う場所―』は、もともとあわ居のガイドブックやパンフレットにあたるようなものをつくりたいという動機付けから制作を開始しました。この五年ほどの実践（改修期間を含めれば八年）を経て、ようやくあわ居の方向性が定まってきたなかで、一度しっかりと、あわ居の自己紹介をしたいと思っただけです。

先行するさまざまな書籍にインスパイアされながら、書籍の体裁や内容についての入念な検討をしているなかで、主宰者である私たちが、独善的に、あるいは一方的に、あわ居を語ることだけは絶対に避けなければいけないということを強く感じました。一般的な自己紹介であれば、私たちが恣意的にあわ居についての情報を取捨し、「主宰者にとってのあわ居」を体裁よくまとめることでも成立するのかもしれませんが。しかし、そうした一方的なコミュニケーションのなかで、あわ居の姿や実践、場で生じている事象、そこから伸びていく知が本当に描き出せるのかという点については、甚だ疑問を抱かざるをえません。この本を通じて私たちはいったい何をしようとしているのか。注意深くこの書籍が実現しようとしていることを探るなかで、関わり合いにおいて立ち現れるあわ居の姿、あわ居の技法、あるいはそこから伸びていく知を、書籍によって浮き彫りにすることを目指すことにしました。そんな作業を進めながら、ふと思っただけが二つありました。

まず一つ目はこの本は、あわ居という場所についての詩集のようなものかもしれないということです。もしも本書があわ居の詩集のようなものになっているのだとしたら、あわ居を十分に紹介することができることになるのだと思います。いや、紹介というよりは、あわ居の姿や形といったものが、この書籍にたしかに現れているのだと思う。

もう一つは、本書はあわ居という局所的な場所についての本ではありながら、実は同時に「私たち」の本でもあるのではないかということです。本書の「あわ居の研究」や「あわ居の記憶」において、対談者や体験者の方から紡ぎだされたあわ居という場所についてのプライベートな語りや記述は、これからの社会の在り様を考えていくことや、多様な実践をひらいていくこと、あるいは創造的にかげがえのない固有の生を模索し構築していくうえでの重要な示唆に満ちているように思われます。その意味で、本書はもしかすれば「私たちの知」の集積体として把握できるものになっているのかもしれない。そしてもし本書を通してあわ居という「場所」が分かち合われることがあるのだとすれば、それは本書を読むなかで、そこにふっと「私たち」が生起することを意味するのかもしれない、そんなことを感じています。

ただし、本書に課題があったことも事実です。例えば本書に掲載した「あわ居の研究」においては、

結果的に対談者がすべて男性ということになりました。実際には、数人の女性の研究者や実践者の方にもオファーをしたのですが、様々な事情やタイミングにより、今回は残念ながら実現には至りませんでした。決して意図したものではありません。今後はこうした偏りがでないよう、十分に留意していきたいと考えています。また、体験者の方へのインタビュアーについても、「ことばが生まれる場所」「あわ居別棟」以外の体験者の方にどうアプローチをしていくのかということは今後の一つの課題ですし、インタビュアーや対談者が岩瀬崇ばかりで良いのかという点についても、一考の余地があると思います。

実践の場における出来事や経験、その軌跡や在り様を、いかにして時間や空間を隔てた他者とわかちあえるのか。こうした問いに対する明確な答えはおそらくなく、その都度、やり方や方向性を修正しながら、これからも模索し続けていければと思っています。しかしまずはその第一歩、ひとつの形として、本書が完成したことは、私たちにとって少なからず手ごたえを伴う、確かな事実です。本書を起点として、新たなコミュニケーションが生成していくこと、あらたなあわ居が覗かれること、新たな詩が生まれること、新たな物語が編まれていくこと。そうしたことを私たちは望んでいるのかもしれない。そんなふうに思います。

最後となりますが、本書はたくさんの方々のお力添えなくしては、決してかたちになることはありませんでした。今のあわ居となる築九十年をこえる古民家を快く譲ってくださった篤谷さんご家族をはじめ、篤谷さんをご紹介してくださった土川商店の土川さん、古民家の改修をお手伝いくださった芝山裕介さんや松久さんご夫妻。本当にありがとうございます（お手伝いいただいた方を挙げるとキリがないため、泣く泣く省略します。申し訳ありません）。また、どこの馬の骨ともしれない私たちをあたたかく迎え入れてくださった石徹白地区のみなさんにもここで改めて感謝の意を申し上げます。

今回の対談を引き受けてくださった井上博斗さん、松本篤さん、阪本佳郎さん、前林明次さん、百瀬雄太さん、井谷信彦さん。対談者のみなさまからいただいたあわ居についての言葉は、自分たちの活動を進めていくうえで、何よりの励みとなるものであり、またそこにはまるで知らない新たなあわ居の姿がありました。また対談までのやりとり、あるいは対談のなかにおいても多くの予想外があり、その予想外がとても良い形で作用したように思っています。また、あわ居の体験者としてインタビュアーを引き受けてくださり、また書籍に掲載することについても快く許可をくださったみなさまにも感謝の意を申し上げます（こちらも本来はすべての方のお名前を掲載したいところですが、匿名希望の方もいらっしゃるの  
でこのように表記いたします）。

さらに、本書に掲載した多くの写真を快く提供してくださった堀義人さんや、写真のモデルをお引き受けくださった鈴木雄飛さん、井上桜子さん、江畑潤さん、加藤健志郎さん、加澤治朗さんにも感謝します。その他にも、あわ居滞在中に撮った写真などをたくさんの方からご提供いただきました。掲載を許可してくださったみなさまにも重ねて感謝を申し上げます。

加えて、二〇二三年の秋から冬にかけて精神的な苦境にあった時期に、京都で温かく歓待をしてくださり、励ましの言葉をくださったアーティストの笹口数さん。また同時期にあわ居を訪れてくださり、あたたかいお言葉と未知のバースベクティヴを投げかけてくださった教育学者の永田佳之さん、またその場に共に居てくださった長良川カンパニーの岡野春樹さん、早登美さんにもあらためてここで感謝の意を申し上げます。あれらの時間がなければ、あわ居のことがいまこうして書籍になることは、決してありませんでした。感謝の念に堪えません。ほんとうにありがとうございました。また、大学卒業後もずっと気に留めてくださり、あわ居をオープンしてからも、継続的に学生と一緒に石徹白を訪れてくださる大学時代からの恩師、田淵六郎先生にも深く感謝します。六郎先生と共につくる場、先生がふと投げかけてくださる言葉は、いつも「わからなさ」を含むものであり、その「わからなさ」に、新たな場所への活力をいただいています。そして今回も装丁を担当していただいた瀬川晃さん。「わからなさ」を抱えたままでもいながら、それでも書籍のかたちがだんだんと明らかにされて

いく、そんなプロセスがひらかれていくのは、まぎれもなく瀬川さんの「わからなさ」に対する受容度によるところが大きいです。いつも支えてくださり本当にありがとうございます。また、今回の書籍の制作にあたって実施したクラウドファンディングで、厚いご支援をいただいたみなさまや、これまであわ居を訪れてくださったみなさまにもここで改めて感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございます。

本書をつくることを通して、私たち自身が、そしてあわ居という場所が作り替えられていく。そんな体感が随所にあった、充実感とよろこびに満ちた制作の日々でした。そしてその日々はまた、他者のご厚意や善意に満ち満ちた、自分たちにとってまたとない、かけがえのない時間でもありました。最後となりますが、夫婦でこうした活動ができるのは、お互いの両親や祖父母といった存在があったことです。深く感謝します。また今回イラストを描いてくれた、一緒に石徹白で暮らす、娘の菜子やひかりにも深く感謝します。

・ 本書の刊行に際してクラウドファンディング（寄付）を実施し、七六八〇〇〇円のご支援をいただきました。皆様に、あらためて感謝を申し上げます。

・ 「あわ居の研究」および「あわ居の記憶」における口語的な表現については、ある程度の加筆修正をしました。ただし、インタビュアーや対談の雰囲気を保つために、文語的な表現としてはほんらい誤りである場合でも、一部は意図的にそのままにしました。

・ 漢字表記やひらがな表記について、前後の文脈に応じた使い分けをその都度していますが、意味するものは同じです（例えば「出会い」と「出遭い」など）。

・ 写真クレジット

yoshito hori : p.18/p.20/p.32-37/p.45 下 / p.355 右

mayuko kokufu : p.47 下

naoko kumagai : p.88

## あわ居―〈異〉と出遭う場所―

発行 二〇二四年一月一日 第一刷

執筆 岩瀬美佳子・岩瀬崇

イラスト 岩瀬美佳子・岩瀬茉莉子・岩瀬ひかり

装幀 瀬川晃

発行者 岩瀬崇

発行所 あわ居

〒五〇一―五二三―一 岐阜県郡上市白鳥町石徹白四七―二

電話 0575 - 86 - 3302

メール [awai.itoshiro@gmail.com](mailto:awai.itoshiro@gmail.com)

ホームページ <https://www.awai-itoshiro.com/>

乱丁・落丁本はお取替えいたしません。本書の無断転載を禁じます。

© Takashi Iwase, Printed in Japan

